漱石全集

第五巻

三四郎

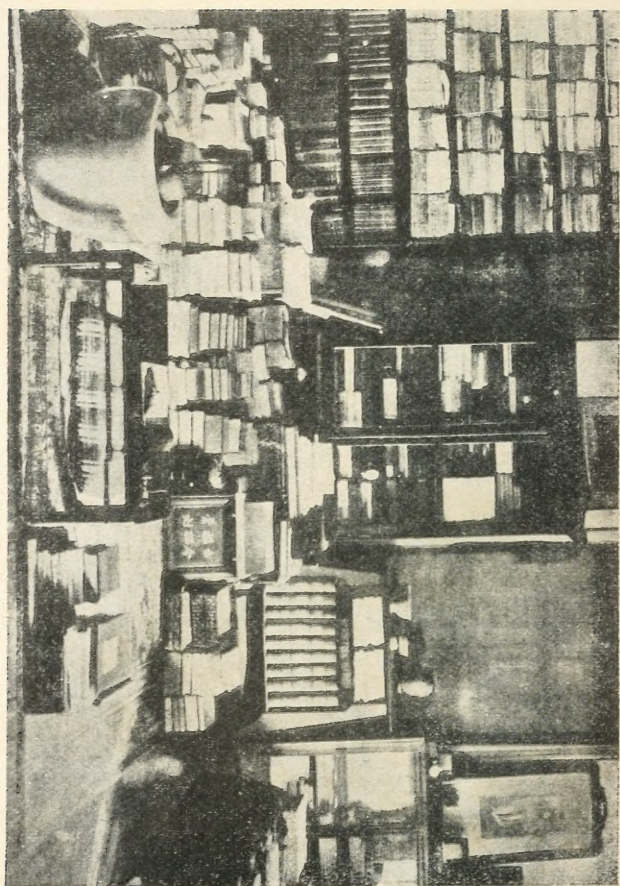
Presented to the

LIBRARY *of the*

UNIVERSITY OF TORONTO

by

The Library of

Takaichi (T.U.) Umezuki

早稻田南町書齋

三四郎

四一、九、一——四一、一二、二九

うと〳〵として眼が覺めると女は何時の間にか、隣の爺さんと話しを始めてゐる。此爺さんは慥かに前の前の驛から乘つた田舍者である。發車間際に頓狂な聲を出して、馳け込んで來て、いきなり肌を脱いだと思つたら背中に御灸の痕が一杯あつたので、三四郎の記憶に殘つて居る。爺さんが汗を拭いて、肌を入れて、女の隣に腰を懸けた迄よく注意して見てゐた位である。

女とは京都からの相乘である。乘つた時から三四郎の眼に着いた。第一色が黒い。三四郎は九州から山陽線に移つて、段々京大阪へ近附いてくるうちに、女の色が次第に白くなるので何時の間にか故郷を遠退く樣な憐れを感じてゐた。それで此女が車室に這入つて來た時は、何となく異性の味方を得た心持がした。此女の色は實際九州色であつた。

三輪田のお光さんと同じ色である。國を立つ間際迄は、お光さんは、うるさい女であつた。傍を離れるのが大いに難有かつた。けれども、斯うして見ると、お光さんの樣なのも決して惡くはない。

唯顏立から云ふと、此女の方が餘程上等である。口に締りがある。眼が判明してゐる。額がお光さんの

様にだゞつ廣くない。何となく好い心持に出來上がつてゐる。それで三四郎は五分に一度位は眼を上げて女の方を見てゐた。時々は女と自分の眼が行き中たる事もあつた。爺さんが女の隣へ腰を掛けた時などは、尤も注意して、出來る丈長い間、女の樣子を見てゐた。其時女はにこりと笑つて、さあ御掛けと云つて爺さんに席を讓つてゐた。夫からしばらくして、三四郎は眠くなつて寢て仕舞つたのである。

其寢てゐる間に女と爺さんは懇意になつて話しを始めたものと見える。眼を開けた三四郎は默つて二人の話しを聞いて居た。女はこんな事を云ふ。——

子供の玩具は矢つ張り廣島より京都の方が安くつて善いものがある。京都で一寸用があつて下りた序に、蛸藥師の傍で玩具を買つて來た。久し振で國へ歸つて子供に逢ふのは嬉しい。然し夫の仕送りが途切れて、仕方なしに親の里へ歸るのだから心配だ。夫は呉に居て長らく海軍の職工をして居たが戰爭中は旅順の方に行つてゐた。戰爭が濟んでから一旦歸つて來た。間もなくあつちの方が金が儲かると云つて、又大連へ出稼ぎに行つた。始めのうちは音信もあり、月々のものも几帳面に送つて來たから好かつたが、此半歳許り前から手紙も金も丸で來なくなつて仕舞つた。不實な性質ではないから、大丈夫だけれども、何時迄も遊んで食べてゐる譯には行かないので、安否のわかる迄は仕方がないから、里へ歸つて待つてゐる積りだ。

爺さんは蛸藥師も知らず、玩具にも興味がないと見えて、始めのうちは只はい〳〵と返事丈してゐたが、旅順以後急に同情を催して、それは大いに氣の毒だと云ひ出した。自分の子も戰爭中兵隊にとられて、と

とうとう彼地で死んで仕舞つた。一體戰爭は何の爲にするものだか解らない。後で景氣でも好くなればだが、大事な子は殺される、物價は高くなる。こんな馬鹿氣たものはない。世の好い時分に出稼ぎなどと云ふものはなかつた。みんな戰爭の御蔭だ。何しろ信心が大切だ。生きて働いて居るに違ひない。もう少し待つてゐれば乾度歸つて來る。――爺さんはこんな事を云つて、頻りに女を慰めて居た。やがて汽車が留まつたら、では御大事にと、女に挨拶をして元氣よく出て行つた。

爺さんに續いて下りたものが四人程あつたが、入れ易つて、乘つたのはたつた一人しかない。固から込み合つた客車でもなかつたのが、急に淋しくなつた。日の暮れた所爲かも知れない。驛夫が屋根をどしどし踏んで、上から灯の點いた洋燈を挿し込んで行く。三四郎は思ひ出した樣に前の停車場で買つた辨當を食ひ出した。

車が動き出して二分も立つたらうと思ふ頃、例の女はすうと立つて三四郎の横を通り越して車室の外へ出て行つた。此の時女の帶の色が始めて三四郎の眼に這入つた。三四郎は鮎の煮浸しの頭を啣へた儘女の後姿を見送つてゐた。便所に行つたんだなと思ひながら頻りに食つてゐる。

女はやがて歸つて來た。今度は正面が見えた。三四郎の辨當はもう仕舞掛である。下を向いて一生懸命に箸を突つ込んで二口三口頬張つたが、女は、どうもまだ元の席へ歸らないらしい。もしやと思つて、ひよいと眼を擧げて見ると矢つ張り正面に立つてゐた。然し三四郎が眼を擧げると同時に女は動き出した。

只三四郎の横を通つて、自分の座へ歸るべき所を、すぐと前へ來て、身體を横へ向けて、窓から首を出して、靜かに外を眺め出した。風が强くあたつて、鬢がふはくする所が三四郎の眼に這入つた。此時三四郎は空になつた辨當の折を力一杯に窓から放り出した。女の窓と三四郎の窓は一軒置きの隣であつた。風に逆らつて抛げた折の蓋が白く舞ひ戻つた樣に見えた時、三四郎は飛んだ事をしたのかと氣が附いて、不圖女の顏を見た。顏は生憎列車の外に出てゐた。けれども女は靜かに首を引つ込めて更紗の手帛で額の所を丁寧に拭き始めた。三四郎は兎も角も謝る方が安全だと考へた。

「御免なさい」と云つた。

女は「いゝえ」と答へた。まだ顏を拭いてゐる。三四郎は仕方なしに默つて仕舞つた。女も默つて仕舞つた。さうして又首を窓から出した。三四人の乘客は暗い洋燈の下で、みんな寐ぼけた顏をしてゐる。口を利いてゐるものは誰もない。汽車丈が凄じい音を立てゝ行く。三四郎は眼を眠つた。

しばらくすると「名古屋はもう直きでせうか」と云ふ女の聲がした。見ると何時の間にか向き直つて、及び腰になつて、顏を三四郎の傍迄持つて來てゐる。三四郎は驚いた。

「さうですね」と云つたが、始めて東京へ行くんだから一向要領を得ない。

「此分では後れますでせうか」

「後れるでせう」

「あんたも名古屋へ御下りで……」
「はあ、下ります」
此汽車は名古屋留りであつた。會話は頗る平凡であつた。只女が三四郎の筋向うに腰を掛けた許りである。それで、しばらくの間は又汽車の音丈になつて仕舞ふ。
次の驛で汽車が留まつた時、女は漸く三四郎に名古屋へ着いたら迷惑でも宿屋へ案内して呉れと云ひだした。一人では氣味が惡いからと云つて、頻りに頼む。三四郎も尤もだと思つた。けれども、さう快く引き受ける氣にもならなかつた。何しろ知らない女なんだから、頗る躊躇したにはしたが、斷然斷る勇氣も出なかつたので、まあ好い加減な生返事をして居た。其うち汽車は名古屋へ着いた。
大きな行李は新橋迄預けてあるから心配はない。三四郎は手頃なズックの革鞄と傘丈持つて改札場を出た。頭には高等學校の夏帽を被つてゐる。然し卒業したしるしに徽章丈は捥ぎ取つて仕舞つた。晝間見ると其處丈色が新しい。後から女が尾いて來る。三四郎は此帽子に對して少々極りが惡かつた。けれども尾いて來るのだから仕方がない。女の方では、此帽子を無論たゞの汚い帽子と思つて居る。
九時半に着くべき汽車が四十分程後れたのだから、もう十時は過つてゐる。けれども暑い時分だから町はまだ宵の口の樣に賑やかだ。宿屋も眼の前に二三軒ある。たゞ三四郎にはちと立派過ぎる樣に思はれた。そこで電氣燈の點いてゐる三階作りの前を澄まして通り越して、ぶら〳〵歩行いて行つた。無論不案内の

土地だから何處へ出るか分らない。只暗い方へ行つた。女は何とも云はずに尾いて來る。すると比較的淋しい横町の角から二軒目に御宿と云ふ看板が見えた。之は三四郎にも女にも相應な汚い看板であつた。三四郎は鳥渡振り返つて、一口女にどうですと相談したが、女は結構だといふんで、思ひ切つてずつと這入つた。上り口で二人連ではないと斷る筈の所を、入らつしやい、――どうぞ御上り――御案内――梅四番抔とのべつに喋舌られたので、已むを得ず無言の儘二人共梅の四番へ通されて仕舞つた。

下女が茶を持つてくる間二人はぼんやり向ひ合つて坐つてゐた。下女が茶を持つて來て、御風呂をと言つた時は、もう此婦人は自分の連ではないと斷る丈の勇氣が出なかつた。そこで手拭をぶら下げて、御先へと挨拶をして、風呂場へ出て行つた。風呂場は廊下の突き當りで便所の隣にあつた。薄暗くつて、大分不潔の樣である。三四郎は着物を脫いで、風呂桶の中へ飛び込んで、少し考へた。こいつは厄介だとぢやぶぢやぶ遣つてゐると、廊下に足音がする。誰か便所へ這入つた樣子である。やがて出て來た。手を洗ふ。それが濟んだら、ぎいと風呂場の戶を半分開けた。例の女が入口から、「ちいと流しませうか」と聞いた。三四郎は大きな聲で、

「いえ澤山です」と斷つた。然し女は出て行かない。却て這入つて來た。さうして帶を解き出した。三四郎と一所に湯を使ふ氣と見える。別に恥つかしい樣子も見えない。三四郎は忽ち湯槽を飛び出した。そこそこに身體を拭いて座敷へ歸つて、座蒲團の上に坐つて、少なからず驚いてゐると、下女が宿帳を持つ

て來た。
三四郎は宿帳を取り上げて、福岡縣京都郡眞崎村小川三四郎二十三年學生と正直に書いたが、女の所へ行つて全く困つて仕舞つた。湯から出る迄待つて居れば好かつたと思つたが、仕方がない。下女がちやんと控へてゐる。已を得ず同縣同郡同村同姓花二十三年と出鱈目を書いて渡した。さうして頻りに團扇を使つてゐた。
やがて女は歸つて來た。「どうも、失禮致しました」と云つてゐる。三四郎は「いゝや」と答へた。
三四郎は革鞄の中から帳面を取り出して日記をつけ出した。書く事も何もない。女がゐなければ書く事が澤山ある樣に思はれた。すると女は「一寸出て參ります」と云つて部屋を出て行つた。三四郎は益日記が書けなくなつた。何處へ行つたんだらうと考へ出した。
そこへ下女が床を延べに來る。廣い蒲團を一枚しか持つて來ないから、床は二つ敷かなくては不可ないと云ふと、部屋が狹いとか、蚊帳が狹いとか云つて埒が明かない。面倒がる樣にも見える。仕舞には只今番頭が一寸出ましたから、歸つたら聞いて持つて參りませうと云つて、頑固に一枚の蒲團を蚊帳一杯に敷いて出て行つた。
夫から、しばらくすると女が歸つて來た。どうも遲くなりましてと云ふ。蚊帳の影で何かしてゐるうちに、がらん／＼といふ音がした。子供に土產の玩具が鳴つたに違ひない。女はやがて風呂敷包みを元の通

りに結んだと見える。蚊帳の向うで「御先へ」と云ふ聲がした。三四郎はたゞ「はあ」と答へた儘で、敷居に尻を乘せて、團扇を使つてゐた。いつそ此儘で夜を明かして仕舞はうかとも思つた。けれども蚊がぶんぶん來る。外ではとても凌ぎ切れない。三四郎はついと立つて、革鞄の中から、キヤラコの襯衣と洋袴下を出して、それを素肌へ着けて、其上から紺の兵兒帶を締めた。それから西洋手拭を二筋持つた儘蚊帳の中へ這入つた。女は蒲團の向うの隅でまだ團扇を動かしてゐる。

「失禮ですが、私は疳性で他人の蒲團に寢るのが嫌だから……少し蚤除けの工夫を遣るから御免なさい」

三四郎はこんな事を云つて、あらかじめ、敷いてある敷布の餘つてゐる端を女の寐てゐる方へ向けてぐるぐる捲き出した。さうして蒲團の眞中に白い長い仕切りを拵へた。女は向うへ寢返りを打つた。三四郎は西洋手拭を廣げて、これを自分の領分に二枚續きに長く敷いて、其上に細長く寢た。其晩は三四郎の手も足も此の幅の狹い西洋手拭の外には一寸も出なかつた。女とは一言も口を利かなかつた。女も壁を向いた儘凝として動かなかつた。

夜はやう〳〵明けた。顏を洗つて膳に向つた時、女はにこりと笑つて、「昨夜は蚤は出ませんでしたか」と聞いた。三四郎は「えゝ、難有う、御蔭さまで」と云ふ樣な事を眞面目に答へながら、下を向いて、御猪口の葡萄豆をしきりに突つつき出した。

勘定をして宿を出て、停車場へ着いた時、女は始めて關西線で四日市の方へ行くのだと云ふ事を三四郎

に話した。三四郎の汽車は間もなく來た。時間の都合で女は少し待合はせる事となつた。改札場の際迄送つて來た女は、

「色々御厄介になりまして、……では御機嫌よう」と丁寧に御辭儀をした。三四郎は革鞄と傘を片手に持つた儘、空いた手で例の古帽子を取つて、只一言、

「左樣なら」と云つた。女は其顏を凝と眺めてゐたが、やがて落ち附いた調子で

「あなたは餘つ程度胸のない方ですね」と云つて、にやりと笑つた。三四郎はプラツトフォームの上へ彈き出された樣な心持がした。車の中へ這入つたら兩方の耳が一層熱り出した。しばらくは凝と小さくなつてゐた。やがて車掌の鳴らす手笛が長い列車の果から果迄響き渡つた。列車は動き出す。三四郎はそつと窓から首を出した。女はとくの昔に何處かへ行つて仕舞つた。大きな時計ばかりが眼に着いた。三四郎はまたそつと自分の席に歸つた。乘合は大分居る。けれども三四郎の擧動に注意する樣なものは一人もない。只筋向うに坐つた男が、自分の席に歸る三四郎を一寸見た。

三四郎は此男に見られた時、何となく極りが惡かつた。本でも讀んで氣を紛らかさうと思つて、革鞄を開けて見ると、昨夜の西洋手拭が、上の所にぎつしり詰まつてゐる。そいつを傍へ搔き寄せて、底の方から、手に障つた奴を何でも構はず引き出すと、讀んでも解らないベーコンの論文集が出た。ベーコンには氣の毒な位薄つぺらな粗末な假綴である。元來汽車の中で讀む了見もないものを、大きな行李に入れ損な

つたから、片附ける序に提革鞄の底へ、外の二三冊と一所に放り込んで置いたのが、運惡く當選したのである。三四郎はベーコンの二十三頁を開いた。他の本でも讀めさうにはない。ましてベーコン抔は無論讀む氣にならない。けれども三四郎は恭しく二十三頁を開いて萬遍なく頁全體を見廻してゐた。三四郎は二十三頁の前で一應昨夜の御浚ひをする氣である。

元來あの女は何だらう。あんな女が世の中に居るものだらうか。女と云ふものは、あゝ落ち附いて平氣でゐられるものだらうか。無教育なのだらうか、大膽なのだらうか。それとも無邪氣なのだらうか。要するに行ける所迄行つて見なかつたから、見當が附かない。思ひ切つてもう少し居つて見ると可かつた。けれども恐ろしい。別れ際にあなたは度胸のない方だと云はれた時には、喫驚した。二十三年の弱點が一度に露見した樣な心持であつた。親でもあゝ旨く言ひ中てるものではない。……

三四郎は此處迄來て、更に悄然て仕舞つた。何處の馬の骨だか分らないものに、頭の上がらない位打された樣な氣がした。ベーコンの二十三頁に對しても甚だ申し譯がない位に感じた。

どうも、あゝ狼狽しちや駄目だ。學問も大學生もあつたものぢやない。甚だ人格に關係してくる。もう少しは仕樣があつたらう。けれども相手が何時でもあゝ出るとすると、教育を受けた自分には、あれより外に受け樣がないとも思はれる。すると無暗に女に近附いてはならないと云ふ譯になる。何だか意氣地がない。非常に窮屈だ。丸で不具にでも生れたやうなものである。けれども……

三四郎は急に氣を易へて、別の世界の事を思ひ出した。――是から東京に行く。大學に這入る。有名な學者に接觸する。趣味品性の具はつた學生と交際する。圖書館で研究をする。著作をやる。世間で喝采する。母が嬉しがる。と云ふ樣な未來をだらしなく考へて、大いに元氣を回復して見ると、別に二十三頁の中に顏を埋めてゐる必要がなくなつた。そこでひよいと頭を上げた。すると筋向うにゐたさつきの男がまた三四郎の方を見てゐた。今度は三四郎の方でも此男を見返した。

髭を濃く生やしてゐる。面長の瘠ぎすの、どことなく神主じみた男であつた。たゞ鼻筋が眞直に通つてゐる所丈が西洋らしい。學校教育を受けつゝある三四郎は、こんな男を見ると屹度教師にして仕舞ふ。男は白地の絣の下に鄭重に白い襦袢を重ねて、紺足袋を穿いてゐた。此服裝から推して、三四郎は先方を中學校の教師と鑑定した。大きな未來を控へてゐる自分から見ると、何だか下らなく感ぜられる。男はもう四十だらう。是より先もう發展しさうにもない。

男はしきりに煙草をふかしてゐる。長い烟を鼻の穴から吹き出して、腕組をした所は大變悠長に見える。さうかと思ふと無暗に便所か何かに立つ。立つ時にうんと伸びをする事がある。さも退屈さうである。隣に乘り合はせた人が、新聞の讀み殼を傍に置くのに借りて見る氣も出さない。三四郎は妙な心持になつて、ベーコンの論文集を伏せて仕舞つた。外の小說でも出して、本氣に讀んで見ようとも考へたが面倒だから、已めにした。それよりは前にゐる人の新聞を借りたくなつた。生憎前の人はぐうぐう寐てゐる。三四郎

は手を延ばして新聞に手を掛けながら、わざと「御明きですか」と髭のある男に聞いた。男は平氣な顏で

「明いてるでせう。御讀みなさい」と云つた。新聞を手に取つた三四郎の方は却て平氣でなかつた。

開けて見ると新聞には別に見る程の事も載つてゐない。一二分で通讀して仕舞つた。律義に疊んで元の場所へ返しながら、一寸會釋すると、向うでも輕く挨拶をして、

「君は高等學校の生徒ですか」と聞いた。

三四郎は、被つてゐる古帽子の徽章の痕が、此男の眼に映つたのを嬉しく感じた。

「えゝ」と答へた。

「東京の？」と聞き返した時、始めて、

「いえ、熊本です。……然し……」と云つたなり默つて仕舞つた。大學生だと云ひたかつたけれども、云ふ程の必要がないからと思つて遠慮した。相手も「はあ、さう」と云つたなり煙草を吹かしてゐる。何故熊本の生徒が今頃東京へ行くんだとも何とも聞いて呉れない。熊本の生徒には興味がないらしい。此時三四郎の前に寐てゐた男が「うん、成程」と云つた。それでゐて慥に寐てゐる。獨り言でも何でもない。髭のある人は三四郎を見てにやくと笑つた。三四郎はそれを機會に、

「あなたは何方へ」と聞いた。

「東京」とゆつくり云つた限りである。何だか中學校の先生らしく無くなつて來た。けれども三等へ乘

つてゐる位だから大したものでない事は明らかである。三四郎はそれで談話を切り上げた。髭のある男は腕組をした儘、時々下駄の前齒で、拍子を取つて、床を鳴らしたりしてゐる。餘程退屈に見える。然し此男の退屈は話したがらない退屈である。

汽車が豐橋へ着いた時、寐てゐた男がむつくり起きて眼を擦りながら下りて行つた。よくあんなに都合よく眼を覺ます事が出來るものだと思つた。ことによると寐ぼけて停車場を間違へたんだらうと氣遣ひながら、窓から眺めてゐると、決してさうでない。無事に改札場を通過して、正氣の人間の樣に出て行つた。三四郎は安心して席を向う側へ移した。是で髭のある人と隣り合せになつた。髭のある人は入れ換はつて、窓から首を出して、水蜜桃を買つてゐる。

やがて二人の間に果物を置いて、

「食べませんか」と云つた。

三四郎は禮を云つて、一つ食べた。髭のある人は好きと見えて、無暗に食べた。三四郎にもつと食べろと云ふ。三四郎は又一つ食べた。二人が水蜜桃を食べてゐるうちに大分親密になつて色々な話しを始めた。

其男の說によると、桃は果物のうちで一番仙人めいてゐる。何だか馬鹿見た樣な味がする。第一核子の恰好が無器用だ。且穴だらけで大變面白く出來上がつてゐると云ふ。三四郎は始めて聞く說だが、隨分詰らない事を云ふ人だと思つた。

次に其男がこんな事を云ひ出した。子規は果物が大變好きだつた。且いくらでも食へる男だつた。ある時大きな樽柿を十六食つた事がある。それで何ともなかつた。自分抔は到底子規の眞似は出來ない。——三四郎は笑つて聞いてゐた。けれども子規の話丈には興味がある樣な氣がした。もう少し子規の事でも話さうかと思つてゐると、

「どうも好きなものには自然と手が出るものでね。仕方がない。豚抔は手が出ない代りに鼻が出る。豚をね、縛つて動けない樣にして置いて、其鼻の先へ、御馳走を並べて置くと、動けないものだから、鼻の先が段々延びて來るさうだ。御馳走に屆く迄は延びるさうです。どうも一念程恐ろしいものはない」と云つて、にや〱笑つてゐる。眞面目だか冗談だか、判然と區別しにくい樣な話し方である。

「まあ御互に豚でなくつて仕合せだ。さう欲しいものの方へ無暗に鼻が延びて行つたら、今頃は汽車にも乘れない位長くなつて困るに違ひない」

三四郎は吹き出した。けれども相手は存外靜かである。

「實際危險い。レオナルド・ダ・ヸンチと云ふ人は桃の幹に砒石を注射してね、其實へも毒が回るものだらうか、どうだらうかと云ふ試驗をした事がある。處が其桃を食つて死んだ人がある。危險い。氣を附けないと危險い」と云ひながら、散々食ひ散らした水蜜桃の核子やら皮やらを、一纏めに新聞に包んで、窓の外へ抛げ出した。

今度は三四郎も笑ふ氣が起らなかつた。レオナルド・ダ・ヸンチと云ふ名を聞いて少しく辟易した上に、何だか昨夕の女の事を考へ出して、妙に不愉快になつたから、謹んで默つて仕舞つた。けれども相手はそんな事に一向氣が附かないらしい。やがて、
「東京は何處へ」と聞き出した。
「實は始めてで樣子が善く分らんのですが……差し當り國の寄宿舍へでも行かうかと思つてゐます」と云ふ。
「ぢや熊本はもう……」
「今度卒業したのです」
「はあ、そりや」と云つたが御目出たいとも結構だとも附けなかつた。たゞ「すると是から大學へ這入るのですね」と如何にも平凡であるかの如くに聞いた。
三四郎は聊か物足りなかつた。其代り、
「えゝ」と云ふ二字で挨拶を片附けた。
「科は？」と又聞かれる。
「一部です」
「法科ですか」

「いゝえ文科です」

「はあ、そりや」と又云つた。三四郎は此はあ、そりやを聞くたびに妙になる。向うが大いに偉いか、大いに人を踏み倒してゐるか、さうでなければ大學に全く縁故も同情もない男に違ひない。然しそのうちの何方だか見當が附かないので此男に對する態度も極めて不明瞭であつた。

濱松で二人とも申し合せた樣に辨當を食つた。食つて仕舞つても汽車は容易に出ない。窓から見ると、西洋人が四五人列車の前を往つたり來たりしてゐる。其うちの一組は夫婦と見えて、暑いのに手を組み合せてゐる。女は上下とも眞白な着物で、大變美しい。三四郎は生れてから今日に至るまで西洋人と云ふものを五六人しか見た事がない。其うちの二人は熊本の高等學校の教師で、其二人のうちの一人は運惡く脊蟲であつた。女では宣教師を一人知つて居る。隨分尖つた顏で、鱚又は魳に類してゐた。だから、かう云ふ派出な綺麗な西洋人は珍らしい許りではない。頗る上等に見える。三四郎は一生懸命に見惚れてゐた。是では威張るのも尤もだと思つた。自分が西洋へ行つて、こんな人の中に這入つたら定めし肩身の狹い事だらうと迄考へた。窓の前を通る時二人の話しを熱心に聞いて見たが些とも分らない。熊本の教師とは丸で發音が違ふ樣だ。

所へ例の男が首を後から出して、

「まだ出さうもないのですかね」と言ひながら、今行き過ぎた、西洋の夫婦を一寸見て、

「あゝ美しい」と小聲に云つて、すぐに生欠伸をした。三四郎は自分が如何にも田舎ものらしいのに氣が着いて、早速首を引き込めて、着座した。男もつゞいて席に返つた。さうして、

「どうも西洋人は美しいですね」と云つた。

三四郎は別段の答も出ないので只はあと受けて笑つて居た。すると髭の男は、

「御互は憐れだなあ」と云ひ出した。「こんな顔をして、こんなに弱つてゐては、いくら日露戰爭に勝つて、一等國になつても駄目ですね。尤も建物を見ても、庭園を見ても、いづれも顔相應の所だが、——あなたは東京が始めてなら、まだ富士山を見た事がないでせう。今に見えるから御覧なさい。あれが日本一の名物だ。あれより外に自慢するものは何もない。所が其富士山は天然自然に昔からあつたものなんだから仕方がない。我々が拵へたものぢやない」と云つて又にや／＼笑つてゐる。三四郎は日露戰爭以後こんな人間に出逢ふとは思ひも寄らなかつた。どうも日本人ぢやない様な氣がする。

「然し是からは日本も段々發展するでせう」と辯護した。すると、かの男は、すましたもので、

「亡びるね」と云つた。——熊本でこんなことを口に出せば、すぐ擲ぐられる。わるくすると國賊取扱にされる。三四郎は頭の中の何處の隅にも斯う云ふ思想を入れる餘裕はない様な空氣の裡で生長した。だからことによると自分の年齢の若いのに乘じて、他を愚弄するのではなからうかとも考へた。男は例の如くにや／＼笑つてゐる。其癖言葉つきはどこ迄も落付いてゐる。どうも見當が附かないから、相手にな

るのを已めて默つて仕舞つた。すると男が、かう云つた。

「熊本より東京は廣い。東京より日本は廣い。日本より……」で一寸切つたが、三四郎の顔を見ると耳を傾けてゐる。

「日本より頭の中の方が廣いでせう」と云つた。「囚はれちや駄目だ。いくら日本の爲を思つたつて贔屓の引倒しになる許りだ」

此言葉を聞いた時、三四郎は眞實に熊本を出た樣な心持がした。同時に熊本に居た時の自分は非常に卑怯であつたと悟つた。

其晩三四郎は東京に着いた。髭の男は分れる時迄名前を明かさなかつた。三四郎は東京へ着きさへすれば、此位の男は到る處に居るものと信じて、別に姓名を尋ねようともしなかつた。

二

三四郎が東京で驚いたものは澤山ある。第一電車のちん〳〵鳴るので驚いた。それから其のちんちん鳴る間に、非常に多くの人間が乘つたり降りたりするので驚いた。次に丸の内で驚いた。尤も驚いたのは、何處迄行つても東京が無くならないと云ふ事であつた。しかも何處をどう歩いても、材木が放り出してある、石が積んである、新しい家が往來から二三間引つ込んで居る、古い藏が半分取崩されて心細く前の方

に殘つてゐる。凡ての物が破壞されつゝある樣に見える。さうして凡ての物が又同時に建設されつゝある樣に見える。大變な動き方である。

三四郎は全く驚いた。要するに普通の田舍者が始めて都の眞中に立つて驚くと同じ程度に、又同じ性質に於て大いに驚いて仕舞つた。今迄の學問は此驚きを豫防する上に於て、賣藥程の效能もなかつた。三四郎の自信は此驚きと共に四割方減却した。不愉快でたまらない。

此劇烈な活動そのものが取りも直さず現實世界だとすると、自分が今日迄の生活は現實世界に毫も接觸してゐない事になる。洞が峠で晝寐をしたと同然である。それでは今日限り晝寐をやめて、活動の割前が拂へるかと云ふと、それは困難である。自分は今活動の中心に立つてゐる。けれども自分はたゞ自分の左右前後に起る活動を見なければならない地位に置き易へられたと云ふ迄で、學生としての生活は以前と變る譯はない。世界はかやうに動搖する。自分は此動搖を見てゐる。けれどもそれに加はる事は出來ない。自分の世界と、現實の世界は一つ平面に竝んで居りながら、どこも接觸してゐない。さうして現實の世界は、かやうに動搖して、自分を置き去りにして行つて仕舞ふ。甚だ不安である。

三四郎は東京の眞中に立つて電車と、汽車と、白い着物を着た人と、黒い着物を着た人との活動を見て、かう感じた。けれども學生生活の裏面に横たはる思想界の活動には毫も氣が附かなかつた。――明治の思想は西洋の歷史にあらはれた三百年の活動を四十年で繰り返してゐる。

三四郎が動く東京の眞中に閉ぢ込められて、一人で鬱ぎ込んでゐるうちに、國元の母から手紙が來た。東京で受取つた最初のものである。見ると色々書いてある。まづ今年は豐作で目出度いと云ふ所から始まつて、身體は大事にしなくつては不可ないと云ふ注意があつて、東京のものはみんな利口で人が悪いから用心しろと書いて、學資は毎月月末に屆く樣にするから安心しろとあつて、勝田の政さんの從弟に當たる人が大學校を卒業して、理科大學とかに出てゐるさうだから、尋ねて行つて、萬事よろしく賴むがいゝで結んである。肝心の名前を忘れたと見えて、欄外と云ふ樣な處に野々宮宗八どのとかいてあつた。此欄外には其外二三件ある。作の靑馬が急病で死んだんで、作は大弱りでゐる。三輪田のお光さんが鮎をくれたけれども東京へ送ると途中で腐つて仕舞ふから、家内で食べて仕舞つた。等である。

三四郎は此手紙を見て、何だか古ぼけた昔から屆いた樣な氣がした。母には濟まないが、こんなものを讀んでゐる暇はないと迄考へた。それにも拘はらず繰り返して二返讀んだ。要するに自分がもし現實世界と接觸してゐるならば、今の所母より外にないのだらう。其母は古い人で古い田舍に居る。其外には汽車の中で乘合はした女がゐる。あれは現實世界の稻妻である。接觸したと云ふには、あまりに短かくて且あまりに鋭過ぎた。――三四郎は母の云ひ附け通り野々宮宗八を尋ねる事にした。

あくる日は平生よりも暑い日であつた。休暇中だから理科大學を尋ねても野々宮君は居るまいと思つた。が、母が宿所を知らせて來ないから、聞き合はせ旁行つて見ようと云ふ氣になつて、午後四時頃、高等

學校の横を通つて彌生町の門から這入つた。往來は埃が二寸も積もつてゐて、其上に下駄の齒や、靴の底や、草鞋の裏が綺麗に出來上がつてる。車の輪と自轉車の痕は幾筋だか分らない。むつとする程堪らない路だつたが、構内へ這入ると流石に樹の多い丈に氣分が晴々した。取付きの戸をあたつて見たら錠が下りてゐた。裏へ廻つても駄目であつた。仕舞に横へ出た。念の爲と思つて推して見たら、旨い具合に開いた。廊下の四つ角に小使が一人居眠りをしてゐた。來意を通じると、しばらくの間は、正氣を回復する爲に、上野の森を眺めてゐたが、突然「御出でかも知れません」と云つて奥へ這入つて行つた。頗る閑靜である。

やがて又出て來た。

「御出でやす。御這入んなさい」と友達見た樣に云ふ。小使に食つ付いて行くと四つ角を曲がつて和土の廊下を下へ降りた。世界が急に暗くなる。炎天で眼が眩んだ時の樣であつたが少時すると瞳が漸く落ち付いて、四邊が見える樣になつた。穴倉だから比較的涼しい。左の方に戸があつて、其戸が明け放してある。其處から顏が出た。額の廣い眼の大きな佛教に縁のある相である。縮みの襯衣の上へ背廣を着てゐるが、背廣は所々に染みがある。背は頗る高い。瘠せてゐる所が暑さに釣り合つてゐる。頭と背中を一直線に前の方へ延ばして、御辭儀をした。

「此方へ」と云つた儘、顏を室の中へ入れて仕舞つた。三四郎は戸の前迄來て室の中を覗いた。すると野々宮君はもう椅子へ腰を掛けてゐる。もう一遍「此方へ」と云つた。此方へと云ふ所に臺がある。四角

な棒を四本立てて、其上を板で張つたものである。三四郎は臺の上へ腰を掛けて初對面の挨拶をする。それから何分宜敷く願ひますと云つた。野々宮君は只はあ、はあと云つて聞いてゐる。其様子が幾分か汽車の中で水蜜桃を食つた男に似てゐる。一通り口上を述べた三四郎はもう何も云ふ事がなくなつて仕舞つた。野々宮君もはあ、はあ云はなくなつた。

部屋の中を見廻すと眞中に大きな長い樫の机が置いてある。其上には何だか込み入つた、太い針線だらけの器械が乘つかつて、其傍に大きな硝子の鉢に水が入れてある。其外にやすりと小刀と襟飾が一つ落ちてゐる。最後に向うの隅を見ると、三尺位の花崗石の臺の上に、福神漬の罐程な複雜な器械が乘せてある。三四郎は此罐の横つ腹に開いてゐる二つの穴に眼をつけた。穴が蟒蛇の眼玉の様に光つてゐる。野々宮君は笑ひながら光るでせうと云つた。さうして、斯う云ふ説明をして吳れた。

「晝間のうちに、あんな準備をして置いて、夜になつて、交通其他の活動が鈍くなる頃に、此靜かな暗い穴倉で、望遠鏡の中から、あの眼玉の様なものを覗くのです。さうして光線の壓力を試驗する。此年の正月頃から取り掛かつたが、装置が中々面倒なのでまだ思ふ様な結果が出て來ません。夏は比較的堪へ易いが、寒夜になると、大變凌ぎにくい。外套を着て襟巻をしても冷たくて遣り切れない。……」

三四郎は大いに驚いた。驚くと共に光線にどんな壓力があつて、其壓力がどんな役に立つんだか、全く要領を得るに苦しんだ。

其時野々宮君は三四郎に「覗いて御覧なさい」と勸めた。三四郎は面白半分、石の臺の二三間手前にある望遠鏡の側へ行つて右の眼をあてがつたが、何も見えない。野々宮君は「どうです、見えますか」と聞く。「一向見えません」と答へると「うんまだ蓋が取らずにあつた」と云ひながら、椅子を立つて望遠鏡の先に被せてあるものを除けて呉れた。

見ると、たゞ輪廓のぼんやりした明るいなかに、物差の度盛がある。下に2の字が出た。野々宮君がまた「どうです」と聞いた。「2の字が見えます」と云ふと「今に動きます」と云ひながら向うへ廻つて何かしてゐる樣であつた。

やがて度盛が明るい中で動き出した。2が消えた。あとから3が出る。其あとから4が出る。5が出る。とう／＼10迄出た。すると度盛がまた逆に動き出した。10が消え、9が消え、8から7、7から6と順々に1迄來て留まつた。野々宮君は又「どうです」と云ふ。三四郎は驚いて、望遠鏡から眼を放して仕舞つた。度盛の意味を聞く氣にもならない。

丁寧に禮を述べて穴倉を上がつて、人の通る所へ出て見ると世の中はまだかん／＼してゐる。暑いけれども深い呼息をした。西の方へ傾いた日が斜に廣い坂を照らして、坂上の兩側にある工科の建築の硝子窓が燃える樣に輝いてゐる。空は深く澄んで、澄んだなかに、西の果から燒ける火の焰が、薄赤く吹き返して來て、三四郎の頭の上迄熱つてゐる樣に思はれた。橫に照り附ける日を半分背中に受けて、三四郎は左

の森の中へ這入つた。其森も同じ夕日を半分背中に受けてゐる。黒ずんだ蒼い葉と葉の間は染めた樣に赤い。太い欅の幹で日暮しが鳴いてゐる。三四郎は池の傍へ來てしやがんだ。

非常に靜かである。電車の音もしない。赤門の前を通る筈の電車は、大學の抗議で小石川を廻る事になつたと國にゐる時分新聞で見た事がある。三四郎は池の端にしやがみながら、不圖此事件を思ひ出した。電車さへ通さないと云ふ大學は餘程社會と離れてゐる。

たま／＼其中に這入つて見ると、穴倉の下で半年餘りも光線の壓力の試驗をしてゐる野々宮君の樣な人もゐる。野々宮君は頗る質素な服裝をして、外で逢へば電燈會社の技手位な格である。それで穴倉の底を根據地として欣然とたゆまずに研究を專念に遣つてゐるから偉い。然し望遠鏡のなかの度盛がいくら動いたつて現實世界と交渉のないのは明らかである。野々宮君は生涯現實世界と接觸する氣がないのかも知れない。要するに此靜かな空氣を呼吸するから、自らあゝ云ふ氣分にもなれるのだらう。自分もいつそのこと氣を散らさずに、活きた世の中と關係のない生涯を送つて見ようかしらん。

三四郎が凝として池の面を見詰めてゐると、大きな木が、幾本となく水の底に映つて、其又底に青い空が見える。三四郎は此時電車よりも、東京よりも、日本よりも、遠く且遙かな心持がした。然ししばらくすると、其心持のうちに薄雲の樣な淋しさが一面に廣がつて來た。さうして、野々宮君の穴倉に這入つて、たつた一人で坐つて居るかと思はれる程な寂寞を覺えた。熊本の高等學校に居る時分も是より靜かな龍田

山に上つたり、月見草ばかり生えてゐる運動場に寐たりして、全く世の中を忘れた氣になつた事は幾度となくある。けれども此孤獨の感じは今始めて起つた。

活動の劇しい東京を見たためだらうか。或は——三四郎は此時赤くなつた。汽車で乘り合はした女の事を思ひ出したからである。——現實世界はどうも自分に必要らしい。けれども現實世界は危くて近寄れない氣がする。三四郎は早く下宿に歸つて、母に手紙を書いてやらうと思つた。

不圖眼を上げると、左手の岡の上に女が二人立つてゐる。女のすぐ下が池で、池の向う側が高い崖の木立で、其後が派出な赤煉瓦のゴシック風の建築である。さうして落ちかゝつた日が、凡ての向うから横に光を透してくる。女は此夕日に向いて立つてゐた。三四郎のしやがんでゐる低い陰から見ると岡の上は大變明るい。女の一人はまぼしいと見えて、團扇を額の所に翳してゐる。顏はよく分らない。けれども着物の色、帶の色は鮮やかに分つた。白い足袋の色も眼についた。鼻緒の色はとにかく草履を穿いてゐる事も分つた。もう一人は眞白である。是は團扇も何も持つて居ない。只額に少し皺を寄せて、對岸から生ひ被さりさうに、高く池の面に枝を伸ばした古木の奥を眺めてゐた。團扇を持つた女は少し前へ出てゐる。白い方は一歩土堤の縁から退つてゐる。三四郎が見ると、二人の姿が筋違に見える。

此時三四郎の受けた感じは只奇麗な色彩だと云ふ事であつた。けれども田舍者だから、此色彩がどういふ風に奇麗なのだか、口にも云へず、筆にも書けない。たゞ白い方が看護婦だと思つた計りである。

三四郎は又見惚れてゐた。すると白い方が動き出した。用事のある様な動き方ではなかつた。自分の足が何時の間にか動いたといふ風であつた。見ると團扇を持つた女も何時の間にか又動いてゐる。二人は申し合はせた樣に用のない歩き方をして、坂を下りて來る。三四郎は矢つ張り見てゐた。

坂の下に石橋がある。渡らなければ眞直に理科大學の方へ出る。渡れば水際を傳つて此方へ來る。二人は石橋を渡つた。

團扇はもう翳して居ない。左の手に白い小さな花を持つて、それを嗅ぎながら來る。嗅ぎながら、鼻の下に宛てがつた花を見ながら、歩くので、眼は伏せてゐる。それで三四郎から一間許りの所へ來てひよいと留まつた。

「是は何でせう」と云つて、仰向いた。頭の上には大きな椎の木が、日の目の洩らない程厚い葉を茂らして、丸い形に、水際迄張り出してゐた。

「是は椎」と看護婦が云つた。丸で子供に物を教へる樣であつた。

「さう。實は生つてゐないの」と云ひながら、仰向いた顏を元へ戻す。其拍子に三四郎を一目見た。三四郎は慥かに女の黒眼の動く刹那を意識した。其時色彩の感じは悉く消えて、何とも云へぬ或物に出逢つた。其或物は汽車の女に「あなたは度胸のない方ですね」と云はれた時の感じと何處か似通つてゐる。三四郎は恐ろしくなつた。

二人の女は三四郎の前を通り過ぎる。若い方が今迄嗅いで居た白い花を三四郎の前へ落として行つた。三四郎は二人の後姿を凝と見詰めて居た。看護婦は先へ行く。若い方が後から行く。華やかな色の中に、白い薄を染め抜いた帯が見える。頭にも真白な薔薇を一つ挿してゐる。其薔薇が椎の木蔭の下の、黒い髪の中で際立つて光つてゐた。

三四郎は茫然してゐた。やがて、小さな声で「矛盾だ」と云つた。大学の空気とあの女が矛盾なのだか、あの色彩とあの眼付が矛盾なのだか、あの女を見て、汽車の女を思ひ出したのが矛盾なのだか、それとも未来に対する自分の方針が二途に矛盾してゐるのか、又は非常に嬉しいものに対して恐れを抱く所が矛盾してゐるのか、――この田舎出の青年には、凡て解らなかつた。たゞ何だか矛盾であつた。

三四郎は女の落として行つた花を拾つた。さうして嗅いで見た。けれども別段の香もなかつた。三四郎は此花を池の中へ投げ込んだ。花は浮いてゐる。すると突然向うで自分の名を呼んだものがある。

三四郎は花から眼を放した。見ると野々宮君が石橋の向うに長く立つてゐる。

「君まだ居たんですか」と云ふ。三四郎は答をする前に、立つてのそ／＼歩いて行つた。石橋の上迄来て、

「えゝ」と云つた。何となく間が抜けてゐる。けれども、野々宮君は、少しも驚かない。

「涼しいですか」と聞いた。三四郎は又

「えゝ」と云つた。

野々宮君は心字池の水を眺めてゐたが、右の手を隠袋へ入れて何か探し出した。隠袋から半分封筒が食み出してゐる。其上に書いてある字が女の手蹟らしい。野々宮君は思ふ物を探し宛てなかつたと見えて、元の通りの手を出してぶらりと下げた。さうして、かう云つた。

「今日は少し装置が狂つたので晩の實驗は已めた。是から本郷の方を散歩して歸らうと思ふが、君どうです一所にあるきませんか」

三四郎は快く應じた。二人で坂を上がつて、岡の上へ出た。野々宮君はさつき女の立つてゐた邊で一寸留まつて、向うの青い木立の間から見える赤い建物と、崖の高い割に、水の落ちた池を一面に見渡して、

「一寸好い景色でせう。あの建築の角度の所丈が少し出てゐる。木の間から。ね。好いでせう。君氣が附いてゐますか。あの建物は中々旨く出來てゐますよ。工科もよく出來てゐるが此方が旨いですね」

三四郎は野々宮君の鑑賞力に少々驚いた。實を云ふと自分には何方が好いか丸で分らないのである。そこで今度は三四郎の方が、はあ、はあと云ひ出した。

「それから、此木と水の感じがね。――大したものぢやないが、何しろ東京の眞中にあるんだから――靜かでせう。かう云ふ所でないと學問をやるには不可ませんね。近頃は東京があまり八釜敷くなり過ぎて困る。是が御殿」とあるき出しながら、左手の建物を指して見せる。「教授會を遣る所です。うむなに、

僕なんか出ないで好いのです。僕は穴倉生活を遣つてゐれば濟むのです。近頃の學問は非常な勢ひで動いてゐるので、少し油斷すると、すぐ取殘されて仕舞ふ。人が見ると穴倉のなかで冗談をしてゐる樣だが、是でも遣つてる當人の頭の中は劇烈に働いてゐるんですよ。電車より餘つ程烈しく働いてゐるかも知れない。だから夏でも旅行をするのが惜しくつてね」と言ひながら仰向いて大きな空を見た。空にはもう日の光が乏しい。

青い空の靜まり返つた、上皮に、白い薄雲が刷毛先で掻き拂つた痕の樣に、筋違に長く浮いてゐる。

「あれを知つてますか」と云ふ。三四郎は仰いで半透明の雲を見た。

「あれは、みんな雪の粉ですよ。かうやつて下から見ると、些とも動いて居ない。然し、あれで地上に起る颶風以上の速力で動いてゐるんですよ。――君ラスキンを讀みましたか」

三四郎は憮然として讀まないと答へた。野々宮君はたゞ

「さうですか」と云つた許りである。しばらくしてから、

「此空を寫生したら面白いですね。――原口にでも話してやらうかしら」と云つた。三四郎は無論原口と云ふ畫工の名前を知らなかつた。

二人はベルツの銅像の前から枳殼寺の横を電車の通りへ出た。銅像の前で、此銅像はどうですかと聞かれて三四郎は又弱つた。表は大變賑かである。電車がしきりなしに通る。

「君電車は煩くはないですか」と又聞かれた。三四郎は煩いより凄じい位である。然し只「えゝ」と答へて置いた。すると野々宮君は「僕もうるさい」と云つた。然し一向煩い様にも見えなかつた。

「僕は車掌に教はらないと、一人で乗換が自由に出來ない。此二三年來無暗に殖えたのでね。便利になつて却て困る。僕の學問と同じ事だ」と言つて笑つた。

學期の始まり際なので新しい高等學校の帽子を被つた生徒が大分通る。野々宮君は愉快さうに、此連中を見てゐる。

「大分新しいのが來ましたね」と云ふ。「若い人は活氣があつて好い。時に君は幾歳ですか」と聞いた。三四郎は宿帳へ書いた通りを答へた。すると、

「それぢや僕より七つ許り若い。七年もあると、人間は大抵の事が出來る。然し月日は立ち易いものでね。七年位直きですよ」と云ふ。どつちが本當なんだか、三四郎には解らなかつた。

四つ角近くへ來ると左右に本屋と雜誌屋が澤山ある。そのうちの二三軒には人が黒山の様にたかつてゐる。さうして雜誌を讀んでゐる。さうして買はずに行つて仕舞ふ。野々宮君は、

「みんな狡猾いなあ」と云つて笑つてゐる。尤も當人も一寸太陽を開けて見た。

四つ角へ出ると、左手の此方側に西洋小間物屋があつて、向う側に日本小間物屋がある。其間を電車がぐるつと曲がつて、非常な勢ひで通る。ベルがちん〱ちん〱云ふ。渡りにくい程雜沓する。野々宮君

は、向うの小間物屋を指して、

「あすこで一寸買物をしますからね」と云つて、ちりん〱と鳴る間を馳け抜けた。三四郎も食つ付いて、向うへ渡つた。野々宮君は早速店へ這入つた。表に待つてゐた三四郎が、氣が附いて見ると、店先の硝子張の棚に櫛だの花簪だのが列べてある。三四郎は妙に思つた。野々宮君が何を買つてゐるのかしらと、不審を起して、店の中へ這入つて見ると、蟬の羽根の様なリボンをぶら下げて、

「どうですか」と聞かれた。三四郎は此時自分も何か買つて、鮎の御禮に三輪田のお光さんに送つてやらうかと思つた。けれどもお光さんが、それを貰つて、鮎の御禮と思はずに、屹度何だかんだと手前勝手の理窟を附けるに違ひないと考へたから已めにした。

それから眞砂町で野々宮君に西洋料理の御馳走になつた。野々宮君の話しでは本郷で一番旨い家ださうだ。けれども三四郎にはたゞ西洋料理の味がする丈であつた。然し食べる事はみんな食べた。

西洋料理屋の前で野々宮君に別れて、追分に歸る所を丁寧にもとの四つ角迄出て、左へ折れた。下駄を買はうと思つて、下駄屋を覗き込んだら、白熱瓦斯の下に、眞白に塗り立てた娘が、石膏の化物の様に坐つてゐたので、急に厭になつて已めた。それから家へ歸る間、大學の池の端で逢つた女の、顔の色ばかり考へてゐた。――其色は薄く餅を焦がした様な狐色であつた。さうして肌理が非常に細かであつた。三四郎は、女の色は、どうしてもあれでなくつては駄目だと斷定した。

三

學年は九月十一日に始まつた。三四郎は正直に午前十時半頃學校へ行つて見たが、玄關前の掲示場に講義の時間割がある許りで學生は一人も居ない。自分の聽くべき分丈を手帳に書き留めて、それから事務室へ寄つたら、流石に事務員丈は出て居た。講義はいつから始まりますかと聞くと、九月十一日から始まると云つてゐる。澄ましたものである。でも、どの部屋を見ても講義がない樣ですがと尋ねると、それは先生が居ないからだと答へた。三四郎は成程と思つて事務室を出た。裏へ廻つて、大きな欅の下から高い空を覗いたら、普通の空よりも明らかに見えた。熊笹の中を水際へ下りて、例の椎の木の所迄來て、又しやがんだ。あの女がもう一遍通れば可い位に考へて、度々岡の上を眺めたが、岡の上には人影もしなかつた。三四郎はそれが當然だと考へた。けれども矢張りしやがんでゐた。すると午砲が鳴つたんで驚いて下宿へ歸つた。

翌日は正八時に學校へ行つた。正門を這入ると、取付の大通の左右に植ゑてある銀杏の並木が眼に付いた。銀杏が向うの方で盡きるあたりから、だら〳〵坂に下がつて、正門の際に立つた三四郎から見ると、坂の向うにある理科大學は二階の一部しか出てゐない。其屋根の後に朝日を受けた上野の森が遠く輝いてゐる。日は正面にある。三四郎は此奥行のある景色を愉快に感じた。

銀杏の並木が此方側で盡きる右手には法文科大學がある。左手には少し退つて博物の教室がある。建築は双方共に同じで、細長い窓の上に、三角に尖つた屋根が突き出してゐる。其三角の縁に當る赤煉瓦と黒い屋根の接目の所が細い石の直線で出來てゐる。さうして其石の色が少し蒼味を帯びて、すぐ下にくる派出な赤煉瓦に一種の趣を添へてゐる。さうして此長い窓と、高い三角が横にいくつも續いてゐる。三四郎は此間野々宮君の説を聞いてから以來、急に此建物を難有く思つて居たが、今朝は、此意見が野々宮君の意見でなくつて、初手から自分の持説である様な氣がし出した。ことに博物室が法文科と一直線に並んでゐないで、少し奥へ引つ込んでゐる所が不規則で妙だと思つた。こんど野々宮君に逢つたら自分の發明として此説を持ち出さうと考へた。

法文科の右のはづれから半町程前へ突き出してゐる圖書館にも感服した。よく分らないが何でも同じ建築だらうと考へられる。其赤い壁に着けて、大きな棕櫚の木を五六本植ゑた所が大いに好い。左手のずつと奥にある工科大學は封建時代の西洋の御城から割り出した様に見えた。眞四角に出來上がつてゐる。窓も四角である。只四隅と入口が丸い。是は櫓を形取つたんだらう。御城丈に堅牢してゐる。法文科見た様に倒れさうでない。何だか脊の低い相撲取に似て居る。

三四郎は見渡す限り見渡して、此外にもまだ眼に入らない建物が澤山ある事を勘定に入れて、何處となく雄大な感じを起した。「學問の府はかうなくつてはならない。かう云ふ構があればこそ研究も出來る。

えらいものだ――三四郎は大學者になつた樣な心持がした。

けれども教室へ這入つて見たら、鐘は鳴つても先生は來なかつた。其代り學生も出て來ない。次の時間も其通りであつた。三四郎は癇癪を起して教場を出た。さうして念の爲に池の周圍を二遍許り廻つて下宿へ歸つた。

夫から約十日許り立つてから、漸く講義が始まつた。三四郎が始めて教室へ這入つて、外の學生と一所に先生の來るのを待つてゐた時の心持は實に殊勝なものであつた。神主が裝束を着けて、是から祭典でも行はうとする間際には、かう云ふ氣分がするだらうと、三四郎は自分で自分の了見を推定した。實際學問の威嚴に打たれたに違ない。それのみならず先生が號鐘が鳴つて十五分立つても出て來ないので益期待から生ずる敬畏の念を增した。そのうち人品のいゝ御爺さんの西洋人が戶を開けて這入つて來て、流暢な英語で講義を始めた。三四郎は其時 answer と云ふ字はアングロ・サクソン語の and-swaru から出たんだと云ふ事を覺えた。それからスコットの通つた小學校の村の名を覺えた。いづれも大切に筆記帳に記して置いた。其次には文學論の講義に出た。此先生は教室に這入つて、一寸黑板を眺めてゐたが、黑板の上に書いてある Geschehen と云ふ字と Nachbild と云ふ字を見て、はあ獨逸語かと云つて、笑ひながらさつさと消して仕舞つた。三四郎は之が爲に獨逸語に對する敬意を少し失つた樣に感じた。先生は、それから古來文學者が天才に對して下した定義を凡そ二十許り列べた。三四郎は是も大事に手帳に筆記して置

いた。午後は大教室に出た。其教室には約七八十人程の聽講者が居た。從つて先生も演説口調であつた。砲聲一發浦賀の夢を破つてと云ふ冒頭であつたから、三四郎は面白がつて聞いてゐると、仕舞には獨逸の哲學者の名が澤山出て來て甚だ解しにくゝなつた。机の上を見ると、落第と云ふ字が美事に彫つてある。餘程閑に任せて仕上げたものと見えて、堅い樫の板を綺麗に切り込んだ手際は素人とは思はれない。深刻の出來である。隣の男は感心に根氣よく筆記をつゞけてゐる。覗いて見ると筆記ではない。遠くから先生の似顔をポンチに書いてゐたのである。三四郎が覗くや否や隣の男はノートを三四郎の方に出して見せた。畫は旨く出來てゐるが、傍に久方の雲井の空の子規と書いてあるのは何の事だか判じかねた。

講義が終つてから、三四郎は何となく疲勞した樣な氣味で、二階の窓から頬杖を突いて、正門內の庭を見下ろしてゐた。只大きな松や櫻を植ゑて其間に砂利を敷いた廣い道を附けた許りであるが、手を入れ過ぎてゐない丈に、見てゐて心持が好い。野々宮君の話しによると此處は昔はかう綺麗ではなかつた。野々宮君の先生の何とか云ふ人が、學生の時分馬に乘つて、此處を乘り廻すうちに、馬が云ふ事を聞かないで、意地を惡くわざと木の下を通るので、帽子が松の枝に引つかゝる。下駄の齒が鐙に挾まる。先生は大變困つてゐると、正門前の喜多床と云ふ髪結床の職人が大勢出て來て、面白がつて笑つてゐたさうである。其時有志のものが醵金して構內に厩をこしらへて、三頭の馬と、馬の先生とを飼つて置いた。所が先生が大變な酒呑で、とう／＼三頭のうちの一番好い白い馬を賣つて飲んで仕舞つた。それはナポレオン三

世時代の老馬であつたさうだ。まさかナポレオン三世時代でも無からう。然し呑気な時代もあつたものだと考へてゐると、さつきポンチ画をかいた男が来て、

「大学の講義は詰らんなあ」と云つた。三四郎は好い加減な返事をした。実は詰るか詰らないか、三四郎には些とも判断が出来ないのである。然し此時から此男と口を利く様になつた。

其日は何となく気が塞いで、面白くなかつたので、池の周囲を回る事は見合せて家へ帰つた。晩食後筆記を繰り返して読んで見たが、別に愉快にも不愉快にもならなかつた。母に言文一致の手紙をかいた。——学校は始まつた。是から毎日出る。学校は大変広い好い場所で、建物も大変美しい。真中に池がある。池の周囲を散歩するのが楽しみだ。電車には近頃漸く乗り馴れた。何か買つて上げたいが、何が好いか分らないから、買つて上げない。欲しければ其方から云つて来て呉れ。今年の米は今に価が出るから、売らずに置く方が得だらう。三輪田のお光さんにはあまり愛想を善くしない方が好からう。東京へ来て見ると人はいくらでもゐる。男も多いが女も多い。と云ふ様な事をごた／＼並べたものであつた。

手紙を書いて、英語の本を六七頁読んだら厭になつた。こんな本を一冊位読んでも駄目だと思ひ出した。床を取つて寝る事にしたが、寝つかれない。不眠症になつたら早く病院に行つて見て貰はう抔と考へてゐるうちに寝て仕舞つた。

翌日も例刻に学校へ行つて講義を聞いた。講義の間に今年の卒業生が何処其処へ幾何で売れたと云ふ話

を耳にした。誰と誰がまだ殘つてゐて、それがある私立學校の地位を競爭してゐる噂だ抔と話してゐるものがあつた。三四郎は漠然と、未來が遠くから眼前に押し寄せる樣な鈍い壓迫を感じたが、それはすぐ忘れて仕舞つた。寧ろ昇之助が何とかしたと云ふ方の話が面白かつた。そこで廊下で熊本出の同級生を捕まへて、昇之助とは何だと聞いたら、寄席へ出る娘義太夫だと敎へて吳れた。夫から寄席の看板はこんなもので、本鄕のどこにあると云ふ事迄云つて聞かせた上、今度の土曜に一所に行かうと誘つて吳れた。よく知つてると思つたら、此男は昨夜始めて、寄席へ這入つたのださうだ。三四郎は何だか寄席へ行つて昇之助が見度くなつた。

　晝飯を食ひに下宿へ歸らうと思つたら、昨日ポンチ畫をかいた男が來て、おい／＼と云ひながら、本鄕の通りの淀見軒と云ふ所に引つ張つて行つて、ライスカレーを食はした。淀見軒と云ふ所は店で果物を賣つてゐる。新しい普請であつた。ポンチ畫をかいた男は此建築の表を指さして、是がヌーボー式だと敎へた。三四郎は建築にもヌーボー式があるものかと始めて悟つた。歸り路に青木堂も敎はつた。矢張り大學生のよく行く所ださうである。赤門を這入つて、二人で池の周圍を散步した。其時ポンチ畫の男は、死んだ小泉八雲先生は敎員控室へ這入るのが嫌ひで講義が濟むといつでも此周圍をぐる／＼廻つてあるいたんだと、恰も小泉先生に敎はつた樣な事を云つた。何故控室へ這入らなかつたのだらうかと三四郎が尋ねたら、

「そりや當り前ださ。第一彼等の講義を聞いても解るぢやないか。話せるものは一人もゐやしない」と

手前い事を平氣で言つたには三四郎も驚いた。此男は佐々木與次郎と云つて、專門學校を卒業して、ことし又選科へ這入つたのださうだ。東片町の五番地の廣田と云ふうちに居るから、遊びに來いと云ふ。下宿かと聞くと、なに高等學校の先生の家だと答へた。

それから當分の間三四郎は毎日學校へ通つて、律義に講義を聽いた。必修課目以外のものへも時々出席して見た。それでも、まだ物足りない。そこで遂には專攻課目に丸で緣故のないものゝ迄へも折々は顏を出した。然し大抵は二度か三度で已めて仕舞つた。一ヶ月と續いたのは少しも無かつた。それでも平均一週に約四十時間程になる。如何な勤勉な三四郎にも四十時間はちと多過ぎる。三四郎は斷えず一種の壓迫を感じてゐた。然るに物足りない。三四郎は樂しまなくなつた。

或日佐々木與次郎に逢つて其話をすると、與次郎は四十時間と聞いて、眼を丸くして「馬鹿々々」と云つたが、「下宿屋のまづい飯を一日に十返食つたら物足りる樣になるか考へて見ろ」といきなり警句でもつて三四郎を打しつけた。三四郎はすぐさま恐れ入つて「どうしたら善からう」と相談をかけた。

「電車に乘るがいゝ」と與次郎が云つた。三四郎は何か寓意でもある事と思つて、しばらく考へて見たが、別に是と云ふ思案も浮かばないので、

「本當の電車か」と聞き直した。其時與次郎はげら／＼笑つて、

「電車に乘つて、東京を十五六返乘り回してゐるうちには自ら物足りる樣になるさ」と云ふ。

「何故」

「何故つて、さう、活きてる頭を、死んだ講義で封じ込めちや、助からない。外へ出て風を入れるさ。其上に物足りる工夫はいくらでもあるが、まあ電車が一番の初歩で且尤も輕便だ」

其日の夕方、與次郎は三四郎を拉して、四丁目から電車に乘つて、新橋へ行つて、新橋から又引き返して、日本橋へ來て、そこで下りて、

「どうだ」と聞いた。

次に大通から細い横町へ曲がつて、平の家と云ふ看板のある料理屋へ上がつて、晩飯を食つて酒を呑んだ。其處の下女はみんな京都辯を使ふ。甚だ纏綿してゐる。表へ出た與次郎は赤い顔をして、又

「どうだ」と聞いた。

次に本場の寄席へ連れて行つてやると云つて、又細い横町へ這入つて、木原店と云ふ寄席へ上がつた。此處で小さんといふ落語家を聞いた。十時過で通へ出た與次郎は、又

「どうだ」と聞いた。

三四郎は物足りたとは答へなかつた。然し滿更物足りない心持もしなかつた。すると與次郎は大いに小さん論を始めた。

小さんは天才である。あんな藝術家は滅多に出るものぢやない。何時でも聞けると思ふから安つぽい感

じがして、甚だ氣の毒だ。實は彼と時を同じうして生きてゐる我々は大變な仕合せである。今から少し前に生れても小さんは聞けない。少し後れても同樣だ。——圓遊も旨い。然し小さんとは趣が違つてゐる。圓遊の扮した太鼓持は、太鼓持になつた圓遊だから面白いので、小さんの遣る太鼓持は、小さんを離れた太鼓持だから面白い。圓遊の演ずる人物から圓遊を隱せば、人物が丸で消滅して仕舞ふ。小さんの演ずる人物から、いくら小さんを隱したつて、人物は活潑々地に躍動する許りだ。そこがえらい。

與次郎はこんな事を云つて、又

「どうだ」と聞いた。實を云ふと三四郎には小さんの味はひが善く分らなかつた。其上圓遊なるものは未だ甞て聞いた事がない。從つて與次郎の說の當否は判定しにくい。然し其比較のほとんど文學的と云ひ得る程に要領を得たには感服した。

高等學校の前で分れる時、三四郎は、

「難有う、大いに物足りた」と禮を述べた。すると與次郎は、

「是から先は圖書館でなくつちや物足りない」と云つて片町の方へ曲がつて仕舞つた。此一言で三四郎は始めて圖書館に這入る事を知つた。

其翌日から三四郎は四十時間の講義を殆んど半分に減らして仕舞つた。さうして圖書館に這入つた。廣く、長く、天井が高く、左右に窓の澤山ある建物であつた。書庫は入口しか見えない。此方の正面から覗くと

奥には、書物がいくらでも備へ付けてある樣に思はれる。立つて見てゐると、書庫の中から、厚い本を二三冊抱へて、出口へ來て左へ折れて行くものがある。職員閲覽室へ行く人である。中には必要の本を書棚から取り卸して、胸一杯にひろげて、立ちながら調べてゐる人もある。三四郎は羨ましくなつた。奥迄行つて二階へ上つて、それから三階へ上つて、本鄕より高い所で、生きたものを近付けずに、紙の臭を嗅ぎながら、――讀んで見たい。けれども何を讀むかに至つては、別に判然した考へがない。讀んで見なければ分らないが、何かあの奥に澤山ありさうに思ふ。

三四郎は一年生だから書庫へ這入る權利がない。仕方なしに、大きな箱入りの札目錄を、こゞんで一枚一枚調べて行くと、いくら捲くつても後から後から新しい本の名が出て來る。仕舞に肩が痛くなつた。顏を上げて、中休みに、館内を見廻すと、流石に圖書館丈あつて靜かなものである。しかも人が澤山ゐる。さうして向ふの果にゐる人の頭が黑く見える。眼口は判然しない。高い窓の外から所々に樹が見える。空も少し見える。遠くから町の音がする。三四郎は立ちながら、學者の生活は靜かで深いものだと考へた。それで其日は其儘歸つた。

次の日は空想をやめて、這入ると早速本を借りた。然し借り損なつたので、すぐ返した。後から借りた本は六づかし過ぎて讀めなかつたから又返した。三四郎はかう云ふ風にして毎日本を八九冊宛は必ず借りた。尤もたまには少し讀んだのもある。三四郎が感心したのは、どんな本を借りても、屹度誰か一度は眼を通

して貰ふと云ふ事實を發見した時であつた。それは書中此處彼處に見える鉛筆の痕で確かである。ある時三四郎は念の爲、アフラ・ベーンと云ふ作家の小説を借りて見た。開ける迄は、よもやと思つたが、見ると矢張り鉛筆で丁寧にしるしが附けてあつた。此時三四郎はこれは到底遣り切れないと思つた。所へ窓の外を樂隊が通つたんで、つい散歩に出る氣になつて、通へ出て、とう〳〵青木堂へ這入つた。

這入つて見ると客が二組あつて、いづれも學生であつたが、向うの隅にたつた一人離れて茶を飲んでゐた男がある。不圖其横顔を見ると、どうも上京の節汽車の中で水蜜桃を澤山食つた人の樣である。向うは氣がつかない。茶を一口飲んでは煙草を一吸ひすつて、大變悠然構へてゐる。今日は白地の浴衣を已めて、背廣を着てゐる。然し決して立派なものぢやない。光線の壓力の野々宮君より白襯衣丈が増しな位なものである。三四郎は樣子を見てゐるうちに慥かに水蜜桃だと物色した。大學の講義を聞いてから以來、汽車の中で此男の話した事が何だか急に意義のある樣に思はれ出した所なので、三四郎は傍へ行つて挨拶を仕ようかと思つた。けれども先方は正面を見たなり、茶を飲んでは、煙草をふかし、煙草をふかしては茶を飲んでゐる。手の出し樣がない。

三四郎は凝と其横顔を眺めてゐたが、突然手杯にある葡萄酒を飲み干して、表へ飛び出した。さうして圖書館に歸つた。

其日は葡萄酒の景氣と、一種の精神作用とで、例になく面白く勉強が出來たので、三四郎は大いに嬉し

く思つた。二時間程読書三昧に入つた後、漸く氣が付いて、そろ／＼歸る支度をしながら、一所に借りた書物のうち、まだ開けて見なかつた、最後の一冊を何氣なく引つぺがして見ると、本の見返しの空いた所に、亂暴にも、鉛筆で一杯何か書いてある。

「ヘーゲルの伯林大學に哲學を講じたる時、ヘーゲルに毫も哲學を賣るの意なし。彼の講義は眞を說くの講義にあらず、眞を體せる人の講義なり。舌の講義にあらずして、心の講義なり。眞と人と合して醇化一致せる時、其說く所、云ふ所は、講義の爲の講義にあらずして、道の爲の講義となる。哲學の講義は茲に至つて始めて聞くべし。徒らに眞を舌頭に轉ずるものは、死したる墨を以て、死したる紙の上に、空しき筆記を殘すに過ぎず。何の意義かこれあらん。……余今試驗の爲、卽ち麪麭の爲に、恨を呑み淚を呑んで此書を讀む。岑々たる頭を抑へて未來永劫に試驗制度を呪詛する事を記憶せよ」

とある。署名は無論ない。三四郎は覺えず微笑した。けれども何處か啓發された樣な氣がした。哲學ばかりぢやない、文學も此通りだらうと考へながら、頁をはぐると、まだある。「ヘーゲルの――」餘程ヘーゲルの好きな男と見える。

「ヘーゲルの講義を聞かんとして、四方より伯林に集まれる學生は、此講義を衣食の資に利用せんとの野心を以て集まれるにあらず。唯哲人ヘーゲルなるものありて、講壇の上に、無上普遍の眞を傳ふると聞いて、向上求道の念に切なるがため、壇下に、わが不穩底の疑義を解釋せんと欲したる淸淨心の發現に外

ならず。此故に彼等はヘーゲルを聞いて、彼等の未來を決定し得たり。自己の運命を改造し得たり。のつぺらぽうに講義を聽いて、のつぺらぽうに卒業し去る公等日本の大學生と同じ事と思ふは、天下の己惚なり。公等はタイプ・ライターに過ぎず。しかも慾張つたるタイプ・ライターなり。公等のなす所、思ふ所、云ふ所、遂に切實なる社會の活氣運に關せず。死に至る迄のつぺらぽうなるかな。死に至る迄のつぺらぽうなるかな」

と、のつぺらぽうを二遍繰り返してゐる。三四郎は默然として考へ込んでゐた。すると、後から一寸肩を叩いたものがある。例の與次郎であつた。與次郎を圖書館で見掛けるのは珍らしい。彼は講義は駄目だが、圖書館は大切だと主張する男である。けれども主張通りに這入る事も少ない男である。

「おい、野々宮宗八さんが、君を探してゐた」と云ふ。與次郎が野々宮君を知らうとは思ひがけなかつたから、念の爲理科大學の野々宮さんかと聞き直すと、うんと云ふ答を得た。早速本を置いて入口の新聞を閲覽する所迄出て行つたが、野々宮君が居ない。玄關迄出て見たが矢つ張り居ない。石段を下りて、首を延ばして其邊を見廻したが影も形も見えない。已むを得ず引き返した。元の席へ來て見ると、與次郎が、例のヘーゲル論を指して、小さな聲で、

「大分振つてる。昔の卒業生に違ひない。昔の奴は亂暴だが、どこか面白い所がある。實際此通りだ」

とにや／＼してゐる。大分氣に入つたらしい。三四郎は

「野々宮さんは居らんぜ」と云ふ。

「先刻入口に居たがな」

「何か用がある樣だつたか」

「ある樣でもあつた」

二人は一所に圖書館を出た。其時與次郎が話した。――野々宮君は自分の寄宿してゐる廣田先生の、元の弟子でよく來る。大變な學問好きで、研究も大分ある。其道の人なら、西洋人でもみんな野々宮君の名を知つてゐる。

三四郎は又、野々宮君の先生で、昔正門内で馬に蹴られた人の話を思ひ出して、或はそれが廣田先生ではなからうかと考へ出した。與次郎に其事を話すと、與次郎は、ことによると、宅の先生だ、そんな事を遣りかねない人だと云つて笑つてゐた。

其翌日は丁度日曜なので、學校では野々宮君に逢ふ譯に行かない。然し昨日自分を搜してゐた事が氣掛りになる。幸ひまだ新宅を訪問した事がないから、此方から行つて用事を聞いて來樣と云ふ氣になつた。思ひ立つたのは朝であつたが、新聞を讀んで愚圖々々してゐるうちに午になる。午飯を食べたから、出掛けようとすると、久し振に熊本出の友人が來る。漸くそれを歸したのは彼是四時過ぎである。ちと遲くなつたが、豫定の通り出た。

野々宮の家は頗る遠い。四五日前大久保へ越した。然し電車を利用すれば、すぐに行かれる。何でも停車場の近邊と聞いてゐるから、探すに不便はない。實を云ふと三四郎はかの平野家行以來飛んだ失敗をしてゐる。神田の高等商業學校へ行く積りで、本郷四丁目から乘つた所が、乘り越して九段迄來て、序に飯田橋迄持つて行かれて、其處で漸く外濠線へ乘り換へて御茶の水から神田橋へ出て、まだ悟らずに鎌倉河岸を數寄屋橋の方へ向いて急いで行つた事がある。それより以來電車は兎角物騷な感じがしてならないのだが、甲武線は一筋だと、かねて聞いてゐるから安心して乘つた。

大久保の停車場を下りて、仲百人の通を戸山學校の方へ行かずに、踏切からすぐ横へ折れると、ほとんど三尺許りの細い路になる。それを爪先上りにだら〳〵と上ると、疎らな孟宗藪がある。其藪の手前と先に一軒づゝ人が住んでゐる。野々宮の家は其手前の分であつた。小さな門が路の向きに丸で關係のない樣な位置に筋違に立つてゐた。這入ると、家が又見當違ひの所にあつた。門も入口も全く後から附けたものらしい。

臺所の傍に立派な生垣があつて、庭の方には却つて仕切りも何もない。只大きな萩が人の脊より高く延びて、座敷の緣側を少し隱してゐる許りである。野々宮君は此緣側に椅子を持ち出して、それへ腰を掛けて西洋の雜誌を讀んでゐた。三四郎の這入つて來たのを見て、

「此方へ」と云つた。丸で理科大學の穴倉の中と同じ挨拶である。庭から這入るべきのか、玄關から廻

るべきのか、三四郎は少しく躊躇してゐた。すると又

「此方へ」と催促されるので、思ひ切つて座敷へ上がる事にした。座敷は即ち書齋で、廣さは八疊で、割合に西洋の書物が澤山あつた。野々宮君は椅子を離れて坐つた。三四郎は閑靜な所だとか、割合に御茶の水迄早く出られるとか、望遠鏡の試驗はどうなりましたとか、——締りのない當座の話をしてゐた。

「昨日私を探して御出でだつたさうですが、何か御用ですか」と聞いた。すると野々宮君は、少し氣の毒さうな顔をして、

「何實は何でもないんですよ」と云つた。三四郎はたゞ「はあ」と云つた。

「それでわざ〳〵來て呉れたんですか」

「なに、さう云ふ譯でもありません」

「實は御國の御母さんがね、僕が色々御世話になるからと云つて、結構なものを送つて下さつたから、一寸あなたにも御禮を云はうと思つて……」

「はあ、さうですか。何か送つて來ましたか」

「えゝ赤い魚の粕漬なんですがね」

「ぢやひめいちでせう」

三四郎は詰らんものを送つたものだと思つた。しかし野々宮君はかのひめいちに就いて色々な事を質問

した。三四郎は特に食ふ時の心得を説明した。粕で焼いて、いざ皿へ移すと云ふ時に、粕を取らないと味が抜けると云つて教へてやつた。

二人がひめいちに就いて問答をしてゐるうちに、日が暮れた。三四郎はもう歸らうと思つて挨拶をしかける所へ、どこからか電報が來た。野々宮君は封を切つて、電報を讀んだが、口のうちで、「困つたな」と云つた。

三四郎は澄ましてゐる譯にも行かず、と云つて無暗に立入つた事を聞く氣にもならなかつたので、たゞ、

「何か出來ましたか」と棒の樣に聞いた。すると野々宮君は、

「なに大した事でもないのです」と云つて、手に持つた電報を、三四郎に見せて呉れた。すぐ來てくれとある。

「何處かへ御出でになるのですか」

「えゝ、妹が此間から病氣をして、大學の病院に這入つてゐるんですが、其奴がすぐ來てくれと云ふんです」と一向騷ぐ氣色もない。三四郎の方は却て驚いた。野々宮君の妹と、妹の病氣と、大學の病院を一所に纏めて、それに池の周圍で逢つた女を加へて、それを一どきに掻き廻して、驚いてゐる。

「ぢや餘程御惡いんですな」

「なに左樣ぢやないんでせう。實は母が看病に行つてるんですが、――もし病氣の爲なら、電車へ乘つ

て驅けて來た方が早い譯ですからね。――なに妹の悪戯でせう。馬鹿だから、よくこんな眞似をします。此處へ越してからまだ一遍も行かないものだから、今日の日曜には來ると思つて待つてでもゐたのでせう、それでゝと云つて首を横に曲げて考へた。

「然し御出でになつた方が可いでせう。もし悪いと不可ません」

「左樣。四五日行かないうちにさう急に變る譯もなささうですが、まあ行つて見るか」

「御出でになるに若くはないでせう」

野々宮は行く事にした。行くと極めたに就いては、三四郎に依頼があると云ひ出した。萬一病氣の爲の電報とすると、今夜は歸れない。すると留守が下女一人になる。下女が非常に臆病で、近所が殊の外物騷である。來合はせたのが丁度幸ひだから、明日の課業に差支へがなければ泊つて呉れまいか、尤も只の電報ならば直ぐ歸つてくる。前から分つてゐれば、例の佐々木でも頼む筈だつたが、今からではとても間に合はない。たつた一晩の事ではあるし、病院へ泊るか、泊らないか、まだ分らない先から、關係もない人に、迷惑を掛けるのは我儘過ぎて、強ひてとは云ひかねるが、――無論野々宮はかう流暢には頼まなかつたが、相手の三四郎が、さう流暢に頼まれる必要のない男だから、すぐ承知して仕舞つた。

下女が御飯はと云ふのを、「食はない」と云つた儘、三四郎に「失敬だが、君一人で、後で食つて下さい」と夕飯迄置き去りにして、出て行つた。行つたと思つたら暗い萩の間から大きな聲を出して、

かである。それでも竹格子の間から鼻を出す位にして、暗い所を眺めてゐた。

すると停車場の方から提灯を點けた男が鐵軌の上を傳つて此方へ來る。話し聲で判じると三四人らしい。提灯の影は踏み切りから土手下へ隱れて、孟宗藪の下を通る時は、話し聲丈になつた。けれども、其言葉は手に取る樣に聞こえた。

「もう少し先だ」

足音は向うへ遠退いて行く。三四郎は庭先へ廻つて下駄を突つ掛けた儘孟宗藪の所から、一間餘の土手を這ひ下りて、提灯のあとを追つ掛けて行つた。

五六間行くか行かないうちに、又一人土手から飛び下りたものがある。

「轢死ぢやないですか」

三四郎は何か答へようとしたが一寸聲が出なかつた。其うち黒い男は行き過ぎた。是は野々宮君の奥に住んでゐる家の主人だらうと、後を跟けながら考へた。半町程くると提灯が留まつてゐる。人も留まつてゐる。人は灯を翳した儘默つてゐる。三四郎は無言で灯の下を見た。下には死骸が半分ある。汽車は右の肩から乳の下を腰の上迄美事に引き千切つて、斜掛の胴を置き去りにして行つたのである。顔は無創である。若い女だ。

三四郎は其時の心持を未だに覺えてゐる。すぐ歸らうとして、踵を囘らしかけたが、足がすくんで殆ど

動けなかつた。土手を這ひ上がつて、座敷へ戻つたら、動悸が打ち出した。水を貰はうと思つて、下女を呼ぶと、下女は幸ひに何も知らないらしい。しばらくすると、奥の家で、何だか騒ぎ出した。三四郎は主人が歸つたんだなと覺つた。やがて土手の下ががや／＼する。それが濟むと又靜かになる。殆ど堪へ難い程の靜かさであつた。

三四郎の眼の前には、あり／＼と先刻の女の顏が見える。其顏と「あゝあゝ……」と云つた力のない聲と、其二つの奥に潜んで居るべき筈の無殘な運命とを、繼ぎ合はして考へて見ると、人生と云ふ丈夫さうな命の根が、知らぬ間に、ゆるんで、何時でも暗闇へ浮き出して行きさうに思はれる。三四郎は慾も得も入らない程怖かつた。たゞ轟と云ふ一瞬間である。其前迄は慥かに生きてゐたに違ひない。

三四郎は此時不圖汽車で水蜜桃を呉れた男が、危い／＼、氣を附けないと危い、と云つた事を思ひ出した。危い／＼と云ひながら、あの男はいやに落ち附いて居た。つまり危い／＼と云ひ得る程に、自分は危くない地位に立つてゐれば、あんな男にもなれるだらう。世の中にゐて、世の中を傍觀してゐる人は此處に面白味があるかも知れない。どうもあの水蜜桃の食ひ具合から、青木堂で茶を呑んでは烟草を喫ひ、烟草を喫つては茶を呑んで、凝と正面を見てゐた樣子は、正に此種の人物である。――批評家である。――三四郎は妙な意味に批評家と云ふ字を使つて見た。使つて見て自分で旨いと感心した。のみならず自分も批評家として、未來に存在しようかと迄考へ出した。あの凄い死顏を見るとこんな氣も起る。

三四郎は室の隅にある洋机と、洋机の前にある椅子と、椅子の横にある本箱と、其本箱の中に行儀よく並べてある洋書を見廻して、此靜かな書齋の主人は、あの批評家と同じく無事で幸福であると思つた。――光線の壓力を研究する爲に、女を轢死させる事はあるまい。主人の妹は病氣である。けれども兄の作つた病氣ではない。自ら罹つた病氣である。抔と夫から夫へと頭が移つて行くうちに、十一時になつた。中野行の電車はもう來ない。或は病氣がわるいので歸らないのかしらと、又心配になる。所へ野々宮から電報が來た。妹無事、明日朝歸るとあつた。

安心して床に這入つたが、三四郎の夢は頗る危險であつた。――轢死を企てた女は、野々宮に關係のある女で、野々宮はそれと知つて家へ歸つて來ない。只三四郎を安心させる爲に電報丈掛けた。妹無事とあるのは僞で、今夜轢死のあつた時刻に妹も死んで仕舞つた。さうして其妹は即ち三四郎が池の端で逢つた女である。……

三四郎は明日例になく早く起きた。

寐付かない所に寐た床のあとを眺めて、煙草を一本喫んだが、昨夜の事は凡て夢の樣である。緣側へ出て、低い廂の外にある空を仰ぐと、今日は好い天氣だ。世界が今朗らかに成つた許りの色をしてゐる。飯を濟まして茶を飲んで、緣側に椅子を持ち出して新聞を讀んでゐると、約束通り野々宮君が歸つて來た。

「昨夜、そこに轢死があつたさうですね」と云ふ。停車場か何かで聞いたものらしい。三四郎は自分の

野々宮君は昨夜よく寐られなかつたものだから茫然して不可ないと云ひ出した。今日は幸ひ午から早稻田の學校へ行く日で、大學の方は休みだから、それ迄寐ようと云つてゐる。「大分遲く迄起きてゐたんですか」と三四郎が聞くと、實は偶然高等學校で敎はつた、もとの先生の廣田といふ人が妹の見舞に來て吳れて、みんなで話しをしてゐるうちに、電車の時間に後れて、つひ泊る事にした。廣田のうちへ泊るべきのを、又妹が駄々を捏ねて、是非病院に泊れと云つて聞かないから、已むを得ず狹い所へ寐たら、何だか苦しくつて寐つかれなかつた。どうも妹は愚物だ。と又妹を攻擊する。三四郎は可笑しくなつた。少し妹の爲に辯護しようかと思つたが、何だか言ひ惡いので已めにした。

其代り廣田さんの事を聞いた。三四郎は廣田さんの名前を是で三四遍耳にしてゐる。さうして、水蜜桃の先生と靑木堂の先生に、ひそかに廣田さんの名を附けてゐる。それから正門內で意地の惡い馬に苦しめられて、喜多床の職人に笑はれたのも矢張り廣田先生にしてある。所が今承はつて見ると、馬の件は果して廣田先生であつた。それで水蜜桃も必ず同先生に違ひないと極めた。考へると、少し無理でもある。

歸るときに、序だから、午前中に屆けて貰ひたいと云つて、袷を一枚病院迄賴まれた。三四郎は大いに嬉しかつた。

三四郎は新しい四角な帽子を被つてゐる。此帽子を被つて病院に行けるのが一寸得意である。冴々しい顏をして野々宮君の家を出た。

御茶の水で電車を降りて、すぐ俥に乗つた。いつもの三四郎に似合はぬ所作である。威勢よく赤門を引き込ませた時、法文科の號鐘が鳴り出した。いつもなら手帳と印氣壺を持つて、八番の教室に這入る時分である。一二時間の講義位聽き損なつても構はないと云ふ氣で、眞直に青山内科の玄關迄乘り附けた。

上り口を奥へ、二つ目の角を右へ切れて、突當りを左へ曲がると東側の部屋だと教はつた通り歩いて行くと、果してあつた。黒塗の札に野々宮よし子と假名でかいて、戸口に懸けてある。三四郎は此名前を讀んだ儘、しばらく戸口の所で佇んでゐた。田舍者だから敲するなぞと云ふ氣の利いた事はやらない。「此中にゐる人が、野々宮君の妹で、よし子と云ふ女である」

三四郎は斯う思つて立つてゐた。戸を開けて顔が見度くもあるし、見て失望するのが厭でもある。自分の頭の中に往來する女の顔は、どうも野々宮宗八さんに似てゐないのだから困る。

後から看護婦が草履の音を立てて近附いて來た。三四郎は思ひ切つて戸を半分程開けた。さうして中にゐる女と顔を見合はせた。（片手に握りを把つた儘）

眼の大きな、鼻の細い、唇の薄い、鉢が開いたと思ふ位に、額が廣くつて顎が削けた女であつた。造作は夫丈である。けれども三四郎は、かう云ふ顔だちから出る、此時にひらめいた咄嗟の表情を生れて始めて見た。蒼白い額の後に、自然の儘に垂れた濃い髪が、肩迄見える。それへ東窓を洩れる朝日の光が、後から射すので、髪と日光の觸れ合ふ境の所が菫色に燃えて、活きた暈を背負つてる。それでゐて、顔も額

く、表の緑が映る上り口に、池の女が立つてゐる。はつと驚いた三四郎の足は、早速の歩調に狂ひが出來た。其時透明な空氣の畫布の中に暗く描かれた女の影は一歩前へ動いた。三四郎も誘はれた樣に前へ動いた。二人は一筋道の廊下の何處かで擦れ違はねばならぬ運命を以て互に近附いて來た。すると女が振り返つた。明るい表の空氣のなかには、初秋の緑が浮いてゐる計りである。振り返つた女の眼に應じて、四角のなかに、現はれたものもなければ、これを待ち受けてゐたものもない。三四郎は其間に女の姿勢と服裝を頭のなかへ入れた。

着物の色は何と云ふ名か分らない。大學の池の水へ、曇つた常磐木の影が映る時の樣である。それを鮮やかな縞が、上から下へ貫いてゐる。さうして其縞が貫きながら波を打つて、互に寄つたり離れたり、重なつて太くなつたり、割れて二筋になつたりする。不規則だけれども亂れない。上から三分一の所を、廣い帶で横に仕切つた。帶の感じには暖味がある。黄を含んでゐるためだらう。

後を振り向いた時、右の肩が、後へ引けて、左の手が腰に添つた儘前へ出た。半巾を持つてゐる。其半巾の指に餘つた所が、さらりと開いてゐる。絹の爲だらう。――腰から下は正しい姿勢にある。

女はやがて元の通りに向き直つた。眼を伏せて二足許り三四郎に近附いた時、突然首を少し後に引いて、まともに男を見た。二重瞼の切れ長の落ち附いた恰好である。目立つて黒い眉毛の下に活きてゐる。同時に綺麗な齒があらはれた。此齒と此顏色とは三四郎に取つて忘るべからざる對照であつた。

今日は白いものを薄く塗つてゐる。けれども本來の地を隱す程に無趣味ではなかつた。濃やかな肉が、程よく色づいて、強い日光に負けない樣に見える上を、極めて薄く粉が吹いてゐる。てら／＼照る顏ではない。

肉は頰と云はず顎と云はずきちりと締まつてゐる。骨の上に餘つたものは澤山ない位である。それでゐて、顏全體が柔らかい。肉が柔らかいのではない骨そのものが柔らかい樣に思はれる。奧行の長い感じを起させる顏である。

女は腰を曲めた。三四郞は知らぬ人に禮をされて驚いたと云ふよりも、寧ろ禮の仕方の巧みなのに驚いた。腰から上が、風に乘る紙の樣にふはりと前に落ちた。しかも早い。それで、ある角度迄來て苦もなく確然と留まつた。無論習つて覺えたものではない。

「一寸伺ひますが――」と云ふ聲が白い齒の間から出た。きりゝとしてゐる。然し鷹揚である。たゞ夏のさかりに椎の實が生つてゐるかと人に聞きさうには思はれなかつた。三四郞はそんな事に氣のつく餘裕はない。

「はあ」と云つて立ち留まつた。

「十五號室はどの邊になりませう」

十五號は三四郞が今出て來た室である。

「野々宮さんですか」

今度は女の方が「えゝ」と云つた。

「野々宮さんの部屋はね、其角を曲つて突當つて、又左へ曲つて右側二番目です」

「此角を……」と云ひながら女は細い指を前へ出した。

「えゝ、つい其先の角です」

「どうも難有う」

女は行き過ぎた。三四郎は立つたまゝ、女の後姿を見守つてゐる。女は角へ來た。曲がらうとする途端に振り返つた。三四郎は赤面する許りに狼狽した。女はにこりと笑つて、此角ですかと云ふ樣な合圖を顏でした。三四郎は思はず首肯いた。女の影は右へ切れて白い壁の中へ隱れた。

三四郎はぶらりと玄關を出た。醫科大學生と間違へて室の番號を聞いたのかしらんと思つて、五六歩あるいたが、急に氣が附いた。女に十五號を聞かれた時、もう一返よし子の室へ後戻りをして、案内すればよかつた。

三四郎は今更取つて歸す勇氣は出なかつた。已むを得ず又五六歩あるいたが、今度はぴたりと留まつた。三四郎の頭の中に、女の結んでゐたリボンの色が映つた。其リボンの色も質も、慥かに野々宮君が兼安で買つたものと同じであると考へ出した時、三四郎は急に足が重くなつた。圖書館の横をのたくる樣に正門

の方へ出ると、どこから來たか與次郎が突然聲を掛けた。
「おい何故休んだ。今日は伊太利人がマカロニーを如何にして食ふかと云ふ講義を聞いた」と云ひながら、傍へ寄つて來て三四郎の肩を叩いた。
二人は少し一所にあるいた。正門の傍へ來た時、三四郎は、
「君、今頃でも薄いリボンを掛けるものかな。あれは極暑に限るんぢやないか」と聞いた。與次郎はアハヽヽと笑つて、
「〇〇教授に聞くがいゝ。何でも知つてる男だから」と云つて取合はなかつた。
正門の所で三四郎は具合が悪いから今日は學校を休むと云ひ出した。與次郎は一所に跟いて來て損をしたと云はぬ許りに教室の方へ歸つて行つた。

四

三四郎の魂がふはつき出した。講義を聽いてゐると、遠方に聞こえる。わるくすると肝要な事を書き落とす。甚しい時は他人の耳を損料で借りてる樣な氣がする。三四郎は馬鹿々々しくつて堪らない。仕方なしに、與次郎に向つて、どうも近頃は講義が面白くないと言ひ出した。與次郎の答はいつも同じ事であつた。

「講義が面白い譯がない。君は田舎者だから、今に偉い事になると思つて、今日迄辛防して聞いてゐたんだらう。愚の至りだ。彼等の講義は開闢以來こんなものだ。今更失望したつて仕方がないや」

「さう云ふ譯でもないが……」と三四郎は辯解する。與次郎のへら／＼調と、三四郎の重苦しい口の利き樣が、不釣合で甚だ可笑しい。

かう云ふ問答を二三度繰り返してゐるうちに、いつの間にか半月許り經過つた。三四郎の耳は漸々借りものでない樣になつて來た。すると今度は與次郎の方から、三四郎に向つて、

「どうも妙な顏だな。如何にも生活に疲れてゐる樣な顏だ。世紀末の顏だ」と批評し出した。三四郎は、此批評に對しても依然として、

「さう云ふ譯でもないが……」を繰り返してゐた。三四郎は世紀末抔と云ふ言葉を聞いて嬉しがる程に、まだ人工的の空氣に觸れてゐなかつた。又これを興味ある玩具として使用し得る程に、ある社會の消息に通じてゐなかつた。たゞ生活に疲れてゐるといふ句が少し氣に入つた。成程疲れ出した樣でもある。三四郎は下痢の爲許りとは思はなかつた。けれども大いに疲れた顏を標榜するほど、人生觀のハイカラでもなかつた。それで此會話はそれぎり發展しずに濟んだ。

そのうち秋は高くなる。食慾は進む。二十三の青年が到底人生に疲れてゐる事が出來ない時節が來た。三四郎はよく出る。大學の池の周圍も大分廻つて見たが、別段の變もない。病院の前も何遍となく往復し

たが、普通の人間に逢ふ計りである。又理科大學の穴倉へ行つて野々宮君に聞いて見たら、妹はもう病院を出たと云ふ。玄關で逢つた女の事を話さうと思つたが、先方が忙しさうなので、つい遠慮して已めて仕舞つた。今度大久保へ行つて緩り話せば、名前も素性も大抵は解る事だから、焦かずに引き取つた。さうして、ふは／＼して諸方歩いてゐる。田端だの、道灌山だの、染井の墓地だの、巣鴨の監獄だの、護國寺だの、――三四郎は新井の藥師迄も行つた。新井の藥師の歸りに、大久保へ出て野々宮君の家へ廻らうと思つたら、落合の火葬場の邊で途を間違へて、高田へ出たので、目白から汽車へ乘つて歸つた。汽車の中で土産に買つた栗を一人で散々食つた。其餘りは翌日與次郎が來て、みんな平げた。

三四郎はふは／＼すればする程愉快になつて來た。初めのうちは餘り講義に念を入れ過ぎたので、耳が遠くなつて筆記に困つたが、近頃は大抵に聽いてゐるから何ともない。講義中に色々な事を考へる。少し位落としても惜しい氣も起らない。よく觀察して見ると與次郎始めみんな同じ事である。三四郎は此位で好いものだらうと思ひ出した。

三四郎が色々考へるうちに、時々例のりボンが出て來る。さうすると氣掛りになる。甚だ不愉快になる。すぐ大久保へ出掛けて見たくなる。然し想像の連鎖やら、外界の刺激やらで、しばらくすると紛れて仕舞ふ。だから大體は呑氣である。それで夢を見てゐる。大久保へは中々行かない。

ある日の午後三四郎は例の如くぶら附いて、團子坂の上から、左へ折れて千駄木林町の廣い通へ出た。

秋晴と云つて、此頃は東京の空も田舎の樣に深く見える。かう云ふ空の下に生きてゐると思ふ丈でも頭は明確する。其上、野へ出れば申し分はない。氣が暢び〳〵して魂が大空程の大きさになる。それで居て身體總體が緊まつて來る。だらしのない春の長閑さとは違ふ。三四郎は左右の生垣を眺めながら、生れて始めての東京の秋を嗅ぎつゝ遣つて來た。

坂下では菊人形が二三日前開業したばかりである。坂を曲がる時は幟さへ見えた。今はたゞ聲丈聞こえる、どんちやん〳〵遠くから囃してゐる。其囃の音が、下の方から次第に浮き上がつて來て、澄み切つた秋の空氣のなかへ廣がり盡くすと、遂には極めて稀薄な波になる。其又餘波が三四郎の鼓膜の側迄來て自然に留まる。騷がしいといふよりは却て好い心持である。

時に突然左の横町から二人あらはれた。その一人が三四郎を見て、「おい」と云ふ。

與次郎の聲は今日に限つて、几帳面である。其代り連がある。三四郎は其連を見たとき、果して日頃の推察通り、青木堂で茶を飲んでゐた人が、廣田さんであると云ふ事を悟つた。此人とは水蜜桃以來妙な關係がある。ことに青木堂で茶を飲んで煙草を呑んで、自分を圖書館に走らしてよりこのかた、一層よく記憶に染みてゐる。いつ見ても神主の樣な顏に西洋人の鼻を附けてゐる。今日も此間の夏服で、別段寒さうな樣子もない。

三四郎は何とか云つて、挨拶をしようと思つたが、あまり時間が經つてゐるので、どう口を利いてい〳〵

か分らない。たゞ帽子を取つて禮をした。與次郎に對しては、あまり丁寧過ぎる、廣田に對しては、少し簡略すぎる。三四郎は何方付かずの中間に出た。すると與次郎が、すぐ、

「此男は私の同級生です。熊本の高等學校から始めて東京へ出て來た――」と聽かれもしない先から田舍ものを吹聽して置いて、それから三四郎の方を向いて、

「是が廣田先生。高等學校の……」と譯もなく雙方を紹介して仕舞つた。

此時廣田先生は「知つてる、知つてる」と二遍繰り返して云つたので、與次郎は妙な顏をしてゐる。然し何故知つてるんですか抔と面倒な事は聞かなかつた。たゞちに、

「君、此邊に貸家はないか。廣くて、綺麗な、書生部屋のある」と尋ねだした。

「貸家はと……ある」

「どの邊だ。汚くつちや不可ないぜ」

「いや綺麗なのがある。大きな石の門が立つてるのがある」

「そりや旨い。どこだ。先生、石の門は可いですな。是非それに仕ようぢやありませんか」と與次郎は大いに進んでゐる。

「石の門は不可ん」と先生が云ふ。

「不可ん？そりや困る。何故不可です」

「何故でも不可ん」

「石の門は可いがな。新しい男爵の様で可いぢやないですか、先生」

與次郎は眞面目である。廣田先生はにや／＼笑つてゐる。とう／＼眞面目の方が勝つて、兎も角も見る事に相談が出來て、三四郎が案内をした。

横町を後へ引き返して、裏通へ出ると、半町許り北へ來た所に、突き當りと思はれる様な小路がある。其小路の中へ三四郎は二人を連れ込んだ。眞直に行くと植木屋の庭へ出て仕舞ふ。三人は入口の五六間手前で留まつた。右手に可なり大きな御影の柱が二本立つてゐる。扉は鐵である。三四郎が是だと云ふ。成程貸家札が附いてゐる。

「こりや恐ろしいもんだ」と云ひながら、與次郎は鐵の扉をうんと推したが、錠が卸りてゐる。「一寸お待ちなさい、聞いてくる」と云ふや否や、與次郎は植木屋の奥の方へ馳け込んで行つた。廣田と三四郎は取り殘された様なものである。二人で話しを始めた。

「東京は如何です」

「えゝ……」

「廣い計りで汚い所でせう」

「えゝ……」

「富士山に比較する樣なものは何もないでせう」
三四郎は富士山の事を丸で忘れてゐた。廣田先生の注意によつて、汽車の窓から、始めて眺めた富士は、考へ出すと、成程崇高なものである。たゞ今自分の頭の中にごた〳〵してゐる世間とは、とても比較にならない。三四郎はあの時の印象を何時の間にか取り落してゐたのを恥づかしく思つた。すると、
「君、不二山を翻譯して見た事がありますか」と意外な質問を放たれた。
「翻譯とは……」
「自然を翻譯すると、みんな人間に化けて仕舞ふから面白い。崇高だとか、偉大だとか、雄壯だとか」
三四郎は翻譯の意味を了した。
「みんな人格上の言葉になる。人格上の言葉に翻譯する事の出來ない輩には、自然が毫も人格上の感化を與へてゐない」
三四郎はまだあとが有るかと思つて、默つて聞いてゐた。所が廣田さんは夫で已めて仕舞つた。植木屋の奥の方を覗いて、
「佐々木は何をしてゐるのか知ら」と獨り言の樣に云ふ。
「見て來ませうか」と三四郎が聞いた。
「なに、見に行つたつて、それで出て來る樣な男ぢやない。それより此處に待つてる方が手間が掛から

ないでいゝ」と云つて枳殻の垣根の下に蹲んで、小石を拾つて、土の上へ何か描き出した。呑氣な事である。與次郎の呑氣とは方角が反對で、程度が略相似てゐる。

所へ植込の松の向うから、與次郎が大きな聲を出した。

「先生々々」

先生は依然として、何か描いてゐる。どうも燈明臺の樣である。返事をしないので、與次郎は仕方なしに出て來た。

「先生一寸見て御覽なさい。好い家だ。この植木屋で持つてるんです。門を開けさせても好いが、裏から廻つた方が早い」

三人は裏から廻つた。雨戸を明けて、一間々々見て歩いた。中流の人が住んで耻づかしくない樣に出來てゐる。家賃が四十圓で、敷金が三ヶ月分だと云ふ。三人はまた表へ出た。

「何で、あんな立派な家を見るのだ」と廣田さんが云ふ。

「何で見るつて、たゞ見る丈だから好いぢやありませんか」と與次郎は云ふ。

「借りもしないのに……」

「なに借りる積りで居たんです。所が家賃をどうしても二十五圓にしようと云はない……」

廣田先生は「當り前さ」と云つた限りである。すると與次郎が石の門の歴史を話し出した。此間迄ある

出入りの屋敷の入口にあつたのを、改築のとき貰つて來て、直ぐあすこへ立てたのだと云ふ。與次郎丈に妙な事を研究して來た。

それから三人は元の大通へ出て、動坂から田端の谷へ下りたが、下りた時分には三人ともたゞ歩いてゐる。貸家の事はみんな忘れて仕舞つた。ひとり與次郎が時々石の門の事を云ふ。麹町からあれを千駄木迄引いてくるのに、手間が五圓程かゝつた抔と云ふ。あの植木屋は大分金持らしい抔とも云ふ。あすこへ四十圓の貸家を建てて、全體誰が借りるだらう抔と餘計なこと迄云ふ。遂には、今に借手がなくつて屹度家賃を下げるに違ひないから、其時もう一遍談判して是非借りようぢやありませんかと云ふ結論であつた。廣田先生は別に、さういふ料簡もないと見えて、かう云つた。

「君が、あんまり餘計な話しばかりしてゐるものだから、時間が掛かつて仕方がない。好い加減にして出て來るものだ」

「餘程長くかゝりましたか。何か畫をかいてゐましたね。先生も隨分呑氣だな」

「何方が呑氣か分りやしない」

「ありや何の畫です」

先生は默つてゐる。其時三四郎が眞面目な顏をして、

「燈臺ぢやないですか」と聞いた。畫手と與次郎は笑ひ出した。

「燈臺は奇拔だな。ぢや野々宮宗八さんを畫いて入らしつたんですね」
「何故」
「野々宮さんは外國ぢや光つてるが、日本ぢや眞暗だから。――誰も丸で知らない。それで僅かばかりの月給を貰つて、穴倉へ立て籠もつて、――實に割に合はない商賣だ。野々宮さんの顏を見る度に氣の毒になつて堪らない」
「君なぞは自分の坐つてゐる周圍方二尺位の所をぼんやり照らす丈だから、丸行燈の樣なものだ」
丸行燈に比較された與次郎は、突然三四郎の方を向いて、
「小川君、君は明治何年生れかな」と聞いた。三四郎は單簡に、
「僕は二十三だ」と答へた。
「そんなものだらう。――先生僕は、丸行燈だの、雁首だのつて云ふものが、どうも嫌ひですがね。明治十五年以後に生れた所爲かも知れないが、何だか舊式で厭な心持がする。君はどうだ」と又三四郎の方を向く。三四郎は、
「僕は別段嫌ひでもない」と云つた。
「尤も君は九州の田舍から出た許りだから、明治元年位の頭と同じなんだらう」
三四郎も廣田も是に對して別段の挨拶をしなかつた。少し行くと古い寺の隣の杉林を切り倒して、綺麗

に地平しをした上に、青ペンキ塗の西洋館を建ててゐる。廣田先生は寺とペンキ塗を等分に見てゐた。

「時代錯誤だ。日本の物質界も精神界も此通りだ。君、九段の燈明臺を知つてゐるだらう」と又燈明臺が出た。「あれは古いもので、江戸名所圖會に出てゐる」

「先生冗談云つちや不可ません。なんぼ九段の燈明臺が舊いたつて、江戸名所圖會に出ちや大變だ」

廣田先生は笑ひ出した。實は東京名所と云ふ錦繪の間違だと云ふ事が解つた。先生の説によると、こんなに古い燈臺が、まだ殘つてゐる傍に、偕行社と云ふ新式の煉瓦作りが出來た。二つ並べて見ると實に馬鹿氣てゐる。けれども誰も氣が附かない、平氣でゐる。是が日本の社會を代表してゐるんだと云ふ。

與次郎も三四郎も成程と云つた儘、御寺の前を通り越して、五六町來ると、大きな黒い門がある。與次郎が、此處を抜けて道灌山へ出ようと云ひ出した。抜けても可いのかと念を押すと、なに是は佐竹の下屋敷で、誰でも通れるんだから構はないと主張するので、二人共其氣になつて門を潜つて、藪の下を通つて古い池の傍迄來ると、番人が出て來て、大變に二人を叱り附けた。其時與次郎はへい／＼と云つて番人に詫つた。

それから谷中へ出て、根津を廻つて、夕方に本郷の下宿へ歸つた。三四郎は近來にない氣樂な半日を暮らした樣に感じた。

翌日學校へ出て見ると與次郎が居ない。午から來るかと思つたが來ない。圖書館へも這入つたが矢つ張

り見當たらなかつた。五時から六時迄純文科共通の講義がある。三四郎はこれへ出た。筆記をするには暗過ぎる。電燈が點くには早過ぎる。細長い窓の外に見える大きな欅の枝の奥が、次第に黑くなる時分だから、室の中は講師の顏も聽講生の顏も等しくぼんやりしてゐる。從つて暗闇で饅頭を食ふ樣に、何となく神祕的である。三四郎は講義が解らない所が妙だと思つた。頰杖を突いて聽いてゐると、神經が鈍くなつて、氣が遠くなる。これでこそ講義の價値がある樣な心持がする。所へ電燈がぱつと點いて、萬事が稍明瞭になつた。すると急に下宿へ歸つて飯が食ひたくなつた。先生もみんなの心を察して、好い加減に講義を切り上げて呉れた。三四郎は早足で追分迄歸つてくる。

着物を脫ぎ換へて膳に向ふと、膳の上に、茶碗蒸と一所に手紙が一本載せてある。其上封を見たとき、三四郎はすぐ母から來たものだと悟つた。濟まん事だが此半月あまり母の事は丸で忘れてゐた。昨日から今日へ掛けては時代錯誤だの、不二山の人格だの、神祕的な講義だので、例の女の影も一向頭の中へ出て來なかつた。三四郎は夫で滿足である。母の手紙はあとで緩り見る事として、取り敢ず食事を濟まして、煙草を吹かした。其烟を見ると先刻の講義を思ひ出す。

そこへ與次郎がふらりと現はれた。どうして學校を休んだかと聞くと、貸家探しで學校所ぢやないさうである。

「そんなに急いで越すのか」と三四郎が聞くと、

「急ぐつて先月中に越す筈の所を明後日の天長節迄待たしたんだから、どうしたつて明日中に探さなければならない。どこか心當りはないか」と云ふ。

こんなに忙しがる癖に、昨日は散歩だか、貸家探しだか分らない樣にぶら〱潰してゐた。三四郎には殆ど合點が行かない。與次郎はこれを解釋して、それは先生が一所だからさと云つた。「元來先生が家を探すなんて間違つてゐる。決して探した事のない男なんだが、昨日はどうかしてゐたに違ひない。御蔭で佐竹の邸で苛い目に叱られて好い面の皮だ。――君何處かないか」と急に催促する。與次郎が來たのは全くそれが目的らしい。よく〱原因を聞いて見ると、今の持主が高利貸で、家賃を無暗に上げるのが、業腹だと云ふので、與次郎が此方から立退きを宣告したのださうだ。それでは與次郎に責任がある譯だ。

「今日は大久保迄行つて見たが、矢つ張りない。――大久保と云へば、序に宗八さんの所に寄つて、よし子さんに逢つて來た。可哀さうにまだ色光澤が惡い。――辣薑性の美人――御母さんが君に宜しく云つて吳れつてことだ。しかし其後はあの邊も穩やかな樣だ。轢死もあれぎりないさうだ」

與次郎の話しはそれから、それへと飛んで行く。平生から締りのない上に、今日は家探しで少し焦き込んでゐる。話しが一段落つくと、相の手の樣に、何處かないかと聞く。仕舞には三四郎も笑ひ出した。

そのうち與次郎の尻が次第に落ち附いて來て、燈火親しむべし抔といふ漢語さへ借用して嬉しがる樣に

なつた。話題は端なく廣田先生の上に落ちた。

「君の所の先生の名は何と云ふのか」

「名は萇一」と指で書いて見せて、「艸冠が餘計だ。字引にあるか知らん。妙な名を附けたものだね」と云ふ。

「高等學校の先生か」

「昔から今日に至る迄高等學校の先生。えらいものだ。十年一日の如しと云ふが、もう十二三年になるだらう」

「子供は居るのか」

「子供どころか、まだ獨身だ」

三四郎は少し驚いた。あの年迄一人で居られるものかとも疑つた。

「何故奧さんを貰はないのだらう」

「そこが先生の先生たる所で、あれで大變な理論家なんだ。細君を貰つて見ない先から、細君はいかんものと理論で極まつてゐるんださうだ。愚だよ。だから始終矛盾ばかりしてゐる。先生、東京程汚い所はない樣に云ふ。それで石の門を見ると恐れを作して、不可ん／＼とか、立派過ぎるとかいふだらう」

「だから細君も試みに持つて見たら好からう」

「大いに佳しとか何とか言ふかも知れない」

「先生は東京が汚いとか、日本人が醜いとか云ふが、洋行でもした事があるのか」

「なにするもんか。あゝ云ふ人なんだ。萬事頭の方が事實より發達してゐるんだから、あゝなるんだね。其代り西洋は寫眞で研究してゐる。巴理の凱旋門だの、倫敦の議事堂だの澤山持つてゐる。あの寫眞で日本を律するんだから堪らない。汚い譯さ。それで自分の住んでる所は、いくら汚くつても存外平氣だから不思議だ」

「三等汽車へ乘つて居つたぞ」

「汚い〳〵つて不平を云やしないか」

「いや別に不平も云はなかつた」

「然し先生は哲學者だね」

「學校で哲學でも敎へてゐるのか」

「いや學校ぢや英語丈しか受持つてゐないがね、あの人間が、自づから哲學に出來上がつてゐるから面白い」

「著述でもあるのか」

「何もない。時々論文を書く事はあるが、ちつとも反響がない。あれぢや駄目だ。丸で世間が知らないんだから仕樣がない。先生、僕の事を丸行燈だといつたが、夫子自身は偉大な暗闇だ」

「どうかして、世の中へ出たら好ささうなものだな」

「出たら好ささうなものだつて、——先生、自分ぢや何も遣らない人だからね。第一僕が居なけりや三度の飯さへ食へない人なんだ」

三四郎は眞逆と云はぬ許りに笑ひ出した。

「嘘ぢやない。氣の毒な程何も遣らないんでね。何でも、僕が下女に命じて、先生の氣に入る樣に始末を附けるんだが——そんな瑣末な事は兎に角、是から大いに活動して、先生を一つ大學教授にして遣らうと思ふ」

與次郎は眞面目である。三四郎は其大言に驚いた。驚いても構はない。驚いた儘に進行して、仕舞に、

「引越をする時は是非手傳ひに來て吳れ」と頼んだ。丸で約束の出來た家がとうからある如き口吻である。

與次郎の歸つたのは彼是十時近くである。一人で坐つて居ると、何處となく肌寒の感じがする。不圖氣が附いたら、机の前の窓がまだ閉てずにあつた。障子を明けると月夜だ。目の觸れるたびに不愉快な檜に、蒼い光が射して、黑い影の縁が少し烟つて見える。檜に秋が來たのは珍らしいと思ひながら、雨戸を閉てた。

三四郎はすぐ床へ這入つた。三四郎は勉強家といふより寧ろ低徊家なので、割合ひ書物を讀まない。其

代りある掬すべき情景に逢ふと、何遍もこれを頭の中で新にして喜んでゐる。其方が命に奥行がある様な氣がする。今日も、何時もなら、神祕的講義の最中に、ぱつと電燈が點く所などを繰り返して嬉しがる筈だが、母の手紙があるので、まづ、それから片附け始めた。

手紙には新藏が蜂蜜を呉れたから、燒酎を混ぜて、毎晩盃に一杯づゝ飲んでゐるとある。新藏は家の小作人で、毎年冬になると年貢米を二十俵づゝ持つてくる。至つて正直ものだが、癇癪が強いので、時々女房を薪で擲る事がある。――三四郎は床の中で新藏が蜂を飼ひ出した昔の事迄思ひ浮かべた。それは五年程前である。裏の椎の木に蜜蜂が二三百疋ぶら下つてゐたのを見附けてすぐ籾漏斗に酒を吹きかけて、悉く生捕りにした。それから之を箱へ入れて、出入りの出來る樣な穴を開けて、日當りの好い石の上に据ゑてやつた。すると蜂が段々殖えて來る。箱が一つでは足りなくなる。二つにする。又足りなくなる。三つにする。と云ふ風に殖やして行つた結果、今では何でも六箱か七箱ある。其うちの一箱を年に一度づゝ石から卸ろして蜂の爲に蜜を切り取ると云つてゐた。毎年夏休みに歸るたびに蜜を上げませうと云はない事はないが、つひに持つて來た例がなかつた。が今年は物覺えが急に善くなつて、年來の約束を履行したものであらう。

平太郎が親爺の石塔を建てたから見に來て呉れろと頼みにきたとある。行つて見ると、木も草も生えてゐない庭の赤土の眞中に、御影石で出來てゐたさうである。平太郎は其御影石が自慢なのだと書いてある。

山から切り出すのに幾日とか掛かつて、それから石屋に頼んだら十圓取られた。百姓や何かには分らないが、貴所のとこの若旦那は大學校へ這入つてる位だから、石の善惡は屹度分る。今度手紙の序に聞いて見て吳れ、さうして十圓も掛けて親爺の爲に拵へてやつた石塔を賞めて貰つてくれと云ふんださうだ。――三四郎は獨りでくす〳〵笑ひ出した。千駄木の石門より餘程烈しい。

大學の制服を着た寫眞を寄こせとある。三四郎は何時か撮つて遣らうと思ひながら、次へ移ると、案の如く三輪田のお光さんが出て來た。――此間お光さんの御母さんが來て、三四郎さんも近々大學を卒業なさる事だが、卒業したら宅の娘を貰つて吳れまいかと云ふ相談であつた。お光さんは器量もよし氣質も優しいし、家に田地も大分あるし、其上家と家との今迄の關係もある事だから、さうしたら双方共都合が好いだらうと書いて、そのあとへ但書が附けてある。――お光さんも嬉しがるだらう。――東京のものは氣心が知れないから私はいやぢや。

三四郎は手紙を卷き返して、封に入れて、枕元へ置いた儘眼を眠つた。鼠が急に天井で暴れ出したが、やがて靜まつた。

三四郎には三つの世界が出來た。一つは遠くにある。與次郎の所謂明治十五年以前の香がする。凡てが平穩である代りに凡てが寐坊氣てゐる。尤も歸るに世話は入らない。戾らうとすれば、すぐに戾れる。ただ、いざとならない以上は戾る氣がしない。云はゞ立退場の樣なものである。三四郎は脫ぎ棄てた過去を、

此立退場の中へ封じ込めた。なつかしい母さへ此處に葬つたかと思ふと、急に勿體なくなる。そこで手紙が來た時丈は、暫く此世界に低徊して舊歡を溫める。

第二の世界のうちには、苔の生えた煉瓦造りがある。片隅から片隅を見渡すと、向うの人の顔がよく分らない程に廣い閲覽室がある。梯子を掛けなければ、手の屆きかねる迄高く積み重ねた書物がある。手摺れ、指の垢、で黒くなつてゐる。金文字で光つてゐる。羊皮、牛皮、二百年前の紙、それから凡ての上に積もつた塵がある。此塵は二三十年かゝつて漸く積もつた貴い塵である。靜かな月日に打ち勝つ程の靜かな塵である。

第二の世界に動く人の影を見ると、大抵不精な髭を生やしてゐる。あるものは空を見て歩いてゐる。あるものは俯向いて歩いてゐる。服裝は必ず穢い。生計は屹度貧乏である。さうして晏如としてゐる。電車に取り卷かれながら、太平の空氣を、通天に呼吸して憚らない。このなかに入るものは、現世を知らないから不幸で、火宅を逃れるから幸である。廣田先生は此内にゐる。野々宮君も此内にゐる。三四郎は此内の空氣を略解し得た所にゐる。出れば出られる。然し折角解し掛けた趣味を思ひ切つて捨てるのも殘念だ。

第三の世界は燦として春の如く盪いてゐる。電燈がある。銀匙がある。歡聲がある。笑語がある。泡立つ三鞭の盃がある。さうして凡ての上の冠として美しい女性がある。三四郎はその女性の一人に口を利いた。一人を二遍見た。此世界は三四郎に取つて最も深厚な世界である。此世界は鼻の先にある。たゞ近づ

き難い。近づき難い點に於て、天外の稲妻と一般である。三四郎は遠くから此世界を眺めて、不思議に思ふ。自分が此世界のどこかへ這入らなければ、其世界のどこかに陥缺が出來る樣な氣がする。自分は此世界のどこかの主人公であるべき資格を有してゐるらしい。それにも拘らず、圓滿の發達を冀ふべき筈の此世界が却て自らを束縛して、自分が自由に出入すべき通路を塞いでゐる。三四郎にはこれが不思議であつた。

三四郎は床のなかで、此三つの世界を並べて、互に比較して見た。次に此三つの世界を攪き混ぜて、其中から一つの結果を得た。――要するに、國から母を呼び寄せて、美しい細君を迎へて、さうして身を學問に委ねるに越した事はない。

結果は頗る平凡である。けれども此結果に到着する前に色々考へたのだから、思索の勞力を打算して、結論の價値を上下しやすい思索家自身から見ると、夫程平凡ではなかつた。

たゞかうすると廣い第三の世界を眇たる一個の細君で代表させる事になる。美しい女性は澤山ある。美しい女性を翻譯すると色々になる。――三四郎は廣田先生に倣つて、翻譯と云ふ字を使つて見た。――苟も人格上の言葉に翻譯の出來る限りは、其翻譯から生ずる感化の範圍を廣くして、自己の個性を完からしむる爲に、なるべく多くの美しい女性に接觸しなければならない。細君一人を知つて甘んずるのは、進んで自己の發達を不完全にする樣なものである。

三四郎は論理を此處迄延長して見て、少し廣田さんにかぶれたなと思つた。實際の所は、これ程痛切に不足を感じてゐなかつたからである。

翌日學校へ出ると講義は例によつて詰らないが、室内の空氣は依然として俗を離れてゐるので、午後三時迄の間に、すつかり第二の世界の人となり終せて、さも偉人の樣な態度を以て、追分の交番の前迄來ると、ぱつたり與次郎に出逢つた。

「アハヽヽ。アハヽヽ」

偉人の態度は是が爲に全く崩れた。交番の巡査さへ薄笑ひをしてゐる。

「なんだ」

「なんだも無いものだ。もう少し普通の人間らしく歩くがいゝ。丸で浪漫的アイロニーだ」

三四郎には此洋語の意味がよく分らなかつた。仕方がないから、

「家はあつたか」と聞いた。

「その事で今昔の所へ行つたんだ――明日愈引越す。手傳ひに來て呉れ」

「何處へ越す」

「西片町十番地への三號。九時迄に向うへ行つて掃除をしてね。待つてゝ呉れ。あとから行くから。いゝか、九時迄だぜ。への三號だよ。失敬」

與次郎は急いで行き過ぎた。三四郎も急いで下宿へ歸つた。其晩取つて返して、圖書館で浪漫的アイロニーと云ふ句を調べて見たら、獨逸のシユレーゲルが唱へ出した言葉で、何でも天才と云ふものは、目的も努力もなく、終日ぶら〳〵ぶら附いて居なくつては駄目だと云ふ説だと書いてあつた。三四郎は漸く安心して、下宿へ歸つて、すぐ寐た。

翌日は約束だから、天長節にも拘らず、例刻に起きて、學校へ行く積りで西片町十番地へ這入つて、への三號を調べて見ると、妙に細い通の中程にある。古い家だ。

玄關の代りに西洋間が一つ突き出してゐて、それと鉤の手に座敷がある。座敷の後が茶の間で、茶の間の向うが勝手、下女部屋と順に並んでゐる。外に二階がある。但し何疊だか分らない。

三四郎は掃除を頼まれたのだが、別に掃除をする必要もないと認めた。無論綺麗ぢやない。然し何と云つて、取つて捨てべきものも見當たらない。強ひて捨てれば疊建具位なものだと考へながら、雨戸丈を明けて、座敷の椽側へ腰を掛けて庭を眺めて居た。

大きな百日紅がある。然し是は根が隣にあるので、幹の半分以上が横に杉垣から、此方の領分を冒してゐる丈である。大きな櫻がある。是は慥かに垣根の中に生えてゐる。其代り枝が半分往來へ逃げ出して、もう少しすると電話の妨害になる。菊が一株ある。けれども寒菊と見えて、一向咲いて居ない。此外には何もない。氣の毒な樣な庭である。たゞ土丈は平らで、肌理が細かで甚だ美しい。三四郎は土を見てゐた。

實際土を見る樣に出來た庭である。

そのうち高等學校で天長節の式の始まる號鐘が鳴り出した。三四郎は號鐘を聞きながら九時が來たんだらうと考へた。何もしないでゐても惡いから、櫻の枯葉でも掃かうかしらんと漸く氣が附いた時、箒がないといふ事を考へ出した。また緣側へ腰を掛けた。掛けて二分もしたかと思ふと、庭木戶がすうと明いた。さうして思ひも寄らぬ池の女が庭の中にあらはれた。

二方は生垣で仕切つてある。四角な庭は十坪に足りない。三四郎は此狹い圍の中に立つた池の女を見るや否や、忽ち悟つた。――花は必ず剪つて、瓶裏に眺むべきものである。

此時三四郎の腰は緣側を離れた。女は折戶を離れた。

「失禮で御座いますが……」

女は此句を冒頭に置いて會釋した。腰から上を例の通り前へ浮かしたが、顏は決して下げない。會釋しながら、三四郎を見詰めてゐる。女の咽喉が正面から見ると長く延びた。同時に其眼が三四郎の眸に映つた。

二三日前三四郎は美學の敎師からグルーズの畫を見せてもらつた。其時美學の敎師が、此人の畫いた女の肖像は悉くヴラプチュアスな表情に富んでゐると說明した。ヴラプチュアス！池の女の此時の眼付を形容するには是より外に言葉がない。何か訴へてゐる。艶なるあるものを訴へてゐる。さうして正しく官能

に訴へてゐる。けれども官能の骨を透して髄に徹する訴へ方である。甘いものに堪へ得る程度を超えて、烈しい刺激と變ずる訴へ方である。甘いと云はんよりは苦痛である。卑しく媚びるのとは無論違ふ。見られるものゝ方が是非媚びたくなる程に殘酷な眼付である。しかも此女にグルーズの畫と似た所は一つもない。眼はグルーズのより半分も小さい。

「廣田さんの御移轉になるのは、此方で御座いませうか」

「はあ、此處です」

女の聲と調子に較べると、三四郎の答は頗るぶつきら棒である。三四郎も氣が付いてゐる。けれども外に云ひ樣がなかつた。

「まだ御移りにならないんで御座いますか」女の言葉は明確してゐる。普通の樣に後を濁さない。

「まだ來ません。もう來るでせう」

女はしばし逡巡つた。手に大きな籃を提げてゐる。女の着物は例によつて、分らない。たゞ何時もの樣に光らない丈が眼についた。地が何だかぶつ〳〵してゐる。夫に縞だか模樣だかある。その模樣が如何にも出鱈目である。

上から椎の葉が時々落ちて來る。其一つが籃の蓋の上に乘つた。乘つたと思ふうちに吹かれて行つた。風が女を包んだ。女は秋の中に立つてゐる。

「あなたは……」
風が隣へ越した時分、女が三四郎に聞いた。
「掃除に頼まれて来たのです」と云つたが、現に腰を掛けてぼかんとしてゐた所を見られたのだから、三四郎は自分でも可笑しくなつた。すると女も笑ひながら、
「ぢや私も少し御待ち申しませうか」と云つた。其云ひ方が三四郎に許諾を求める様に聞こえたので、三四郎は大いに愉快であつた。そこで「あゝ」と答へた。三四郎の料簡では、「あゝ、御待ちなさい」を略した積りである。女はそれでもまだ立つてゐる。三四郎は仕方がないから、
「あなたは……」と向うで聞いた様な事を、此方からも聞いた。すると、女は帯の間から、一枚の名刺を出して、三四郎に呉れた。名刺には里見美禰子とあつた。本郷真砂町だから谷を越すとすぐ向うである。三四郎が此名刺を眺めてゐる間に、女は椽に腰を卸ろした。
「あなたには御目に掛かりましたな」と名刺を袂へ入れた三四郎が顔を挙げた。
「はあ。いつか病院で……」と云つて女も此方を向いた。
「まだある」
「それから池の端で……」と女はすぐ云つた。能く覚えてゐる。三四郎はそれで云ふ事がなくなつた。

女は最後に、

「どうも失禮致しました」と句切りをつけたので、三四郎は、

「いゝえ」と答へた。頗る簡潔である。兩人は櫻の枝を見てゐた。梢に蟲の食つた樣な葉が僅かばかり殘つてゐる。引越の荷物は中々遣つて來ない。

「何か先生に御用なんですか」

三四郎は突然かう聞いた。高い櫻の枯枝を餘念なく眺めて居た女は、急に三四郎の方を振り向く。あら喫驚した、苛いわ、といふ顏附であつた。然し答は尋常である。

「私も御手傳ひに頼まれました」

三四郎は此時始めて氣が附いて見ると、女の腰を掛けてゐる緣に砂が一杯たまつてゐる。

「砂で大變だ。着物が汚れます」

「えゝ」と左右を眺めた限りである。腰を上げない。しばらく緣を見廻した眼を、三四郎に移すや否や、

「掃除はもうなすつたんですか」と聞いた。笑つてゐる。三四郎は其笑ひの中に馴れ易いあるものを認めた。

「まだ遣らんです」

「御手傳ひをして、一所に始めませうか」

三四郎はすぐに立つた。女は動かない。腰を掛けた儘、箒やハタキの在家を聞く。三四郎は、たゞ空手で來たのだから、どこにもない、何なら通へ行つて買つて來ようかと聞くと、それは徒費だから、隣で借りる方が好からうと云ふ。三四郎はすぐ隣へ行つた。早速箒とハタキと、それから馬尻と雜巾迄借りて急いで歸つてくると、女は依然として故の所へ腰をかけて、高い欅の枝を眺めてゐた。

「あつて……」と一口云つた丈である。

三四郎は箒を肩へ擔いで、馬尻を右の手にぶら下げて「えゝありました」と當り前の事を答へた。

女は白足袋の儘砂だらけの縁側へ上がつた。あるくと細い足の痕が出來る。袂から白い前垂を出して帯の上から締めた。其前垂の縁がレースの樣に縢つてある。掃除をするには勿體ない程綺麗な色である。女は箒を取つた。

「一旦掃き出しませう」と云ひながら、袖の裏から右の手を出して、ぶらつく袂を肩の上へ擔いだ。綺麗な手が二の腕迄出た。擔いだ袂の端からは美しい襦袢の袖が見える。茫然として立つてゐた三四郎は、突然馬尻を鳴らして勝手口へ廻つた。

美禰子が掃くあとを、三四郎が雜巾を掛ける。三四郎が疊を敲く間に、美禰子が障子をはたく。どうかかうか掃除が一通り濟んだ時は二人共大分親しくなつた。

三四郎が馬尻の水を取換へに臺所へ行つたあとで、美禰子がハタキと箒を持つて二階へ上つた。

「一寸來て下さい」と上から三四郎を呼ぶ。

「何ですか」と馬尻を提げた三四郎が階子段の下から云ふ。女は暗い所に立つてゐる。前垂だけが眞白だ。三四郎は馬尻を提げた儘二三段上つた。女は凝としてゐる。三四郎は又二段上つた。薄暗い所で美禰子の顔と三四郎の顔が一尺許りの距離に來た。

「何ですか」

「何だか暗くつて分らないの」

「何故」

「何故でも」

三四郎は追窮する氣がなくなつた。美禰子の傍を擦り拔けて上へ出た。馬尻を暗い椽側へ置いて戸を開ける。成程棧の具合が善く分らない。そのうち美禰子も上がつて來た。

「まだ開からなくつて」

美禰子は反對の側へ行つた。

「此方です」

三四郎はだまつて、美禰子の方へ近寄つた。もう少しで美禰子の手に自分の手が觸れる所で、馬尻に蹴爪づいた。大きな音がする。漸くの事で戸を一枚明けると、強い日がまともに射し込んだ。眩しい位であ

ふ。二人は顔を見合はせて思はず笑ひ出した。
裏の窓も開ける。窓には竹の格子が附いてゐる。家主の庭が見える。鶏を飼つてゐる。美禰子は例の如く掃き出した。三四郎は四つ這ひになつて、後から拭き出した。美禰子は箒を両手で持つた儘、三四郎の姿を見て、

「まあ」と云つた。

やがて、箒を畳の上へ抛げ出して、裏の窓の所へ行つて、立つた儘外面を眺めてゐる。そのうち三四郎も拭き終つた。濡れ雑巾を馬尻の中へぼちやんと擲き込んで、美禰子の傍へ来て並んだ。

「何を見てるんです」

「中てゝ御覧なさい」

「鶏ですか」

「いゝえ」

「あの大きな木ですか」

「いゝえ」

「ぢや何を見てるんです。僕には分らない」

「私先刻からあの白い雲を見て居りますの」

成程白い雲が大きな空を渡つてゐる。空は限りなく晴れて、どこ迄も青く澄んでゐる上を、綿の光つた樣な濃い雲がしきりに飛んで行く。風の力が烈しいと見えて、雲の端が吹き散らされると、青い地が透いて見える程に薄くなる。あるひは吹き散らされながら、塊まつて、白く柔らかな針を集めた樣に、さゝくれ立つ。美禰子は其塊を指さして云つた。

「駝鳥の襟巻に似てゐるでせう」

三四郎はボーアと云ふ言葉を知らなかつた。それで知らないと云つた。美禰子は又、

「まあ」と云つたが、すぐ丁寧にボーアを説明してくれた。其時三四郎は、

「うん、あれなら知つとる」と云つた。さうして、あの白い雲はみんな雪の粉で、下から見てあの位に動く以上は、颶風以上の速度でなくてはならないと、此間野々宮さんから聞いた通りを教へた。美禰子は、

「あらさう」と云ひながら三四郎を見たが、

「雪ぢや詰らないわね」と否定を許さぬ樣な調子であつた。

「何故です」

「何故でも、雲は雲でなくつちや不可ないわ。かうして遠くから眺めてゐる甲斐がないぢやありませんか」

「さうですか」

「さうですかつて、あなたは雪でも構はなくつて」
「あなたは高い所を見るのが好きの樣ですな」
「えゝ」
美禰子は竹の格子の中から、まだ空を眺めてゐる。白い雲はあとから、あとから、飛んで來る。所へ遠くから荷車の音が聞こえる。今、靜かな橫町を曲がつて、此方へ近附いて來るのが地響でよく分る。三四郎は「來た」と云つた。美禰子は「早いのね」と云つた儘凝としてゐる。車の音の動くのが、白い雲の動くのに關係でもある樣に耳を澄ましてゐる。車は落ち附いた秋の中を容赦なく近附いて來る。やがて門の前へ來て留まつた。
三四郎は美禰子を捨てて二階を驅け降りた。三四郎が玄關へ出るのと、與次郎が門を這入るのとが同時同刻であつた。
「早いな」と與次郎が先づ聲を掛けた。
「遲いな」と三四郎が應へた。美禰子とは反對である。
「遲いつて、荷物を一度に出したんだから仕方がない。それに僕一人だから。餘は下女と車屋計りでどうする事も出來ない」
「先生は」

「先生は學校」
二人が話しを始めてゐるうちに、車屋が荷物を卸ろし始めた。下女も這入つて來た。臺所の方を下女と車屋に頼んで、與次郎と三四郎は書物を西洋間へ入れる。書物が澤山ある。竝べるのは一仕事だ。
「里見の御孃さんは、まだ來てゐないか」
「來てゐる」
「何處に」
「二階にゐる」
「二階に何をしてゐる」
「何をしてゐるか、二階にゐる」
「冗談ぢやない」
與次郎は本を一冊持つた儘、廊下傳ひに階子段の下迄行つて、例の通りの聲で、
「里見さん、里見さん。書物を片附けるから、一寸手傳つて下さい」と云ふ。
「たゞ今參ります」
箒とハタキを持つて、美禰子は靜かに降りて來た。
「何をして居たんです」と下から與次郎が焦き立てる樣に聞く。

「二階の御掃除」と上から返事があつた。

降りるのを待ち兼ねて、與次郎は美禰子を西洋間の戸口の所へ連れて來た。車力の卸ろした書物が一杯積んである。三四郎が其中へ、向うむきに蹲んで、しきりに何か讀み始めてゐる。

「まあ大變ね。是をどうするの」と美禰子が云つた時、三四郎は蹲みながら振り返つた。にや／＼笑つてゐる。

「大變も何もありやしない。これを室の中へ入れて、片付けるんです。今に先生も歸つて來て手傳ふ筈だから譯はない。――君。蹲んで本なんぞ讀み出しちや困る。後で借りて行つて緩り讀むがいゝ」と與次郎が小言を言ふ。

美禰子と三四郎が戸口で本を揃へると、それを與次郎が受取つて室の中の書棚へ並べるといふ役割が出來た。

「さう亂暴に、出しちや困る。まだ此續きが一冊ある筈だ」と與次郎が青い平たい本を振り廻す。

「だつて無いんですもの」

「なに無い事があるものか」

「有つた、有つた」と三四郎が云ふ。

「どら、拜見」と美禰子が顔を寄せて來る。「ヒストリー、オフ、インテレクチユアル、デヹロツプメ

ント。あら有つたのね」

「あら有つたも無いもんだ。早く御出しなさい」

三人は約三十分許り根氣に働いた。仕舞にはさすがの與次郎も、あまり焦つ附かなくなつた。見ると書棚の方を向いて胡坐をかいて默つてゐる。美禰子は三四郎の肩を一寸突つ附いた。三四郎は笑ひながら、

「おい如何した」と聞く。

「うん。先生もまあ、斯んなに入りもしない本を集めて如何する氣かなあ。全く人泣かせだ。今之を賣つて株でも買つて置くと儲かるんだが、仕方がない」と嘆息した儘、矢張り壁を向いて胡坐をかいてゐる。

三四郎と美禰子は顏を見合はせて笑つた。肝心の主腦が動かないので、二人共書物を揃へるのを控へてゐる。三四郎は詩の本をひねくり出した。美禰子は大きな畫帖を膝の上に開いた。勝手の方では臨時雇ひの車夫と下女がしきりに論判してゐる。大變騷々しい。

「一寸御覽なさい」と美禰子が小さな聲で云ふ。三四郎は及び腰になつて、畫帖の上へ顏を出した。美禰子の髮で香水の匂がする。

畫はマーメイドの圖である。裸體の女の腰から下が魚になつて、魚の胴が、ぐるりと腰を廻つて、向う側に尾だけ出てゐる。女は長い髮を櫛で梳きながら、梳き餘つたのを手に受けながら、此方を向いてゐる。背景は廣い海である。

「人魚」
「人魚」
頭を擦り附けた二人は同じ事をさゝやいた。此時胡坐をかいてゐた與次郎が何と思つたか、
「何だ、何を見てゐるんだ」と云ひながら廊下へ出て來た。三人は首を聚めて畫帖を一枚毎に繰つて行つた。色々な批評が出る。みんな好い加減である。
所へ廣田先生がフロックコートで天長節の式から歸つて來た。三人は挨拶をするときに畫帖を伏せて仕舞つた。先生が書物丈早く片附けようといふので、三人が又根氣に遣り始めた。今度は主人公が居るので、さう油を賣る事も出來なかつたと見えて、一時間後には、どうか、かうか廊下の書物が書棚の中へ詰まつて仕舞つた。四人は立ち竝んで綺麗に片附いた書物を一應眺めた。
「あとの整理は明日だ」と與次郎が云つた。是で我慢なさいと云はぬ許りである。
「大分御集めになりましたね」と美禰子が云ふ。
「先生是丈みんな御讀みになつたですか」と最後に三四郎が聞いた。三四郎は實際參考の爲め、この事實を確めて置く必要があつたと見える。
「みんな讀めるものか、佐々木なら讀むかも知れないが」
與次郎は頭を掻いてゐる。三四郎は眞面目になつて、實は此間から大學の圖書館で、少し宛本を借りて

讀むが、どんな本を借りても、必ず誰か目を通してゐる。試しにアフラ・ベーンといふ人の小説を借りて見たが、矢つ張りだれか讀んだ痕があるので、讀書範圍の際限が知りたくなつたから聞いて見たと云ふ。

「アフラ・ベーンなら僕も讀んだ」

廣田先生の此一言には三四郎も驚いた。

「驚いたな。先生は何でも人の讀まないものを讀む癖がある」と與次郎が云つた。

廣田は笑つて座敷の方へ行く。着物を着換へる爲だらう。美禰子も尾いて出た。あとで與次郎が、三四郎にかう云つた。

「あれだから偉大な暗闇だ。何でも讀んでゐる。けれども些とも光らない。もう少し流行るものを讀んで、もう少し出娑婆つて呉れると可いがな」

與次郎の言葉は決して冷評ではなかつた。三四郎は默つて本箱を眺めてゐた。すると座敷から美禰子の聲が聞こえた。

「御馳走を上げるから御二人とも入らつしやい」

二人が書齋から廊下傳ひに、座敷へ來て見ると、座敷の眞中に美禰子の持つて來た籃が据ゑてある。蓋が取つてある。中にサンドヰツチが澤山這入つてゐる。美禰子は其側に坐つて、籃の中のものを小皿へ取り分けてゐる。與次郎と美禰子の問答が始まつた。

「能く忘れずに持つて來ましたね」
「だつて、わざ〳〵御注文ですもの」
「其籃も買つて來たんですか」
「いゝえ」
「家にあつたんですか」
「えゝ」
「大變大きなものですね。車夫でも連れて來たんですか。序に、少しの間置いて働かせれば可いのに」
「車夫は今日は使に出ました。女だつて此位なものは持てますわ」
「あなただから持つんです。外の御孃さんなら、まあ已めますね」
「さうでせうか。夫なら私も已めれば可かつた」
美禰子は食物を小皿へ取りながら、與次郎と應對してゐる。言葉に少しも澁滯がない。しかも落ち付いてゐる。殆ど與次郎の顏を見ない位である。三四郎は敬服した。
臺所から下女が茶を持つてくる。籃を取り卷いた連中は、サンドヰツチを食ひ出した。少しの間靜かであつたが、思ひ出した樣に與次郎が又廣田先生に話しかけた。
「先生、序だから一寸聞いて置きますが先刻の何とかベーンですね」

「アフラ・ベーンだ」

「全體何です、そのアフラ・ベーンと云ふのは」

「英國の閨秀作家だ。十七世紀の」

「十七世紀は古過ぎる。雜誌の材料にやなりませんね」

「古い。然し職業として小說に從事した始めての女だから、それで有名だ」

「有名ぢや困るな。もう少し伺つて置かう。どんなものを書いたんですか」

「僕はオルノーコと云ふ小說を讀んだ丈だが、小川さん、さういふ名の小說が全集のうちにあるでせう」

三四郎は綺麗に忘れてゐる。先生に其梗槪を聞いて見ると、オルノーコと云ふ黑ん坊の王族が英國の船長に瞞されて、奴隷に賣られて、非常に難儀をする事が書いてあるのださうだ。しかも是は作家の實見譚だとして後世に信ぜられてゐるといふ話しである。

「面白いな。里見さん、どうです、一つオルノーコでも書いちやあ」と與次郎は又美禰子の方へ向つた。

「書いても可ござんすけれども、私にはそんな實見譚がないんですもの」

「黑ん坊の主人公が必要なら、その小川君でも可いぢやありませんか。九州の男で色が黑いから」

「口の惡い」と美禰子は三四郎を辯護する樣に言つたが、すぐあとから三四郎の方を向いて、

「書いても可くつて」と聞いた。其眼を見た時に、三四郎は今朝籃を提げて、折戸からあらはれた瞬間の女を思ひ出した。自ら醉つた心地である。けれども醉つて竦んだ心地である。どうぞ願ひます抔とは無論云ひ得なかつた。

廣田先生は例に依つて煙草を呑み出した。與次郎は之を評して鼻から哲學の烟を吐くと云つた。成程烟の出方が少し違ふ。悠然として太く逞しい棒が二本穴を抜けて來る。與次郎は其烟柱を眺めて、半分背を唐紙に持たした儘默つてゐる。三四郎の眼はぼんやり庭の上にある。引越ではない。丸で小集の體に見える。談話も從つて氣樂なものである。たゞ美禰子丈が廣田先生の蔭で、先生がさつき脱ぎ棄てた洋服を疊み始めた。先生に和服を着せたのも美禰子の所爲と見える。

「今のオルノーコの話しだが、君は粗忽しいから間違へると不可ないから序に云ふがね」と先生の烟が一寸途切れた。

「へえ、伺つて置きます」と與次郎が几帳面に云ふ。

「あの小説が出てから、サザーンといふ人が其話を脚本に仕組んだのが別にある。矢張り同じ名でね。それを一所にしちや不可ない」

「へえ、一所にしやしません」

洋服を疊んで居た美禰子は一寸與次郎の顔を見た。

「その脚本のなかに有名な句がある。Pity's akin to love といふ句だが……」それ丈で又哲學の烟を盛に吹き出した。

「日本にもありさうな句ですな」と今度は三四郎が云つた。外のものも、みんな有りさうだと云ひ出した。けれども誰にも思ひ出せない。では一つ譯して見たら好からうといふ事になつて、四人が色々に試みたが一向纏まらない。仕舞に與次郎が、

「これは、どうしても俗謠で行かなくつちや駄目ですよ、句の趣が俗謠だもの」と與次郎らしい意見を提出した。

そこで三人が全然飜譯權を與次郎に委任する事にした。與次郎はしばらく考へてゐたが、

「少し無理ですがね、かう云ふなどうでせう。可哀想だた惚れたつて事よ」

「不可ん、不可ん、下劣の極だ」と先生が忽ち苦い顔をした。その云ひ方が如何にも下劣らしいので、三四郎と美禰子は一度に笑ひ出した。此笑ひ聲がまだ止まないうちに、庭の木戸がぎいと開いて、野々宮さんが這入つて來た。

「もう大抵片附いたんですか」と云ひながら、野々宮さんは縁側の正面の所迄來て、部屋のなかにゐる四人を覗く樣に見渡した。

「まだ片附きませんよ」と與次郎が早速云ふ。

「少し手傳つて頂きませうか」と美禰子が與次郎に調子を合はせた。野々宮さんはにや〳〵笑ひながら、

「大分賑やかな樣ですね。何か面白い事がありますか」と云つて、ぐるりと後向きに縁側へ腰を掛けた。

「今僕が翻譯をして先生に叱られた所です」

「翻譯を？　どんな翻譯ですか」

「なに詰らない――可哀相だた惚れたつて事よと云ふんです」

「へえ」と云つた野々宮君は縁側で筋違に向き直つた。「一體そりや何ですか。僕にや意味が分らない」

「誰にだつて分らんさ」と今度は先生が云つた。

「いや、少し言葉をつめ過ぎたから――當り前に延ばすと、斯うです。可哀相だとは惚れたと云ふ事よ」

「アハヽヽ。さうして其原文は何と云ふのです」

「Pity's akin to love」と美禰子が繰り返した。美しい綺麗な發音であつた。

野々宮さんは、縁側から立つて、二三歩庭の方へ歩き出したが、やがて又ぐるりと向き直つて、部屋を正面に留まつた。

「成程旨い譯だ」

三四郎は野々宮君の態度と視線とを注意せずには居られなかつた。

美禰子は臺所へ立つた。茶碗を洗つて、新しい茶を注いで、縁側の端迄持つて出る。

「御茶を」と云つた儘、其處へ坐つた。「よし子さんは、どうなすつて」と聞く。

「えゝ、身體の方はもう回復しましたが」と又腰を掛けて茶を飲む。それから、少し先生の方へ向いた。

「先生、折角大久保へ越したが、又此方の方へ出なければならない樣になりさうです」

「何故」

「妹が學校へ行き歸りに、戸山の原を通るのが厭だといひ出しましてね。それに僕が夜實驗をやるものですから、遲く迄待つてゐるのが淋しくつて不可ないんださうです。尤も今のうちは母が居るから構ひませんが、もう少しして、母が國へ歸ると、あとは下女丈になるものですからね。臆病もの二人では到底辛抱し切れないのでせう。──實に厄介だな」と冗談半分の嘆聲を洩らしたが、「どうです里見さん、あなたの所へでも食客に置いて呉れませんか」と美禰子の顏を見た。

「何時でも置いて上げますわ」

「何方です。宗八さんの方をですか、よし子さんの方をですか」と與次郎が口を出した。

「何方でも」

三四郎丈默つてゐた。廣田先生は少し眞面目になつて、

「さうして君はどうする氣なんだ」

「妹の始末さへ附けば、當分下宿しても可いです。それでなければ、又何處かへ引越さなければなら

い。一層寄宿舎へでも入れようかと思ふんですがね。何しろ子供だから、僕が始終行けるか、向うが始終来られる所でないと困るんです」

「それぢや野々宮さんの所に限る」と與次郎が又注意を喚起した。廣田さんは與次郎を相手にしない様子で、

「僕の所の二階へ置いて遣つても好いが、何しろ佐々木の様なものが居るから」と云ふ。

「先生、二階へは是非佐々木を置いてやつて下さい」と與次郎自身が依頼した。野々宮君は笑ひながら、

「まあ、どうかしませう。——身體ばかり大きくつて馬鹿だから實に困る。あれで團子坂の菊人形が見たいから、連れて行けなんて云ふんだから」

「連れて行つて御上げなされば好いのに。私だつて見たいわ」

「ぢや一所に行きませうか」

「えゝ是非。小川さんも入らつしやい」

「えゝ行きませう」

「佐々木さんも」

「菊人形は御免だ。菊人形を見る位なら活動寫眞を見に行きます」

「菊人形は可いよ」と今度は廣田先生が云ひ出した。「あれ程に人工的なものは恐らく外國にもないだらう。人工的によく斯んなものを拵へたといふ所を見て置く必要がある。あれが普通の人間に出来て居た

ら、恐らく團子坂へ行くものは一人もあるまい。普通の人間なら、どこの家でも四五人は必ずゐる。團子坂へ出掛けるには當たらない」

「先生一流の論理だ」と與次郎が評した。

「昔教場で教はる時にも、よく、あれで遣られたものだ」と野々宮君が云つた。

「ぢや先生も入らつしやい」と美禰子が最後に云ふ。先生は黙つてゐる。みんな笑ひ出した。臺所から婆さんが「どなたか一寸」と云ふ。與次郎は「おい」とすぐ立つた。三四郎は矢つ張り坐つてゐた。

「どれ僕も失禮しようか」と野々宮さんが腰を上げる。

「あらもう御歸り。隨分ね」と美禰子が云ふ。

「此間のものはもう少し待つて呉れ玉へ」と廣田先生が云ふのを「えゝ、宜うござんす」と受けて、野々宮さんが庭から出て行つた。其影が折戸の外へ隱れると、美禰子は急に思ひ出した樣に「さう／＼」と云ひながら、庭先に脱いであつた下駄を穿いて、野々宮の後へ追ひ掛けた。表で何か話をしてゐる。

三四郎は黙つて坐つてゐた。

五

門を這入ると、此間の萩が、人の丈より高く茂つて、株の根に黒い影が出來てゐる。此黒い影が地の上を這つて、奥の方へ行くと、見えなくなる。葉と葉の重なる裏迄上つて來る樣にも思はれる。夫程表には濃い日が當つてゐる。手洗水の傍に南天がある。是も普通よりは脊が高い。三本寄つてひよろ〳〵してゐる。葉は便所の窓の上にある。

萩と南天の間に縁側が少し見える。縁側は南天を基點として斜に向ふへ走つてゐる。萩の影になつた所は、一番遠いはづれになる。それで萩は一番手前にある。よし子は此萩の陰にゐた。縁側に腰を掛けて。

三四郎は萩とすれ〳〵に立つた。よし子は縁から腰を上げた。足は平たい石の上にある。三四郎は今更その脊の高いのに驚いた。

「御這入りなさい」

依然として三四郎を待ち設けた樣な言葉遣ひである。三四郎は病院の當時を思ひ出した。萩を通り越して縁鼻迄來た。

「御掛けなさい」

三四郎は靴を穿いてゐる。命の如く腰を掛けた。よし子は座蒲團を取つて來た。

「御敷きなさい」

三四郎は蒲團を敷いた。門を這入つてから、三四郎はまだ一言も口を開かない。此單純な少女は唯自分

の思ふ通りを三四郎に云ふが、三四郎からは毫も返事を求めてゐない樣に思はれる。三四郎は無邪氣なる女王の前に出た心持がした。命を聽く丈である。御世辭を使ふ必要がない。一言でも先方の意を迎へる樣な事をいへば、急に卑しくなる。啞の奴隷の如く、さきの云ふが儘に振舞つてゐれば愉快である。三四郎は子供の樣なよし子から子供扱ひにされながら、少しもわが自尊心を傷つけたとは感じ得なかつた。

「兄ですか」とよし子は其次に聞いた。

野々宮を尋ねて來た譯でもない。尋ねない譯でもない。何で來たか三四郎にも實は分らないのである。

「野々宮さんはまだ學校ですか」

「えゝ、何時でも夜遲くでなくつちや歸りません」

是は三四郎も知つてる事である。三四郎は挨拶に窮した。見ると緣側に繪の具函がある。描きかけた水彩がある。

「畫を御習ひですか」

「えゝ、好きだから描きます」

「先生は誰ですか」

「先生に習ふ程上手ぢやないの」

「一寸拜見」

「是？是まだ出來てゐないの」と描き掛けを三四郎の方へ出す。成程自分のうちの庭が描き掛けてある。空と、前の家の柿の木と、這入り口の萩丈が出來てゐる。中にも柿の木は甚だ赤く出來てゐる。

「中々旨い」と三四郎が畫を眺めながら云ふ。

「是が？」とよし子は少し驚いた。本當に驚いたのである。三四郎の樣なわざとらしい調子は少しもなかつた。

三四郎は今更自分の言葉を冗談にする事も出來ず、又眞面目にする事も出來なくなつた。何方にしてもよし子から輕蔑されさうである。三四郎は畫を眺めながら、腹のなかで赤面した。

緣側から座敷を見廻すと、しんと靜かである。茶の間は無論、臺所にも人はゐない樣である。

「御母さんはもう御國へ御歸りになつたんですか」

「まだ歸りません。近いうちに立つ筈ですけれど」

「今、入らつしやるんですか」

「今一寸買物に出ましたの」

「あなたが里見さんの所へ御移りになると云ふのは本當ですか」

「何うして」

「何うしてつて――此間廣田先生の所でそんな話しがありましたから」

「まだ極りません。事によると、さうなるかも知れませんけれど」
三四郎は少しく要領を得た。
「野々宮さんは元から里見さんと御懇意なんですか」
「えゝ。御友達なの」
男と女の友達といふ意味かしらと思つたが、何だか可笑しい。けれども三四郎はそれ以上を聞き得なかつた。
「廣田先生は野々宮さんの元の先生ださうですね」
「えゝ」
話しは「えゝ」で塞へた。
「あなたは里見さんの所へ入らつしやる方が可いんですか」
「私？　さうね。でも美禰子さんの御兄さんに御氣の毒ですから」
「美禰子さんの兄さんがあるんですか」
「えゝ。宅の兄と同年の卒業なんです」
「矢つ張り理學士ですか」
「いゝえ、科は違ひます。法學士です。其又上の兄さんが廣田先生の御友達だつたのですけれども、早

く御亡くなりになつて、今では恭助さん丈なんです」
「御父さんや御母さんは」
よし子は少し笑ひながら、
「ないわ」と云つた。美禰子の父母の存在を想像するのに滑稽であると云はぬ許りである。餘程早く死んだものと見える。よし子の記憶には丸でないのだらう。
「さう云ふ關係で美禰子さんは廣田先生のうちへ出入りをなさるんですね」
「えゝ。死んだ兄さんが廣田先生とは大變仲善しだつたさうです。それに美禰子さんは英語がすきだから、時々英語を習ひに入らつしやるんでせう」
「此方へも來ますか」
よし子は何時の間にか、水彩畫の續きを描き始めた。三四郎が傍にゐるのが丸で苦になつてゐない。それでゐて、能く返事をする。
「美禰子さん？」と聞きながら、柿の木の下にある藁葺屋根に影をつけたが、
「少し黒過ぎますね」と畫を三四郎の前へ出した。三四郎は今度は正直に、
「えゝ、少し黒過ぎます」と答へた。すると、よし子は畫筆に水を含ませて、黒い所を洗ひながら、
「入らつしやいますわ」と漸く三四郎に返事をした。

「度々？」

「えゝ度々」とよし子は依然として畫紙に向つてゐる。三四郎は、よし子が畫のつゞきを描き出してから、問答が大變氣樂になつた。

しばらく無言の儘、畫の中を覗いてゐると、よし子は丹念に藁葺屋根の黒い影を洗つてゐたが、あまり水が多過ぎたのと、筆の使ひ方が中々不慣れなので、黒いものが勝手に四方へ浮き出して、折角赤く出來た柹が、蔭干しの澁柹の樣な色になつた。よし子は畫筆の手を休めて、兩手を伸ばして、首をあとへ引いて、ワツトマンを成るべく遠くから眺めて居たが、仕舞に、小さな聲で、

「もう駄目ね」と云ふ。實際駄目なのだから、仕方がない。三四郎は氣の毒になつた。

「もう御廢しなさい。さうして、又新しく御描きなさい」

よし子は顏を畫に向けた儘、尻眼に三四郎を見た。大きな潤ひのある眼である。三四郎は益々氣の毒になつた。すると女が急に笑ひ出した。

「馬鹿ね。二時間許り損をして」と云ひながら、折角描いた水彩の上へ、横縱に二三本太い棒を引いて、繪の具函の蓋をぱたりと伏せた。

「もう廢しませう。座敷へ御這入りなさい。御茶を上げますから」と云ひながら、自分は上へあがつた。三四郎は靴を脫ぐのが面倒なので、矢つ張り緣側に腰を掛けてゐた。腹の中では、今になつて、茶を遣る

といふ女を非常に面白いと思つてゐた。三四郎に度外れの女を面白がる積りは少しもないのだが、突然御茶を上げますと云はれた時には、一種の愉快を感ぜぬ譯に行かなかつたのである。其感じは、どうしても異性に近づいて得られる感じではなかつた。

茶の間で話し聲がする。下女は居たに違ひない。やがて襖を開いて、茶器を持つて、よし子があらはれた。其顏を正面から見たときに、三四郎は又女性中の尤も女性的な顏であると思つた。

よし子は茶を汲んで椽側へ出して、自分は座敷の疊の上へ坐つた。三四郎はもう歸らうと思つてゐたが、此女の傍にゐると、歸らないでも構はない樣な氣がする。病院では曾て此女の顏を眺め過ぎて、少し赤面させた爲に、早速引き取つたが、今日は何ともない。茶を出したのを幸ひに椽側と座敷で又談話を始めた。色々話してゐるうちに、よし子は三四郎に妙な事を聞き出した。それは、自分の兄の野々宮が好きか嫌ひかと云ふ質問であつた。一寸聞くと丸で頑是ない子供の云ひさうな事であるが、よし子の意味はもう少し深い所にあつた。研究心の強い學問好きの人は、萬事を研究する氣で見るから、情愛が薄くなる譯である。人情で物をみると、凡てが好き嫌ひの二つになる。研究する氣なぞが起るものではない。自分の兄は理學者だものだから、自分を研究して不可ない。自分を研究すればする程、自分を可愛がる度は減るのだから、妹に對して不親切になる。けれども、あの位研究好きの兄が、この位自分を可愛がつて呉れるのだから、それを思ふと、兄は日本中で一番好い人に違ひないと云ふ結論であつた。

三四郎は此説を聞いて、大いに尤もな樣な、又何處か拔けてゐる樣な氣がしたが、偖何處が拔けてゐるんだか、頭がぼんやりして、一寸分らなかつた。それで表向き此説に對しては別段の批評を加へなかつた。たゞ腹の中でこれしきの女の云ふ事を、明瞭に批評し得ないのは、男兒として腑甲斐ない事だと、いたく赤面した。同時に、東京の女學生は決して馬鹿に出來ないものだと云ふ事を悟つた。

三四郎はよし子に對する敬愛の念を抱いて下宿へ歸つた。端書が來てゐる。「明日午後一時頃から菊人形を見に參りますから、廣田先生のうち迄入らつしやい。美禰子」

其字が、野々宮さんの隱袋から半分食み出してゐた封筒の上書に似てゐるので、三四郎は何遍も讀み直して見た。

翌日は日曜である。三四郎は午飯を濟ましてすぐ西片町へ來た。新調の制服を着て、光つた靴を穿いてゐる。靜かな橫町を廣田先生の前迄來ると、人聲がする。

先生の家は門を這入ると、左手がすぐ庭で、木戸をあければ玄關へかゝらずに、座敷の緣へ出られる。三四郎は要目垣の間に見える棧を外さうとして、ふと、庭のなかの話し聲を耳にした。話しは野々宮と美禰子の間に起りつゝある。

「そんな事をすれば地面の上へ落ちて死ぬ計りだ」是は男の聲である。

「死んでも、其方が可いと思ひます」是は女の答である。

「尤もそんな無謀な人間は、高い所から落ちて死ぬ丈の價値は充分ある」
「殘酷な事を仰しやる」
三四郎は此處で木戸を開けた。庭の眞中に立つてゐた會話の主は二人とも此方を見た。野々宮はたゞ「やあ」と平凡に云つて、頭を首肯かせた丈である。頭に新しい茶の中折帽を被つてゐる。美禰子は、すぐ、
「端書は何時頃着きましたか」と聞いた。二人の今迄遣つてゐた會話はこれで中絶した。
縁側には主人が洋服を着て腰を掛けて、相變らず哲學を吹いてゐる。是は西洋の雜誌を手にしてゐた。側によし子がゐる。兩手を後へ突いて、身體を空に持たせながら、伸ばした足に穿いた厚い草履を眺めてゐた。――三四郎はみんなから待ち受けられてゐたと見える。
主人は雜誌を擲げ出した。
「では行くかな。とう／＼引張り出された」
「御苦勞樣」と野々宮さんが言つた。女は二人で顏を見合はせて、他に知れない樣な笑ひを洩らした。
庭を出るとき、女が二人つゞいた。
「背が高いのね」と美禰子が後から言つた。
「のつぽ」とよし子が一言答へた。門の側で並んだ時、「だから、なり丈草履を穿くの」と辯解をした。
三四郎もつゞいて庭を出ようとすると、二階の障子ががらりと開いた。與次郎が手欄の所迄出て來た。

「行くのか」と聞く。

「うん、君は」

「行かない。菊細工なんぞ見て何になるものか。馬鹿だな」

「一所に行かう。家に居たつて仕様がないぢやないか」

「今論文を書いてゐる。大論文を書いてゐる。中々それ所ぢやない」

三四郎は呆れ返つた様な笑ひ方をして、四人の後を追ひ掛けた。四人は細い横町を三分の二程広い通りの方へ遠ざかつた所である。此一団の影を高い空気の下に認めた時、三四郎は自分の今の生活が熊本当時のそれよりも、ずつと意味の深いものになりつゝあると感じた。曾て考へた三個の世界のうちで、第二第三の世界は正に此一団の影で代表されてゐる。影の半分は薄黒い。半分は花野の如く明らかである。さうして三四郎の頭のなかでは此両方が渾然として調和されてゐる。のみならず、自分も何時の間にか、自然と此経緯のなかに織り込まれてゐる。たゞそのうちの何処かに落ち付かない所がある。それが不安である。歩きながら考へると、今さき庭のうちで、野々宮と美禰子が話してゐた談柄が近因である。三四郎は此不安の念を駆る為に、二人の談柄を再び剔抉し出して見たい気がした。

四人は既に曲り角へ来た。四人とも足を留めて、振り返つた。美禰子は額に手を翳してゐる。

三四郎は一分かゝらぬうちに追ひ付いた。追ひ付いても誰も何とも云はない。唯歩き出した丈である。

しばらくすると、美禰子が、
「野々宮さんは、理學者だから、なほそんな事を仰しやるんでせう」と云ひ出した。話しの續きらしい。
「なに理學を遣らなくつても同じ事です。高く飛ばうと云ふには、飛べる丈の裝置を考へた上でなければ出來ないに極まつて居る。頭の方が先に要るに違ひないぢやありませんか」
「そんなに高く飛びたくない人は、それで我慢するかも知れません」
「我慢しなければ、死ぬ許りですもの」
「さうすると安全で地面の上に立つてゐるのが一番好い事になりますね。何だか詰らない樣だ」
野々宮さんは返事を已めて、廣田先生の方を向いたが、
「女には詩人が多いですね」と笑ひながら云つた。すると廣田先生が、
「男子の弊は却つて純粹の詩人になり切れない所にあるだらう」と妙な挨拶をした。野々宮さんはそれで默つた。よし子と美禰子は何か御互の話しを始める。三四郎は漸く質問の機會を得た。
「今のは何の御話しなんですか」
「なに空中飛行器の事です」と野々宮さんが無造作に云つた。三四郎は落語のおちを聞く樣な氣がした。
それからは別段の會話も出なかつた。又長い會話が出來かねる程、人がぞろ／＼歩く所へ來た。大觀音の前に乞食が居る。額を地に擦り附けて、大きな聲をのべつに出して、哀願を逞しうしてゐる。時々顏を

上げると、額の所丈が砂で白くなつてゐる。誰も顧るものがない。五人も平氣で行き過ぎた。五六間も來た時に、廣田先生が急に振り向いて三四郎に聞いた。

「君あの乞食に錢を遣りましたか」

「いゝえ」と三四郎が後を見ると、例の乞食は、白い額の下で兩手を合はせて、相變らず大きな聲を出してゐる。

「遣る氣にならないわね」とよし子がすぐに云つた。

「何故」とよし子の兄は妹を見た。窘める程に強い言葉でもなかつた。野々宮の顔附は寧ろ冷靜である。

「あゝ始終焦つ着いて居ちや、焦つ着き榮えがしないから駄目ですよ」と美禰子が評した。

「いえ場所が惡いからだ」と今度は廣田先生が云つた。「あまり人通りが多過ぎるから不可ない。山の上の淋しい所で、あゝいふ男に逢つたら、誰でも遣る氣になるんだよ」

「其代り一日待つてゐても、誰も通らないかも知れない」と野々宮はくす／＼笑ひ出した。

三四郎は四人の乞食に對する批評を聞いて、自分が今日迄養成した徳義上の觀念を幾分か傷つけられる樣な氣がした。けれども自分が乞食の前を通るとき、一錢も投げてやる料簡が起らなかつたのみならず、實を云へば、寧ろ不愉快な感じが募つた事實を反省して見ると、自分よりも是等四人の方が却つて己に誠であると思ひ附いた。又彼等は己に誠であり得る程な廣い天地の下に呼吸する都會人種であるといふ事を悟

つた。

行くに從つて人が多くなる。しばらくすると一人の迷子に出逢つた。七つ許りの女の子である。泣きながら、人の袖の下を右へ行つたり、左へ行つたりうろ／＼してゐる。御婆さん、御婆さんと無暗に云ふ。是には往來の人もみんな心を動かしてゐる樣に見える。立ち留まるものもある。可哀相だといふものもある。然し誰も手を附けない。子供は凡ての人の注意と同情を惹きつゝ、しきりに泣き號んで御婆さんを搜してゐる。不可思議の現象である。

「これも場所が惡い所爲ぢやないか」と野々宮君が子供の影を見送りながら云つた。

「今に巡査が始末をつけるに極まつてるから、みんな責任を逃れるんだね」と廣田先生が說明した。

「私の傍迄來れば交番迄送つてやるわ」とよし子が云ふ。

「ぢや、追つ掛けて行つて、連れて行くが好い」と兄が注意した。

「追つ掛けるのは厭」

「何故」

「何故つて――こんなに大勢人がゐるんですもの。私に限つた事はないわ」

「矢つ張り責任を逃れるんだ」と廣田がいふ。

「矢つ張り場所が惡いんだ」と野々宮がいふ。男は二人で笑つた。團子坂の上まで來ると、交番の前へ

人が黒山の様に集つてゐる。迷子はとう／＼巡査の手に渡つたのである。
「もう安心大丈夫です」と美禰子が、よし子を顧て云つた。よし子は「まあ可かつた」といふ。
坂の上から見ると、坂は曲がつてゐる。刀の切先の様である。幅は無論狭い。右側の二階建が左側の高い小屋の前を半分遮つてゐる。其後には又高い幟が何本となく立ててある。人は急に谷底へ落ち込む様に思はれる。其落ち込むものが、這ひ上がるものと入り亂れて、路一杯に塞がつてゐるから、谷の底にあたる所は幅をつくして異様に動く。見てゐると眼が疲れるほど不規則に蠢いてゐる。廣田先生は此坂の上に立つて、
「是は大變だ」と、さも歸りたさうである。四人はあとから先生を押す様にして、谷へ這入つた。其谷が途中からだら／＼と向うへ廻り込む所に、右にも左にも、大きな葭簀掛けの小屋を、狭い兩側から高く構へたので、空さへ存外窮屈に見える。往來は暗くなる迄込み合つてゐる。其中で木戸番が出来る丈大きな聲を出す。「人間から出る聲ぢやない。菊人形から出る聲だ」と廣田先生が評した。それ程彼等の聲は尋常を離れてゐる。
一行は左の小屋へ這入つた。曾我の討入がある。五郎も十郎も頼朝もみな平等に菊の着物を着てゐる。但し顔や手足は悉く木彫である。其次は雪が降つてゐる。若い女が癪を起してゐる。是も人形の心に、菊を一面に這はせて、花と葉が平らに隙間なく衣裳の恰好となる様に作つたものである。

よし子は餘念なく眺めてゐる。廣田先生と野々宮君はしきりに話しを始めた。菊の培養法が違ふとか何とかいふ所で、三四郎は、外の見物に隔てられて、一間ばかり離れた。美禰子はもう三四郎より先にゐる。見物は概して町家のものである。教育のありさうなものは極めて少ない。美禰子は其間に立つて、振り返つた。首を延ばして、野々宮のゐる方を見た。野々宮は右の手を竹の手欄から出して、菊の根を指しながら、何か熱心に説明してゐる。美禰子は又向うをむいた。見物に押されて、さつさと出口の方へ行く。三四郎は群集を押し分けながら、三人を棄てて、美禰子の後を追つて行つた。

漸くの事で、美禰子の傍迄來て、

「里見さん」と呼んだ時に、美禰子は青竹の手欄に手を突いて、心持ち首を戻して、三四郎を見た。何とも云はない。手欄のなかは養老の瀧である。丸い顔の、腰に斧を指した男が、瓢箪を持つて、瀧壺の側に屈んでゐる。三四郎が美禰子の顔を見た時には、青竹のなかに何があるか殆ど氣が付かなかつた。

「どうかしましたか」と思はず云つた。美禰子はまだ何とも答へない。黒い眼をさも物憂さうに三四郎の額の上に据ゑた。其時三四郎は美禰子の二重瞼に不可思議なある意味を認めた。其意味のうちには、靈の疲れがある。肉の弛みがある。苦痛に近き訴へがある。三四郎は、美禰子の答へを豫期しつゝある今の場合を忘れて、此眸と此瞼の間に凡てを遺却した。すると美禰子は云つた。

「もう出ませう」

眸と瞼の距離が次第に近づく樣に見えた。近づくに從つて三四郎の心には女の爲に出なければ濟まない氣が萌して來た。それが頂點に達した頃、女は首を投げる樣に向うをむいた。手を靑竹の手欄から離して、出口の方へ歩いて行く。三四郎はすぐ後から跟いて出た。

二人が表へ竝んだ時、美禰子は俯向いて右の手を額に當てた。周圍は人が渦を捲いてゐる。三四郎は女の耳へ口を寄せた。

「どうかしましたか」

女は人込の中を谷中の方へ歩き出した。三四郎も無論一所に歩き出した。半町ばかり來た時、女は人の中で留まつた。

「此處は何處でせう」

「此方へ行くと谷中の天王寺の方へ出て仕舞ひます。歸り路とは丸で反對です」

「さう。私心持が惡くつて……」

三四郎は往來の眞中で扶けなき苦痛を感じた。立つて考へてゐた。

「何處か靜かな所はないでせうか」と女が聞いた。

谷中と千駄木が谷で出逢ふと、一番低い所に小川が流れてゐる。此小川を沿うて、町を左へ切れるとすぐ野に出る。川は眞直に北へ通つてゐる。三四郎は東京へ來てから何遍此小川の向う側を歩いて、何遍此

方側を歩いたか善く覺えてゐる。美禰子の立つてゐる所に、此小川が、丁度谷中の町を横切つて根津へ抜ける石橋の傍である。

「もう一町ばかり歩けますか」と美禰子に聞いて見た。

「歩きます」

二人はすぐ石橋を渡つて、左へ折れた。人の家の路次の様な所を十間程行き盡くして門の手前から板橋を此方側へ渡り返して、しばらく川の縁を上ると、もう人は通らない。廣い野である。

三四郎は此靜かな秋のなかへ出たら、急に饒舌り出した。

「どうです具合は。頭痛でもしますか。あんまり人が大勢ゐた所為でせう。あの人形を見てゐる連中のうちには隨分下等なのがゐた様だから――何か失禮でもしましたか」

女は黙つてゐる。やがて川の流れから、眼を上げて、三四郎を見た。二重瞼にはつきりと張りがあつた。三四郎は其眼付で半ば安心した。

「難有う。大分好くなりました」と云ふ。

「休みませうか」

「えゝ」

「もう少し歩けますか」

「えゝ」
「歩ければ、もう少し御歩きなさい。此處は汚い。彼處迄行くと丁度休むに好い場所があるから」
「えゝ」
一丁許り來た。又橋がある。一尺に足らない古板を造作なく渡した上を、三四郎は大股に歩いた。女もつゞいて通つた。待ち合はせた三四郎の眼には、女の足が常の大地を踏むと同じ樣に輕く見えた。此女は素直な足を眞直に前へ運ぶ。わざと女らしく甘へた歩き方をしない。從つて無暗に此方から手を貸す譯に行かない。
向うに藁屋根がある。屋根の下が一面に赤い。近寄つて見ると、唐辛子を干したのであつた。女は此赤いものが、唐辛子であると見分けのつく處迄來て留まつた。
「美しい事」と云ひながら、草の上に腰を卸ろした。草は小川の縁に僅かな幅を生えて居るのみである。夫すら夏の半ばの樣に青くはない。美禰子は派出な着物の汚れるのを、丸で苦にしてゐない。
「もう少し歩けませんか」と三四郎は立ちながら、促す樣に云つて見た。
「難有う。是で澤山」
「矢つ張り心持が惡いですか」
「あんまり疲れたから」

三四郎もとう／＼汚い草の上に坐つた。美禰子と三四郎の間は四尺許り離れてゐる。二人の足の下には小さな川が流れてゐる。秋になつて水が落ちたから浅い。角の出た石の上に鶺鴒が一羽とまつた位である。三四郎は水の中を眺めてゐた。水が次第に濁つて来る。見ると川上で百姓が大根を洗つてゐた。美禰子の視線は遠くの向うにある。向うは広い畑で、畑の先が森で、森の上が空になる。空の色が段々変つて来る。

たゞ単調に澄んでゐたもののうちに、色が幾通りも出来てきた。透き徹る藍の地が消える様に次第に薄くなる。其上に白い雲が鈍く重なりかゝる。重なつたものが溶けて流れ出す。何処で地が尽きて、何処で雲が始まるか分らない程に嬾い上を、心持黄な色がふうと一面にかゝつてゐる。

「空の色が濁りました」と美禰子が云つた。

三四郎は流れから眼を放して、上を見た。かう云ふ空の模様を見たのは始めてではない。けれども空が濁つたといふ言葉を聞いたのは此時が始めてである。気が付いて見ると、濁つたと形容するより外に形容しかたのない色であつた。三四郎が何か答へようとする前に、女は又言つた。

「重い事。大理石の様に見えます」

美禰子は二重瞼を細くして高い所を眺めてゐた。それから、その細くなつた儘の眼を静かに三四郎の方に向けた。さうして、

「大理石の様に見えるでせう」と聞いた。三四郎は、

「えゝ、大理石の樣に見えます」と答へるより外はなかつた。女はそれで默つた。しばらくしてから、今度は三四郎が云つた。

「かう云ふ空の下にゐると、心が重くなるが氣は輕くなる」

「どう云ふ譯ですか」と美禰子が問ひ返した。

三四郎には、どう云ふ譯もなかつた。返事はせずに、又かう云つた。

「安心して夢を見てゐる樣な空模樣だ」

「動く樣で、なか／＼動きませんね」と美禰子は又遠くの雲を眺め出した。

菊人形で客を呼ぶ聲が、折々二人の坐つてゐる所迄聞こえる。

「隨分大きな聲ね」

「朝から晩迄あゝ云ふ聲を出してゐるんでせうか。豪いもんだな」と云つたが、三四郎は急に置き去りにした三人の事を思ひ出した。何か云はうとしてゐるうちに、美禰子は答へた。

「商賣ですもの、丁度大觀音の乞食と同じ事なんですよ」

「場所が惡くはないですか」

三四郎は珍らしく冗談を云つて、さうして一人で面白さうに笑つた。乞食に就いて下した廣田の言葉を餘程可笑しく受けたからである。

「廣田先生は、よく、あゝ云ふ事を仰しやる方なんですよ」と極めて輕く獨り言の樣に云つたあとで、急に調子を更へて、

「かう云ふ所に、かうして坐つてゐたら、大丈夫及第よ」と比較的活潑に附け加へた。さうして、今度は自分の方で面白さうに笑つた。

「成程野々宮さんの云つた通り、何時迄待つてゐても誰も通りさうもありませんね」

「丁度好いぢやありませんか」と早口に云つたが、後で「御貰ひをしない乞食なんだから」と結んだ。是は前句の解釋の爲に附けた樣に聞えた。

所へ知らん人が突然あらはれた。唐辛子の干してある家の陰から出て、何時の間にか河を向うへ渡つたものと見える。二人の坐つてゐる方へ段々近附いて來る。洋服を着て髯を生やして、年輩から云ふと廣田先生位な男である。此男が二人の前へ來た時、顏をぐるりと向け直して、正面から三四郎と美禰子を睨め附けた。其眼のうちには明らかに憎惡の色がある。三四郎は凝と坐つてゐにくい程な束縛を感じた。男はやがて行き過ぎた。其後影を見送りながら、三四郎は、

「廣田先生や野々宮さんはさぞ後で僕等を探したでせう」と始めて氣が附いた樣に云つた。美禰子は寧ろ冷やかである。

「なに大丈夫よ。大きな迷子ですもの」

「迷子だから探したでせう」と三四郎は矢張り前説を主張した。すると美禰子は、なほ冷やかな調子で、

「責任を逃れたがる人だから、丁度好いでせう」

「誰が？廣田先生がですか」

美禰子は答へなかつた。

「野々宮さんがですか」

美禰子は矢つ張り答へなかつた。

「もう氣分は宜くなりましたか。宜くなつたら、そろ／＼歸りませうか」

美禰子は三四郎を見た。三四郎は上げかけた腰を又草の上に卸ろした。其時三四郎は此女にはとても叶はない樣な氣が何處かでした。同時に自分の腹を見拔かれたといふ自覺に伴なふ一種の屈辱をかすかに感じた。

「迷子」

女は三四郎を見た儘で此一言を繰り返した。三四郎は答へなかつた。

「迷子の英譯を知つて入らしつて」

三四郎は知るとも、知らぬとも云ひ得ぬ程に、此問を豫期してゐなかつた。

「敎へて上げませうか」

「えゝ」

「迷へる子――解つて？」

三四郎は斯う云ふ場合になると挨拶に困る男である。咄嗟の機が過ぎて、頭が冷やかに働き出した時、過去を顧みて、あゝ云へば好かつた、斯うすれば好かつたと後悔する。と云つて、此後悔を予期して、無理に応急の返事を、左も自然らしく得意に吐き散らす程に軽薄ではなかつた。だから只黙つてゐる。さうして黙つてゐる事が如何にも半間であると自覚してゐる。

迷へる子といふ言葉は解つた様でもある。又解らない様でもある。解る解らないは此言葉の意味よりも、寧ろ此言葉を使つた女の意味である。三四郎はいたづらに女の顔を眺めて黙つてゐた。すると女は急に真面目になつた。

「私そんなに生意気に見えますか」

其調子には弁解の心持がある。三四郎は意外の感に打たれた。今迄は霧の中にゐた。霧が晴れゝば好いと思つてゐた。此言葉で霧が晴れた。明瞭な女が出て来た。晴れたのが恨めしい気がする。

三四郎は美禰子の態度を故の様な、――二人の頭の上に広がつてゐる、澄むとも濁るとも片付かない空の様な、――意味のあるものにしたかつた。けれども、それは女の機嫌を取るための挨拶位で戻せるものではないと思つた。女は卒然として、

「おや、もう歸りませう」と云つた。厭味のある言ひ方ではなかつた。たゞ三四郎にとつて自分は興味のないものと諦めた樣に靜かな口調であつた。

空は又變つて來た。風が遠くから吹いてくる。廣い畠の上には日が限つて、見てゐると、寒い程淋しい。草からあがる地息で身體は冷えてゐた。氣が附けば、こんな所に、よく今迄べつとり坐つて居られたものだと思ふ。自分一人なら、とうに何處かへ行つて仕舞つたに違ひない。美禰子も——美禰子はこんな所へ坐る女かも知れない。

「少し寒くなつた樣ですから、兎に角立ちませう。冷えると毒だ。然し氣分はもう悉皆直りましたか」

「えゝ、悉皆直りました」と明らかに答へたが、俄に立ち上がつた。立ち上がる時、小さな聲で、獨り言の樣に、

「迷へる子」と長く引つ張つて云つた。三四郎は無論答へなかつた。

美禰子は、さつき洋服を着た男の出て來た方角を指して、道があるなら、あの唐辛子の傍を通つて行きたいといふ。二人は、その見當へ歩いて行つた。藁葺の後に果して細い三尺程の路があつた。半分程來た所で三四郎は聞いた。

「よし子さんは、あなたの所へ來る事に極まつたんですか」

女は片頬で笑つた。さうして問ひ返した。

「御話御聞きになるの」

三四郎が何か云はうとすると、足の前に泥濘があつた。四尺許りの所、土が凹んで水がぴたぴたに溜まつてゐる。其中に足掛りの為に手頃な石を置いたものがある。三四郎は石の扶けを藉らずに、すぐに向ふへ飛んだ。さうして美禰子を振り返つて見た。美禰子は右の足を泥濘の真中にある石の上へ乗せた。石の据りがあまり善くない。足へ力を入れて、肩を揺つて調子を取つてゐる。三四郎は此方側から手を出した。

「御捕まりなさい」

「いえ大丈夫」と女は笑つてゐる。手を出してゐる間は、調子を取る丈で渡らない。三四郎は手を引込めた。すると美禰子は石の上にある右の足に、身体の重みを託して、左の足でひらりと此方側へ渡つた。あまりに下駄を汚すまいと念を入れ過ぎた為、力が余つて、腰が浮いた。のめりさうに胸が前へ出る。其勢で美禰子の両手が三四郎の両腕の上へ落ちた。

「迷へる子」と美禰子が口の内で云つた。三四郎は其呼吸を感ずる事が出来た。

六

ベルが鳴つて、講師は教室から出て行つた。三四郎は印気の着いた洋筆を振つて、帳面を伏せようとした。すると隣にゐた与次郎が声を掛けた。

「おい一寸借せ。書き落とした所がある」

與次郎は三四郎の帳面を引き寄せて上から覗き込んだ。stray sheep といふ字が無暗にかいてある。

「何だこれは」

「講義を筆記するのが厭になつたから、いたづらを書いてゐた」

「さう不勉強では不可ん。カントの超絶唯心論がバークレーの超絶實在論にどうだとか云つたな」

「どうだとか云つた」

「聞いてゐなかつたのか」

「いゝや」

「全然 stray sheep だ。仕方がない」

與次郎は自分の帳面を抱へて立ち上がつた。机の前を離れながら、三四郎に、

「おい一寸來い」と云ふ。三四郎は與次郎に跟いて教室を出た。階子段を降りて、玄關前の草原へ來た。大きな櫻がある。二人は其下に坐つた。

此處は夏の初めになると苜蓿が一面に生える。與次郎が入學願書を持つて事務へ來た時に、此櫻の下に二人の學生が寐轉んでゐた。其一人が一人に向つて、口頭試驗を都々逸で負けて置いて呉れると、いくらでも唄つて見せるがなと云ふと、一人が小聲で、粹な捌きの博士の前で、戀の試驗がして見たいと唄つて

ゐた。其時から與次郎は此欅の木の下が好きになつて、何か事があると、三四郎を此處へ引つ張り出す。三四郎は其歴史を與次郎から聞いた時に、成程與次郎は俗謠で pity's love を譯す筈だと思つた。今日は然し與次郎が事の外眞面目である。草の上に胡坐をかくや否や、懷中から、文藝時評といふ雜誌を出して開けた儘の一頁を逆に三四郎の方へ向けた。

「どうだ」と云ふ。見ると標題に大きな活字で「偉大なる暗闇」とある。下には零餘子と雅號を使つてゐる。偉大なる暗闇とは與次郎がいつでも廣田先生を評する語で、三四郎も二三度聞かされたものである。然し零餘子は全く知らん名である。どうだと云はれた時に、三四郎は、返事をする前提として一先づ與次郎の顔を見た。すると與次郎は何にも云はずに其扁平な顔を前へ出して、右の人指し指の先で、自分の鼻の頭を抑へて凝としてゐる。向ふに立つてゐた一人の學生が、此樣子を見てにや〳〵笑ひ出した。それに氣が付いた與次郎は漸く指を鼻から放した。

「己が書いたんだ」と云ふ。三四郎は成程さうかと悟つた。

「僕等が菊細工を見に行く時書いてゐたのは、是か」

「いや、ありや、たつた二三日前ぢやないか。さう早く活版になつて堪るものか。あれは來月出る。これは、ずつと前に書いたものだ。何を書いたものか標題で解るだらう」

「廣田先生の事か」

「うん。かうして輿論を喚起して置いてね。さうして、先生が大學へ這入れる下地を作る……」

「此雜誌はそんなに勢力のある雜誌か」

三四郎は雜誌の名前さへ知らなかつた。

「いや無勢力だから、實は困る」と與次郎は答へた。三四郎は微笑はざるを得なかつた。

「何部位賣れるのか」

與次郎は何部賣れるとも云はない。

「まあ好いさ。書かんよりは增しだ」と辯解してゐる。

段々聞いて見ると、與次郎は從來から此雜誌と關係があつて、閑暇さへあれば殆ど毎號筆を執つてゐるが、其代り雅名も毎號變へるから、二三の同人の外、誰も知らないんだと云ふ。成程さうだらう。三四郎は今始めて、與次郎と文壇との交渉を聞いた位のものである。然し與次郎が何の爲に、遊戯に等しい匿名を用ひて、彼の所謂大論文をひそかに公にしつゝあるか。其處が三四郎には分らなかつた。幾分か小遣取りの積りで、遣つてゐる仕事かと不遠慮に尋ねた時、與次郎は眼を丸くした。

「君は九州の田舍から出た許りだから、中央文壇の趨勢を知らない爲に、そんな呑氣な事を云ふのだらう。今の思想界の中心に居て、その動搖のはげしい有樣を目撃しながら、考へのあるものが知らん顏をしてゐられるものか。實際今日の文權は全く吾々青年の手にあるんだから、一言でも半句でも進んで云へる

丈云はなけりや撰ぢやないか。文壇は急轉直下の勢ひで目覺ましい革命を受けてゐる。凡てが悉く搖いて、新氣運に向つて行くんだから、取り殘されちや大變だ。進んで自分から此氣運を拵へ上げなくつちや、生きてゐる甲斐はない。文學々々つて安つぽい樣に云ふが、そりや大學なんかで聞く文學のことだ。新しい吾吾の所謂文學は、人生そのものの大反射だ。文學の新氣運は日本全社會の活動に影響しなければならない。又現にしつゝある。彼等が晝寐をして夢を見てゐる間に、何時か影響しつゝある。恐ろしいものだ」

三四郎は默つて聞いてゐた。少し法螺の樣な氣がする。然し法螺でも與次郎は中々熱心に吹いてゐる。すくなくとも當人丈は至極眞面目らしく見える。三四郎は大分動かされた。

「さう云ふ精神でやつてゐるのか。では君は原稿料なんか、どうでも構はんのだつたな」

「いや、原稿料は取るよ。取れる丈取る。然し雜誌が賣れないから中々寄こさない。どうかして、もう少し賣れる工夫をしないと不可ない。何か好い趣向はないだらうか」と今度は三四郎に相談を掛けた。話しが急に實際問題に落ちて仕舞つた。三四郎は妙な心持がする。與次郎は平氣である。號鐘が烈しく鳴り出した。

「兎も角此雜誌を一部君にやるから讀んで見てくれ。偉大なる暗闇と云ふ題が面白いだらう。此題なら人が驚くに極まつてゐる。――驚かせないと讀まないから駄目だ」

二人は玄關を上つて、教室へ這入つて、机に着いた。やがて先生が來る。二人とも筆記を始めた。三四

郎は「偉大なる暗闇」が氣にかゝるので、講義の傍に文藝時評を開けた儘、筆記の相間々々に先生に知れない樣に讀み出した。先生は幸ひ近眼である。のみならず自己の講義のうちに全然埋沒してゐる。三四郎の不心得には丸で關係しない。三四郎は好い氣になつて、此方も筆記したり、彼方も讀んだりして行つたが、もと〳〵二人でする事を一人で兼ねる無理な藝だから仕舞には「偉大なる暗闇」も講義の筆記も双方ともに關係が解らなくなつた。たゞ與次郎の文章が一句丈判然頭へ這入つた。

「自然は寶石を作るに幾年の星霜を費やしたか。又此寶石が採掘の運に逢ふ迄に、幾年の星霜を靜かに輝いてゐたか」といふ句である。其他は不得要領に終つた。其代り此時間には stray sheep といふ字を一つも書かずに濟んだ。

講義が終るや否や、與次郎は三四郎に向つて、

「どうだ」と聞いた。實はまだ善く讀まないと答へると、時間の經濟を知らない男だといつて非難した。是非讀めといふ。三四郎は家へ歸つて是非讀むと約束した。やがて午になつた。二人は連れ立つて門を出た。

「今晩出席するだらうな」と與次郎が西片町へ這入る横町の角で立ち留まつた。今夜は同級生の懇親會がある。三四郎は忘れてゐた。漸く思ひ出して、行く積りだと答へると、與次郎は、

「出る前に一寸誘つて呉れ。君に話す事がある」と云ふ。耳の後へ洋筆軸を挾んでゐる。何となく得意

である。三四郎は承知した。

下宿へ帰つて、湯に入つて、好い心持になつて上がつて見ると、机の上に絵端書がある。小川を描いて、草をもぢや／＼生やして、其縁に羊を二匹寝かして、其向ふ側に大きな男が洋杖を持つて立つてゐる所を写したものである。男の顔が甚だ獰猛に出来てゐる。全く西洋の絵にある悪魔を擬したもので、念の為、傍にちやんとデヸルと仮名が振つてある。表は三四郎の宛名の下に、迷へる子と小さく書いた許である。三四郎は迷へる子の何者かをすぐ悟つた。のみならず、端書の裏に、迷へる子を二匹書いて、其一匹を暗に自分に見立てて呉れたのを甚だ嬉しく思つた。迷へる子のなかには美禰子のみではない、自分ももとより這入つてゐたのである。それが美禰子の思はくであつたと見える。美禰子の使つた stray sheep の意味が是で漸く判然した。

与次郎に約束した「偉大なる暗闇」を読まうと思ふが、一寸読む気にならない。しきりに絵端書を眺めて考へた。イソツプにもない様な滑稽趣味がある。無邪気にも見える。洒落でもある。さうして凡ての下に、三四郎の心を動かすあるものがある。

手際から云つても敬服の至りである。諸事明瞭に出来上がつてゐる。よし子の描いた柿の木の比ではない。――と三四郎には思はれた。

しばらくしてから、三四郎は漸く「偉大なる暗闇」を読み出した。実はふは／＼して読み出したのであ

るが、二三十頁來ると、次第に釣り込まれる樣に氣が乘つてきて、知らず／＼の間に、五頁六頁と進んで、つひに二十七頁の長論文を苦もなく片附けた。最後の一句を讀了した時、始めて是で仕舞だなと氣が附いた。眼を雜誌から離して、あゝ讀んだなと思つた。

然し次の瞬間に、何を讀んだかと考へて見ると、何もない。可笑しい位何もない。たゞ大いに且盛に讀んだ氣がする。三四郎は與次郎の伎倆に感服した。

論文は現今の文學者の攻撃に始まつて、廣田先生の讃辭に終つてゐる。ことに大學文科の西洋人を手痛く罵倒してゐる。早く適當の日本人を招聘して、大學相當の講義を開かなくつては、學問の最高府たる大學も昔の寺小屋同然の有樣になつて、煉瓦石のミイラと選ぶ所がない樣になる。尤も人がなければ仕方がないが、こゝに廣田先生がある。先生は十年一日の如く高等學校に敎鞭を執つて薄給と無名に甘んじてゐる。然し眞正の學者である。學海の新氣運に貢獻して、日本の活社會と交渉のある敎授を擔任すべき人物である。——煎じ詰めると是丈であるが、其是丈が、非常に尤もらしい口吻と、燦爛たる警句とによつて、前後二十七頁に延長してゐる。

その中には「禿を自慢にするものは老人に限る」とか「ヴィーナスは波から生れたが、活眼の士は大學から生れない」とか「博士を學界の名産と心得るのは、海月を田子の浦の名産と考へる樣なものだ」とか色色面白い句が澤山ある。然しそれより外に何もない。殊に妙なのは、廣田先生を偉大なる暗闇に喩へた點

焦げたものが十ばかり皿の中に並んでゐる。

三四郎は座に着いた。禮をする。先生は口をもが〳〵させる。

「おい君も一つ食つて見ろ」と與次郎が皿のものを箸で撮んで出した。掌へ載せて見ると、馬鹿貝の剝身の干したのをつけ燒にしたのである。

「妙なものを食ふな」と聞くと、

「妙なものつて、旨いぜ食つて見ろ。是はね、僕がわざ〳〵先生に土產に買つて來たんだ。先生はまだ、これを食つた事がないと仰しやる」

「何處から」

「日本橋から」

三四郎は可笑しくなつた。かう云ふ所になると、さつきの演說の調子とは少し違ふ。

「先生、どうです」

「硬いね」

「硬いけれども旨いでせう。よく嚙まなくつちや不可ません。嚙むと味が出る」

「味が出る迄嚙んでゐちや、齒が疲れて仕舞ふ。何でこんな古風なものを買つて來たものかな」

「不可ませんか。こりや、ことによると先生には駄目かも知れない。里見の美禰子さんなら可いだらう」

「何故」と三四郎が聞いた。

「あゝ落ち附いてゐりや車の出る迄弁当を嚼んでるに違ひない」

「あの女は落ち附いて居て、乱暴だ」と廣田が云つた。

「えゝ乱暴です。イブセンの女の様な所がある」

「イブセンの女は露骨だが、あの女は心が乱暴だ。尤も乱暴と云つても普通の乱暴とは意味が違ふが。野々宮の妹の方が、一寸見ると乱暴の様で、矢つ張り女らしい。妙なものだね」

「里見のは乱暴の内訌ですか」

三四郎は黙つて二人の批評を聞いてゐた。何方の批評も腑に落ちない。乱暴といふ言葉が、どうして美禰子の上に使へるか、それからが第一不思議であつた。

與次郎はやがて、袴を穿いて、改まつて出て来て、

「一寸行つて参ります」と云ふ。先生は黙つて茶を飲んでゐる。二人は表へ出た。表はもう暗い。門を離れて二三間来ると、三四郎はすぐ話しかけた。

「先生は里見のお嬢さんを乱暴だと云つてたね」

「うん。先生は勝手な事をいふ人だから、時と場合によると何でも云ふ。第一先生が女を評するのが滑稽だ。先生の女に於ける知識は恐らく零だらう。ラブをした事がないものに女が分るものか」

「先生はそれで可いとして、君は先生の說に贊成したぢやないか」
「うん亂暴だと云つた。何故」
「何う云ふ所を亂暴と云ふのか」
「何う云ふ所も、斯う云ふ所もありやしない。現代の女性はみんな亂暴に極まつてる。あの女ばかりぢやない」
「君はあの人をイブセンの人物に似てると云つたぢやないか」
「云つた」
「イブセンの誰に似て居る積りなのか」
「誰つて……似てるよ」
三四郎は無論納得しない。然し追窮もしない。默つて一間許り步いた。すると突然與次郎がかう云つた。
「イブセンの人物に似てるのは里見の御孃さん許りぢやない、今の一般の女性はみんな似てる。女性ばかりぢやない。苟くも新しい空氣に觸れた男はみんなイブセンの人物に似た所がある。たゞ男も女もイブセンの樣に自由行動を取らないだけだ。腹のなかでは大抵かぶれてゐる」
「僕はあんまり、かぶれてゐない」
「ゐないと自ら欺いてゐるのだ。――どんな社會だつて陥缺のない社會はあるまい」

「それは無いだらう」

「無いとすれば、その中に生息してゐる動物は何處かに不足を感じる譯だ。イブセンの人物は、現代社會制度の缺陷を尤も明らかに感じたものだ。吾々も追ひ／＼あゝ成つて來る」

「君はさう思ふか」

「僕ばかりぢやない。具眼の士はみんなさう思つてゐる」

「君の家の先生もそんな考へか」

「うちの先生？　先生は解らない」

「だつて、先刻里見さんを評して、落ち附いてゐて亂暴だと云つたぢやないか。それを解釋して見ると、周圍に調和して行けるから、落ち附いてゐられるので、何處かに不足があるから、底の方が亂暴だと云ふ意味ぢやないのか」

「成程。――先生は偉い所があるよ。あゝいふ所へ行くと矢つ張り偉い」

と與次郎は急に廣田先生を賞め出した。三四郎は美禰子の性格に就いてもう少し議論の歩を進めたかつたのだが、與次郎の此一言で全くはぐらかされて仕舞つた。すると與次郎が云つた。

「實は今日君に用があると云つたのはね。――うん、夫よりか前に、君あの偉大なる暗闇を讀んだか。あれを讀んで置かないと僕の用事が頭へ這入り惡い」

「今日あれから家へ歸つて讀んだ」

「どうだ」

「先生は何と云つた」

「先生は讀むものかね。丸で知りやしない」

「さうだな。面白い事は面白いが、――何だか腹の足しにならない麥酒を飲んだ樣だね」

「それで澤山だ。讀んで景氣が附きさへすれば可い。だから匿名にしてある。どうせ今は準備時代だ。かうして置いて、丁度宜い時分に、本名を名乘つて出る。――夫は夫として、先刻の用事を話して置かう」

與次郎の用事といふのは斯うである。――今夜の會で自分達の科の不振の事をしきりに慨嘆するから、三四郎も一所に慨嘆しなくつては不可ないんださうだ。不振は事實であるから外のものも慨嘆するに極まつてゐる。それから、大勢一所に挽回策を講ずる事となる。何しろ適當な日本人を一人大學へ入れるのが急務だと云ひ出す。みんなが賛成する。當然だから賛成するのは無論だ。次に誰が好からうといふ相談に移る。其時廣田先生の名を持ち出す。其時三四郎は與次郎に口を添へて極力先生を賞賛しろと云ふ話しである。さうしないと、與次郎が廣田の食客だといふ事を知つてゐるものが疑ひを起さないとも限らない。自分は現に食客なんだから、どう思はれても構はないが、萬一煩ひが廣田先生に及ぶ樣では濟まん事になる。尤も外に同志が三四人はゐるから、大丈夫だが、一人でも味方は多い方が便利だから、三四郎も

「うつくしい空だ」と三四郎が云つた。與次郎も空を見ながら、一間許り歩いた。突然、
「おい、君」と三四郎を呼んだ。三四郎は又さつきの話しの續きかと思つて「なんだ」と答へた。
「君、かう云ふ空を見て何んな感じを起す」
與次郎に似合はぬ事を云つた。無限とか永久とかいふ持ち合はせの答へはいくらでもあるが、そんな事を云ふと與次郎に笑はれると思つて、三四郎は默つてゐた。
「詰らんなあ我々は。あしたから、斯んな運動をするのはもう已めにしようか知ら。偉大なる暗闇を書いても何の役にも立ちさうにもない」
「何故急にそんな事を云ひ出したのか」
「此空を見ると、さう云ふ考へになる。——君、女に惚れた事があるか」
三四郎は即答が出來なかつた。
「女は恐ろしいものだよ」と與次郎が云つた。
「恐ろしいものだ、僕も知つてゐる」と三四郎も云つた。すると與次郎が大きな聲で笑ひ出した。靜かな夜の中で大變高く聞こえる。
「知りもしない癖に。知りもしない癖に」
三四郎は憮然としてゐた。

「明日も好い天氣だ。運動會は仕合せだ。綺麗な女が澤山來る。是非見にくるがいゝ」
暗い中を二人は學生集會所の前迄來た。中には電燈が輝いてゐる。
木造の廊下を廻つて、部屋へ這入ると、早く來たものは、もう塊まつてゐる。其塊りが大きいのと小さいのと合はせて三つ程ある。中には無言で備附けの雜誌や新聞を見ながら、わざと列を離れてゐるのもある。話しは方々に聞こえる。話しの數は塊りの數より多い樣に思はれる。然し割合に落ち附いて靜かである。煙草の烟の方が猛烈に立ち上る。
其中だん／＼寄つて來る。黑い影が闇の中から吹き曝しの廊下の上へ、ぽつりと現はれると、それが一人一人に明るくなつて、部屋の中へ這入つて來る。時には五六人續けて、明るくなる事もある。軈て人數は略揃つた。
與次郎は、さつきから、煙草の烟の中で、しきりに彼方此方と往來してゐた。行く所で何か小聲に話してゐる。三四郎は、それ／＼運動を始めたなと思つて眺めて居た。
しばらくすると幹事が大きな聲で、みんなに席へ着けと云ふ。食卓は無論前から用意が出來てゐた。みんな、ごた／＼に席へ着いた。順序も何もない。食事は始まつた。
三四郎は熊本で赤酒許り飲んでゐた。赤酒といふのは、所で出來る下等な酒である。熊本の學生はみんな赤酒を呑む。それが當然と心得てゐる。たま／＼飲食店へ上がれば牛肉屋である。其牛肉屋の牛が馬肉

かも知れないといふ嫌疑がある。學生は皿に盛つた肉を手摑みにして、座敷の壁へ抛き附ける。落ちれば牛肉で、貼つ附けば馬肉だといふ。丸で呪ひ見た樣な事をしてゐた。其三四郎に取つて、かう云ふ紳士的な學生親睦會は珍らしい。悦んで肉刀と肉叉を動かしてゐた。其間には麥酒をさかんに飮んだ

「學生集會所の料理は不味いですね」と三四郎の隣に坐つた男が話しかけた。此男は頭を坊主に刈つて、金縁の眼鏡を掛けた大人しい學生であつた。

「さうですな」と三四郎は生返事をした。相手が與次郎なら、僕の樣な田舍者には非常に旨いと正直を所ないふ筈であつたが、其正直が却て皮肉に聞こえると惡いと思つて已めにした。すると其男が、

「君は何處の高等學校ですか」と聞き出した。

「熊本です」

「熊本ですか。熊本には僕の從弟も居たが、隨分ひどい所ださうですね」

「野蠻な所です」

二人が話してゐると、向うの方で、急に高い聲がし出した。見ると與次郎が隣席の二三人を相手に、しきりに何か辯じてゐる。時々ダーター、ファブラと云ふ。何の事だか分らない。然し與次郎の相手は、此言葉を聞くたびに笑ひ出す。與次郎は益得意になつて、ダーター、ファブラ我々新時代の青年は……とやつてゐる。三四郎の筋向に坐つてゐた色の白い品の好い學生がしばらく肉刀の手を休めて、與次郎の連

中を眺めてゐたが、やがて笑ひながら Il a le diable au corps（悪魔が乗り移つてゐる）と冗談半分に佛蘭西語を使つた。向うの連中には全く聞こえなかつたと見えて、此時麦酒の洋盃が四つ許り一度に高く上がつた。得意さうに祝盃を挙げてゐる。

「あの人は大変賑やかな人ですね」と三四郎の隣りの金釦の制服を着けた学生が云つた。

「えゝ。よく饒舌ります」

「僕はいつか、あの人に淀見軒でライスカレーを御馳走になつた。丸で知らないのに、突然来て、君淀見軒へ行かうつて、とう〳〵引張つて行つて……」

学生はハヽヽと笑つた。三四郎は、淀見軒で与次郎からライスカレーを御馳走になつたものは自分ばかりではないんだなと悟つた。

やがて珈琲が出る。一人が椅子を離れて立つた。与次郎が烈しく手を敲くと、他のものも忽ち調子を合はせた。

立つたものは、新しい黒い制服を着て、鼻の下にもう髭を生やしてゐる。脊が頗る高い。立つには恰好の好い男である。演説めいた事を始めた。

我々が今夜此處へ寄つて、懇親の為に、一夕の歓をつくすのは、それ自身に於て愉快な事であるが、此懇親が単に社交上の意味ばかりでなく。それ以外に一種重要な影響を生じ得ると偶然ながら気が附いたら

自分は立ちたくなつた。此會合は麥酒に始まつて珈琲に終つてゐる。全く普通の會合である。然し此麥酒を飲んで珈琲を飲んだ四十人近くの人間は普通の人間ではない。しかも其麥酒を飲み始めてから珈琲を飲み終る迄の間に既に自己の運命の膨脹を自覺し得た。

政治の自由を說いたのは昔の事である。言論の自由を說いたのも過去の事である。自由とは單に是等の表面にあらはれ易い事實の爲に專有されべき言葉ではない。吾等新時代の青年は偉大なる心の自由を說かねばならぬ時運に際會したと信ずる。

吾々は舊き日本の壓迫に堪へ得ぬ青年である。同時に新しき西洋の壓迫にも堪へ得ぬ青年であるといふ事を、世間に發表せねば居られぬ狀況の下に生きて居る。新しき西洋の壓迫は社會の上に於ても文藝の上に於ても、我等新時代の青年に取つては舊き日本の壓迫と同じく、苦痛である。

我々は西洋の文藝を研究する者である。然し研究は何處迄も研究である。その文藝のもとに屈從するのとは根本的に相違がある。我々は西洋の文藝に囚はれんが爲に、これを研究するのではない。囚はれたる心を解脫せしめんが爲に、これを研究してゐるのである。此方便に合せざる文藝は如何なる威壓の下に强ひらるゝとも學ぶ事を敢てせざるの自信と決心とを有して居る。

我々は此自信と決心とを有するの點に於て普通の人間とは異なつてゐる。文藝は技術でもない、事務でもない。より多く人生の根本義に觸れた社會の原動力である。吾々は此意味に於て文藝を研究し、此意味

に於て卿上の自信と決心とを有し、此意味に於て今夕の會合に一般以上の重大なる影響を想見するのである。

社會は烈しく搖きつゝある。社會の産物たる文藝もまた搖きつゝある。搖く勢ひに乘じて、吾々の理想通りに文藝を導くためには、零碎なる個人を團結して、自己の運命を充實し發展し膨脹しなくてはならぬ。今夕の麥酒と珈琲は、かゝる隱れたる目的を、一歩前に進めた點に於て、普通の麥酒と珈琲よりも百倍以上の價ある貴き麥酒と珈琲である。

演説の意味はざつと斯んなものである。演説が濟んだ時、席に在つた學生は悉く喝采した。三四郎は尤も熱心なる喝采者の一人であつた。すると與次郎が突然立つた。

「ダーター、ファブラ、沙翁の使つた字數が何萬字だの、イブセンの白髮の數が何千本だのと云つてたつて仕方がない。尤もそんな馬鹿げた講義を聞いたつて囚はれる氣遣ひはないから大丈夫だが、大學に氣の毒で不可ない。どうしても新時代の青年を滿足させる樣な人間を引つ張つて來なくつちや。西洋人じや駄目だ。第一幅が利かない。……」

滿堂は又悉く喝采した。さうして悉く笑つた。與次郎の隣にゐたものが、

「ダーター、ファブラの爲に祝盃を擧げよう」と云ひ出した。さつき演説をした學生がすぐに賛成した。生憎麥酒がみな空である。よろしいと云つて與次郎はすぐ臺所の方へ馳けて行つた。給仕が酒を持つて出

る。祝盃を擧げるや否や、
「もう一つ。今度は偉大なる暗闇の爲に」と云つたものがある。與次郎の周圍にゐたものは聲を合して、アハヽと笑つた。與次郎は頭を掻いてゐる。
散會の時刻が來て、若い男がみな暗い夜の中に散つた時に、三四郎が與次郎に聞いた。
「ダーター、ファブラとは何の事だ」
「希臘語だ」
與次郎はそれより外に答へなかつた。三四郎も夫より外に聞かなかつた。二人は美しい空を戴いて家に歸つた。
あくる日は豫想の如く好天氣である。今年は例年より氣候がずつと緩んでゐる。殊更今日は暖かい。三四郎は朝のうち湯に行つた。閑人の少ない世の中だから、午前は頗る空いてゐる。三四郎は板の間に懸けてある三越呉服店の看板を見た。綺麗な女が畫いてある。其女の顏が何處か美禰子に似てゐる。よく見ると目附が違つてゐる。齒並が分らない。美禰子の顏で尤も三四郎を驚かしたものは眼附と齒並である。與次郎の說によると、あの女は反つ齒の氣味だから、あゝ始終齒が出るんださうだが、三四郎には決してさうは思へない。……
三四郎は湯に漬つてこんな事を考へてゐたので、身體の方はあまり洗はずに出た。昨夕から急に新時代

の青年といふ自覺が強くなつたけれども、強い方は自覺丈で、身體の方は元の儘である。休みになると他のものよりずつと樂にしてゐる。今日は午から大學の陸上運動會を見に行く氣である。

三四郎は元來あまり運動好きではない。國に居るとき兎狩を二三度した事がある。それから高等學校の端艇競漕のときに旗振りの役を勤めた事がある。其時青と赤と間違へて振つて大變苦情が出た。尤も決勝の鐵砲を打つ掛りの教授が鐵砲を打ち損なつた。打つには打つたが音がしなかつた。これが三四郎の狼狽した原因である。それより以來三四郎は運動會へ近づかなかつた。然し今日は上京以來始めての競技會だから是非行つて見る積りである。與次郎も是非行つて見ろと云つた。與次郎の云ふ所によると競技より女の方が見に行く價値があるのださうだ。女のうちには野々宮さんの妹がゐるだらう。野々宮さんの妹と一所に美禰子もゐるだらう。其處へ行つて、今日はとか何とか挨拶をして見たい。

午過ぎになつたから出掛けた。會場の入口は運動場の南の隅にある。大きな日の丸と英吉利の國旗が交叉してある。日の丸は合點が行くが、英吉利の國旗は何の爲だか解らない。三四郎は日英同盟の所爲かとも考へた。けれども日英同盟と大學の陸上運動會とはどう云ふ關係があるか、頓と見當が附かなかつた。

運動場は長方形の芝生である。秋が深いので芝の色が大分褪めてゐる。競技を見る所は西側にある。後に大きな築山を一杯に控へて、前は運動場の柵で仕切られた中へ、みんなを追ひ込む仕掛になつてゐる。狹い割に見物人が多いので甚だ窮屈である。幸ひ日和が好いので寒くはない。然し外套を着てゐるものが

大分ある。其代り傘をさして來た女もある。

三四郎が失望したのは婦人席が別になつてゐて、普通の人間には近寄れない事であつた。それからフロツクコートや何か着た偉さうな男が澤山集まつて、自分が存外幅の利かない樣に見えた事であつた。新時代の青年を以て自ら居る三四郎は少し小さくなつてゐた。それでも人と人の間から婦人席の方を見渡す事は忘れなかつた。横からだから能く見えないが、此處は流石に綺麗である。悉く着飾つてゐる。其上遠距離だから顏がみんな美しい。その代り誰が目立つて美しいといふ事もない。只總體が總體として美しい。女が男を征服する色である。甲の女が乙の女に打ち勝つ色ではなかつた。そこで三四郎は又失望した。然し注意したら、何處かにゐるだらうと思つて、よく見渡すと、果して前列の一番柵に近い所に二人並んでゐた。

三四郎は目の着け所が漸く解つたので、先づ一段落告げた樣な氣で、安心してゐると、忽ち五六人の男が眼の前に飛んで出た。二百メートルの競走が濟んだのである。決勝點は美禰子とよし子が坐つてゐる眞正面で、しかも鼻の先だから、二人を見詰めてゐた三四郎の視線のうちには是非共是等の壯漢が這入つて來る。五六人はやがて十二三人に殖えた。みんな呼吸が逼まつてゐる樣に見える。三四郎は是等の學生の態度と自分の態度とを比べて見て、其相違に驚いた。どうして、あゝ無分別に走ける氣になれたものだらうと思つた。然し婦人連は悉く熱心に見てゐる。そのうちでも美禰子とよし子は尤も熱心らしい。三四郎

は自分も無分別に走けて見たくなつた。一番に到着したものが、紫の猿股を穿いて婦人席の方を向いて立つてゐる。よく見ると昨夜の親睦会で演説をした学生に似てゐる。あゝ背が高くては一番になる筈である。計測掛が黒板に二十五秒七四と書いた。書き終つて、余りの白墨を向ふへ投げて、此方を向いた所を見ると野々宮さんであつた。野々宮さんは何時になく真黒なフロツクを着て、胸に掛員の徽章を附けて、大分人品が宜い。半巾を出して、洋服の袖を二三度はたいたが、やがて黒板を離れて、芝生の上を横切つて来た。丁度美禰子とよし子の坐つてゐる真前の所へ出た。低い柵の向ふ側から首を婦人席の中へ延ばして、何か云つてゐる。美禰子は立つた。野々宮さんの所迄歩いて行く。柵の向ふと此方で話しを始めた様に見えた。美禰子は急に振り返つた。嬉しさうな笑に充ちた顔である。三四郎は遠くから一生懸命に二人を見守つてゐた。すると、よし子が立つた。又柵の傍へ寄つて行く。二人が三人になつた。芝生の中では砲丸抛げが始まつた。

砲丸抛げ程腕の力の要るものはなからう。力の要る割に是程面白くないものも沢山ない。たゞ文字通り砲丸を抛げるのである。芸でも何でもない。野々宮さんは柵の所で、一寸此様子を見て笑つてゐた。けれども見物の邪魔になると悪いと思つたのであらう。柵を離れて芝生の中へ引き取つた。二人の女も元の席へ復した。砲丸は時々抛げられてゐる。第一どの位遠く迄行くんだか、殆ど三四郎には分らない。三四郎は馬鹿〳〵しくなつた。それでも我慢して立つてゐた。漸くの事で片が附いたと見えて、野々宮さんは又黒

板へ十一メートル二八と書いた。

それから又競走があつて、長飛があつて、其次には槌投げが始まつた。三四郎は此槌投げに至つて、とうとう辛抱が仕切れなくなつた。運動會は各自勝手に開くべきものである。人に見せべきものではない。あんなものを熱心に見物する女は悉く間違つてゐると迄思ひ込んで、會場を抜け出して、裏の築山の所迄來た。幕が張つてあつて通れない。引き返して砂利の敷いてある所を少し來ると、會場から逃げた人がちらほら歩いてゐる。盛裝した婦人も見える。三四郎は又右へ折れて、爪先上りを丘の頂點迄來た。路は頂點で盡きてゐる。大きな石がある。三四郎は其上へ腰を掛けて、高い崖の下にある池を眺めた。下の運動會場でわあといふ多勢の聲がする。

三四郎はおよそ五分許り石へ腰を掛けた儘ぼんやりしてゐた。やがて又動く氣になつたので腰を上げて、立ちながら靴の踵を向け直すと、丘の上り際の、薄く色づいた紅葉の間に、先刻の女の影が見えた。並んで丘の裾を通る。

三四郎は上から、二人を見下ろしてゐた。二人は枝の隙から明らかな日向へ出て來た。黙つてゐると、前を通り抜けて仕舞ふ。三四郎は聲を掛けようかと考へた。距離があまり遠過ぎる。急いで二三歩芝の上を裾の方へ下りた。下り出すと好い具合に女の一人が此方を向いて呉れた。三四郎はそれで留まつた。實は此方からあまり御機嫌を取りたくない。運動會が少し癪に障つてゐる。

「あんな所に……」とよし子が云ひ出した。驚いて笑つてゐる。この女はどんな陳腐なものを見ても珍らしさうな眼附をする様に思はれる。其代り、如何な珍らしいものに出逢つても、やはり待ち受けてゐた様な眼附で迎へるかと想像される。だから此女に逢ふと重苦しい所が少しもなくつて、しかも落ち附いた感じが起る。三四郎は立つた儘、これは全く、この大きな、常に潤つてゐる、黒い眸の御蔭だと考へた。

美禰子も留まつた。三四郎を見た。然し其眼は此時に限つて何物をも訴へてゐなかつた。丸で高い木を眺める様な眼であつた。三四郎は心の裡で、火の消えた洋燈を見る心持がした。元の所に立ちすくんでゐる。美禰子も動かない。

「何故競技を御覧にならないの」とよし子が下から聞いた。

「今迄見てゐたんですが、詰らないから止めて来たのです」

よし子は美禰子を顧みた。美禰子はやはり顔色を動かさない。三四郎は、

「夫よりか、あなた方こそ何故出て来たんです。大變熱心に見てゐたぢやありませんか」と當た様な當てない様な事を大きな聲で云つた。美禰子は此時始めて、少し笑つた。三四郎には其笑ひの意味が能く分らない。二歩ばかり女の方に近附いた。

「もう宅へ帰るんですか」

女は二人とも答へなかつた。三四郎は又二歩ばかり女の方へ近附いた。

「何處かへ行くんですか」

「えゝ、一寸」と美禰子が小さな聲で云ふ。よく聞こえない。三四郎はとう／＼女の前迄下りて來た。しかし何處へ行くとも追窮もしないで立つてゐる。會場の方で喝采の聲が聞こえる。

「高飛よ」とよし子が云ふ。「今度は何メートルになつたでせう」

美禰子は輕く笑つた許りである。三四郎も默つてゐる。三四郎は高飛に口を出すのを潔しとしない積りである。すると美禰子が聞いた。

「此上には何か面白いものが有つて？」

此上には石があつて、崖がある許りである。面白いものがありよう筈がない。

「何もないです」

「さう」と疑ひを殘した樣に云つた。

「一寸上がつて見ませうか」とよし子が快く云ふ。

「あなた、まだ此處を御存じないの」と相手の女は落ち附いて出た。

「宜いから入らつしやいよ」

よし子は先へ上る。二人は又跟いて行つた。よし子は足を芝生の端迄出して、振り向きながら、「絶壁ね」と大袈裟な言葉を使つた。「サッフオーでも飛び込みさうな所ぢやありませんか」

美禰子と三四郎は聲を出して笑つた。其癖三四郎はサツフオーがどんな所から飛び込んだか能く知らなかつた。
「あなたも飛び込んで御覽なさい」と美禰子が云ふ。
「私？ 飛び込みませうか。でも餘り水が汚いわね」と云ひながら、此方へ歸つて來た。
やがて女二人の間に用談が始まつた。
「あなた、入らしつて」と美禰子がいふ。
「えゝ。あなたは」とよし子がいふ。
「何うしませう」
「どうでも。なんなら私一寸行つてくるから、此處に待つて入らつしやい」
「さうね」
中々片附かない。三四郎が聞いて見ると、よし子が病院の看護婦の所へ、序だから、一寸禮に行つてくるんだと云ふ。美禰子は此夏自分の親戚が入院してゐた時近附になつた看護婦を訪ねれば訪ねるのだが、是は必要でも何でもないのださうだ。
よし子は、素直に氣の輕い女だから、仕舞に、すぐ歸つて來ますと云ひ捨てて、早足に一人丘を下りて行つた。止める程の必要もなし、一所に行く程の事件でもないので、二人は自然後に遺る譯になつた。二

人の消極な態度から云へば、遣るといふより、遺されたかたちにもなる。

三四郎は又石に腰を掛けた。女は立つてゐる。秋の日は鏡の様に濁つた池の上に落ちた。中に小さな島がある。島にはたゞ二本の樹が生えてゐる。青い松と薄い紅葉が具合よく枝を交し合つて、箱庭の趣がある。島を越して向う側の突き當りが蓊欝とどす黒く光つてゐる。女は丘の上から其暗い木陰を指さした。

「あの木を知つて入らしつて」といふ。

「あれは椎」

女は笑ひ出した。

「能く覺えて入らつしやる事」

「あの時の看護婦ですか、あなたが今訪ねようと云つたのは」

「えゝ」

「よし子さんの看護婦とは違ふんですか」

「違ひます。是は椎――といつた看護婦です」

今度は三四郎が笑ひ出した。

「彼處ですね。あなたがあの看護婦と一所に團扇を持つて立つてゐたのは」

二人のゐる所は高く池の中に突き出してゐる。此丘とは丸で縁のない小山が一段低く、右側を走つてゐる

ら。大きな松と御殿の一角と、運動會の幕の一部と、なだらかな芝生が見える。

「熱い日でしたね。病院があんまり暑いものだから、とう／＼堪へ切れないで出て來たの。――あなたは又何であんな所に蹲踞んで入らしつたんです」

「熱いからです。あの日は始めて野々宮さんに逢つて、それから、彼處へ來てぼんやりして居たのです。何だか心細くなつて」

「野々宮さんに御逢ひになつてから、心細く御成りになつたの」

「いゝえ、左う云ふ譯ぢやないんです」と言ひ掛けて、美禰子の顏を見たが、急に話頭を轉じた。

「野々宮さんと云へば、今日は大變働いてゐますね」

「ええ、珍らしくフロツクコートを御着になつて――隨分御迷惑でせう。朝から晩迄ですから」

「だつて大分得意の樣ぢやありませんか」

「誰が。野々宮さんが。――あなたも隨分ね」

「何故ですか」

「だつて、眞逆運動會の計測掛になつて得意になる樣な方でもないでせう」

三四郎は又話頭を轉じた。

「先刻あなたの所へ來て何か話してゐましたね」

「會場で？」

「えゝ、運動場の柵の所で」と云つたが、三四郎は此間を急に撤回したくなつた。女は「えゝ」と云つた儘男の顔を凝と見てゐる。少し下唇を反らして笑ひ掛けてゐる。三四郎は堪らなくなつた。何か云つて紛らかさうとした時に、女は口を開いた。

「あなたは未だ此間の繪端書の返事を下さらないのね」

三四郎は迷附きながら「上げます」と答へた。女は呉れとも何とも云はない。

「あなた、原口さんといふ畫工を御存じ？」と聞き直した。

「知りません」

「さう」

「何うかしましたか」

「なに、その原口さんが、今日見に來て入らしつてね。みんなを寫生してゐるから、私達も用心しないと、ポンチに畫かれるからつて、野々宮さんがわざ〳〵注意して下すつたんです」

美禰子は傍へ來て腰を掛けた。三四郎は自分が如何にも愚物の様な氣がした。

「よし子さんは兄さんと一所に歸らないんですか」

「一所に歸らうつたつて歸れないわ。よし子さんは、昨日から私の家にゐるんですもの」

三四郎は其時始めて美禰子から野々宮の御母さんが國へ歸つたと云ふ事を聞いた。御母さんが歸ると同時に、大久保を引拂つて、野々宮さんは下宿をする、よし子は當分美禰子の宅から學校へ通ふ事に相談が極まつたんださうである。

三四郎は寧ろ野々宮さんの氣樂なのに驚いた。さう容易く下宿生活に戻る位なら、始めから家を持たない方が善からう。第一鍋、釜、手桶抔といふ世帶道具の始末はどう附けたらうと餘計な事迄考へたが、口に出して云ふ程の事でもないから、別段の批評は加へなかつた。其上、野々宮さんが一家の主人から、後戻りをして、再び純書生と同樣な生活狀態に復するのは、取りも直さず家族制度から一歩遠退いたと同じ事で、自分に取つては、目前の疑惑を少し長距離へ引き移した樣な好都合にもなる。其代りよし子が美禰子の家へ同居して仕舞つた。此兄妹は絕えず往來してゐないと治まらない樣に出來上がつてゐる。絕えず往來してゐるうちには野々宮さんと美禰子との關係も次第々々に移つて來る。すると野々宮さんが又いつ何時下宿生活を永久に已める時機が來ないとも限らない。

三四郎は頭の中に、かう云ふ疑ひある未來を描きながら、美禰子と應對をしてゐる。一向に氣が乘らない。それを外部の態度丈でも普通の如く繕はうとすると苦痛になつて來る。其處へ旨い具合によし子が歸つて來て吳れた。女同志の間には、もう一遍競技を見に行かうかと云ふ相談があつたが、短かくなりかけた秋の日が大分回つたのと、回るに連れて、廣い戶外の肌寒が漸く增してくるので、歸る事に話しが極まる。

三四郎も女連に別れて下宿へ戻らうと思つたが、三人が話しながら、ずる〱べつたりに歩き出したものだから、際立つた挨拶をする機會がない。二人は自分を引つ張つて行く樣に見える。自分も亦引張られて行きたい樣な氣がする。それで二人に食つ附いて池の端を圖書館の横から、方角違ひの赤門の方に向いて來た。其時三四郎は、よし子に向つて、

「御兄さんは下宿をなすつたさうですね」と聞いたら、よし子は、すぐ、

「えゝ。とう〱。他を美禰子さんの所へ押し附けて置いて。苛いでせう」と同意を求める樣に云つた。三四郎は何か返事をしようとした。其前に美禰子が口を開いた。

「宗八さんの樣な方は、我々の考へぢや分りませんよ。ずつと高い所に居て、大きな事を考へて入らつしやるんだから」と大いに野々宮さんを賞め出した。よし子は默つて聞いてゐる。

學問をする人が煩さい俗用を避けて、成るべく單純な生活に我慢するのは、みんな研究の爲已むを得ないんだから仕方がない。野々宮の樣な外國に迄聞こえる程の仕事をする人が、普通の學生同樣な下宿に這入つてゐるのも必竟野々宮が偉いからの事で、下宿が汚ければ汚い程尊敬しなくつてはならない。――美禰子の野々宮に對する讃辭のつゞきは、ざつと斯うである。

三四郎は赤門の所で二人に別れた。追分の方へ足を向けながら考へ出した。――成程美禰子の云つた通りである。自分と野々宮を比較して見ると大分段が違ふ。自分は田舍から出て大學へ這入つた許りである。

學問といふ學問もなければ、見識と云ふ見識もない。自分が、野々宮に對する程な尊敬を美禰子から受け得ないのは當然である。さう云へば何だか、あの女から馬鹿にされてゐる樣でもある。先刻、運動會はつまらないから、此處にゐると、丘の上で答へた時に、美禰子は眞面目な顔をして、此上には何か面白いものがありますかと聞いた。あの時は氣が附かなかつたが、今解釋して見ると、故意に自分を愚弄した言葉かも知れない。――三四郎は氣が附いて、今日迄美禰子の自分に對する態度や言語を一々繰り返して見ると、どれも是もみんな惡い意味が附けられる。三四郎は往來の眞中で眞赤になつて俯向いた。不圖、顔を上げると向うから、與次郎と昨夕の會で演說をした學生が竝んで來た。與次郎は首を竪に振つたぎり默つてゐる。學生は帽子を脫つて禮をしながら、

「昨夜は。何うですか。囚はれちや不可ませんよ」と笑つて行き過ぎた。

七

裏から回つて婆さんに聞くと、婆さんが小さな聲で、與次郎さんは昨日から御歸りなさらないと云ふ。三四郎は勝手口に立つて考へた。婆さんは氣を利かして、まあ御上りなさい。先生は書齋に御出でですからと云ひながら、手を休めずに、膳椀を洗つてゐる。今晩食が濟んだ許りの所らしい。

三四郎は茶の間を通り拔けて、廊下傳ひに書齋の入口迄來た。戸が開いてゐる。中から「おい」と人を

呼ぶ聲がする。三四郎は敷居のうちへ這入つた。先生は机に向つてゐる。机の上には何があるか分らない。高い脊が研究を隱してゐる。三四郎は入口に近く坐つて、

「御勉強ですか」と丁寧に聞いた。先生は顏丈後へ振り向けた。髭の影が不明瞭にもぢや〳〵してゐる。寫眞版で見た誰かの肖像に似てゐる。

「やあ、與次郎かと思つたら、君ですか、失敬した」と云つて、席を立つた。机の上には筆と紙がある。先生は何か書いてゐた。與次郎の話しに、うちの先生は時々何か書いてゐる。然し何を書いてゐるんだか、他の者が讀んでも些とも分らない。生きてゐるうちに、大著述にでも纏められれば結構だが、あれで死んで仕舞つちやあ、反古が積まる計りだ。實に詰らない。と嘆息してゐた事がある。三四郎は廣田の机の上を見て、すぐ與次郎の話しを思ひ出した。

「御邪魔なら歸ります。別段の用事でもありません」

「いや、歸つてもらふ程邪魔でもありません。此方の用事も別段の事でもないんだから。さう急に片附ける性質のものを遣つてゐるんぢやない」

三四郎は一寸挨拶が出來なかつた。然し腹のうちでは、此人の樣な氣分になれたら、勉強も樂に出來て好からうと思つた。しばらくしてから、斯う云つた。

「實は佐々木君の所へ來たんですが、居なかつたものですから……」

「あゝ、與次郎は何でも昨夜から歸らない樣だ。時々漂泊して困る」
「何か急に用事でも出來たんですか」
「用事は決して出來る男ぢやない。たゞ用事を拵へる男でね。あゝ云ふ馬鹿は少ない」
三四郎は仕方がないから、
「中々氣樂ですな」と云つた。
「氣樂なら好いけれども。與次郎のは氣樂なのぢやない。氣が移るので――例へば田の中を流れてゐる小川の樣なものと思つてゐれば間違ひはない。淺くて狹い。しかし水丈は始終變つてゐる。だから、する事が、ちつとも締りがない。縁日へひやかしになど行くと、急に思ひ出した樣に、先生松を一鉢御買ひなさいなんて妙な事を云ふ。さうして買ふとも何とも云はないうちに値切つて買つて仕舞ふ。其代り縁日ものを買ふ事なんぞは上手でね。あいつに買はせると大變安く買へる。さうかと思ふと、夏になつてみんなが家を留守にするときなんか、松を座敷へ入れたまんま雨戸を閉てゝ錠を卸ろして仕舞ふ。歸つて見ると、松が溫氣で蒸れて眞赤になつてゐる。萬事さう云ふ風で洵に困る」
實を云ふと三四郎は此間與次郎に二十圓借した。二週間後には文藝時評社から原稿料が取れる筈だから、それ迄立替へてくれろと云ふ。事理を聞いて見ると、氣の毒であつたから、國から送つて來た許りの爲替を五圓引いて、餘りは悉く貸して仕舞つた。まだ返す期限ではないが、廣田の話しを聞いて見ると少々心

配になる。しかし先生にそんな事は打ち明けられないから、反對に、

「でも佐々木君は、大いに先生に敬服して、蔭では先生の爲に中々盡力してゐます」と云ふと、先生は眞面目になつて、

「どんな盡力をしてゐるんですか」と聞き出した。所が「偉大なる暗闇」其他凡て廣田先生に關する與次郎の所爲は、先生に話してはならないと、當人から封じられてゐる。やり掛けた途中でそんな事が知れると先生に叱られるに極まつてゐるから默つて居るべきだといふ。話して可い時には己が話すと明言してゐるんだから仕方がない。三四郎は話しを外らして仕舞つた。

三四郎が廣田の家へ來るには色々な意味がある。一つは、此人の生活其他が普通のものと變つてゐる。ことに自分の性情とは全く容れない樣な所がある。そこで三四郎は何うしたらあゝなるだらうと云ふ好奇心から參考の爲研究に來る。次に此人の前に出ると呑氣になる。世の中の競爭が餘り苦にならない。野々宮さんも廣田先生と同じく世外の趣はあるが、世外の功名心の爲に、流俗の嗜慾を遠ざけてゐるかの樣に思はれる。だから野々宮さんを相手に二人限りで話してゐると、自分も早く一人前の仕事をして、學問に貢獻しなくては濟まない樣な氣が起る。焦慮いて堪らない。そこへ行くと廣田先生は太平である。先生は高等學校でたゞ語學を教へる丈で、外に何の藝もない、——と云つては失禮だが、外に何等の研究も公にしない。しかも泰然と取り澄ましてゐる。其處に、此暢氣の源は伏在してゐるのだらうと思ふ。三四郎は近

頃女に囚はれた。恋人に囚はれたのなら、却て面白いが、惚れられてるんだか、馬鹿にされてるんだか、怖がつて可いんだか、蔑んで可いんだか、廃すべきだか、続けべきだか訳の分らない囚はれ方である。三四郎は忌々しくなつた。さう云ふ時は廣田さんに限る。三十分程先生と相對してゐると心持が悠揚になる。女の一人や二人どうなつても構はないと思ふ。實を云ふと、三四郎が今夜出掛けて来たのは七分方此意味である。

訪問理由の第三は大分矛盾してゐる。自分は美禰子に苦しんでゐる。美禰子の傍に野々宮さんを置くと猶苦しんで来る。其野々宮さんに尤も近いものは此先生である。だから此先生の所へ来ると、野々宮さんと美禰子との關係が自ら明瞭になつて来るだらうと思ふ。これが明瞭になりさへすれば、自分の態度も判然極める事が出来る。其癖二人の事を未だ嘗て先生に聞いた事がない。今夜は一つ聞いて見ようかしらと、心を動かした。

「野々宮さんは下宿なすつたさうですね」

「えゝ、下宿したさうです」

「家を持つたものが、又下宿をしたら不便だらうと思ひますが、野々宮さんは能く……」

「えゝ、そんな事には一向無頓着な方でね。あの服装を見ても分る。家庭的な人ぢやない。其代り學問にかけると非常に神經質だ」

「當分あゝ遣つて御出での積りなんでせうか」
「分らない。又突然家を持つかも知れない」
「奥さんでも御貰ひになる御考へはないんでせうか」
「あるかも知れない。佳いのを周旋して遣り玉へ」
三四郎は苦笑ひをした。餘計な事を云つたと思つた。すると廣田さんが、
「君はどうです」と聞いた。
「私は……」
「まだ早いですね。今から細君を持つちやあ大變だ」
「國のものは勸めますが」
「國の誰が」
「母です」
「御母さんの云ふ通り持つ氣になりますか」
「中々なりません」
廣田さんは髭の下から齒を出して笑つた。割合に綺麗な齒を持つてゐる。三四郎は其時急になつかしい心持がした。けれども其なつかしさは美禰子を離れてゐる。野々宮を離れてゐる。三四郎の眼前の利害に

は超絶したなつかしさであつた。三四郎は是で、野々宮君の事を聞くのが恥づかしい氣がし出した、質問を已めて仕舞つた。すると廣田先生が又話し出した。

「御母さんの云ふ事は成るべく聞いて上げるが可い。近頃の青年は我々時代の青年と違つて自我の意識が強過ぎて不可ない。吾々の書生をして居る頃には、する事爲す事一として他を離れた事はなかつた。凡てが、君とか、親とか、國とか、社會とか、みんな他本位であつた。それを一口にいふと教育を受けるものが悉く僞善家であつた。其僞善が社會の變化で、とう／＼張り通せなくなつた結果、漸々自己本位を思想行爲の上に輸入すると、今度は我意識が非常に發展し過ぎて仕舞つた。昔の僞善家に對して、今は露惡家計りの狀態にある。――君、露惡家といふ言葉を聞いた事がありますか」

「いゝえ」

「今僕が卽席に作つた言葉だ。君も其露惡家の一人――だかどうだか、まあ多分さうだらう。與次郎の如きに至ると其最たるものだ。あの君の知つてる里見といふ女があるでせう。あれも一種の露惡家で、それから野々宮の妹ね。あれは又、あれなりに露惡家だから面白い。昔は殿樣と親父丈が露惡家で濟んでゐたが、今日では各自同等の權利で露惡家になりたがる。尤も惡い事でも何でもない。臭いものゝ蓋を除れば肥桶で、美事な形式を剝ぐと大抵は露惡になるのは知れ切つてゐる。形式丈美事だつて面倒な計りだから、みんな節約して木地丈で用を足してゐる。甚だ痛快である。天醜爛漫としてゐる。所が此爛漫が度を

越すと、露悪家同志が御互に不便を感じて來る。其不便が段々高じて極端に達した時利他主義が又復活する。それが又形式に流れて腐敗すると又利己主義に歸參する。つまり際限はない。我々はさう云ふ風にして暮らして行くものと思へば差支へない。さうして行くうちに進歩する。英國を見給へ。此兩主義が昔からうまく平衡が取れてゐる。だから動かない。だから進歩しない。イブセンも出なければニイチエも出ない。氣の毒なものだ。自分丈は得意の樣だが、傍から見れば堅くなつて、化石しかゝつてゐる。……」

三四郎は内心感心した樣なものゝ、話しが外れて飛んだ所へ曲がつて、曲がりなりに太くなつて行くので、少し驚いてゐた。すると廣田さんも漸く氣が附いた。

「一體何を話してゐたのかな」

「結婚の事です」

「結婚？」

「えゝ、私が母のいふ事を聞いて……」

「うん、左う〳〵。なるべく御母さんの言ふ事を聞かなければ不可ない」と云つてにこ〳〵してゐる。丸で子供に對する樣である。三四郎は別に腹も立たなかつた。

「我々が露悪家なのは、可いですが、先生時代の人が偽善家なのは、どういふ意味ですか」

「君、人から親切にされて愉快ですか」

「えゝ、まあ愉快です」
「乾度。僕はさうでない、大變親切にされて不愉快な事がある」
「どんな場合ですか」
「形式丈は親切に適つてゐる。然し親切自身が目的でない場合」
「そんな場合があるでせうか」
「君、元日に御目出度うと云はれて、實際御目出たい氣がしますか」
「そりや……」
「しないだらう。それと同じく腹を抱へて笑ふだの、轉げかへつて笑ふだのと云ふ奴に、一人だつて實際笑つてる奴はない。親切も其通りで。御役目に親切をして吳れるのがある。僕が學校で教師をしてゐる樣なものでね。實際の目的は衣食にあるんだから、生徒から見たら定めて不愉快だらう。之に反して與次郞の如きは露惡黨の領袖だけに、度々僕に迷惑を掛けて、始末に了へぬいたづらものだが、惡氣がない。可愛らしい所がある。丁度亞米利加人の金錢に對して露骨なのと一般だ。それ自身が目的である。それ自身が目的である行爲程正直なものはなくつて、正直程厭味のないものは無いんだから、萬事正直に出られない樣な我々時代の小六づかしい教育を受けたものはみんな氣障だ」
此處迄の理窟は三四郞にも分つてゐる。けれども三四郞に取つて、目下痛切な問題は、大體にわたつて

の理窟ではない。實際に交渉のある或格段な相手が、正直か正直でないかを知りたいのである。三四郎は腹の中で美禰子の自分に對する素振をもう一遍考へて見た。所が氣障か氣障でないか殆ど判斷が出來ない。三四郎は自分の感受性が人一倍鈍いのではなからうかと疑ひ出した。

其時廣田さんは急にうんと云つて、何か思ひ出した樣である。

「うん、まだある。此二十世紀になつてから妙なのが流行る。利他本位の内容を利己本位で充たすと云ふ六づかしい遣り口なんだが、君そんな人に出逢つたですか」

「何んなのです」

「外の言葉で云ふと、僞善を行ふに露惡を以てする。まだ分らないだらうな。ちと説明し方が惡い樣だ。――昔の僞善家はね、何でも人に善く思はれたいが先に立つんでせう。所が其反對で、人の感觸を害する爲に、わざ〳〵僞善をやる。横から見ても縱から見ても、相手には僞善としか思はれない樣に仕向けて行く。相手は無論厭な心持がする。そこで本人の目的は達せられる。僞善を僞善其儘で先方に通用させようとする正直な所が露惡家の特色で、しかも表面上の行爲言語は飽く迄も善に違ひないから、――そら、二位一體といふ樣な事になる。此方法を巧妙に用ひるものが近來大分殖えて來た樣だ。極めて神經の鋭敏になつた文明人種が、最も優美に露惡家にならうとすると、これが一番好い方法になる。血を出さなければ人が殺せないといふのは隨分野蠻な話しだからな君、段々流行らなくなる

廣田先生の話し方は、丁度案内者が古戰場を說明する樣なもので、實際を遠くから眺めた地位に自らを置いてゐる。それで頗る樂天の趣がある。恰も敎場で講義を聞くと一般の感を起させる。然し三四郎には應へた。念頭に美禰子といふ女があつて、此理論をすぐ適用出來るからである。三四郎は頭の中に此標準を置いて、美禰子の凡てを測つて見た。然し測り切れない所が大變ある。先生は口を閉ぢて、例の如く鼻から哲學の烟を吐き始めた。

所へ玄關に足音がした。案內も乞はずに廊下傳ひに這入つて來る。忽ち與次郞が書齋の入口に坐つて、「原口さんが御出でになりました」と云ふ。只今歸りましたといふ挨拶を省いてゐる。わざと省いたのかも知れない。三四郞には存在な目禮をした許りですぐに出て行つた。

與次郞と敷居際で擦れ違つて、原口さんが這入つて來た。原口さんは佛蘭西式の髭を生やして、頭を五分刈にした、脂肪の多い男である。野々宮さんより年が二つ三つ上に見える。廣田先生よりずつと綺麗な和服を着てゐる。

「やあ、暫く。今迄佐々木が宅へ來てゐてね、一所に飯を食つたり何かして――それから、とう〳〵引つ張り出されて……」と大分樂天的な口調である。傍にゐると自然陽氣になる樣な聲を出す。三四郞は原口と云ふ名前を聞いた時から、大方あの畫工だらうと思つてゐた。夫にしても與次郞は交際家だ。大抵な先輩とはみんな知合になつてゐるから豪いと感心して硬くなつた。三四郞は年長者の前へ出ると硬くなる。

九州流の教育を受けた結果だと自分では解釋してゐる。

やがて主人が原口に紹介して呉れる。三四郎は丁寧に頭を下げた。向うは輕く會釋した。三四郎はそれから默つて二人の談話を承はつてゐた。

原口さんは先づ用談から片附けると云つて、近いうちに會をするから出て呉れと頼んでゐる。會員と名のつく程の立派なものは拵へない積りだが、通知を出すものは、文學者とか藝術家とか、大學の教授とか、僅かな人數に限つて置くから差支へはない。しかも大抵知合の間だから、形式は全く不必要である。目的はたゞ大勢寄つて晩餐を食ふ。それから文藝上有益な談話を交換する。そんなものである。

廣田先生は一口「出よう」と云つた。用事は夫で濟んで仕舞つた。用事は夫で濟んで仕舞つたが、それから後の原口さんと廣田先生の會話が頗る面白かつた。

廣田先生が「君近頃何をしてゐるかね」と原口さんに聞くと、原口さんがこんな事を云ふ。

「矢つ張り一中節を稽古してゐる。もう五つ程上げた。花紅葉吉原八景だの、小稻半兵衛唐崎心中だのつて中々面白いのがあるよ。君も少し遣つて見ないか。尤もありや、餘り大きな聲を出しちや不可ないんだつてね。本來が四疊半の座敷に限つたものださうだ。所が僕が此通り大きな聲だらう。それに節廻しがあれで中々込み入つてゐるんで、何うしても旨く不可ん。今度一つ遣るから聞いて呉れ玉へ」

廣田先生は笑つてゐた。すると原口さんは續きをかう云ふ風に述べた。

「それでも僕はまだ可いんだが、里見恭助と來たら、丸で片無しだからね。どう云ふものか知らん。妹はあんなに器用だのに。此間はとう／＼降參して、もう唄は止める、其代り何か樂器を習はうと云ひ出した所が、馬鹿囃を御習ひなさらないかと勸めたものが有つてね。大笑ひさ」

「そりや本當かい」

「本當とも。現に里見が僕に、君が遣るなら遣つても好いと云つた位だもの。あれで馬鹿囃には八通り囃しかたがあるんださうだ」

「君、遣つちや何うだ。あれなら普通の人間にでも出來さうだ」

「いや馬鹿囃は厭だ。それよりか鼓が打つて見たくつてね。何故だか鼓の音を聞いてゐると、全く二十世紀の氣がしなくなるから可い。どうして今の世にあゝ間が拔けてゐられるだらうと思ふと、それ丈で大變な藥になる。いくら僕が暢氣でも、鼓の音の樣な畫はとても描けないから」

「描かうともしないんぢやないか」

「描けないんだもの。今の東京にゐるものに悠揚な畫が出來るものか。尤も畫にも限るまいけれども。――畫と云へば、此間大學の運動會へ行つて、里見と野々宮さんの妹のカリカチユアーを描いて遣らうと思つたら、とう／＼逃げられて仕舞つた。こんだ一つ本當の肖像畫を描いて展覽會にでも出さうかと思つて」

「誰の」

「里見の妹の。どうも普通の日本の女の顔は歌麿式や何かばかりで、西洋の畫布には移りが悪くつて不可ないが、あの女や野々宮さんは可い。兩方共に畫になる。あの女が團扇を翳して、木立を後に、明るい方を向いてる所を等身に寫して見ようかしらと思つてる。西洋の扇は厭味で不可ないが、日本の團扇は新しくつて面白いだらう。兎に角早くしないと駄目だ。今に嫁にでも行かれようものなら、さう此方の自由に行かなくなるかも知れないから」

三四郎は多大な興味を以て原口の話しを聞いてゐた。ことに美禰子が團扇を翳してゐる構圖は非常な感動を三四郎に與へた。不思議の因縁が二人の間に存在してゐるのではないかと思ふ程であつた。すると廣田先生が、「そんな圖はさう面白い事もないぢやないか」と無遠慮な事を云ひ出した。

「でも當人の希望なんだもの。團扇を翳してゐる所は、どうでせうと云ふから、頗る妙でせうと云つて承知したのさ。何わるい圖どりではないよ。描き樣にも因るが」

「あんまり美しく描くと、結婚の申込が多くなつて困るぜ」

「ハヽヽぢや中位に描いて置かう。結婚と云へば、あの女も、もう嫁に行く時期だね。どうだらう、何處か好い口はないだらうか。里見にも頼まれてゐるんだが」

「君貰つちや何うだ」

「僕か。僕で可ければ貰ふが、どうもあの女には信用がなくつてね」
「何故」
「原口さんは洋行する時には大變な氣込で、わざ／＼鰹節を買ひ込んで、是で巴理の下宿に籠城するなんて大威張りだつたが、巴理へ着くや否や、忽ち豹變したさうですねつて笑ふんだから始末がわるい。大方兄からでも聞いたんだらう」
「あの女は自分の行きたい所でなくつちや行きつこない。勸めたつて駄目だ。好きな人がある迄獨身で置くがいゝ」
「全く西洋流だね。尤もこれからの女はみんな左うなるんだから、それも可からう」
夫から二人の間に長い繪畫談があつた。三四郎は廣田先生の西洋の畫工の名を澤山知つてゐるのに驚いた。歸るとき勝手口で下駄を探してゐると、先生が階子段の下へ來て「おい佐々木一寸降りて來い」と云つてゐた。
戸外は寒い。空は高く晴れて、何處から露が降るかと思ふ位である。手が着物に觸ると、觸つた所だけが冷りとする。人通りの少ない小路を二三度折れたり曲がつたりして行くうちに、突然辻占屋に逢つた。大きな丸い提灯を點けて、腰から下を眞赤にしてゐる。三四郎は辻占が買つて見たくなつた。然し敢て買はなかつた。杉垣に羽織の肩が觸る程に、赤い提灯を避けて通した。しばらくして、暗い所を斜に拔ける

と、追分の通へ出た。角に蕎麥屋がある。三四郎は今度は思ひ切つて暖簾を潜つた。少し酒を飲む爲である。

高等學校の生徒が三人ゐる。近頃學校の先生が午の辨當に蕎麥を食ふものが多くなつたと話してゐる。蕎麥屋の擔夫が午砲が鳴ると、蒸籠や種ものを山の様に肩へ載せて、急いで校門を這入つてくる。此處の蕎麥屋はあれで大分儲かるだらうと話してゐる。何とかいふ先生は夏でも釜揚饂飩を食ふが、どう云ふものだらうと云つてゐる。大方胃が悪いんだらうと云つてゐる。其外色々の事を云つてゐる。教師の名は大抵呼び棄てにする。中に一人廣田さんと云つたものがある。それから何故廣田さんは獨身であるかといふ議論を始めた。廣田さんの所へ行くと女の裸體畫が懸けてあるから、女が嫌ひなんぢやなからうと云ふ説である。尤も其裸體畫は西洋人だから當てにならない。日本の女は嫌ひかも知れないといふ説である。いや失戀の結果に違ひないと云ふ説も出た。失戀してあんな變人になつたのかと質問したものもあつた。然し若い美人が出入するといふ噂があるが本當かと聞き糺したものもあつた。

段々聞いてゐるうちに、要するに廣田先生は偉い人だといふ事になつた。何故偉いか三四郎には能く解らないが、兎に角此三人は三人ながら與次郎の書いた「偉大なる暗闇」を讀んでゐる。現にあれを讀んでから、急に廣田さんが好きになつたと云つてゐる。時々は「偉大なる暗闇」のなかにある警句を引用して來る。さうして盛に與次郎の文章を賞めてゐる。零餘子とは誰だらうと不思議がつてゐる。何しろ餘程

よく廣田さんを知つてゐる男に相違ないといふ事には三人共同意した。

三四郎は傍に居て成程と感心した。與次郎が「偉大なる暗闇」を書く筈である。文藝時評の賣れ高の少ないのは當人の自白した通りであるのに、麗々しく彼の所謂大論文を掲げて得意がるのは、虚榮心の滿足以外に何の爲になるだらうと疑つてゐたが、是で見ると活版の勢力は矢張り大したものである。與次郎の主張する通り、一言でも半句でも云はない方が損になる。人の評判はこんな所から揚がり、又こんな所から落ちると思ふと、筆を執るものの責任が恐ろしくなつて、三四郎は蕎麥屋を出た。

下宿へ歸ると、酒はもう醒めて仕舞つた。何だか詰らなくつて不可ない。机の前に坐つて、ぼんやりしてゐると、下女が下から湯沸しに熱い湯を入れて持つて來た序に、封書を一通置いて行つた。又母の手紙である。三四郎はすぐ封を切つた。今日は母の手蹟を見るのが甚だ嬉しい。

手紙は可なり長いものであつたが、別段の事も書いてない。ことに三輪田のお光さんについては一口も述べてないので大いに難有かつた。けれども中に妙な助言がある。

御前は子供の時から度胸がなくつて不可ない。度胸の惡いのは大變な損で、試驗の時なぞにはどの位困るか知れない。興津の高さんは、あんなに學問が出來て、中學校の先生をしてゐるが、檢定試驗を受けるたびに、身體が顫へて、うまく答案が出來ないんで、氣の毒な事に未だに月給が上がらずにゐる。友達の醫學士とかに頼んで顫への留まる丸藥を拵へて貰つて、試驗前に飲んで出たが矢つ張り顫へたさうである。

御前のはぶる〳〵顫へる程でもない樣だから、平生から治藥に度胸の据わる藥を東京の醫者に拵へて貰つて飮んで見ろ。癒らない事もなからうと云ふのである。

三四郎は馬鹿々々しいと思つた。けれども馬鹿々々しいうちに大いなる慰藉を見出だした。母は本當に親切なものであると、つく〴〵感心した。其晩一時頃迄かゝつて長い返事を母に遣つた。其中には東京はあまり面白い所ではないと云ふ一句があつた。

八

三四郎が與次郎に金を貸した顚末は、斯うである。

此間の晩九時頃になつて、與次郎が雨の中を突然遣つて來て、冒頭から大いに弱つたと云ふ。見ると、例になく顏の色が惡い。始めは秋雨に濡れた冷たい空氣に吹かれ過ぎたからの事と思つてゐたが、座に就いて見ると、惡いのは顏色ばかりではない。珍らしく銷沈してゐる。三四郎が「具合でも好くないのか」と尋ねると、與次郎は鹿の樣な眼を二度程ぱちつかせて、かう答へた。

「實は金を失くなしてね。困つちまつた」

そこで、一寸心配さうな顏をして、煙草の烟を二三本鼻から吐いた。三四郎は默つて待つてゐる譯にも行かない。どう云ふ種類の金を、どこで失くなしたのかと段々聞いて見ると、すぐ解つた。與次郎は煙草

の烟の、二三本鼻から出切る間丈控へてゐたばかりで、その後は、一部始終を譯もなくすら〳〵と話して仕舞つた。

與次郎の失くした金は、額で二十圓、但し人のものである。去年廣田先生が此前の家を借りる時分に、三ヶ月の敷金に窮して、足りない所を一時野々宮さんから用達つて貰つた事がある。然るに其金は野々宮さんが、妹にヴイオリンを買つて遣らなくてはならないとかで、わざ〳〵國元の親父さんから送らせたものださうだ。それだから今日が今日必要といふ程でない代りに、延びれば延びる程よし子が困る。よし子は現に今でもヴイオリンを買はずに濟ましてゐる。廣田先生が返さないからである。先生だつて返せればとうに返すんだらうが、月々餘裕が一文も出ない上に、月給以外に決して稼がない男だから、つい夫なりにしてあつた。所が此夏高等學校の受驗生の答案調べを引き受けた時の手當が六十圓此頃になつて漸く受け取れた。それで漸く義理を濟ます事になつて、與次郎が其使を云ひ付かつた。

「その金を失くなしたんだから濟まない」と與次郎が云つてゐる。實際濟まない樣な顏付でもある。何處へ落としたんだと聞くと、なに落としたんぢやない。馬券を何枚とか買つて、みんな無くなして仕舞つたのだと云ふ。三四郎も是には呆れ返つた。あまり無分別の度を通り越してゐるので意見をする氣にもならない。其上本人が悄然としてゐる。是を平常の活潑潑地と比べると與次郎なるものが二人居るとしか思はれない。其對照が烈し過ぎる。だから可笑しいのと氣の毒なのとが一所になつて三四郎を襲つて來た。

三四郎は笑ひ出した。すると與次郎も笑ひ出した。
「まあ可いや、どうかなるだらう」と云ふ。
「先生はまだ知らないのか」と聞くと、
「まだ知らない」
「野々宮さんは―
「無論、まだ知らない」
「金は何時受取つたのか」
「金は此月始まりだから、今日で丁度二週間程になる」
「馬券を買つたのは」
「受取つた明くる日だ」
「夫から今日迄其儘にして置いたのか」
「色々奔走したが出来ないんだから仕方がない。已むを得なければ今月末迄此儘にして置かう」
「今月末になれば出来る見込でもあるのか」
「文藝時評社から、どうかなるだらう」
三四郎は立つて、机の抽出を開けた。昨日母から来たばかりの手紙の中を覗いて、

「金は此處にある。今月は國から早く送つて來た」と云つた。與次郎は、
「難有い。親愛なる小川君」と急に元氣の好い聲で落語家の樣な事を云つた。
二人は十時過ぎ暇を潰して、追分の通へ出て、角の蕎麥屋へ這入つた。三四郎が蕎麥屋で酒を飲む事を覺えたのは此時である。其晩は二人共愉快に飲んだ。勘定は與次郎が拂つた。與次郎は中々人に拂はせない男である。
夫から今日に至る迄與次郎は金を返さない。三四郎は正直だから下宿屋の拂ひを氣にしてゐる。催促はしないけれども、どうかして呉れゝば可いがと思つて、日を過ごすうちに晦日近くなつた。もう一日二日しか餘つてゐない。間違つたら下宿の勘定を延ばして置かう抔といふ考へは未だ三四郎の頭に上らない。必ず與次郎が持つて來て呉れる――と迄は無論彼を信用してゐないのだが、まあどうか工面して見よう位の親切氣はあるだらうと考へてゐる。廣田先生の評によると與次郎の頭は淺瀨の水の樣に始終移つてゐるのださうだが、無暗に移る許りで責任を忘れる樣では困る。まさかそれ程の事もあるまい。
三四郎は二階の窓から往來を眺めてゐた。すると向うから與次郎が足早にやつて來た。窓の下迄來て仰向いて、三四郎の顏を見上げて、「おい、居るか」と云ふ。三四郎は上から、與次郎を見下ろして、「うん、居る」と云ふ。此馬鹿見た樣な挨拶が上下で一句交換されると、三四郎は部屋の中へ首を引込める。與次郎は梯子段をとん〳〵上がつて來た。

「待つてゐやしないか。君の事だから下宿の勘定を心配してゐるだらうと思つて、大分奔走した。馬鹿氣てゐる」
「文藝時評から原稿料を呉れたか」
「原稿料つて、原稿料はみんな取つて仕舞つた」
「だつて此間は月末に取る樣に云つてゐたぢやないか」
「さうかな、夫は聞き違ひだらう。もう一文も取るのはない」
「可笑しいな。だつて君は慥かに左う云つたぜ」
「なに、前借りをしようと云つたのだ。所が中々貸さない。僕に貸すと返さないと思つてゐる。怪しからん。僅か二十圓許りの金だのに。いくら偉大なる暗闇を書いて遣つても信用しない。詰らない。厭になつちまつた」
「ぢや金は出來ないのか」
「いや外で拵へたよ。君が困るだらうと思つて」
「さうか。それは氣の毒だ」
「所が困つた事が出來た。金は此處にはない。君が取りに行かなくつちや」
「何處へ」

「實は文藝時評が可けないから、原口だの何だの二三軒歩いたが、何處も月末で都合がつかない。それから最後に里見の所へ行つて――里見といふのは知らないかね。里見恭助。法學士だ。美禰子さんの兄さんだ。あすこへ行つた所が、今度は留守で矢つ張り要領を得ない。其うち腹が減つて歩くのが面倒になつたから、とう／＼美禰子さんに逢つて話しをした」

「野々宮さんの妹が居やしないか」

「なに午少し過ぎだから學校に行つてる時分だ。それに應接間だから居たつて構やしない」

「さうか」

「それで美禰子さんが、引き受けてくれて、御用立て申しますと云ふんだがね」

「あの女は自分の金があるのかい」

「そりや、何うだか知らない。然し兎に角大丈夫だよ。引き受けたんだから。ありや妙な女で、年の行かない癖に姉さんじみた事をするのが好きな性質なんだから、引き受けさへすれば、安心だ。心配しないでも可い。宜しく願つて置けば構はない。所が一番仕舞になつて、御金は此處にありますが、あなたには渡せませんと云ふんだから、驚いたね。僕はそんなに不信用なんですかと聞くと、えゝと云つて笑つてゐる。厭になつちまつた。ぢや小川を遣しますかなと又聞いたら、え、小川さんに御手渡し致しませうと云はれた。どうでも勝手にするが可い。君取りに行けるかい」

「取りに行かなければ、國へ電報でも掛けるんだな」

「電報はよさう。馬鹿氣てゐる。いくら君だつて借りに行けるだらう」

「行ける」

是で漸く二十圓の埒が明いた。それが濟むと、與次郎はすぐ廣田先生に關する事件の報告を始めた。

運動は着々歩を進めつゝある。暇さへあれば下宿へ出掛けて行つて、一人々々に相談する。相談は一人一人に限る。大勢寄ると、各自が自分の存在を主張しようとして、動ともすれば異を樹てる。それでなければ、自分の存在を閑却された心持になつて、初手から冷淡に構へる。相談はどうしても一人々々に限る。其代り暇は要る。金も要る。それを苦にしてゐては運動は出來ない。それから相談中には廣田先生の名前を餘り出さない事にする。我々の爲の相談でなくつて、廣田先生の爲の相談だと思はれると、事が纏まらなくなる。

與次郎は此方法で運動の歩を進めてゐるのださうだ。それで今日迄の所は旨く行つた。西洋人許りでは不可ないから、是非共日本人を入れて貰はうといふ所迄話しは來た。是から先はもう一返寄つて、委員を選んで、學長なり、總長なりに、我々の希望を述べに遣る許りである。尤も會合丈はほんの形式だから略しても可い。委員になるべき學生も大體は知れてゐる。みんな廣田先生に同情を持つてゐる連中だから、談判の模樣によつては、此方から先生の名を當局者へ持ち出すかも知れない。……

聞いてゐると、與次郎一人で天下が自由になる樣に思はれる。三四郎は尠からず與次郎の手腕に感服した。與次郎は又此間の晩、原口さんを先生の所へ連れて來た事に就いて、辯じ出した。

「あの晩、原口さんが、先生に文藝家の會をやるから出ろと、勸めてゐたらう」と云ふ。三四郎は無論覺えてゐる。與次郎の話しによると、實はあれも自身の發起に係るものださうだ。其理由に色々あるが、まづ第一に手近な所を云へば、あの會員のうちには、大學の文科で有力な教授がゐる。其男と廣田先生を接觸させるのは、此際先生に取つて、大變な便利である。先生は變人だから、求めて誰とも交際しない。然し此方で相當の機會を作つて、接觸させれば、變人なりに附合つて行く。……

「左う云ふ意味があるのか、些とも知らなかつた。それで君が發起人だと云ふんだが、會をやる時、君の名前で通知を出して、さう云ふ偉い人達がみんな寄つて來るのかな」

與次郎は、しばらく眞面目に、三四郎を見てゐたが、やがて苦笑ひをして傍を向いた。

「馬鹿云つちや不可ない。發起人つて、表向きの發起人ぢやない。たゞ僕がさう云ふ會を企てたのだ。つまり僕が原口さんを勸めて、萬事原口さんが周旋する樣に拵へたのだ」

「さうか」

「さうかは田臭だね。時に君もあの會へ出るが可い。もう近いうちに有る筈だから」

「そんな偉い人ばかり出る所へ行つたつて仕方がない。僕は廢さう」

「又田臭を放つた。偉い人も偉くない人も社會へ頭を出した順序が違ふ丈だ。なにあんな連中、博士とか學士とか云つたつて、會つて話して見ると何でもないものだよ。第一向うがさう偉いとも何とも思つてやしない。是非出て置くが可い。君の將來の爲だから」

「何處であるのか」

「多分上野の精養軒になるだらう」

「僕はあんな所へ這入つた事がない。高い會費を取るんだらう」

「まあ二圓位だらう。なに會費なんか、心配しなくつても可い。無ければ僕が出して置くから」

三四郎は忽ちさきの二十圓の件を思ひ出した。けれども不思議に可笑しくならなかつた。與次郎は其上銀座の何處とかへ天麩羅を食ひに行かうと云ひ出した。金はあると云ふ。不思議な男である。云ひなり次第になる三四郎も是は斷つた。其代り一所に散歩に出た。歸りに岡野へ寄つて、與次郎は栗饅頭を澤山買つた。これを先生に土産に持つて行くんだと云つて、袋を抱へて歸つていつた。

三四郎は其晩與次郎の性格を考へた。永く東京に居るとあんなになるものかと思つた。それから里見へ金を借りに行く事を考へた。美禰子の所へ行く用事が出來たのは嬉しい樣な氣がする。然し頭を下げて金を借りるのは難有くない。三四郎は生れてから今日に至る迄、人に金を借りた經驗のない男である。其上貸すと云ふ當人が娘である。獨立した人間ではない。たとひ金が自由になるとしても、兄の許諾を得ない

內證の金を借りたとなると、借りる自分は兎に角、あとで、貸した人の迷惑になるかも知れない。或はあの女の事だから、迷惑にならない樣に始めから出來てゐるかとも思へる。何しろ逢つて見よう。逢つた上で、借りるのが面白くない樣子だつたら、斷つて、少時下宿の拂ひを延ばして置いて、國から取り寄せれば事は濟む。――當用は此處迄考へて句切りを附けた。あとは散漫に美禰子の事が頭に浮かんで來る。美禰子の顏や手や、襟や、帶や、着物やらを、想像に任せて、乘けたり除つたりしてゐた。ことに明日逢ふ時に、どんな態度で、どんな事を云ふだらうと其光景が十通りにも二十通りにもなつて、色々に出て來る。三四郎は本來から斯んな男である。用談があつて人と會見の約束などをする時には、先方が何う出るだらうといふ事計り想像する。自分が、こんな顏をして、こんな事を、こんな聲で云つて遣らう抔とは決して考へない。しかも會見が濟むと後から屹度其方を考へる。さうして後悔する。

ことに今夜は自分の方を想像する餘地がない。三四郎は此間から美禰子を疑つてゐる。然し疑ふばかりで一向埒が明かない。さうかと言つて面と向つて、聞き糺すべき事件は一つもないのだから、一刀兩斷の解決抔は思ひも寄らぬ事である。もし三四郎の安心の爲に解決が必要なら、それはたゞ美禰子に接觸する機會を利用して、先方の樣子から、好い加減に最後の判決を自分に與へて仕舞ふ丈である。明日の會見は此判決に缺くべからざる材料である。だから、色々に向うを想像して見る。しかし、どう想像しても、自分に都合の好い光景ばかり出て來る。それでゐて、實際は甚だ疑はしい。丁度汚い所を綺麗な寫眞に取つ

て眺めてゐる樣な氣がする。寫眞は寫眞として何處迄も本當に違ひないが、實物の汚い事も爭はれないと一般で、同じでなければならぬ筈の二つが決して一致しない。

最後に嬉しい事を思ひ附いた。美禰子は與次郎に金を貸すと云つた。けれども與次郎には渡さないと云つた。實際與次郎は金錢の上に於ては、信用し惡い男かも知れない。然し其意味で美禰子が渡さないのか、どうだか疑はしい。もし其意味でないとすると、自分には甚だ頼母しい事になる。たゞ金を貸して呉れる丈でも充分の好意である。自分に逢つて手渡しにしたいと云ふのは――三四郎は此處迄己惚れて見たが、忽ち、

「矢つ張り愚弄ぢやないか」と考へ出して、急に赤くなつた。もし、ある人があつて、其女は何の爲に君を愚弄するのかと聞いたら、三四郎は恐らく答へ得なかつたらう。強ひて考へて見ろと云はれたら、三四郎は愚弄其物に興味を有つてゐる女だからと迄は答へたかも知れない。自分の己惚れを罰する爲とは全く考へ得なかつたに違ひない。――三四郎は美禰子の爲に己惚れしめられたんだと信じてゐる。

翌日は幸ひ教師が二人缺席して、午からの授業が休みになつた。下宿へ歸るのも面倒だから、途中で一品料理の腹を拵へて、美禰子の家へ行つた。前を通つた事は何遍でもある。けれども這入るのは始めてである。瓦葺の門の柱に里見恭助といふ標札が出てゐる。三四郎は此處を通る度に、里見恭助といふ人はどんな男だらうと思ふ。まだ逢つた事がない。門は締まつてゐる。潛りから這入ると玄關迄の距離は存外短

かい。長方形の御影石が飛び〳〵に敷いてある。玄関は細い綺麗な格子で閉て切つてある。電鈴を押す。取次の下女に「美禰子さんは御宅ですか」と云つた時、三四郎は自分ながら気恥づかしい様な妙な心持がした。他の玄関で、妙齢の女の在否を尋ねた事はまだない。甚だ尋ね悪い気がする。下女の方は案外真面目である。しかも恭しい。一旦奥へ這入つて、又出て来て、丁寧に御辞儀をして、どうぞと云ふから尾いて上がると応接間へ通した。重い窓掛の掛かつてゐる西洋室である。少し暗い。

下女は又「暫く、どうか……」と挨拶をして出て行つた。三四郎は静かな室の中に席を占めた。正面に壁を切り抜いた小さい煖爐がある。其上が横に長い鏡になつてゐて、前に蝋燭立が二本ある。三四郎は左右の蝋燭立の真中に自分の顔を写して見て、又坐つた。

すると奥の方でヴイオリンの音がした。それが何処からか、風が持つて来て捨てて行つた様に、すぐ消えて仕舞つた。三四郎は惜しい気がする。厚く張つた椅子の背に倚りかゝつて、もう少し遣れば可いがと思つて耳を澄ましてゐたが、音は夫限で已んだ。約一分も立つうちに、三四郎はヴイオリンの事を忘れた。向うにある鏡と蝋燭立を眺めてゐる。妙に西洋の臭がする。それから加徒力の連想がある。何故加徒力だか三四郎にも解らない。其時ヴイオリンが又鳴つた。今度は高い音と低い音が二三度急に続いて響いた。それでぱつたり消えて仕舞つた。三四郎は全く西洋の音楽を知らない。然し今の音は、決して、纏まつたものの一部分を弾いたとは受け取れない。たゞ鳴らした丈である。その無作法にたゞ鳴らした所が

三四郎の情緒によく合つた。不意に天から二三粒落ちて來た、出鱈目の雹の樣である。

三四郎が半ば感覺を失つた眼を鏡の中に移すと、鏡の中に美禰子が何時の間にか立つてゐる。下女が閉てたと思つた戸が開いてゐる。戸の後に掛けてある幕を片手で押し分けた美禰子の胸から上が明らかに寫つてゐる。美禰子は鏡の中で三四郎を見た。三四郎は鏡の中の美禰子を見た。美禰子はにこりと笑つた。

「入らつしやい」

女の聲は後で聞こえた。三四郎は振り向かなければならなかつた。女と男は直かに顏を見合はせた。其時女は廂の廣い髮を一寸前に動かして禮をした。禮をするには及ばない位に親しい態度であつた。男の方は却て椅子から腰を浮かして頭を下げた。女は知らぬ風をして、向うへ廻つて鏡を背に、三四郎の正面に腰を卸した。

「とう〳〵入らしつた」

同じ樣な親しい調子である。三四郎には此一言が非常に嬉しく聞こえた。女は光る絹を着てゐる。先刻から大分待たしたところを以て見ると、應接間へ出る爲にわざ〳〵綺麗なのに着換へたのかも知れない。それで端然と坐つてゐる。眼と口に笑ひを帶びて無言の儘三四郎を見守つた姿に、男は寧ろ甘い苦しみを感じた。凝として見らるゝに堪へない心の起つたのは、其癖女の腰を卸すや否やである。三四郎はすぐ口を開いた。殆ど發作に近い。

「佐々木が……」
「佐々木さんが、あなたの所へ入らしつたでせう」と云つて例の白い齒を露はした。女の後には前の蠟燭立が煖爐臺の左右に並んでゐる。金で細工をした妙な形の臺である。是を蠟燭立と見たのは三四郎の臆斷で、實は何だか分らない。此不可思議の蠟燭立の後に明らかな鏡がある。光線は厚い窓掛に遮られて、充分に這入らない。其上天氣は曇つてゐる。三四郎は此間に美禰子の白い齒を見た。
「佐々木が來ました」
「何と云つて入らつしやいました」
「僕にあなたの所へ行けと云つて來ました」
「左うでせう。――夫で入らしつたの」とわざ〳〵聞いた。
「えゝ」と云つて少し躊躇した。あとから「まあ、左うです」と答へた。女は全く齒を隱した。靜かに席を立つて、窓の所へ行つて、外面を眺め出した。
「曇りましたね。寒いでせう、戸外は」
「いゝえ、存外暖かい。風は丸でありません」
「さう」と云ひながら席へ歸つて來た。
「實は佐々木が金を……」と三四郎から云ひ出した。

「分つてるの」と中途で已めた。三四郎も默つた。すると、

「何うして御失くしになつたの」と聞いた。

「馬券を買つたのです」

女は「まあ」と云つた。まあと云つた割に顏は驚いてゐない。却つて笑つてる。すこし經つて、「惡い方ね」と附け加へた。三四郎は答へずにゐた。

「馬券で中たるのは、人の心を中てるより六づかしいぢやありませんか。あなたは索引の附いてゐる人の心さへ中てゝ見ようとなさらない呑氣な方だのに」

「僕が馬券を買つたんぢやありません」

「あら。誰が買つたの」

「佐々木が買つたのです」

女は急に笑ひ出した。三四郎も可笑しくなつた。

「ぢや、あなたが御金が御入用ぢやなかつたのね。馬鹿々々しい」

「要る事は僕が要るのです」

「本當に？」

「本當に」

「だつて夫ぢや可笑しいわね」
「だから借りなくつても可いんです」
「何故。御厭なの？」
「厭ぢやないが、御兄さんに默つて、あなたから借りちや、好くないからです」
「何ういふ譯で？でも兄は承知してるんですもの」
「左うですか。ぢや借りても好い。——然し借りないでも好い。家へさう云つて遣りさへすれば、一週間位すると來ますから」
「御迷惑なら、強ひて……」
美禰子は急に冷淡になつた。今迄傍にゐたものが一町許り遠退いた氣がする。三四郎は借りて置けば可かつたと思つた。けれども、もう仕方がない。蠟燭立を見て澄ましてゐる。三四郎は自分から進んで、他の機嫌を取つた事のない男である。女も遠ざかつたぎり近附いて來ない。しばらくすると又立ち上がつた。窓から戸外をすかして見て、
「降りさうもありませんね」と云ふ。三四郎も同じ調子で「降りさうもありません」と答へた。
「降らなければ私一寸出て來ようかしら」と窓の所で立つた儘云ふ。三四郎は歸つてくれといふ意味に解釋した。光る絹を着換へたのも自分の爲ではなかつた。

「もう歸りませう」と立ち上がつた。美禰子は玄關迄送つて來た。沓脱へ下りて、靴を穿いてゐると、上から美禰子が、

「其處迄御一所に出ませう。可いでせう」と云つた。三四郎は靴の紐を結びながら「ええ、何うでも」と答へた。女は何時の間にか、和土の上へ下りた。下りながら三四郎の耳の傍へ口を持つて來て「怒つて入らつしやるの」と私語いた。所へ下女が周章てながら、送りに出て來た。

二人は半町程無言の儘連れ立つて來た。其間三四郎は始終美禰子の事を考へてゐる。此女は我儘に育つたに違ひない。それから家庭にゐて、普通の女性以上の自由を有して、萬事意の如く振舞ふに違ひない。かうして、誰の許諾も經ずに、自分と一所に、往來を歩くのでも分る。年寄の親がなくつて、若い兄が放任主義だから、斯うも出來るのだらうが、是が田舍であつたら嘸困ることだらう。此女に三輪田のお光さんの樣な生活を送れと云つたら、何うする氣かしらん。東京は田舍と違つて、萬事が明け放しだから、此方の女は、大抵斯うなのかも分らないが、遠くから想像して見ると、もう少しは舊式の樣でもある。すると與次郎が美禰子をイブセン流と評したのも成程と思ひ當たる。但し俗禮に拘らない所丈がイブセン流なのか、或は腹の底の思想迄も、さうなのか。其處は分らない。

　そのうち本郷の通へ出た。一所に歩いてゐる二人は、一所に歩いてゐながら、相手が何處へ行くのだか、全く知らない。今迄に横町を三つ許り曲がつた。曲がるたびに、二人の足は申し合はせた樣に無言の儘同

じ方角へ曲がつた。本郷の通を四丁目の角へ来る途中で、女が聞いた。

「何處へ入らつしやるの」

「あなたは何處へ行くんです」

二人は一寸顔を見合はせた。三四郎は至極眞面目である。女は堪へ切れずに又白い歯を露はした。

「一所に入らつしやい」

二人は四丁目の角を切通しの方へ折れた。三十間程行くと、右側に大きな西洋館がある。美禰子は其前に留まつた。帯の間から薄い帳面と、印形を出して、

「御願ひ」と云つた。

「何ですか」

「是で御金を取つて頂戴」

三四郎は手を出して、帳面を受取つた。眞中に小口當座預金通帳とあつて、横に里見美禰子殿と書いてある。三四郎は帳面と印形を持つた儘、女の顔を見て立つた。

「三十圓」と女が金高を云つた。恰も毎日銀行へ金を取りに行き慣けた者に對する口振である。幸ひ、三四郎は國に居る時分、かう云ふ帳面を持つて度々豊津迄出掛けた事がある。すぐ石段を上つて、戸を開けて、銀行の中へ這入つた。帳面と印形を掛りのものに渡して、必要の金額を受取つて出て見ると、美禰

子は待つてゐない。もう切通しの方へ二十間許り歩き出してゐる。三四郎は急いで追ひ付いた。すぐ受取つたものを渡さうとして、隠袋へ手を入れると、美禰子が、

「丹青會の展覧會を御覧になつて」と聞いた。

「まだ覧ません」

「招待券を二枚貰つたんですけれども、つい閑がなかつたものだから、まだ行かずにゐたんですが、行つて見ませうか」

「行つても可いです」

「行きませう。もう、おつき閉會になりますから。私、一遍は見て置かないと原口さんに濟まないのです」

「原口さんが招待券を呉れたんですか」

「えゝ。あなた原口さんを御存じなの？」

「廣田先生の所で一度會ひました」

「面白い方でせう。馬鹿囃を稽古なさるんですつて」

「此間は鼓を習ひたいと云つてゐました。夫から――」

「夫から？」

「夫から、あなたの肖像を描くとか云つてゐました。本當ですか」

「えゝ、高等モデルなの」と云つた。男は是より以上に氣の利いた事が云へない性質である。それで默つて仕舞つた。女は何とか云つて貰ひたかつたらしい。

三四郎は又隱袋へ手を入れた。銀行の通帳と印形を出して、女に渡した。金は帳面の間に挾んで置いた筈である。然るに女が、

「御金は」と云つた。見ると、間にはない。三四郎は又外套を探つた。中から手擦れのした札を攫み出した。女は手を出さない。

「貴方から返して頂戴」と云つた。三四郎は聊か迷惑の様な氣がした。然しこんな時に爭ふ事を好まぬ男である。其上往來だから猶更遠慮をした。折角握つた札を又元の所へ收めて、妙な女だと思つた。

學生が多く通る。擦れ違ふ時に屹度二人を見る。中には遠くから眼を着けて來るものもある。三四郎は池の端へ出る迄の路を頗る長く感じた。それでも電車に乘る氣にはならない。二人共のそ〳〵歩いてゐる。會場へ着いたのは殆んど三時近くである。妙な看板が出してある。丹青會と云ふ字も、字の周圍についてゐる圖案も、三四郎の眼には悉く新しい。然し熊本では見る事の出來ない意味で新しいので、寧ろ一種異樣の感がある。中は猶更である。三四郎の眼には只油繪と水彩畫の區別が判然と映ずる位のものに過ぎない。

それでも好惡はある。買つても好いと思ふのもある。然し巧拙は全く分らない。從つて鑑別力のないものと、初手から諦めた三四郎は、一向口を開かない。

美禰子が是は何うですかと云ふと、左うですなといふ。是は面白いぢやありませんかと云ふと、面白さうですなといふ。丸で張合ひがない。話しの出來ない馬鹿か、此方を相手にしない偉い男か、何方かに見える。馬鹿とすれば衒はない所に愛嬌がある。偉いとすれば、相手にならない所が惡らしい。

長い間外國を旅行して歩いた兄妹の畫が澤山ある。双方共同じ姓で、しかも一つ所に竝べて掛けてある。美禰子は其一枚の前に留まつた。

「ヹニスでせう」

是は三四郎にも解つた。何だかヹニスらしい。畫舫にでも乘つて見たい心持がする。三四郎は高等學校に居る時分畫舫といふ字を覺えた。それから此字が好きになつた。畫舫といふと、女と一所に乘らなければ濟まない樣な氣がする。默つて蒼い水と、水の左右の高い家と、倒さに映る家の影と、影の中にちらちらする赤い片とを眺めてゐた。すると、

「兄さんの方が餘程旨い樣ですね」と美禰子が云つた。三四郎には此意味が通じなかつた。

「兄さんとは……」

「此畫は兄さんの方でせう」

「誰の？」

美禰子は不思議さうな顔をして、三四郎を見た。

「だつて、彼方の方が妹さんので、此方の方が兄さんのぢやありませんか」

三四郎は一歩退いて、今通つて來た路の片側を振り返つて見た。同じ樣に外國の景色を描いたものが幾點となく掛かつてゐる。

「違ふんですか」

「一人と思つて入らしつたの」

「えゝ」と云つて、呆やりしてゐる。やがて二人が顔を見合はした。さうして一度に笑ひ出した。美禰子は、驚いた樣に、わざと大きな眼をして、しかも一段と調子を落とした小聲になつて、

「隨分ね」と云ひながら、一間ばかり、ずんずん先へ行つて仕舞つた。三四郎は立ち留まつた儘、もう一遍ヹニスの掘割を眺め出した。先へ拔けた女は、此時振り返つた。三四郎は自分の方を見てゐない。女は先へ行く足をぴたりと留めた。向うから三四郎の横顔を熟視してゐた。

「里見さん」

出し拔けに誰か大きな聲で呼んだ者がある。

美禰子も三四郎も等しく顔を向け直した。事務室と書いた入口を一間許り離れて、原口さんが立つてゐる。原口さんの後に、少し重なり合つて、野々宮さんが立つてゐる。美禰子は呼ばれた原口よりは、原口より遠くの野々宮を見た。見るや否や、二三歩後戻りをして三四郎の傍へ來た。人に目立たぬ位に、自分

の口を三四郎の耳へ近寄せた。さうして何か私語いた。三四郎には何を云つたのか少しも分らない。聞き直さうとするうちに、美禰子は二人の方へ引き返して行つた。もう挨拶をしてゐる。野々宮は三四郎に向つて、

「妙な連と來ましたね」と云つた。三四郎が何か答へようとするうちに、美禰子が、

「似合ふでせう」と云つた。野々宮さんは何とも云はなかつた。くるりと後を向いた。後には疊一枚程の大きな畫がある。其畫は肖像畫である。さうして一面に黑い。着物も帽子も背景から區別の出來ない程光線を受けてゐない中に、顔ばかり白い。顔は瘠せて、頰の肉が落ちてゐる。

「摸寫ですね」と野々宮さんが原口さんに云つた。原口は今しきりに美禰子に何か話してゐる。――もう閉會である。來觀者も大分減つた。開會の初めには毎日事務所へ來てゐたが、此頃は滅多に顔を出さない。今日は久し振に、此方へ用があつて、野々宮さんを引張つて來た所だ。うまく出つ食はしたものだ。此會を仕舞ふと、すぐ來年の準備にかゝらなければならないから、非常に忙しい。何時もは花の時分に開くのだが、來年は少し會員の都合で早くする積りだから、丁度會を二つ續けて開くと同じ事になる。必死の勉強をやらなければならない。それ迄に是非美禰子の肖像を描き上げて仕舞ふ積りである。迷惑だらうが大晦日でも描かして呉れ

「其代り此處ん所へ掛ける積りです」

原口さんは此時始めて、黒い畫の方を向いた。野々宮さんは其間ぽかんとして同じ畫を眺めてゐた。
「どうです。ヹラスケスは。尤も摸寫ですがね。而も餘り上出來ではない」と原口が始めて説明する。
野々宮さんは何も云ふ必要がなくなつた。
「どなたが御寫しになつたの」と女が聞いた。
「三井です。三井はもつと旨いんですがね。此畫はあまり感服出來ない」と一二歩退つて見た。「どうも、原畫が技巧の極點に達した人のものだから、旨く行かないね」
原口は首を曲げた。三四郎は原口の首を曲げた所を見てゐた。
「もう、皆見たんですか」と畫工が美禰子に聞いた。原口は美禰子にばかり話しかける。
「まだ」
「どうです。もう廢して、一所に出らつしやい。精養軒で御茶でも上げます。なに私は用があるから、どうせ一寸行かなければならない。――會の事でね、マネジャーに相談して置きたい事がある。懇意の男だから。――今丁度御茶に好い時分です。もう少しするとね、御茶には遲し晩餐には早し、中途半端になる。どうです。一所に入らつしやいな」
美禰子は三四郎を見た。三四郎はどうでも可い顏をしてゐる。野々宮は立つた儘相手にしない。
「折角來たものだから、皆見て行きませう。ねえ、小川さん」

三四郎はえゝと云つた。
「ぢや、斯うなさい。此奥の別室にね。深見さんの遺畫があるから。それ丈見て、歸りに精養軒へ入らつしやい。先へ行つて待つてゐますから」
「難有う」
「深見さんの水彩は普通の水彩の積りで見ちや不可ませんよ。何處迄も深見さんの水彩なんだから。實物を見る氣にならないで、深見さんの氣韻を見る氣になつてゐると、中々面白い所が出て來ます」と注意して、原口は野々宮と出て行つた。美禰子は禮を云つて其後影を見送つた。二人は振り返らなかつた。
女は歩を回らして、別室へ入つた。男は一足後から續いた。光線の乏しい暗い部屋である。細長い壁に一列に懸かつてゐる深見先生の遺畫を見ると、成程原口さんの注意した如く殆ど水彩ばかりである。三四郎が著しく感じたのは、其水彩の色が、どれも是も薄くて、數が少なくつて、對照に乏しくつて、日向へでも出さないと引き立たないと思ふ程地味に畫いてあるといふ事である。其代り筆が些とも滯つてゐない。殆ど一氣呵成に仕上げた趣がある。繪の具の下に鉛筆の輪廓が明らかに透いて見えるのでも、洒落な畫風がわかる。人間抔になると、細くて長くて、丸で殼竿の様である。こゝにもヹニスが一枚ある。
「是もヹニスですね」と女が寄つて來た。
「えゝ」と云つたが、ヹニスで急に思ひ出した。

「さつき何を云つたんですか」
女は「さつき？」と聞き返した。
「さつき、僕が立つて、彼方のヹニスを見てゐる時です」
女は又眞白な齒を露はした。けれども何とも云はない。
「用でなければ聞かなくつても可いです」
「用ぢやないのよ」
三四郎は未だ變な顏をしてゐる。曇つた秋の日はもう四時を過ぎた。部屋は薄暗くなつてくる。觀覽人は極めて少ない。別室の中には、只男女二人の影があるのみである。女は畫を離れて、三四郎の眞正面に立つた。
「野々宮さん。ね、ね」
「野々宮さん……」
「解つたでせう」
美禰子の意味は、大濤の崩れる如く一度に三四郎の胸を浸した。
「野々宮さんを愚弄したのですか」
「何で？」

女の語氣は全く無邪氣である。三四郎は忽然として、後を云ふ勇氣がなくなつた。無言の儘二三歩動き出した。女は縋る樣に附いて來た。

「あなたを愚弄したんぢやないのよ」

三四郎は又立ち留まつた。三四郎は脊の高い男である。上から美禰子を見下ろした。

「それで宜いです」

「何故惡いの？」

「だから可いです」

女は顏を背けた。二人共戸口の方へ歩いて來た。戸口を出る拍子に互の肩が觸れた。男は急に汽車で乘り合はした女を思ひ出した。美禰子の肉に觸れた所が、夢に疼く樣な心持がした。

「本當に宜いの？」と美禰子が小さい聲で聞いた。向うから二三人連の觀覽者が來る。

「兎も角出ませう」と三四郎が云つた。下足を受取つて、出ると戸外は雨だ。

「精養軒へ行きますか」

美禰子は答へなかつた。雨の中を濡れながら、博物館前の廣い原の中に立つた。幸ひ雨は今降り出した許りである。其上烈しくはない。女は雨の中に立つて、見廻しながら、向うの森を指した。

「あの樹の蔭へ這入りませう」

少し待てば歇みさうである。二人は大きな杉の下に這つた。雨を防ぐには都合の好くない樹である。けれども二人とも動かない。濡れても立つてゐる。二人共寒くなつた。女が「小川さん」と云ふ。男は八の字を寄せて、空を見てゐた顔を女の方へ向けた。

「悪くつて？先刻のこと」

「可いです」

「だつて」と云ひながら、寄つて來た。「私、何故だか、あゝ爲たかつたんですもの。野々宮さんに失禮する積りぢやないんですけれども」

女は瞳を定めて、三四郎を見た。三四郎は其瞳の中に言葉よりも深き訴へを認めた。――必竟あなたの爲にした事ぢやありませんかと、二重瞼の奥で訴へてゐる。三四郎は、もう一遍、

「だから、可いです」と答へた。

雨は段々濃くなつた。雫の落ちない場所は僅かしかない。二人は段々一つ所へ塊まつて來た。肩と肩と擦れ合ふ位にして立ち竦んでゐた。雨の音の中で、美禰子が、

「さつきの御金を御遣ひなさい」と云つた。

「借りませう。要る丈」と答へた。

「みんな、御遣ひなさい」と云つた。

九

與次郎が勸めるので、三四郎はとう〳〵精養軒の會へ出た。其時三四郎は黒い紬の羽織を着た。此羽織は、三輪田のお光さんの御母さんが織つて呉れたのを、紋附に染めて、お光さんが縫ひ上げたものだと、母の手紙に長い說明がある。小包が屆いた時、一應着て見て、面白くないから、戶棚へ入れて置いた。それを與次郎が、勿體ないから是非着ろ〳〵と云ふ。三四郎が着なければ自分が持つて行つて着さうな勢ひであつたから、つい着る氣になつた。着て見ると惡くはない樣だ。

三四郎は此出立ちで、與次郎と二人で精養軒の玄關に立つてゐた。與次郎の說によると、御客は斯うして迎へべきものださうだ。三四郎はそんな事とは知らなかつた。第一自分が御客の積りでゐた。かうなると、紬の羽織では何だか安つぽい受附の氣がする。制服を着て來れば善かつたと思つた。其うち會員が段々來る。與次郎は來る人を捕まへて屹度何とか話しをする。悉く舊知の樣にあしらつてゐる。御客が帽子と外套を給仕に渡して、廣い階子段の橫を、暗い廊下の方へ折れると、三四郎に向つて、今のは誰某だと教へて呉れる。三四郎は、御蔭で知名な人の顔を大分覺えた。

其内御客は略集まつた。約三十人足らずである。廣田先生もゐる。野々宮さんもゐる。――是は理學者だけれども、畫や文學が好きだからと云ふので、原口さんが、無理に引つ張り出したのださうだ。原口さ

んは無論ゐる。一番先へ來て、世話を燒いたり、愛嬌を振り蒔いたり、佛蘭西式の髭を撮んで見たり、萬事忙しさうである。

やがて着席となつた。各自勝手な所へ坐る。讓るものもなければ、爭ふものもない。其内でも廣田先生はのろいにも似合はず一番に腰を卸して仕舞つた。たゞ與次郎と三四郎丈が一所になつて、入口に近く座を占めた。其他は悉く偶然の向ひ合せ、隣同志であつた。

野々宮さんと廣田先生の間に縞の羽織を着た批評家が坐つた。向うには庄司と云ふ博士が座に着いた。是は與次郎の所謂文科で有力な教授である。フロックを着た品格のある男であつた。髮を普通の倍以上長くしてゐる。それが電燈の光で、黑く渦を捲いて見える。廣田先生の坊主頭と較べると大分相違がある。原口さんは大分離れて席を取つた。彼方が角だから、遠く三四郎と眞向ひになる。折襟に、幅の廣い黑繻子を結んだ先がぱつと開いて胸一杯になつてゐる。與次郎が佛蘭西の畫工は、みんなあゝ云ふ襟飾を着けるものだと敎へて吳れた。三四郎は肉汁を吸ひながら、丸で兵兒帶の結目の樣だと考へた。其うち談話が段々始まつた。與次郎は麥酒丈飮む。何時もの樣に口を利かない。流石の男も今日は少々謹んでゐると見えた。三四郎が、少さな聲で、

「些と、ダーター、ファブラを遣らないか」と云ふと、「今日は不可ない」と答へたが、すぐ横を向いて、隣の男と話しを始めた。あなたの、あの論文を拜見して、大いに利益を得ましたとか何とか禮を述べてる

る。所が其論文は、彼が自分の前で、盛に罵倒したものだから、三四郎には頗る不思議の思ひがある。與次郎は又此方を向いた。

「其羽織は中々立派だ。好く似合ふ」と白い紋を殊更注意して眺めてゐる。其時向うの端から、原口さんが、野々宮に話しかけた。元來が大きな聲の人だから、遠くで應對するには都合が好い。今迄向ひ合せに言葉を換はしてゐた廣田先生と庄司といふ教授は、二人の應答を途中で遮る事を恐れて、談話をやめた。其他の人もみんな默つた。會の中心點が始めて出來上がつた。

「野々宮さん光線の壓力の試驗はもう濟みましたか」

「いや、まだ中々だ」

「隨分手數が掛かるもんだね。我々の職業も根氣仕事だが、君の方はもつと劇しい樣だ」

「畫はインスピレーションで直ぐ描けるから可いが、物理の實驗はさう旨くは行かない」

「インスピレーションには辟易する。此夏ある所を通つたら婆さんが二人で問答をしてゐた。聞いて見ると梅雨はもう明けたんだらうか、どうだらうかといふ研究なんだが、一人の婆さんが、昔は雷さへ鳴れば梅雨は明けるに極まつてゐたが、近頃ぢや左うは行かないと不平してゐる。すると一人が何うして、何うして、雷位で明ける事ぢやありやしないと憤慨してゐた。——畫も其通り、今の畫はインスピレーション位で描ける事ぢやありやしない。ねえ田村さん、小説だつて、左うだらう」

隣に田村といふ小說家が坐つて居た。此男が自分のインスピレーションに原稿の催促以外に何もないと答へたので、大笑ひになつた。田村は、それから改まつて、野々宮さんに、光線に壓力があるものか、あれば、どうして試驗するかと聞き出した。野々宮さんの答は面白かつた。――雲母か何かで、十六武藏位の大きさの薄い圓盤を作つて、水晶の絲で釣るして、眞空の中に置いて、此圓盤の面へ弧光燈の光を直角にあてると、此圓盤が光に壓されて動く、と云ふのである。

一座は耳を傾けて聞いてゐた。中にも三四郎は腹の中で、あの福神漬の罐のなかに、そんな裝置がしてあるのだらうと、上京の際、望遠鏡で驚かされた昔を思ひ出した。

「君、水晶の絲があるのか」と小さな聲で與次郎に聞いて見た。與次郎は頭を振つてゐる。

「野々宮さん、水晶の絲がありますか」

「えゝ、水晶の粉をね。酸水素吹管の焰で溶かして置いて、兩方の手で、左右へ引つ張ると細い絲が出來るのです」

三四郎は「左うですか」と云つたぎり、引つ込んだ。今度は野々宮さんの隣にゐる縞の羽織の批評家が口を出した。

「我々はさういふ方面へ掛けると、全然無學なんですが、始めは何うして氣が附いたものでせうな」

「理論上はマクスエル以來豫想されてゐたのですが、それをレベデフといふ人が始めて實驗で證明した

のです。近頃あの彗星の尾が、太陽の方へ引き附けられべき筈であるのに、出るたびに何時でも反對の方角に靡くのは光の壓力で吹き飛ばされるんぢやなからうかと思ひ附いた人もある位です」

批評家は大分感心したらしい。

「思ひ附きも面白いが、第一大きくて可いですね」と云つた。

「大きい計りぢやない、罪がなくつて愉快だ」と廣田先生が云つた。

「それで其思ひ附きが外れたら猶罪がなくつて可い」と原口さんが笑つてゐる。

「否、どうも中たつてるらしい。光線の壓力は半徑の二乘に比例するが、引力の方が半徑の三乘に比例するんだから、物が小さくなればなる程引力の方が負けて、光線の壓力が強くなる。もし彗星の尾が非常に細かい小片から出來てるとすれば、どうしても太陽とは反對の方へ吹き飛ばされる譯だ」

野々宮は、つい眞面目になつた。すると原口が例の調子で、

「罪がない代りに、大變計算が面倒になつて來た。矢つ張り一利一害だ」と云つた。此一言で、人々は元の通り麥酒の氣分に復した。廣田先生が、斯んな事を云ふ。

「どうも物理學者は自然派ぢや駄目の樣だね」

物理學者と自然派の二字は少なからず滿場の興味を刺激した。

「それは何う云ふ意味ですか」と本人の野々宮さんが聞き出した。廣田先生は説明しなければならなく

なつた。
「だつて、光線の壓力を試驗する爲に、眼丈明けて、自然を觀察してゐたつて、駄目だからさ。自然の獻立のうちに、光線の壓力といふ事實は印刷されてゐない樣ぢやないか。だから人工的に、水晶の絲だの、眞空だの、雲母だのと云ふ装置をして、其壓力が物理學者の眼に見えるやうに仕掛けるのだらう。だから、自然派ぢやないよ」
「然し浪漫派でもないだらう」と原口さんが交ぜ返した。
「いや浪漫派だ」と廣田先生が勿體らしく辯解した。「光線と、光線を受けるものとを、普通の自然界に於ては見出だせない樣な位地關係に置く所が全く浪漫派ぢやないか」
「然し、一旦さういふ位地關係に置いた以上は、光線固有の壓力を觀察する丈だから、それからあとは自然派でせう」と野々宮さんが云つた。
「すると、物理學者は浪漫的自然派ですね。文學の方で云ふと、イブセンの樣なものぢやないか」と筋向うの博士が比較を持ち出した。
「左樣、イブセンの劇には野々宮君と同じ位な装置があるが、其装置の下に働く人物は、光線の樣に自然の法則に從つてゐるか疑はしい」是は縞の羽織の批評家の言葉であつた。
「左うかも知れないが、斯う云ふ事は人間の研究上記憶して置く可き事だと思ふ。――即ち、ある情況

の下に置かれた人間は、反對の方向に働き得る能力と權利とを有してゐる。と云ふ事なんだが。――所が妙な習慣で、人間も光線も同じ様に器械的の法則に從つて活動すると思ふものだから、時々飛んだ間違ひが出來る。怒らせようと思つて裝置をすると、笑つたり、笑はせようと目論んで掛かると、怒つたり、丸で反對だ。然しどつちにしても人間に違ひない」と廣田先生が又問題を大きくして仕舞つた。

「ぢや、ある情況の下に、ある人間が、どんな所作をしても自然だと云ふ事になりますね」と向うの小說家が質問した。廣田先生は、すぐ、

「えゝ、えゝ。どんな人間を、どう描いても世界に一人位はゐる樣ぢやないですか」と答へた。「實際人間たる吾々は、人間らしからざる行爲動作を、何うしたつて想像出來るものぢやない。たゞ下手に書くから人間と思はれないのぢやないですか」

小說家は夫で默つた。今度は博士が又口を利いた。

「物理學者でも、ガリレオが寺院の釣り洋燈の一振動の時間が、振動の大小に拘らず同じである事に氣が附いたり、ニユートンが林檎が引力で落ちるのを發見したりするのは、始めから自然派ですね」

「さう云ふ自然派なら、文學の方でも結構でせう。原口さん、畫の方でも自然派がありますか」と野々宮さんが聞いた。

「あるとも。恐るべきクールベエと云ふ奴がゐる。vérité vraie. 何でも事實でなければ承知しない。然

しさう猖獗を極めてゐるものぢやない。たゞ一派として存在を認められる丈さ。又左うでなくつちや困るからね。小說だつて同じ事だらう、ねえ君。矢つ張りモローや、シャヴンヌの樣なのもゐる筈だらうぢやないか」

「居る筈だ」と隣の小說家が答へた。

食後には卓上演說も何もなかつた。たゞ原口さんが、しきりに九段の上の銅像の惡口を云つてゐた。あんな銅像を無暗に立てられては、東京市民が迷惑する。それより、美しい藝者の銅像でも拵へる方が氣が利いてゐるといふ說であつた。與次郎は三四郎に九段の銅像は原口さんと仲の惡い人が作つたんだと教へた。

會が濟んで、外へ出ると好い月であつた。今夜の廣田先生は庄司博士に善い印象を與へたらうかと與次郎が聞いた。三四郎は與へたらうと答へた。與次郎は共同水道栓の傍に立つて、此夏、夜散步に來て、あまり暑いから此處で水を浴びてゐたら、巡査に見附かつて、擂鉢山へ駈け上がつたと話した。二人は擂鉢山の上で月を見て歸つた。

歸り路に與次郎が三四郎に向つて、突然借金の言譯をし出した。月の冴えた比較的寒い晚である。三四郎は殆ど金の事などは考へてゐなかつた。言譯を聞くのでさへ本氣ではない。どうせ返す事はあるまいと思つてゐる。與次郎も決して返すとは云はない。たゞ返せない事情を色々に話す。其話し方のはうが三四

郎には餘程面白い。――自分の知つてる或る男が、失戀の結果、世の中が厭になつて、とう〳〵自殺を仕ようと決心したが、海もいや河もいや、噴火口は猶いや、首を縊るのは尤もいやと云ふ譯で、已むを得ず短銃を買つて來た。買つて來て、まだ目的を遂行しないうちに友達が金を借りに來た。金はないと斷つたが、是非どうかして呉れと訴へるので、仕方なしに、大事の短銃を借して遣つた。友達はそれを質に入れて一時を凌いだ。都合がついて、質を受け出して返しに來た時は、肝心の短銃の主はもう死ぬ氣がなくなつて居た。だから此男の命は金を借りに來られた爲に助かつたと同じ事である。

「さう云ふ事もあるからなあ」と與次郎が云つた。三四郎には只可笑しい丈である。其外には何等の意味もない。高い月を仰いで大きな聲を出して笑つた。金を返されないでも愉快である。與次郎は、

「笑つちや不可ん」と注意した。三四郎は猶可笑しくなつた。

「笑はないで、よく考へて見ろ。己が金を返さなければこそ、君が美禰子さんから金を借りる事が出來たんだらう」

三四郎は笑ふのを已めた。

「それで?」

「それ丈で澤山ぢやないか。――君、あの女を愛してゐるんだらう」

與次郎は善く知つてゐる。三四郎はふんと云つて、又高い月を見た。月の側に白い雲が出た。

「君、あの女には、もう返したのか」
「いゝや」
「何時迄も借りて置いてやれ」
暢氣な事を云ふ。三四郎は何とも答へなかつた。しかし何時迄も借りて置く氣は無論無かつた。實は必要な二十圓を下宿へ拂つて、殘りの十圓を其翌日すぐ里見の家へ屆けようと思つたが、今返しては却て、好意に背いて、よくないと考へ直して、折角門内に這入られる機會を犧牲にして迄も引き返した。其時何かの拍子で、氣が緩んで、其十圓をくづして仕舞つた。實は今夜の會費も其内から出てゐる。自分の許りではない。與次郎のもその内から出てゐる。あとには、漸く二三圓殘つてゐる。三四郎は夫で冬襯衣を買はうと思つた。
實は與次郎が到底返しさうもないから、三四郎は思ひ切つて、此間國元へ三十圓の不足を請求した。充分な學資を月々貰つてゐながら、たゞ不足だからと云つて請求する譯には行かない。三四郎はあまり嘘を吐いた事のない男だから、請求の理由に至つて困却した。仕方がないからたゞ友達が金を失くして弱つてゐたから、つい氣の毒になつて貸してやつた。其結果として、今度は此方が弱る樣になつた。どうか送つて呉れと書いた。
直ぐ返事を出して呉れゝば、もう屆く時分であるのにまだ來ない。今夜あたりは事によると來てゐるか

も知れぬ位に考へて、下宿へ歸つて見ると、果して、母の手蹟で書いた封筒がちやんと机の上に乘つてゐる。不思議な事に、何時も必ず書留で來るのが、今日は三錢切手一枚で濟ましてある。開いて見ると、中は例になく短かい。母としては不親切な位、用事丈で申し納めて仕舞つた。依頼の金は野々宮さんの方へ送つたから、野々宮さんから受取れといふ差圖に過ぎない。三四郎は床を取つて寐た。

翌日も其翌日も三四郎は野々宮さんの所へ行かなかつた。野々宮さんの方でも何とも云つて來なかつた。さうしてゐる内に一週間程經つた。仕舞に野々宮さんから、下宿の下女を使に手紙を寄こした。御母さんから賴まれものがあるから、一寸來て呉れろとある。三四郎は講義の隙を見て、又理科大學の穴倉へ降りて行つた。其處で立談の間に事を濟ませようと思つた所が、左う旨くは行かなかつた。此夏は野々宮さん丈で專領してゐた部屋に髭の生えた人が二三人ゐる。制服を着た學生も二三人ゐる。それが、みんな熱心に、靜肅に、頭の上の日の當たる世界を餘處にして、研究を遣つてゐる。其内で野々宮さんは尤も多忙に見えた。部屋の入口に顏を出した三四郎を、一寸見て、無言の儘近寄つて來た。

「國から、金が屆いたから、取りに來て呉れ玉へ。今此處に持つてゐないから。それからまだ外に話す事もある」

三四郎ははあと答へた。今夜でも好いかと尋ねた。野々宮は少し考へてゐたが、仕舞に思ひ切つて、宜しいと云つた。三四郎は夫で穴倉を出た。出ながら、流石に理學者は根氣の好いものだと感心した。此夏

見た福神漬の罐と、望遠鏡が依然として故の通りの位地に備へ附けてあつた。
　次の講義の時間に與次郎に逢つて是々だと話すと、與次郎は馬鹿だと云はない許りに三四郎を眺めて、
「だから何時迄も借りて置いてやれと云つたのに。餘計な事をして年寄には心配を掛ける。宗八さんには御談義をされる。是位愚な事はない」と丸で自分から事が起つたとは認めてゐない申し分である。三四郎も此問題に關しては、もう與次郎の責任を忘れて仕舞つた。從つて與次郎の頭に掛かつて來ない返事をした。
「何時迄も借りて置くのは、厭だから、家へさう云つて遣つたんだ」
「君は厭でも、向うでは喜ぶよ」
「何故」
　此何故が三四郎自身には幾分か虚僞の響らしく聞こえた。然し相手には何等の影響も與へなかつたらしい。
「當り前ぢやないか。僕を人にしたつて、同じ事だ。僕に金が餘つてゐるとするぜ。左うすれば、其金を君から返して貰ふよりも、君に貸して置く方が善い心持だ。人間はね、自分が困らない程度内で、成る可く人に親切がして見たいものだ」
　三四郎は返事をしないで、講義を筆記し始めた。二三行書き出すと、與次郎が又、耳の傍へ口を持つて

來た。

「おれだつて、金のある時は度々人に貸した事がある。然し誰も決して返したものがない。夫だからおれは此通り愉快だ」

三四郎は眞逆、左うかとも云へなかつた。薄笑ひをした丈で、又洋筆を走らし始めた。與次郎も夫からは落ち附いて、時間の終る迄口を利かなかつた。

號鐘が鳴つて、二人肩を並べて教場を出るとき、與次郎が、突然聞いた。

「あの女は君に惚れてるのか」

二人の後から續々聽講生が出て來る。三四郎は已むを得ず無言の儘階子段を降りて横手の玄關から圖書館傍の空地へ出て、始めて與次郎を顧た。

「能く分らない」

與次郎は暫く三四郎を見てゐた。

「左う云ふ事もある。然し能く分つたとして、君、あの女の夫になれるか」

三四郎は未だ曾て此問題を考へた事がなかつた。美禰子に愛せられるといふ事實其物が、彼女の夫たる唯一の資格の様な氣がしてゐた。云はれて見ると、成程疑問である。三四郎は首を傾けた。

「野々宮さんならなれる」と與次郎が云つた。

「野々宮さんと、あの人とは何か今迄に関係があるのか」
三四郎の顔は彫り附けた様に真面目であつた。與次郎は一口、
「知らん」と云つた。三四郎は黙つてゐる。
「まあ野々宮さんの所へ行つて、御談義を聞いて来い」と云ひ棄てゝ、相手は池の方へ行き掛けた。三四郎は愚劣の看板の如く突つ立つた。與次郎は五六歩行つたが、又笑ひながら帰つて来た。
「君、いつそ、よし子さんを貰はないか」と云ひながら、三四郎を引つ張つて、池の方へ連れて行つた。歩きながら、あれなら好い、あれなら好いと、二度程繰返した。其内又号鐘が鳴つた。
三四郎は其夕方野々宮さんの所へ出掛けたが、時間がまだ少し早過ぎるので、散歩かたがた四丁目迄来て、襯衣を買ひに大きな唐物屋へ這入つた。小僧が奥から色々持つて来たのを撫でゝ見たり、広げて見たりして、容易に買はない。訳もなく鷹揚に構へてゐると、偶然美禰子とよし子が連れ立つて香水を買ひに来た。あらと云つて挨拶をした後で、美禰子が、
「先達ては難有う」と礼を述べた。三四郎には此御礼の意味が明らかに解つた。美禰子から金を借りた翌日もう一返訪問して余分をすぐに返すべき所を、一先づ見合せた代りに、二日ばかり待つて、三四郎は丁寧な礼状を美禰子に送つた。
手紙の文句は、書いた人の、書いた当時の気分を素直に表はしたものではあるが、無論書き過ぎてゐる。

三四郎は出來る丈の言葉を層々と排列して感謝の意を熱烈に致した。普通のものから見れば殆ど借金の禮狀とは思はれない位に、湯氣の立つたものである。然し感謝以外には、何も書いてない。夫だから、自然の勢ひ、感謝が感謝以上になつたのである。三四郎は此手紙を郵函に入れるとき、時を移さぬ美禰子の返事を豫期してゐた。所が折角の封書はたゞ行つた儘である。夫から美禰子に逢ふ機會は今日迄なかつた。三四郎はこの微弱なる「此間は難有う」といふ反響に對して、確乎した返事をする勇氣も出なかつた。大きな襯衣を兩手で眼の先へ廣げて眺めながら、よし子が居るからあゝ冷淡なんだらうかと考へた。それから此襯衣も此女の金で買ふんだなと考へた。小僧はどれになさいますと催促した。

二人の女は笑ひながら側へ來て、一所に襯衣を見て呉れた。仕舞に、よし子が「是になさい」と云つた。三四郎はそれにした。今度は三四郎の方が香水の相談を受けた。一向分らない。ヘリオトロープと書いてある罎を持つて、好い加減に、是はどうですと云ふと、美禰子が、「それに爲ませう」とすぐ極めた。三四郎は氣の毒な位であつた。

表へ出て分れようとすると、女の方が互に御辭儀を始めた。よし子が「ぢや行つて來てよ」と云ふと、美禰子が、「御早く……」と云つてゐる。聞いて見て、妹が兄の下宿へ行く所だといふ事が解つた。三四郎は又綺麗な女と二人連で追分の方へ歩くべき宵となつた。日はまだ全く落ちてゐない。

三四郎はよし子と一所に歩くよりは、よし子と一所に野々宮の下宿で落ち合はねばならぬ機會を聊か迷

惑に感じた。いつその事今夜は家へ歸つて、又出直さうかと考へた。然し、與次郎の所謂御談義を聞くには、よし子が傍に居て呉れる方が便利かも知れない。まさか人の前で、母から、斯ういふ依頼があつたと、遠慮なしの注意を與へる譯はなからう。ことに依ると、たゞ金を受取る丈で濟むかも解らない。――三四郎は腹の中で、一寸狡い決心をした。

「僕も野々宮さんの所へ行く所です」

「さう。御遊びに？」

「いえ、少し用があるんです。あなたは遊びですか」

「いゝえ、私も御用なの」

兩方が同じ樣な事を聞いて、同じ樣な答を得た。しかし兩方共迷惑を感じてゐる氣色が更にない。三四郎は念の爲、邪魔ぢやないかと尋ねて見た。些とも邪魔にはならないさうである。女は言葉で邪魔を否定した許りではない。顔では寧ろ何故そんな事を質問するかと驚いてゐる。三四郎は店先の瓦斯の光で、女の黒い眼のなかに、其驚きを認めたと思つた。事實としては、たゞ大きく黒く見えた許りである。

「ヴイオリンを買ひましたか」

「何うして御存じ」

三四郎は返答に窮した。女は頓着なく、すぐ、斯う云つた。

いくら兄さんに左う云つても、たゞ買つてやる、買つてやると云ふ計りで、些とも買つて呉れなかつたんですの」

三四郎は腹の中で、野々宮よりも廣田よりも、寧ろ與次郎を非難した。

二人は自分の通る細い露路に折れた。折れると中に家が澤山ある。暗い路を戸毎の軒燈が照らしてゐる。其軒燈の一つの前に留まつた。野々宮は此奥にゐる。

三四郎の下宿とは殆ど一丁程の距離である。野々宮が此處へ移つてから、三四郎は二三度訪問した事がある。野々宮の部屋は廣い廊下を突き當たつて、二段ばかり眞直に上ると、左手に離れた二間である。南向きに餘所の廣い庭を殆ど縁の下に控へて、晝も夜も至極靜かである。此離座敷に立て籠もつた野々宮さんを見た時、成程家を疊んで下宿をするのも惡い思ひ附きではなかつたと、始めて來た時から、感心した位、居心地の好い所である。其時野々宮さんは廊下へ下りて、下から自分の部屋の軒を見上げて、一寸見給へ藁葺だと云つた。成程珍らしく屋根に瓦を置いてなかつた。

今日は夜だから、屋根は無論見えないが、部屋の中には電燈が點いてゐる。三四郎は電燈を見るや否や藁葺を思ひ出した。さうして可笑しくなつた。

「妙な御客が落ち合つたな。入口で逢つたのか」と野々宮さんが妹に聞いてゐる。妹は然らざる旨を説明してゐる。序に三四郎の樣な襯衣を買つたら好からうと助言してゐる。夫から、此間のヴイオリンは和

製で音が悪くつて不可ない。買ふのを是迄延期したのだから、もう少し良いのと買ひ易へて呉れと頼んでゐる。切めて美禰子さん位のなら我慢すると云つてゐる。其外似たり寄つたりの駄々をしきりに捏ねてゐる。野々宮さんは別段怖い顔もせず、と云つて、優しい言葉も掛けず、たゞ左うかなと聞いてゐる。

三四郎は此間何も云はずにゐた。よし子は愚な事ばかり述べる。且少しも遠慮をしない。それが馬鹿とも思へなければ、我儘とも受取れない。兄との応対を傍にゐて聞いてゐると、広い日当りの好い畠へ出た様な心持がする。三四郎は来るべき御講義の事を丸で忘れて仕舞つた。其時突然驚かされた。

「あゝ、私忘れてゐた。美禰子さんの御言伝があつてよ」

「左うか」

「嬉しいでせう。嬉しくなくつて？」

野々宮さんは痒い様な顔をした。さうして、三四郎の方を向いた。

「僕の妹は馬鹿ですね」と云つた。三四郎は仕方なしに、たゞ笑つてゐた。

「馬鹿ぢやないわ。ねえ、小川さん」

三四郎は又笑つてゐた。腹の中ではもう笑ふのが厭になつた。

「美禰子さんがね、兄さんに文芸協会の演芸会に連れて行つて頂戴つて」

「里見さんと一所に行つたら宜からう」

「御用が有るんですつて」

「御前も行くのか」

「無論だわ」

野々宮さんは行くとも行かないとも答へなかつた。又三四郎の方を向いて、今夜妹を呼んだのは、眞面目な用のあるのだのに、あんな暢氣許り云つてゐて困ると話した。聞いて見ると、學者丈あつて、存外淡泊である。よし子に縁談の口がある。國へさう云つてやつたら、兩親も異存はないと返事をして來た。夫に就いて本人の意見をよく確める必要が起つたのだと云ふ。三四郎はたゞ結構ですと答へて、成るべく早く自分の方を片附けて歸らうとした。そこで、

「母からあなたに御面倒を願つたさうで」と切り出した。野々宮さんは、

「何、大して面倒でもありませんがね」とすぐに机の抽出から、預かつたものを出して、三四郎に渡した。

「御母さんが心配して、長い手紙を書いて寄こしましたよ。三四郎は餘儀ない事情で月々の學資を友達に貸したと云ふが、いくら友達だつて、さう無暗に金を借りるものぢやあるまいし、よし借りたつて返す筈だらうつて。田舍のものは正直だから、さう思ふのも無理はない。それからね、三四郎が貸すにしても、あまり貸方が大袈裟だ。親から月々學資を送つて貰ふ身分でゐながら、一度に二十圓の三十圓のと、人に

用立てるなんて、如何にも無分別だとあるんですがね――何だか僕に責任が有る樣に書いてあるから困る。……」

野々宮さんは三四郎を見て、にや〳〵笑つてゐる。三四郎は眞面目に「御氣の毒です」といつた計りである。野々宮さんは、若いものを、極め附ける積りで云つたんで無いと見えて、少し調子を變へた。

「なに、心配する事はありませんよ。何でもない事なんだから。たゞ御母さんは、田舍の相場で、金の價値を附けるから、三十圓が大變重くなるんだね。何でも三十圓あると、四人の家族が半年食つて行けると書いてあつたが、そんなものかな、君」と聞いた。よし子は大きな聲を出して笑つた。三四郎にも馬鹿氣てゐる所が頗る可笑しいんだが、母の言條が、全く事實を離れた作り話でないのだから、其處に氣が附いた時には、成程輕卒な事をして惡かつたと少しく後悔した。

「さうすると、月に五圓の割だから、一人前一圓二十五錢に當たる。それを三十日に割り附けると、四錢ばかりだが――いくら田舍でも少し安過ぎる樣だな」と野々宮さんが計算を立てた。

「何を食べたら、その位で生きてゐられるでせう」とよし子が眞面目に聞き出した。三四郎も後悔する暇がなくなつて、自分の知つてゐる田舍生活の有樣を色々話して聞かした。其中には宮籠といふ慣例もあつた。三四郎の家では、年に一度づゝ村全體へ十圓寄附する事になつてゐる。其時には六十戸から一人づつ出て、其六十人が、仕事を休んで、村の御宮へ寄つて、朝から晩迄、酒を飲みつゞけに飲んで、御馳走

を食ひつゞけに食ふんだといふ。

「それで十圓」とよし子が驚いてゐた。御談義は是で何處かへ行つたらしい。それから少し雜談をして一段落附いた時に、野々宮さんが改めて、斯う云つた。

「何しろ、御母さんの方ではね。僕が一應事情を調べて、不都合がないと認めたら、金を渡して呉れろ。さうして面倒でも其事情を知らせて貰ひたいといふんだが、金は事情も何も聞かないうちに、もう渡して仕舞つたしと、——何うするかね。君慥か佐々木に貸したんですね」

三四郎は美禰子から洩れて、よし子に傳はつて、それが野々宮さんに知れてゐるんだと判じた。然し其金が廻り廻つてヴイオリンに變形したものとは兄妹とも氣が附かないから一種妙な感じがした。たゞ「左うです」と答へて置いた。

「佐々木が馬券を買つて、自分の金を失くなしたんだつてね」

「えゝ」

よし子は又大きな聲を出して笑つた。

「おや、好い加減に御母さんの所へさう云つて上げよう。然し今度から、そんな金はもう貸さない事に爲たら好いでせう」

三四郎は貸さない事にする旨を答へて、挨拶をして、立ち掛けると、よし子も、もう歸らうと云ひ出し

た。

「先刻の話しをしなくつちや」と兄が注意した。

「好くつてよ」と妹が拒絶した。

「好くはないよ」

「好くつてよ。知らないわ」

兄は妹の顔を見て黙つてゐる。妹は、また斯う云つた。

「だつて仕方がないぢやありませんか。知りもしない人の所へ、行くか行かないかつて、聞いたつて。好きでも嫌ひでもないんだから、何も云ひ様はありやしないわ。だから知らないわ」

三四郎は知らないわの本意を漸く會得した。兄妹を其儘にして急いで表へ出た。

人の通らない軒燈ばかりの明らかな露路を抜けて表へ出ると、風が吹く。北へ向き直ると、まともに顔へ當たる。時を切つて、自分の下宿の方から吹いてくる。其時三四郎は考へた。此風のなかを、野々宮さんは、妹を送つて里見迄連れて行つて遣るだらう。

下宿の二階へ上がつて、自分の室へ這入つて、坐つて見ると、矢つ張り風の音がする。三四郎は斯う云ふ風の音を聞く度に、運命といふ字を思ひ出す。ごうと鳴つて來る度に竦みたくなる。自分ながら決して強い男とは思つてゐない。考へると、上京以來自分の運命は大概與次郎の為に拵へられてゐる。しかも

多少の程度に於て、和氣靄然たる翻弄を受ける樣に製へられてゐる。與次郎は愛すべき惡戲ものである。向後も此愛すべき惡戲ものの爲に、自分の運命を握られてゐさうに思ふ。風がしきりに吹く。慥かに與次郎以上の風である。

三四郎は母から來た三十圓を枕元へ置いて寐た。此三十圓も運命の翻弄が産んだものである。此三十圓が是から先どんな働きをするか、丸で分らない。自分はこれを美禰子に返しに行く。美禰子がこれを受取る時に、又一煽り來るに極まつてゐる。三四郎は成るべく大きく來れば好いと思つた。

三四郎は夫なり寐附いた。運命も與次郎も手を下し樣のない位すこやかな眠りに入つた。すると半鐘の音で眼が覺めた。何處かで人聲がする。東京の火事は是で二返目である。三四郎は寐卷の上へ羽織を引つ掛けて、窓を明けた。風は大分落ちてゐる。向うの二階屋が風の鳴るなかに、眞黑に見える。家が黑い程、家の後の空は赤かつた。

三四郎は寒いのを我慢して、しばらく此赤いものを見詰めてゐた。其時三四郎の頭には運命があか〱と赤く映つた。三四郎は又暖かい布團のなかに潛り込んだ。さうして、赤い運命のなかで狂ひ回る多くの人の身の上を忘れた。

夜が明ければ常の人である。制服を着けて、帳面を持つて學校へ出た。たゞ三十圓を懷にする事だけは忘れなかつた。生憎時間割の都合が惡い。三時迄ぎつしり詰まつてゐる。三時過ぎに行けば、よし子も學

校から歸つて來てゐるだらう。ことに依れば里見恭助といふ兄も在宅かも知れない。人がゐては、金を返すのが、全く駄目の樣な氣がする。

又與次郎が話し掛けた。

「昨夜は御談義を聞いたか」

「なに御談義といふ程でもない」

「左うだらう、野々宮さんは、あれで理由の解つた人だからな」と云つて何處かへ行つて仕舞つた。二時間後の講義のときに又出逢つた。

「廣田先生のことは大丈夫旨く行きさうだ」と云ふ。どこ迄事が運んだかと聞いて見ると、

「いや心配しないでも好い。いづれ緩り話す。先生が君がしばらく來ないと云つて、聞いてゐたぜ。時時行くが好い。先生は一人ものだからな。吾々が慰めて遣らんと、不可ん。今度何か買つて來い」と云ひつ放して、それなり消えて仕舞つた。すると、次の時間に又何處からか現はれた。今度は何と思つたか、講義の最中に、突然、

「金受取りたりや」と電報の樣なものを白紙へ書いて出した。三四郎は返事を書かうと思つて、教師の方を見ると、教師がちやんと此方を見てゐる。白紙を丸めて足の下へ擲げた。講義が終るのを待つて、始めて返事をした。

「金は受取つた、此處にある」
「さうか夫は好かつた。返す積りか」
「無論返すさ」
「それが好からう。早く返すが好い」
「今日返さうと思ふ」
「うん午過ぎ遲くなるかもしれない」
「何處かへ行くのか」
「行くとも、毎日々々畫に描かれに行く。もう餘つ程出來たらう」
「原口さんの所か」
「うん」
三四郎は與次郎から原口さんの宿所を聞き取つた。

十

廣田先生が病氣だと云ふから、三四郎が見舞に來た。門を這入ると、玄關に靴が一足揃へてある。醫者かも知れないと思つた。いつもの通り勝手口へ回ると誰もゐない。のそ／＼上がり込んで茶の間へ來ると、

座敷で話し聲がする。三四郎はしばらく佇んでゐた。手に可なり大きな風呂敷包みを提げてゐる。中には樽柿が一杯入つてゐる。今度來る時は、何か買つてこいと、與次郎の注意があつたから、追分の通で買つて來た。すると座敷のうちで、突然どたり、ばたりと云ふ音がした。誰か組打を始めたらしい。三四郎は必定喧嘩と思ひ込んだ。風呂敷包みを提げた儘、仕切りの唐紙を鋭く一尺許り明けて屹と睨め込んだ。廣田先生が茶の袴を穿いた大きな男に組み敷かれてゐる。先生は俯伏しの顔を際どく疊から上げて、三四郎を見たが、にやりと笑ひながら、

「やあ、御出で」と云つた。上の男は一寸振り返つた儘である。

「先生、失禮ですが、起きて御覽なさい」と云ふ。何でも先生の手を逆に取つて、肘の關節を表から、膝頭で壓へてゐるらしい。先生は下から到底起きられない旨を答へた。上の男は、それで、手を離して、膝を立てゝ、袴の襞を正しく、居住居を直した。見れば立派な男である。先生もすぐ起き直つた。

「成程」と云つてゐる。

「あの流で行くと、無理に逆らつたら、腕を折る恐れがあるから、危險です」

三四郎は此問答で、始めて、此兩人の今何をしてゐたかを悟つた。

「御病氣ださうですが、もう宜しいんですか」

「えゝ、もう宜しい」

三四郎は風呂敷包みを解いて、中にあるものを、二人の間に廣げた。

「柿を買つて來ました」

廣田先生は書齋へ行つて、小刀を取つて來る。三四郎は臺所から庖丁を持つて來た。三人で柿を食ひ出した。食ひながら、先生と知らぬ男はしきりに地方の中學の話を始めた。生活難の事、紛擾の事、一つ所に長く留まつてゐられぬ事、學科以外に柔術の教師をした事、ある教師は、下駄の臺を買つて、鼻緒は古いのを、着け更へて、用ひられる丈用ひる位にしてゐる事、今度辭職した以上は、容易に口が見附かりさうもない事、已むを得ず、それ迄妻を國元へ預けた事――中々盡きさうもない。

三四郎は柿の核を吐き出しながら、此男の顏を見てゐて、情なくなつた。今の自分と、此男と比較して見ると、丸で人種が違ふ樣な氣がする。此男の言葉のうちには、もう一遍學生生活がして見たい。學生生活程氣樂なものはないと云ふ文句が何度も繰り返された。三四郎は此文句を聞くたびに、自分の壽命も僅か二三年の間なのか知らんと、盆槍考へた。與次郎と蕎麥などを食ふ時の樣に、氣が冴えない。

廣田先生は又立つて書齋に入つた。歸つた時は、手に一卷の書物を持つてゐた。表紙が赤黒くつて、切り口の埃で汚れたものである。

「是が此間話したハイドリオタフィア。退屈なら見てる玉へ」

三四郎は禮を述べて書物を受け取つた。

「寂寞の罌粟花を散らすや頻りなり。人の記念に對しては、永劫に價すると否とを問ふ事なし」といふ句が眼に附いた。先生は安心して柔術の學士と談話をつゞける。――中學教師抔の生活狀態を聞いて見ると、みな氣の毒なもの計りの樣だが、眞に氣の毒と思ふのは當人丈である。なぜといふと、現代人は事實を好むが、事實に伴なふ情操は切り棄てる習慣である。切り棄てなければならない程世間が切迫してゐるのだから仕方がない。其證據には新聞を見ると分る。新聞の社會記事は十の九迄悲劇である。けれども我我は此悲劇を悲劇として味はふ餘裕がない。たゞ事實の報道として讀む丈である。自分の取る新聞抔は、死人十何人と題して、一日に變死した人間の年齡、戸籍、死因を六號活字で一行づゝに書く事がある。簡潔明瞭の極である。又泥棒早見と云ふ欄があつて、何處へどんな泥棒が入つたか、一目に分る樣に泥棒がかたまつてゐる。是も至極便利である。すべてが、この調子と思はなくつちや不可ない。辭職もその通り。當人には悲劇に近い出來事かも知れないが、他人には夫程痛切な感じを與へないと覺悟しなければならまい。其積りで運動したら好からう。」

「だつて先生位餘裕があるなら、少しは痛切に感じても善ささうなものだが」と柔術の男が眞面目な顔をして云つた。此時は廣田先生も三四郎も、さう云つた當人も一度に笑つた。此男が中々歸りさうもないので三四郎は、書物を借りて、勝手から表へ出た。

「朽ちざる墓に眠り、傳はる事に生き、知らるゝ名に殘り、しからずば滄桑の變に任せて、後の世に存

せんと思ふ事、昔より人の願なり。此願のかなへるとき、人は天國にあり。去れども眞なる信仰の教法より視れば、此願も此滿足も無きが如くに果敢なきものなり。生きるとは、再び我に歸るの意にして、再の我に歸るとは、願にもあらず、望にもあらず、氣高き信者の見たる明白なる事實なれば、聖徒イノセントの墓地に横たはるは猶埃及の砂中に埋まるが如し。常住の吾身を觀じ悦べば、六尺の狹きもアドリエーナスの大廟と異なる所あらず。成るが儘に成るとのみ覺悟せよ」

是はハイドリオタフィアの末節である。三四郎はぶら〳〵白山の方へ歩きながら、往來のなかで、此一節を讀んだ。廣田先生から聞く所によると、此著者は有名な名文家で、此一篇は名文家の書いたうちの名文であるさうだ。廣田先生は其話しをした時に、笑ひながら、尤も是は私の說ぢやないよと斷られた。成程三四郎にも何處が名文だか能く解らない。只句切りが惡くつて、字遣ひが異樣で、言葉の運び方が重苦しくつて、丸で古い御寺を見る樣な心持がした丈である。此一節丈讀むにも道程にすると、三四町も掛かつた。しかも判然とはしない。

贏ち得た所は物寂びてゐる。奈良の大佛の鐘を撞いて、其餘波の響が、東京にゐる自分の耳に微かに屆いたと同じ事である。三四郎は此一節の齎す意味よりも、其意味の上に這ひかゝる情緒の影を嬉しがつた。三四郎は切實に生死の問題を考へた事のない男である。考へるには、青春の血が、あまりに暖か過ぎる。眼の前には眉を焦がす程な大きな火が燃えてゐる。其感じが、眞の自分である。三四郎は是から曙町の

原口の所へ行く。

子供の葬式が來た。羽織を着た男がたつた二人着いてゐる。小さい棺は眞白な布で卷いてある。其傍に綺麗な風車を結ひ附けた。車がしきりに回る。車の羽根が五色に塗つてある。それが一色になつて回る。白い棺は綺麗な風車を絶間なく搖かして、三四郎の横を通り越した。三四郎は美しい葬だと思つた。

三四郎は他の文章と、他の葬式を餘處から見た。もし誰か來て、序に美禰子を餘處から見ろと注意したら、三四郎は驚いたに違ひない。三四郎は美禰子を餘處から見る事が出來ない樣な眼になつてゐる。第一餘處も餘處でないもそんな區別は丸で意識してゐない。たゞ事實として、他の死に對しては、美しい穩やかな味ひがあると共に、生きてゐる美禰子に對しては、美しい享樂の底に、一種の苦悶がある。三四郎は此苦悶を拂はうとして、眞直に進んで行く。進んで行けば苦悶が除れる樣に思ふ。苦悶を除る爲に一歩傍へ退く事は夢にも案じ得ない。これを案じ得ない三四郎は、現に遠くから、寂滅の會を文字の上に眺めて、夭折の憐れを、三尺の外に感じたのである。しかも、悲しい筈の所を、快く眺めて、美しく感じたのである。

曙町へ曲がると大きな松がある。此松を目標に來いと教はつた。松の下へ來ると、家が違つてゐる。向うを見ると又松がある。其先にも松がある。松が澤山ある。三四郎は好い所だと思つた。多くの松を通り越して左へ折れると、生垣に綺麗な門がある。果して原口といふ標札が出てゐた。其標札は木理の込ん

だ黑つぽい板に、綠の油で名前を派出に書いたものである。字だか模樣だか分らない位凝つてゐる。門から玄關迄はからりとして何もない。左右に芝が植ゑてある。

玄關には美禰子の下駄が揃へてあつた。鼻緒の二本が右左で色が違ふ。それで能く覺えてゐる。今仕事中だが、可ければ上がれと云ふ小女の取次に尾いて、畫室へ這入つた。廣い部屋である。細長く南北に延びた床の上は、畫家らしく、取り亂れてゐる。先づ一部分には絨毯が敷いてある。それが部屋の大きさに較べると、丸で釣り合ひが取れないから、敷物として敷いたといふよりは、色の好い、模樣の雅な織物として放りだした樣に見える。離れて向うに置いた大きな虎の皮も其通り、坐る爲の、設けの座とは受け取れない。絨毯とは不調和な位置に筋違に尾を長く曳いてゐる。砂を錬り固めた樣な大きな甕がある。其中から矢が二本出てゐる。鼠色の羽根と羽根の間が金箔で強く光る。其傍に鎧もあつた。三四郎は卯の花縅しと云ふのだらうと思つた。向う側の隅にぱつと眼を射るものがある。紫の裾模樣の小袖に金絲の刺繡が見える。袖から袖へ幔幕の綱を通して、蟲干の時の樣に釣るした。袖は丸くて短かい。是が元祿かと三四郎も氣が附いた。其外には畫が澤山ある。壁に掛けたの計りでも大小合はせると餘程になる。額縁を附けない下畫といふ樣なものは、重ねて卷いた端が、卷き崩れて、小口をしだらなく露はした。

描かれつゝある人の肖像は、此彩色の眼を亂す間にある。描かれつゝある人は、突き當りの正面に團扇を翳して立つた。描く男は丸い脊をぐるりと返して、調色板を持つた儘、三四郎に向つた。口に太い烟管

を啣へてゐる。
「遣つて來たね」と云つて煙管を口から取つて、小さい圓卓の上に置いた。燐寸と灰皿が載つてゐる。椅子もある。
「掛け給へ。――あれだ」と云つて、描き掛けた畫布の方を見た。長さは六尺もある。三四郎はたゞ、
「成程大きなものですな」と云つた。原口さんは、耳にも留めない風で、
「うん、中々」と獨り言の樣に、髮の毛と、背景の境の所を塗り始めた。三四郎は此時漸く美禰子の方を見た。すると女の翳した團扇の陰で、白い歯がかすかに光つた。
それから二三分は全く靜かになつた。部屋は煖爐で溫めてある。今日は外面でも、さう寒くはない。風は死に盡くした。枯れた樹が音なく冬の日に包まれて立つてゐる。三四郎は畫室へ導かれた時、霞の中へ這入つた樣な氣がした。圓卓に肱を持たして、此靜かさの夜に勝る境に、憚りなき精神を溺れしめた。此靜かさのうちに、美禰子がゐる。美禰子の影が次第に出來上がりつゝある。肥つた畫工の畫筆丈が動く。夫も眼に動く丈で、耳には靜かである。肥つた畫工も動く事がある。然し足音はしない。
靜かなものに封じ込められた美禰子は全く動かない。團扇を翳して立つた姿其儘が既に畫である。三四郎から見ると、原口さんは、美禰子を寫してゐるのではない。不可思議に奧行のある畫から、精出して、其奧行丈を落として、普通の畫に美禰子を描き直してゐるのである。にも拘らず第二の美禰子は、この靜

かさのうちに、次第と第一に近づいて來る。三四郎には、此二人の美禰子の間に、時計の音に觸れない、靜かな長い時間が含まれてゐる樣に思はれた。其時間が畫家の意識にさへ上らない程柔順しく經つに從つて、第二の美禰子が漸く追ひ附いて來る。もう少しで双方がぴたりと出合つて一つに收まると云ふ所で、時の流れが急に向きを換へて永久の中に注いで仕舞ふ。原口さんの畫筆は夫より先には進めない。三四郎は其處迄跟いて行つて、氣が附いて、不圖美禰子を見た。美禰子は依然として動かずに居る。三四郎の頭は此靜かな空氣のうちで覺えず動いてゐた。醉つた心持である。すると突然原口さんが笑ひ出した。

「又苦しくなつた樣ですね」

女は何も云はずに、すぐ姿勢を崩して、傍に置いた安樂椅子へ落ちる樣にとんと腰を卸ろした。其時白い齒が又光つた。さうして動く時の袖と共に三四郎を見た。其眼は流星の樣に三四郎の眉間を通り越して行つた。

原口さんは圓卓の傍迄來て、三四郎に、

「何うです」と云ひながら、燐寸を擦つて先刻の烟管に火を附けて、再び口に啣へた。大きな木の雁首を指で抑へて、二吹き許り濃い烟を髭の中から出したが、やがて又丸い背中を向けて畫に近附いた。勝手な所を自由に塗つてゐる。

繪は無論仕上がつてゐないものだらう。けれども何處も彼處も萬遍なく繪の具が塗つてあるから、素人

の三四郎が見ると、中々立派である。旨いか無味いか無論分らない。技巧の批評の出來ない三四郎には、たゞ技巧の齎す感じ丈がある。それすら、經驗がないから、頗る正鵠を失してゐるらしい。藝術の影響に全然無頓着な人間でないと自らを證據立てる丈でも三四郎は風流人である。

三四郎が見ると、此畫は一體にはつとしてゐる。何だか一面に粉が吹いて、光澤のない日光に當つた樣に思はれる。影の所でも黒くはない。寧ろ薄い紫が射してゐる。三四郎は此畫を見て、何となく輕快な感じがした。浮いた調子は猪牙船に乘つた心持がある。それでも何處か落ち付いてゐる。劍呑でない。苦つた所、澁つた所、毒々しい所は無論ない。三四郎は原口さんらしい畫だと思つた。すると原口さんは無雜作に畫筆を使ひながら、こんな事を云ふ。

「小川さん面白い話がある。僕の知つた男にね、細君が厭になつて離緣を請求したものがある。所が細君が承知しないで、私は緣あつて、此家へ方付いたものですから、假令あなたが御厭でも私は決して出て參りません」

原口さんは其處で一寸畫を離れて、畫筆の結果を眺めてゐたが、今度は、美禰子に向つて、

「里見さん。あなたが單衣を着て吳れないものだから、着物が描き惡くつて困る。丸で好い加減にやるんだから、少し大膽過ぎますね」

「御氣の毒さま」と美禰子が云つた。

原口さんは返事もせずに又畫面へ近寄つた。「それでね、細君の御尻が離縁するには餘り重くあつたものだから、友人が細君に向つて、斯う云つたんださ。出るのが厭なら、出ないでも好い。何時迄でも家にゐるが好い。其代り己の方が出るから。――里見さん一寸立つて見て下さい。團扇は何うでも好い。ただ立てば。さう。難有う。――細君が、私が家に居つても、貴方が出て御仕舞ひになれば、後が困るぢやありませんかと云ふと、何構はないさ、御前は勝手に入夫でもしたら宜からうと答へたんだつて」

「それから、何うなりました」と三四郎が聞いた。原口さんは、語るに足りないと思つたものか、また後をつけた。

「何うもならないのさ。だから結婚は考へ物だよ。離合聚散、共に自由にならない。廣田先生を見給へ、野々宮さんを見給へ、里見恭助君を見給へ、序に僕を見給へ。みんな結婚をしてゐない。女が偉くなると、かう云ふ獨身ものが澤山出來て來る。だから社會の原則は、獨身ものが、出來得ない程度内に於て、女が偉くならなくつちや駄目だね」

「でも兄は近々結婚致しますよ」

「おや、左うですか。すると貴方は何うなります」

「存じません」

三四郎は美禰子を見た。美禰子も三四郎を見て笑つた。原口さん丈は畫に向いてゐる。「存じません。

存じません。——ぢや」と畫筆を動かした。
三四郎は此機會を利用して、圓卓の側を離れて、美禰子の傍へ近寄つた。美禰子は椅子の脊に、油氣のない頭を、無雑作に持たせて、疲れた人の、身繕ひに心なき放擲の姿である。明らさまに襦袢の襟から咽喉頸が出てゐる。椅子には脱ぎ捨てた羽織を掛けた。廂髪の上に綺麗な裏が見える。
三四郎は懐に三十圓入れてゐる。此三十圓が二人の間にある、説明しにくいものを代表してゐる。——と三四郎は信じた。返さうと思つて、返さなかつたのも是が爲である。思ひ切つて、今返さうとするのも是が爲である。返すと用がなくなつて、遠ざかるか、用がなくなつても、一層近附いて來るか、——普通の人から見ると、三四郎は少し迷信家の調子を帯びてゐる。
「里見さん」と云つた。
「なに」と答へた。仰向いて下から三四郎を見た。顔を故の如くに落ち附けてゐる。眼丈は動いた。それも三四郎の眞正面で穏やかに留まつた。三四郎は女を多少疲れてゐると判じた。
「丁度序だから、此處で返しませう」と云ひながら、釦を一つ外して、内懐へ手を入れた。
女は又、
「なに」と繰り返した。故の通り、刺激のない調子である。内懐へ手を入れながら、三四郎は何うしようと考へた。やがて思ひ切つた。

「此間の金です」

「今下すつても仕方がないわ」

女は下から見上げた儘である。手も出さない。身體も動かさない。顔も元の所に落ち附けてゐる。男は女の返事さへ能くは解し兼ねた。其時、

「もう少しだから、何うです」と云ふ聲が後で聞こえた。見ると、原口さんが此方を向いて立つてゐる。畫筆を指の股に挾んだまゝ、三角に刈り込んだ髯の先を引つ張つて笑つた。美禰子は兩手を椅子の肘に掛けて、腰を卸ろしたなり、頭と脊を眞直に延ばした。三四郎は小さな聲で、

「まだ餘程掛かりますか」と聞いた

「もう一時間ばかり」と美禰子も小さな聲で答へた。三四郎は又圓卓に歸つた。女はもう描かるべき姿勢を取つた。原口さんは又烟管を點けた。畫筆は又動き出す。脊を向けながら、原口さんが斯う云つた。

「小川さん。里見さんの眼を見て御覽」

三四郎は云はれた通りにした。美禰子は突然額から團扇を放して、靜かな姿勢を崩した。横を向いて硝子越しに庭を眺めてゐる。

「不可ない。横を向いてしまつちや、不可ない。今描き出した許りだのに」

「何故餘計な事を仰しやる」と女は正面に歸つた。原口さんは辯解をする。

「冷やかしたんぢやない。小川さんに話す事があつたんです」
「何を」
「是から話すから、まあ元の通りの姿勢に復して下さい。さう。もう少し肱を前へ出して。夫で小川さん、僕の描いた眼が、實物の表情通り出來てゐるかね」
「何うも能く分らんですが。一體斯うやつて、毎日々々描いてゐるのに、描かれる人の眼の表情が何時も變らずにゐるものでせうか」
「それは變るだらう。本人が變るばかりぢやない、畫工の方の氣分も毎日變るんだから、本當を云ふと、肖像畫が何枚でも出來上がらなくつちやならない譯だが、さうは行かない。又たつた一枚で可なり纏まつたものが出來るから不思議だ。何故と云つて見給へ……」
原口さんは此間始終筆を使つてゐる。美禰子の方も見てゐる。三四郎は原口さんの諸機關が一度に働くのを目撃して恐れ入つた。
「かう遣つて毎日描いてゐると、毎日の量が積もり積もつて、しばらくする内に、描いてゐる畫に一定の氣分が出來てくる。だから、たとひ外の氣分で戶外から歸つて來ても、畫室へ這入つて、畫に向ひさへすれば、ぢきに一種一定の氣分になれる。つまり畫の中の氣分が、此方へ乘り移るのだね。里見さんだつて同じ事だ。自然の儘に放つて置けば色々の刺激で色々の表情になるに極まつてゐるんだが、それが實際

畫の上へ大した影響を及ぼさないのは、あゝ云ふ姿勢や、斯う云ふ亂雜な鼓だとか、鎧だとか、虎の皮だとかいふ周圍のものが、自然に一種一定の表情を引き起す樣になつて來て、其習慣が次第に他の表情を壓迫する程强くなるから、まあ大抵なら、此眼附を此儘で仕上げて行けば好いんだね。それに表情と云つたつて……」

原口さんは突然默つた。何處か六づかしい所へ來たと見える。二歩許り立ち退いて、美禰子と畫を頻りに見較べてゐる。

「里見さん、何うかしましたか」と聞いた。

「いゝえ」

此答は美禰子の口から出たとは思へなかつた。美禰子はそれ程靜かに姿勢を崩さずにゐる。

「それに表情と云つたつて」と原口さんが又始めた。「畫工はね、心を描くんぢやない。心が外へ見世を出してゐる所を描くんだから、見世さへ手落なく觀察すれば、身代は自ら分るものと、まあ、さうして置くんだね。見世で窺へない身代は畫工の擔任區域以外と諦めべきものだよ。だから我々は肉ばかり描いてゐる。どんな肉を描いたつて、靈が籠らなければ、死肉だから、畫として通用しない丈だ。そこで此の里見さんの眼もね。里見さんの心を寫す積りで描いてゐるんぢやない。たゞ眼として描いてゐる。此眼が氣に入つたから描いてゐる。此眼の恰好だの、二重瞼の影だの、眸の深さだの、何でも僕に見える所

丈を殘りなく描いて行く。すると偶然の結果として、一種の表情が出て來る。もし出て來なければ、僕の色の出し具合が惡かつたか、恰好の取り方が間違つてゐたか、何方かになる。現にあの色あの形そのものが一種の表情なんだから仕方がない」

原口さんは、此時又二歩ばかり後へ退つて、美禰子と畫とを見較べた。

「何うも、今日は何うかしてゐるね。疲れたんでせう。疲れたら、もう廢しませう。――疲れましたか」

「いゝえ」

原口さんは又畫へ近寄つた。

「それで、僕が何故里見さんの眼を選んだかと云ふとね。まあ話すから聞き給へ。西洋畫の女の顏を見ると、誰の描いた美人でも、屹度大きな眼をしてゐる。可笑しい位大きな眼ばかりだ。所が日本では觀音樣を始めとして、お多福、能の面、もつとも著しいのは浮世繪にあらはれた美人、悉く細い。みんな象に似てゐる。何故東西で美の標準がこれ程違ふかと思ふと、一寸不思議だらう。所が實は何でもない。西洋には眼の大きい奴ばかりゐるから、大きい眼のうちで、美的淘汰が行はれる。日本は鯨の系統ばかりだから――ピエル・ロチーといふ男は、日本人の眼は、あれで何うして開けるだらうなんて冷やかしてゐる。――そら、さう云ふ國柄だから、どうしたつて材料の寡ない大きな眼に對する審美眼が發達しやうがない。そこで選擇の自由の利く細い眼のうちで、理想が出來て仕舞つたのが、歌麿になつたり、祐信になつたり

じて珍重がられてゐる。然しいくら日本的でも、西洋畫には、あゝ細いのは盲目を描いた樣で見ともなくつて不可ない。と云つてラファエルの聖母の樣なのは、天でありやしないし、有つた所が日本人とは云はれないから、其處で里見さんを煩はす事になつたのさ。里見さんもう少しですよ」

答はなかつた。美禰子は凝としてゐる。

三四郎は此畫家の話しを甚だ面白く感じた。とくに話し丈聽きに來たのならば猶幾倍の興味を添へたらうにと思つた。三四郎の注意の焦點は、今、原口さんの話しの上にもない、原口さんの畫の上にもない。無論向うに立つてゐる美禰子に集まつてゐる。三四郎は畫家の話しに耳を傾けながら、眼丈は遂に美禰子を離れなかつた。彼の眼に映じた女の姿勢は、自然の經過を、尤も美しい刹那に、捕虜にして動けなくした樣である。變らない所に、永い慰藉がある。然るに原口さんが突然首を捩つて、女に何うかしましたかと聞いた。其時三四郎は、少し恐ろしくなつた位である。移り易い美しさを、移さずに据ゑて置く手段が、もう盡きたと畫家から注意された樣に聞こえたからである。

成程さう思つて見ると、何うかしてゐるらしくもある。色光澤が好くない、眼尻に堪へ難い嬾さが見える。三四郎は此活人畫から受ける安慰の念を失つた。同時にもしや自分が此變化の原因ではなからうかと考へ附いた。忽ち強烈な個性的の刺激が三四郎の心を襲つて來た。移り行く美を果敢なむと云ふ共通性の情緒は丸で影を潛めて仕舞つた。――自分はそれ程の影響を此女の上に有して居る。――三四郎は此自覺

のうちに一切の己を意識した。けれどもその影響が自分に取つて、利益か不利益かは未決の問題である。
此時原口さんが、とう／＼筆を擱いて、
「もう廢さう。今日は何うしても駄目だ」と云ひ出した。美禰子は持つてゐた團扇を、立ちながら床の上に落とした。椅子に掛けた羽織を取つて着ながら、此方へ寄つて來た。
「今日は疲れてゐますね」
「私？」と羽織の裄を揃へて、紐を結んだ。
「いや實は僕も疲れた。また明日元氣の好い時に遣りませう。まあ御茶でも飮んで緩りなさい」
夕暮には、まだ間があつた。けれども美禰子は少し用があるから歸るといふ。三四郎も留められたが、わざと斷つて、美禰子と一所に表へ出た。日本の社會狀態で、かう云ふ機會を、隨意に造る事は、三四郎に取つて困難である。三四郎は成るべく此機會を長く引き延ばして利用しようと試みた。それで比較的人の通らない、閑靜な曙町を一廻り散歩しようぢやないかと女を誘つて見た。所が相手は案外にも應じなかつた。一直線に生垣の間を横切つて、大通へ出た。三四郎は、並んで歩きながら、
「原口さんも左う云つてゐたが、本當に何うかしたんですか」と聞いた。
「私？」と美禰子が又云つた。原口さんに答へたと同じ事である。三四郎が美禰子を知つてから、美禰子はかつて、長い言葉を使つた事がない。大抵の應對は一句か二句で濟ましてゐる。しかも甚だ單簡なも

のに過ぎない。それでゐて、三四郎の耳には一種の深い響を與へる。殆ど他の人からは、聞き得る事の出來ない色が出る。三四郎はそれに敬服した。それを不思議がつた。

「私？」と云つた時、女は顔を半分程三四郎の方へ向けた。さうして二重瞼の切れ目から男を見た。其眼には暈が被かつてゐる樣に思はれた。何時になく感じが生温く來た。頬の色も少し蒼い。

「色が少し惡い樣です」

「左うですか」

二人は五六歩無言であるいた。三四郎は何うともして、二人の間に掛かつた薄い幕の樣なものを裂き破りたくなつた。然し何と云つたら破れるか、丸で分別が出なかつた。小說などにある甘い言葉は遣ひたくない。趣味の上から云つても、社交上若い男女の習慣としても、遣ひ度くない。三四郎は事實上不可能の事を望んでゐる。望んでゐる計りではない。歩きながら工夫してゐる。

やがて、女の方から口を利き出した。

「今日何か原口さんに御用が御有りだつたの」

「いゝえ、用事は無かつたです」

「ぢや、たゞ遊びに入らしつたの」

「いゝえ、遊びに行つたんぢやありません」

「ぢや、何で入らしつたの」
三四郎は此瞬間を捕へた。
「あなたに會ひに行つたんです」
三四郎は是で云へる丈の事を悉く云つた積りである。すると、女はすこしも刺激に感じない、しかも、例の如く男を醉はせる調子で、
「御金は、彼處ぢや頂けないのよ」と云つた。三四郎は落膽した。
二人は又無言で五六間來た。三四郎は突然口を開いた。
「本當は金を返しに行つたのぢやありません」
美禰子はしばらく返事をしなかつた。やがて、靜かに云つた。
「御金は私も要りません。持つて入らつしやい」
三四郎は堪へられなくなつた。急に、
「たゞ、あなたに會ひたいから行つたのです」と云つて、横に女の顔を覗き込んだ。女は三四郎を見なかつた。其時三四郎の耳に、女の口を洩れた微かな溜息が聞こえた。
「御金は……」
「金なんぞ……」

二人の會話は双方共意味を成さないで、途中で切れた。それなりで、又小半町程來た。今度は女から話し掛けた。

「原口さんの畫を御覽になつて、どう御思ひなすつて」

答へ方が色々あるので、三四郎は返事をせずに少しの間步いた。

「餘り出來方が早いので御驚きなさりやしなくつて」

「えゝ」と云つたが、實は始めて氣が附いた。考へると、原口が廣田先生の所へ來て、美禰子の肖像を描く意志を洩らしてから、まだ一ヶ月位にしかならない。展覽會で直接に美禰子に依賴してゐたのは、夫より後の事である。三四郎は畫の道に暗いから、あんな大きな額が、何の位な速度で仕上げられるものか、殆ど想像の外にあつたが、美禰子から注意されて見ると、餘り早く出來過ぎてゐる樣に思はれる。

「何時から取掛かつたんです」

「本當に取掛かつたのは、つい此間ですけれども、其前から少し宛描いて頂いてゐたんです」

「其前つて、何時頃からですか」

「あの服裝で分るでせう」

三四郎は突然として、始めて池の周圍で美禰子に逢つた暑い昔を思ひ出した。

「そら、あなた、椎の木の下に跼んでいらしつたぢやありませんか」

「あなたは團扇を翳して、高い所に立つてゐた」
「あの畫の通りでせう」
「えゝ。あの通りです」
二人は顏を見合はした。もう少しで白山の坂の上へ出る。
向うから車が馳けて來た。黒い帽子を被つて、金縁の眼鏡を掛けて、遠くから見ても色光澤の好い男が乘つてゐる。此車が三四郎の眼に這入つた時から、車の上の若い紳士は美禰子の方を見詰めてゐるらしく思はれた。二三間先へ來ると、車を急に留めた。前掛を器用に跳ね退けて、蹴込から飛び下りた所を見ると、脊のすらりと高い細面の立派な人であつた。髭を綺麗に剃つてゐる。それでゐて、全く男らしい。
「今迄待つてゐたけれども、餘り遲いから迎ひに來た」と美禰子の眞前に立つた。見下ろして笑つてゐる。
「さう、難有う」と美禰子も笑つて、男の顏を見返したが、其眼をすぐ三四郎の方へ向けた。
「何誰」と男が聞いた。
「大學の小川さん」と美禰子が答へた。
男は輕く帽子を取つて、向うから挨拶をした。
「早く行かう。兄さんも待つてゐる」

好い具合に三四郎は追分へ曲がるべき横町の角に立つてゐた。金はとう〱返さずに分かれた。

十一

此頃與次郎が學校で文藝協會の切符を賣つて回つてゐる。二三日掛かつて、知つたものへは略賣り附けた樣子である。與次郎はそれから知らないものを捕まへる事にした。大抵は廊下で捕まへる。すると中々放さない。どうか、斯うか買はせて仕舞ふ。時には談判中に號鐘が鳴つて取り逃がす事もある。與次郎は之を時利あらずと號してゐる。時には相手が笑つてゐて、何時迄も要領を得ない事がある。三四郎は之を人利あらずと號してゐる。或時便所から出て來た教授を捕まへた。其教授は手帛で手を拭きながら、今一寸と云つた儘急いで圖書館へ這入つて仕舞つた。夫きり決して出て來ない。與次郎は之を——何とも號しなかつた。後影を見送つて、あれは腸加答兒に違ひないと三四郎に教へて呉れた。

與次郎に切符の販賣方を何枚託まれたのかと聞くと、何枚でも賣れる丈託まれたのだと云ふ。餘り賣れ過ぎて演藝場に這入り切れない恐れはないかと聞くと、少しは有ると云ふ。それでは賣つた後で困るだらうと念を推すと、何大丈夫だ、中には義理で買ふものもあるし、事故で來ないものもあるし、それから腸加答兒も少しは出來るだらうと云つて、澄ましてゐる。

與次郎が切符を賣る所を見てゐると、引き易へに金を渡すものからは無論即座に受け取るが、さうでな

い學生には只切符丈渡してゐる。氣の小さい三四郎が見ると、心配になる位渡して歩く。あとから思ふ通り金が寄るかと聞いて見ると、無論寄らないといふ答だ。几帳面に僅か賣るよりも、だらしなく澤山賣る方が、大體の上に於て利益だから斯うすると云つてゐる。與次郎は之をタイムス社が日本で百科全書を賣つた方法に比較してゐる。比較丈は立派に聞こえたが、三四郎は何だか心元なく思つた。そこで一應與次郎に注意した時に、與次郎の返事は面白かつた。

「相手は東京帝國大學學生だよ」

「いくら學生だつて、君の樣に金に掛けると暢氣なのが多いだらう」

「なに善意に拂はないのは、文藝協會の方でも八釜敷くは云はない筈だ。何うせ幾何切符が賣れたつて、とゞの詰りは協會の借金になる事は明らかだから」

三四郎は念の爲、それは君の意見か、協會の意見かと糺して見た。與次郎は、無論僕の意見であつて、協會の意見であると都合のいゝ事を答へた。

與次郎の說を聞くと、今度の演藝會を見ないものは、丸で馬鹿の樣な氣がする。馬鹿の樣な氣がする迄與次郎は講釋をする。それが切符を賣る爲だか、實際演藝會を信仰してゐる爲だか、或はたゞ自分の景氣を附け、かねて相手の景氣をつけ、次いでは演藝會の景氣をつけて、世上一般の空氣を出來る丈賑やかにする爲だか、そこの所が一寸明晰に區別が立たないものだから、相手は馬鹿の樣な氣がするにも拘らず、

あまり與次郎の感化を蒙らない。

與次郎は第一に會員の練習に骨を折つてゐる話をする。話通りに聞いてゐると、會員の多數は、練習の結果として、當日前に役に立たなくなりさうだ。それから背景の話をする。其背景が大したもので、東京にゐる有爲の青年畫家を悉く引き上げて、悉く應分の技倆を振はした樣な事になる。次に服裝の話をする。其服裝が頭から足の先迄故實づくめに出來上がつてゐる。次に脚本の話をする。それが、みんな新作で、みんな面白い。其外幾何でもある。

與次郎は廣田先生と原口さんに招待券を送つたと云つてゐる。野々宮兄妹と里見兄妹には上等の切符を買はせたと云つてゐる。萬事が好都合だと云つてゐる。三四郎は與次郎の爲に演藝會萬歲を唱へた。

萬歲を唱へた晚、與次郎が三四郎の下宿へ來た。晝間とは打つて變つてゐる。堅くなつて火鉢の傍へ坐つて寒い寒いと云ふ。其顏がたゞ寒いのではないらしい。始めは火鉢へ乘り掛かる樣に手を翳してゐたが、やがて懷手になつた。三四郎は與次郎の顏を陽氣にする爲に、机の上の洋燈を端から端へ移した。所が與次郎は顎をがつくり落として、大きな坊主頭丈を黑く灯に照らしてゐる。一向冴えない。何うかしたかと聞い時に、首を擧げて洋燈を見た。

「此家ではまだ電氣を引かないのか」と顏附には全く緣のない事を聞いた。

「まだ引かない。其内電氣にする積りださうだ。洋燈は暗くて不可んね」と答へてゐると、急に、洋燈

の事は忘れたと見えて、
「おい、小川、大變な事が出來て仕舞つた」と云ひ出した。
一寸理由を聞いて見る。與次郎は懐から皺だらけの新聞を出した。二枚重なつてゐる。其一枚を剥がして、折り疊み直して、此處を讀んで見ろと差し附けた。讀む所を指の頭で抑へてゐる。三四郎は眼を洋燈の傍へ寄せた。見出しに大學の純文科とある。
大學の外國文學科は從來西洋人の擔當で、當事者は一切の授業を外國教師に依頼してゐたが、時勢の進歩と多數學生の希望に促されて、今度愈本邦人の講義も必須課目として認めるに至つた。そこで此間中から適當の人物を人選中であつたが、漸く某氏に決定して、近々發表になるさうだ。某氏は近き過去に於て、海外留學の命を受けた事のある秀才だから至極適任だらうと云ふ内容である。
「廣田先生ぢや無かつたんだな」と三四郎が與次郎を顧た。與次郎は矢つ張り新聞の上を見てゐる。
「是は慥かなのか」と三四郎が又聞いた。
「何うも」と首を曲げたが、「大抵大丈夫だらうと思つてゐたんだがな。遣り損なつた。尤も此男が大分運動をしてゐると云ふ話は聞いた事もあるが」と云ふ。
「然し是丈ぢや、まだ風説ぢやないか。愈發表になつて見なければ分らないのだから」
「いや、それ丈なら無論構はない。先生の關係した事ぢやないから、然し」と云つて、又殘りの新聞を

疊み直して、標題を指の頭で抑へて、三四郎の眼の下へ出した。

今度の新聞にも略同様の事が載つてゐる。そこ丈は別段に新しい印象を起しやうもないが、其後へ來て、三四郎は驚かされた。廣田先生が大變な不德義漢の樣に書いてある。十年間語學の教師をして、世間には杳として聞こえない凡材の癖に、大學で本邦人の外國文學講師を入れると聞くや否や、急に狐鼠々々運動を始めて、自分の評判記を學生間に流布した。のみならず其門下生をして「偉大なる暗闇」などと云ふ論文を小雜誌に草せしめた。此論文は零餘子なる匿名の下にあらはれたが、實は廣田の家に出入する文科大學生小川三四郎なるものの筆である事迄分つてゐる。と、とう〳〵三四郎の名前が出て來た。

三四郎は妙な顏をして與次郎を見た。與次郎は前から三四郎の顏を見てゐる。二人共しばらく默つてゐた。やがて、三四郎が、

「困るなあ」と云つた。少し與次郎を恨んでゐる。與次郎は、そこは餘り構つてゐない。

「君、これを何う思ふ」と云ふ。

「何う思ふとは」

「投書を其儘出したに違ひない。決して社の方で調べたものぢやない。文藝時評の六號活字の投書に斯んなのが、いくらでも來る。六號活字は殆ど罪惡のかたまりだ。よく〳〵探つて見ると嘘が多い。目に見えた嘘を吐いてゐるのもある。何故そんな愚な事をやるかと云ふとね、君。みんな利害問題が動機になつ

てるらしい。それで僕が六號活字を受持つてゐる時には、性質の好くないのは、大抵屑籠へ放り込んだ。此記事も全くそれだね。反對運動の結果だ」

「何故、君の名が出ないで、僕の名が出たものだらうな」

與次郎は「左うさ」と云つてゐる。しばらくしてから、

「矢つ張り何だらう。君は本科生で僕は選科生だからだらう」と説明した。けれども三四郎には、是が説明にも何にもならなかつた。三四郎は依然として迷惑である。

「全體僕が零餘子なんて稀知な號を使はずに、堂々と佐々木與次郎と署名して置けば好かつた。實際あの論文は佐々木與次郎以外に書ける者は一人もないんだからなあ」

與次郎は眞面目である。三四郎に「偉大なる暗闇」の著作權を奪はれて却て迷惑してゐるのかも知れない。三四郎に馬鹿々々しくなつた。

「君、先生に話したか」と聞いた。

「さあ、其處だ。偉大なる暗闇の作者なんか、君だつて、僕だつて、どちらだつて構はないが、事先生の人格に關係してくる以上は、話さずにはゐられない。あゝ云ふ先生だから、一向知りません、何か間違ひでせう、偉大なる暗闇といふ論文は雜誌に出ましたが、匿名です。先生の崇拜者が書いたものですから御安心なさい位に云つて置けば、さうかで直ぐ濟んで仕舞ふ譯だが、此際左うは行かん。どうしたつて僕

が責任を明らかにしなくつちや。事が旨く行つて、知らん顔をしてゐるのは、心持が好いが、遣り損なつて默つてゐるのは不愉快で堪らない。第一自分が事を起して置いて、あゝ云ふ善良な人を迷惑な狀態に陷らして、それで平氣に見物がして居られるものぢやない。正邪曲直なんて六づかしい問題は別として、たゞ氣の毒で、痛はしくつて不可ない」

三四郎は始めて與次郎を感心な男だと思つた。

「先生は新聞を讀んだんだらうか」

「家へ來る新聞にやない。だから僕も知らなかつた。然し先生は學校へ行つて色々な新聞を見るかられ。よし先生が見なくつても誰か話すだらう」

「すると、もう知つてるな」

「無論知つてるだらう」

「君には何とも云はないか」

「云はない。尤も碌に話しをする暇もないんだから、云はない筈だが。此間から演藝會の事で始終奔走してゐるものだから——あゝ演藝會も、もう厭になつた。已めて仕舞はうかしらん。御白粉を附けて、芝居なんかやつたつて、何が面白いものか」

「先生に話したら、君、叱られるだらう」

「叱られるだらう。叱られるのは仕方がないが、如何にも氣の毒でね。餘計な事をして迷惑を掛けてるんだから。――先生は道樂のない人でね。酒は飲ます、煙草は――」と云ひかけたが途中で已めて仕舞つた。先生の哲學を鼻から烟にして吹き出す量は月に積もると、莫大なものである。

「煙草丈は可なり呑むが、其外に何も無いぜ。釣をするぢやなし、碁を打つぢやなし、家庭の樂しみがあるぢやなし。あれが一番不可ない。子供でもあると可いんだけれども。實に枯淡だからなあ」

與次郎は夫で腕組をした。

「たまに、慰めようと思つて、少し奔走すると、斯んな事になるし。君も先生の所へ行つて遣れ」

「行つて遣る所ぢやない。僕にも多少責任があるから。謝罪つて來る」

「君は謝罪る必要はない」

「ぢや辯解して來る」

與次郎は夫で歸つた。三四郎は床に這入つてから度々寐返りを打つた。國にゐる方が寐易い心持がする。偽りの記事――廣田先生――美禰子――美禰子を迎ひに來て連れて行つた立派な男――色々の刺激がある。

夜中からぐつすり寐た。何時もの様に起きるのが、ひどく辛かつた。顔を洗ふ所で、同じ文科の學生に逢つた。顔丈は互に見知り合ひである。失敬と云ふ挨拶のうちに、此男は例の記事を讀んで居るらしく推した。然し先方では無論話頭を避けた。三四郎も辯解を試みなかつた。

暖かい汁の香を嗅いでゐる時に、又故里の母からの書信に接した。又例の如く長かりさうだ。洋服を着換へるのが面倒だから、着たまゝの上へ袴を穿いて、懷へ手紙を入れて、出る。戸外は薄い霜で光つた。通へ出ると、殆ど學生計り歩いてゐる。それが、みな同じ方向へ行く。悉く急いで行く。寒い往來は若い男の活氣で一杯になる。其中に霜降の外套を着た廣田先生の長い影が見えた。此青年の隊伍に紛れ込んだ先生は、歩調に於て既に時代錯誤である。左右前後に比較すると頗る緩漫に見える。先生の影は校門のうちに隱れた。門内に大きな松がある。巨人の傘の樣に枝を擴げて玄關を塞いでゐる。三四郎の足が門前迄來た時は先生の影が、既に消えて、正面に見えるものは、松と、松の上にある時計臺計りであつた。此時計臺の時計は常に狂つてゐる。もしくは留まつてゐる。

門内を一寸覗き込んだ三四郎は、口の内で「ハイドリオタフイア」と云ふ字を二度繰り返した。此字は三四郎の覺えた外國語のうちで、尤も長い、又尤も六づかしい言葉の一つであつた。意味はまだ分らない。廣田先生に聞いて見る積りでゐる。かつて與次郎に尋ねたら、恐らくダーターフアブラの類だらうと云つてゐた。けれども三四郎から見ると二つの間には大變な違ひがある。ダーターフアブラは躍るべき性質のものと思へる。ハイドリオタフイアは覺えるのにさへ暇が入る。二返繰り返すと歩調が自ら緩漫になる。廣田先生の使ふために古人が作つて置いた樣な音がする。

學校へ行つたら、「偉大なる暗闇」の作者として、衆人の注意を一身に集めてゐる氣色がした。戸外へ出

ようとしたが、戸外は存外寒いから廊下にゐた。さうして講義の間に懐から母の手紙を出して讀んだ。
此冬休みには歸つて來いと、丸で熊本にゐた當時と同樣な命令がある。實は熊本にゐた時分にこんな事があつた。學校が休みになるか、ならないのに、歸れと云ふ電報が掛かつた。母の病氣に違ひないと思ひ込んで、驚いて飛んで歸ると、母の方では此方に變がなくつて、まあ結構だつたと云はぬ許りに喜んでゐる。譯を聞くと、何時迄待つてゐても歸らないから、御稻荷樣へ伺ひを立てたら、こりや、もう熊本を立つてゐるといふ御託宣であつたので、途中で何うかしはせぬだらうかと非常に心配してゐたのだと云ふ。三四郎は其當時を思ひ出して、今度も亦伺ひを立てられる事かと思つた。然し手紙には御稻荷樣の事は書いてない。たゞ三輪田のお光さんも待つてゐると割註見た樣なものが附いてゐる。お光さんは豐津の女學校をやめて、家へ歸つたさうだ。又お光さんに縫つて貰つた綿入が小包で來るさうだ。大工の角三が山で賭博を打つて九十八圓取られたさうだ。――其顛末が委しく書いてある。面倒だから好い加減に讀んだ。何でも山を買ひたいといふ男が三人連で入り込んで來たのを、角三が案内をして、山を廻つてあるいてる間に取られて仕舞つたのださうだ。角三はうちへ歸つて、女房に何時の間に取られたか分らないと辯解した。すると、女房が夫ぢや御前さん眠り藥でも嗅がされたんだらうと云つたら、角三が、うんさう云へば何だか嗅いだ樣だと答へたさうだ。けれども村のものはみんな賭博をして卷き上げられたと評判してゐる。田舍でも斯うだから、東京にゐる御前などは、本當によく氣を附けなくては不可ないと云ふ訓戒が附いて

ゐる。

長い手紙を巻き收めてゐると、與次郎が傍へ來て「やあ女の手紙だな」と云つた。昨夜よりは冗談をいふ丈元氣が可い。三四郎は、

「なに母からだ」と、少し詰らなさうに答へて、封筒ごと懐へ入れた。

「里見の御孃さんからぢやないのか」

「いゝや」

「君、里見の御孃さんの事を聞いたか」

「何を」と問ひ返してゐる所へ、一人の學生が、與次郎に、演藝會の切符を欲しいといふ人が階下に待つてゐると敎へに來てくれた。與次郎はすぐ降りて行つた。

與次郎は夫なり消えてなくなつた。いくら掴まへようと思つても出て來ない。三四郎は已むを得ず精出して講義を筆記してゐた。講義が濟んでから、昨夕の約束通り廣田先生の家へ寄る。相變らず靜かである。先生は茶の間に長くなつて寐てゐた。婆さんに、どうか爲すつたのかと聞くと、左うぢやないのでせう、昨夕餘り遲くなつたので、眠いと云つて、先刻御歸りになると、すぐ横に御成りなすつたのだと云ふ。長い身體の上に小夜着が掛けてある。三四郎は小さな聲で、又婆さんに、どうして、さう遲くなつたのかと聞いた。なに何時でも遲いのだが、昨夕のは勉强ぢやなくつて、佐々木さんと久しく御話しをして御出で

だつたのだといふ答である。勉強が佐々木に代つたから、晝寐をする說明にはならないが、與次郎が、昨夕先生に謝の話をした事丈は是で明暸になつた。序に與次郎が、どう叱られたか聞いて置きたいのだが、それは婆さんが知らう筈がないし、肝心の與次郎は學校で取り逃がして仕舞つたから仕方がない。今日の元氣の好い所を見ると、大した事件には成らずに濟んだのだらう。尤も與次郎の心理現象は到底三四郎には解らないのだから、實際どんな事があつたか想像は出來ない。

三四郎は長火鉢の前へ坐つた。鐵瓶がちん／＼鳴つてゐる。婆さんは遠慮をして下女部屋へ引取つた。

三四郎は胡坐をかいて、鐵瓶に手を翳して、先生の起きるのを待つてゐる。先生は熟睡してゐる。三四郎は靜かで好い心持になつた。爪で鐵瓶を敲いて見た。熱い湯を茶碗に注いでふう／＼吹いて飲んだ。先生は向ふをむいて寐てゐる。二三日前に頭を刈つたと見えて、髮が甚だ短かい。髭の端が濃く出てゐる。鼻も向ふを向いてゐる。鼻の穴がすう／＼云ふ。安眠だ。

三四郎は返さうと思つて、持つて來たハイドリオタフイアを出して讀み始めた。ぽつ／＼拾ひ讀みをする。中々解らない。墓の中に花を投げる事が書いてある。羅馬人は薔薇を affect すると書いてある。何の意味だかよく知らないが、大方好むとでも譯すんだらうと思つた。希臘人は Amaranth を用ひると書いてある。是も明暸でない。然し花の名には違ひない。夫から少し先へ行くと、丸で解らなくなつた。頁から眼を離して先生を見た。まだ寐てゐる。何で斯んな六づかしい書物を自分に借したものだらうと思

つた。それから、此六づかしい書物が、何故解らないながらも、自分の興味を惹くのだらうと思つた。最後に廣田先生は必竟ハイドリオタフィアだと思つた。

さうすると、廣田先生がむくりと起きた　首丈持ち上げて、三四郎を見た。

「何時來たの」と聞いた。三四郎はもつと寐て御出でなさいと勸めた。實際退屈ではなかつたのである。先生は、

「いや起きる」と云つて起きた。それから例の如く哲學の烟を吹き始めた。烟が沈默の間に、棒になつて出る。

「難有う。書物を返します」

「あゝ。――讀んだの」

「讀んだけれどもよく解らんです。第一標題が解らんです」

「ハイドリオタフィア」

「何の事ですか」

「何の事か僕にも分らない。兎に角希臘語らしいね」

三四郎はあとを尋ねる勇氣が拔けて仕舞つた。先生は欠を一つした。

「あゝ眠かつた。好い心持に寐た。面白い夢を見てね」

先生は女の夢だと云つてゐる。それを話すのかと思つたら、湯に行かないかと云ひ出した。二人は手拭を提げて出掛けた。

湯から上がつて、二人が板の間に据ゑてある器械の上に乗つて、身長を測つて見た。廣田先生は五尺六寸ある。三四郎は四寸五分しかない。

「まだ延びるかも知れない」と廣田先生が三四郎に云つた。

「もう駄目です。三年来この通りです」と三四郎が答へた。

「左うかな」と先生が云つた。自分を餘つ程子供の様に考へてゐるのだと三四郎は思つた。家へ歸つた時、先生が、用が無ければ話して行つても構はないと、書齋の戸を開けて、自分が先へ這入つた。三四郎は兎に角、例の用事を片附ける義務があるから、續いて這入つた。

「佐々木は、まだ歸らない様ですな」

「今日は遅くなるとか云つて斷つてゐた。此間から演藝會の事で大分奔走してゐる様だが、世話好きなんだか、騒ぎ廻る事が好きなんだか、一向要領を得ない男だ」

「親切なんですよ」

「目的丈は親切な所も少しあるんだが、何しろ、頭の出来が甚だ不親切だものだから、碌な事は仕出かさない。一寸見ると、要領を得てゐる。寧ろ得過ぎてゐる。けれども終局へ行くと、何の爲に要領を得て

来たのだか、丸で滅茶苦茶になつて仕舞ふ。いくら云つても直さないから放つて置く。あれは悪戯をしに世の中へ生れて来た男だね」

三四郎は何とか辯護の道がありさうなものだと思つたが、現に結果の悪い實例があるんだから、仕様がない。話を轉じた。

「あの新聞の記事を御覧でしたか」

「えゝ、見た」

「新聞に出る迄は些とも御存じなかつたのですか」

「いゝえ」

「御驚きなすつたでせう」

「驚くつて――夫は全く驚かない事もない。けれども世の中の事はみんな、彼んなものだと思つてるから、若い人程正直に驚きはしない」

「御迷惑でせう」

「迷惑でない事もない。けれども僕位世の中に住み古した年配の人間なら、あの記事を見て、すぐ事實だと思ひ込む人計りもないから、矢つ張り若い人程正直に迷惑とは感じない。與次郎は社員に知つてるものがあるから、其男に頼んで眞相を書いて貰ふの、あの投書の出所を探して制裁を加へるの、自分の雜誌で

充分反駁を探しますのと、[illegible]で下らない事を色々云ふが、そんな手數をするならば、始めから餘計な事を書かない方が、いくら好いか分りやしない」

「全く先生の爲を思つたからです。惡氣ぢやないです」

「惡氣で遣られて堪るものか。第一僕の爲に運動をするものがさ、僕の意向も聞かないで、勝手な方法を講じたり、勝手な方針を立てた日には、最初から僕の存在を侮辱してゐると同じ事ぢやないか。存在を無視されてゐる方が、どの位體面を保つに都合が好いか知れやしない」

三四郎は仕方なしに默つてゐた。

「さうして、偉大なる暗闇なんて愚にも附かないものを書いて。——新聞には君が書いたとしてあるが、實際は佐々木が書いたんだつてね」

「左うです」

「昨夜佐々木が自白した。君こそ迷惑だらう。あんな馬鹿な文章は佐々木より外に書くものはありやしない。僕も讀んで見た。實質もなければ、品位もない、丸で救世軍の太鼓の樣なものだ。讀者の惡感情を引き起す爲に、書いてるとしか思はれやしない。徹頭徹尾故意だけで成り立つてゐる。常識のあるものが見れば、どうしても爲にする所があつて起稿したものだと判定がつく。あれぢや僕が門下生に書かしたと云はれる筈だ。あれを讀んだ時には、成程新聞の記事は尤もだと思つた」

廣田先生は夫で話しを切つた。鼻から例によつて哲學を吐く。與次郎は此烟の出方で、先生の氣分を窺ふ事が出來ると云つてゐる。濃く眞直に迸る時は、哲學の絶頂に達した際で、緩く崩れる時は、心氣平穩のことによると冷やかされる恐れがある。烟が、鼻の下に低徊して、髭に未練がある樣に見える時は、冥想に入る。もしくは詩的感興がある。尤も恐るべきは孔の先の渦である。渦が出ると、大變に叱られる。與次郎の云ふ事だから、三四郎は無論當てにはしない。然し此際だから氣を付けて烟の形狀を眺めてゐた。すると與次郎の云つた樣な判然たる烟は些とも出て來ない。其代り出るものは、大抵な資格を具へてゐる。

三四郎が何時迄立つても、恐れ入つた樣に控へてゐるので、先生は又話し始めた。

「濟んだ事は、もう已めよう。佐々木も昨夜悉く謝つて仕舞つたから、今日あたりは又晴々して例の如く飛んで歩いてゐるだらう。いくら陰で不心得を責めたつて、當人が平氣で切符なんぞ賣つて歩いて居ては仕方がない。夫よりもつと面白い話しを仕よう」

「えゝ」

「僕がさつき晝寐をしてゐる時、面白い夢を見た。それはね、僕が生涯にたつた一遍逢つた女に、突然夢の中で再會したと云ふ小說染みた御話だが、其方が、新聞の記事より聞いてゐても愉快だよ」

「えゝ。何んな女ですか」

「十二三の綺麗な女だ。顔に黒子がある」
三四郎は十二三と聞いて少し失望した。
「何時頃御逢ひになつたのですか」
「二十年許り前」
三四郎は又驚いた。
「能く其女と云ふ事が分りましたね」
「夢だよ。夢だから分るさ。さうして夢だから不思議で好い。僕が何でも大きな森の中を歩いて居る。あの色の褪めた夏の洋服を着てね、あの古い帽子を被つて。――さう其時は何でも、六づかしい事を考へてゐた。凡て宇宙の法則は變らないが、法則に支配される凡て宇宙のものは必ず變る。すると其法則は、物の外に存在してゐなくてはならない。――覚めて見ると詰らないが夢の中だから真面目にそんな事を考へて森の下を通つて行くと、突然其女に逢つた。行き逢つたのではない。向ふは凝と立つてゐた。見ると、昔の通りの顔をしてゐる。昔の通りの服装をしてゐる。髪も昔の髪である。黒子も無論あつた。つまり二十年前見た時と少しも變らない十二三の女である。僕が其女に、あなたは少しも變らないといふと、其女は僕に大變年を御取りなすつたと云ふ。次に僕が、あなたは何うして、さう變らずにゐるのかと聞くと、此顔の年、此服装の月、此髪の日が一番好きだから、かうして居ると云ふ。それは何時の事かと聞くと、

二十年前、あなたに御目にかゝつた時だといふ。それなら僕は何故斯う年を取つたんだらうと、自分で不思議がると、女が、あなたは、其時よりも、もつと美しい方へ方へと御移りなさりたがるからだと教へて呉れた。其時僕が女に、あなたは畫だと云ふと、女が僕に、あなたは詩だと云つた」

「それから何うしました」と三四郎が聞いた。

「それから君が來たのさ」と云ふ。

「二十年前に逢つたと云ふのは夢ぢやない、本當の事實なんですか」

「本當の事實なんだから面白い」

「何處で御逢ひになつたんですか」

先生の鼻は又烟を吹き出した。其烟を眺めて、當分默つてゐる。やがて斯う云つた。

「憲法發布は明治二十二年だつたね。其時森文部大臣が殺された。君は覺えてゐまい。幾年かな君は。さう、それぢや、まだ赤ん坊の時分だ。僕は高等學校の生徒であつた。大臣の葬式に參列するのだと云つて、大勢鐵砲を擔いで出た。墓地へ行くのだと思つたら、さうではない。體操の教師が竹橋內へ引張つて行つて、路傍へ整列さした。我々は其處へ立つたなり、大臣の柩を送る事になつた。名は送るのだけれども、實は見物したのも同然だつた。其日は寒い日でね、今でも覺えてゐる。動かずに立つてゐると、靴の下で足が痛む。隣の男が僕の鼻を見ては赤い赤いと云つた。やがて行列が來た。何でも長いものだつた。寒い

眼の前を靜かな馬車や俥が何臺となく通る。其中に今話した小さな娘がゐた。今、其時の模樣を思ひ出さうとしても、ぼうとして迚も明瞭に浮かんで來ない。たゞこの女丈は覺えてゐる。夫も年を經つに從つて段々薄らいで來た。今では思ひ出す事も滅多にない。今日夢を見る前迄は、丸で忘れてゐた。けれども其當時は頭の中へ燒き附けられた樣に熱い印象を持つてゐた。――妙なものだ」

「それから其女には丸で逢はないんですか」

「丸で逢はない」

「じや、何處の誰だか全く分らないんですか」

「無論分らない」

「尋ねて見なかつたですか」

「いゝや」

「先生はそれで……」と云つたが急に逼へた。

「夫で？」

「夫で結婚をなさらないんですか」

先生は笑ひ出した。

「それ程浪漫的な人間ぢやない。僕は君よりも遙かに散文的に出來てゐる」

「然し、もし其女が來たら御貰ひになつたでせう」
「さうさね」と一度考へた上で「貰つたらうね」と云つた。三四郎は氣の毒な樣な顏をしてゐる。すると先生が又話し出した。
「その爲に獨身を餘儀なくされたといふと、僕が其女の爲に不具にされたと同じ事になる。けれども、人間には生れ附いて、結婚の出來ない不具もあるし。其外色々結婚のしにくい事情を持つてゐるものがある」
「そんなに結婚を妨げる事情が世の中に澤山あるでせうか」
先生は烟の間から、凝と三四郎を見てゐた。
「ハムレットは結婚したくなかつたんだらう。ハムレットは一人しか居ないかも知れないが、あれに似た人は澤山ゐる」
「例へばどんな人です」
「例へば」と云つて、先生は默つた。烟がしきりに出る。「例へば、こゝに一人の男がある。父は早く死んで、母一人を頼みに育つたとする。其母が又病氣に罹つて、愈息を引き取るといふ間際に、自分が死んだら誰某の世話になれといふ。子供が會つた事もない、知りもしない人を指名する。理由を聞くと、母が何とも答へない。強ひて聞くと矢張り誰某が御前の本當の御父さんだと微かな聲で云つた。――まあ話だが、さういふ母を持つた子がゐるとする。すると、其子が結婚に信仰を置かなくなるのは無論だ

それが、幾何でもゐる。大抵は若い男女である。一日目に與次郎が、三四郎に向つて大成功と叫んだ。三四郎は二日目の切符を持つてゐた。與次郎が廣田先生を誘つて行けと云ふ。切符が違ふだらうと聞けば、無論違ふと云ふ。然し一人で放つて置くと、決して行く氣遣ひがないから、君が寄つて引つ張り出すのだと理由を說明して聞かせた。三四郎は承知した。

夕刻に行つて見ると、先生は明るい洋燈の下に大きな本を擴げてゐた。

「御出でになりませんか」と聞くと、先生は少し笑ひながら、無言の儘首を横に振つた。子供の樣な所作をする。然し三四郎には、それが學者らしく思はれた。口を利かない所が床しく思はれたのだらう。三四郎は中腰になつて、ぼんやりしてゐた。先生は斷つたのが氣の毒になつた。

「君行くなら、一所に出よう。僕も散歩ながら、其處迄行くから」

先生は黑い廻套を着て出た。懷手らしいが分らない。空が低く垂れてゐる。星の見えない寒さである。

「雨になるかも知れない」

「降ると困るでせう」

「出入りにね。日本の芝居小屋は下足があるから、天氣の好い時ですら大變な不便だ。それで小屋の中は、空氣が通はなくつて、煙草が烟つて、頭痛がして、——よく、みんな、彼で我慢が出來るものだ」

「ですけれども、眞逆戶外で遣る譯にも行かないからでせう」

千人を容れる席があつたと云ふ事も聞いた。それは小さい方である。尤も大きいのは、五萬人を容れたと云ふ事も聞いた。入場券は象牙と鉛と二通りあつて、何れも賞牌見たやうな恰好で、表に模様が打ち出してあつたり、彫刻が施してあると云ふ事も聞いた。先生は其入場券の價迄知つてゐた。一日切の小芝居は二十錢で、三日續きの大芝居は三十五錢だと云つた。三四郎がへえ、へえと感心してゐるうちに、演藝會場の前へ出た。

盛に電燈が點いてゐる。入場者は續々寄つて來る。與次郎の云つたよりも以上の景氣である。

「どうです、折角だから御這入りになりませんか」

「いや這入らない」

先生は又暗い方へ向いて行つた。

三四郎は、しばらく先生の後影を見送つてゐたが、あとから、車で乘り附ける人が、下足の札を受け取る手間も惜しさうに、急いで這入つて行くのを見て、自分も足早に入場した。前へ押されたと同じ事である。

入口に四五人用のない人が立つてゐる。そのうちの袴を着けた男が入場券を受け取つた。其男の肩の上から場内を覗いて見ると、中は急に廣くなつてゐる。且甚だ明るい。三四郎は眉に手を加へない許りにして、導かれた席に着いた。狹い所に割り込みながら、四方を見廻すと、人間の持つて來た色で眼がちらち

らする。自分の眼を動かすから詰らないではない。無數の人間に附着した色が、廣い空間で、絶えず各自に、且つ勝手に、動くからである。

舞臺ではもう始まつてゐる。出て來る人物が、みんな冠を被つて、沓を穿いて居た。そこへ長い輿を擔いで來た。それを舞臺の眞中で留めたものがある。輿を卸すと、中から又一人あらはれた。其男が刀を拔いて、輿を突き返したのと斬り合ひを始めた。――三四郎には何のことか丸で分らない。尤も與次郎から梗概を聞いた事はある。けれども好い加減に聞いてゐた。見れば分るだらうと考へて、うん宜しいと云つてゐた。所が見れば茫と其意を得ない。三四郎の記憶にはたゞ入鹿の大臣といふ名前が殘つてゐる。三四郎はどれが入鹿だらうと考へた。それは到底見込が附かない。そこで舞臺全體を入鹿の積りで眺めてゐた。すると冠でも、沓でも、筒袖の衣服でも、使ふ言葉でも、何となく入鹿臭くなつて來た。實を云ふと三四郎には確然たる入鹿の觀念がない。日本歴史を習つたのが、あまりに遠い過去であるから、古い入鹿の事もつい忘れて仕舞つた。推古天皇の時の樣でもある。欽明天皇の御代でも差支へない氣がする。應神天皇や聖武天皇では決してないと思ふ。三四郎はたゞ入鹿じみた心持を持つてゐる丈である。芝居を見るには夫で澤山だと考へて、唐めいた裝束や背景を眺めてゐた。然し筋はちつとも解らなかつた。其うち幕になつた。

幕になる少し前に、隣りの男が、其の又隣りの男に、登場人物の聲が、六疊敷で、親子差向ひの談話の樣だ。

丸で訓練がないと非難してゐた。そつちの隣の男は登場人物の腰が据らない。悉くひよろ／＼してゐると訴へてゐた。二人は登場人物の本名をみんな暗んじてゐる。三四郎は耳を傾けて二人の談話を聞いてゐた。二人共立派な服装をしてゐる。大方有名な人だらうと思つた。けれどももし与次郎に此談話を聞かせたら定めし反対するだらうと思つた。其時後の方で旨い旨い中々旨いと大きな声を出したものがある。隣の男は二人とも後を振り返つた。それぎり話しを已めて仕舞つた。そこで幕が下りた。

彼所此所に席を立つものがある。花道から出口へ掛けて、人の影が頗る忙しい。三四郎は中腰になつて、四方をぐるりと見廻した。来てゐる筈の人は何処にも見えない。本当を云ふと演芸中にも出来る丈は気を附けてゐた。それで知れないから、幕になつたらばと内々心当にしてゐたのである。三四郎は少し失望した。已むを得ず眼を正面に帰した。

隣の連中は余程世間が広い男達と見えて、右左を顧みて、彼所には誰がゐる。此所には誰がゐると頻りに知名の人の名を口にする。中には離れながら、互に挨拶をしたのも一二人ある。三四郎は御蔭で是等知名な人の細君を少し覚えた。其中には新婚した許りのものもあつた。是は隣の一人にも珍らしかつたと見えて、其男はわざ／＼眼鏡を拭き直して、成程々々と云つて見てゐた。

すると、幕の下りた舞台の前を、向うの端から此方へ向けて、小走りに与次郎が走けて来た。三分の二程の所で留まつた。少し及び腰になつて、土間の中を覗き込みながら、何か話してゐる。三四郎はそれを

見當に視線を附けた。——舞臺の端に立つた與次郎から一直線に二三間離して美禰子の横顔が見えた。

其傍にゐる男は背中を三四郎に向けてゐる。三四郎は心のうちに、此男が何かの拍子に、どうかして此方を向いて呉れゝば好いと念じてゐた。旨い具合に其男は立つた。坐り疲れたと見えて、椽側の仕切りに腰を掛けて、場内を見廻し始めた。其時三四郎は明らかに野々宮さんの廣い額と大きな眼を認める事が出來た。野々宮さんが立つと共に、美禰子の後にゐたよし子の姿も見えた。三四郎は此三人の外に、まだ連が居るか居ないかを確めようとした。けれども遠くから見ると、たゞ人がぎつしり詰まつてゐる丈で、連と云へば土間全體が連と見える迄だから仕方がない。美禰子と與次郎の間には、時々談話が交換されつゝあるらしい。野々宮さんも折々口を出すと思はれる。

すると突然原口さんが幕の間から出て來た。與次郎と並んで、しきりに土間の中を覗き込む。口は無論動かしてゐるのだらう。野々宮さんは相圖の樣な首を竪に振つた。其時原口さんは後から、平手で、與次郎の背中を叩いた。與次郎はくるりと引つ繰り返つて、幕の裾を潜つて何處かへ消え失せた。原口さんは、舞臺を降りて、人と人との間を傳はつて、野々宮さんの傍迄來た。野々宮さんは、腰を立てゝ原口さんを通した。原口さんはぽかりと人の中へ飛び込んだ。美禰子とよし子のゐる邊で見えなくなつた。

此連中の一擧一動を演藝以上の興味を以て注意してゐた三四郎は、此時急に原口流の所作が羨ましくなつた。あゝ云ふ便利な方法で人の傍へ寄る事が出來ようとは毫も思ひ付かなかつた。自分も一つ眞似て見

ようかしらと思つた。然し眞似ると云ふ自覺が、旣に實行の勇氣を挫いた上に、もう入る席は、いくら詰めても、六づかしからうといふ遠慮が手傳つて、三四郎の尻に依然として、故の席を去り得なかつた。

其うち幕が開いて、ハムレットが始まつた。三四郎は廣田先生のうちで西洋の何とかいふ名優の扮したハムレットの寫眞を見た事がある。今三四郎の眼の前にあらはれたハムレットは、是と略同樣な服裝をしてゐる。服裝ばかりではない。顏迄似てゐる。兩方共八の字を寄せてゐる。

此ハムレットは動作が全く輕快で、心持が好い。舞臺の上を大いに動いて、又大いに動かせる。能掛りの入鹿とは大變趣を異にしてゐる。ことに、ある時、ある場合に、舞臺の眞中に立つて、手を擴げて見たり、空を睨んで見たりするときは、觀客の眼中に外のものは一切入り込む餘地のない位强烈な刺激を與へる。

其代り臺詞は日本語である。西洋語を日本語に譯した日本語である。口調には抑揚がある。節奏もある。ある所は能辯過ぎると思はれる位流暢に出る。文章も立派である。それでゐて、氣が乘らない。三四郎は、ハムレットがもう少し日本人じみた事を云つて呉れゝば好いと思つた。御母さん、それぢや御父さんに濟まないぢやありませんかと云ひさうな所で、急にアポロ抔を引合ひに出して、呑氣に遣つて仕舞ふ。それでゐて顏附は親子とも泣き出しさうである。然し三四郎は此矛盾をたゞ朧氣に感じたのみである。決して詰らないと思ひ切る程の勇氣は出なかつた。

塞つて、ハムレットに飽きた時は、美禰子の方を見てゐた。美禰子が人の影に隠れて見えなくなる時は、ハムレットを見てゐた。

ハムレットがオフエリヤに向つて、尼寺へ行け尼寺へ行けと云ふ所へ来た時、三四郎は不図広田先生のことを考へ出した。広田先生は云つた。――ハムレットの様なものに結婚が出来るか。――成程本で読むと左うらしい。けれども、芝居では結婚しても好ささうである。好く思案して見ると、尼寺へ行けとの云ひ方が悪いのだらう。其証拠には尼寺へ行けと云はれたオフエリヤが些とも気の毒にならない。

幕が又下りた。美禰子とよし子が席を立つた。三四郎もつゞいて立つた。廊下迄来て見ると、二人は廊下の中程で、男と話しをしてゐる。男は廊下から出入りの出来る左側の席の戸口に半分身体を出した。男の横顔を見た時、三四郎は後へ引き返した。席へ返らずに下足を取つて表へ出た。

本来は暗い夜である。人の力で明るくした所を通り越すと、雨が落ちてゐるやうに思へる。風が枝を鳴らす。三四郎は急いで下宿に帰つた。

夜半から降り出した。三四郎は床の中で、雨の音を聞きながら、尼寺へ行けと云ふ一句を柱にして、其周囲にぐる〳〵彷徨した。広田先生も起きてゐるかも知れない。先生はどんな柱を抱いてゐるだらう。与次郎は偉大なる暗闇の中に正躰なく埋まつてゐるに違ない。……

明日は少し熱がする。頭が重いから寝てゐた。午飯は床の上に起き直つて食つた。又一寝入りすると

度は汗が出た。氣がうとくなる。そこへ威勢よく與次郎が這入つて来た。昨夕も見えず、今朝も講義に出ない様だから何うしたかと思つて訪ねたと云ふ。三四郎は禮を述べた。

「なに、昨夕は行つたんだ。行つたんだ。君が舞臺の上に出て来て、美禰子さんと、遠くで話をしてゐたのも、ちやんと知つてゐる」

三四郎は少し酔つた様な心持である。口を利き出すと、つる／＼と出る。與次郎は手を出して、三四郎の額を抑へた。

「大分熱がある。薬を飲まなくつちや不可ない。風邪を引いたんだ」

「演藝場があまり暑過ぎて、明る過ぎて、さうして外へ出ると、急に寒過ぎて、暗過ぎるからだ。あれは可くない」

「可けないたつて、仕方がないぢやないか」

「仕方がないつたつて、可けない」

三四郎の言葉は段々短かくなる。與次郎が好い加減にあしらつてゐるうちに、すう／＼寐て仕舞つた。一時間程して又眼を開けた。與次郎を見て、

「君、其處にゐるのか」と云ふ。今度は平生の三四郎の様である。氣分はどうかと聞くと、頭が重いと答へた丈である。

「風邪だらう」
「風邪だらう」
南方で同じ事を云つた。しばらくしてから、三四郎が與次郎に聞いた。
「君、此間美禰子さんの事を知つてるかと僕に尋ねたね」
「美禰子さんの事を？何處で？」
「學校で」
「學校で？何時」
與次郎はまだ思ひ出せない樣子である。三四郎は已むを得ず、其前後の當時を詳しく說明した。與次郎は、
「成程そんな事が有つたかも知れない」と云つてゐる。三四郎は隨分無責任だと思つた。與次郎も少し氣の毒になつて、考へ出さうとした。やがて斯う云つた。
「ぢや、何ぢやないか。美禰子さんが嫁に行くと云ふ話ぢやないか」
「極まつたのか」
「極まつた樣に聞いたが、能く分らない」
「野々宮さんの所か」

「いや、野々宮さんぢやない」
「ぢや……」と云ひ掛けて已めた。
「君、知つてるのか」
「知らない」と云ひ切つた。すると與次郎が少し前へ乘り出して來た。
「何うも能く分らない。不思議な事があるんだが。もう少し經たないと、何うなるんだか見當が附かない」
三四郎は其不思議な事を、すぐ話せば好いと思ふのに、與次郎は平氣なもので、一人で呑み込んで、一人で不思議がつてゐる。三四郎は少時我慢してゐたが、とう／＼焦れつたくなつて、與次郎に、美禰子に關する凡ての事實を隱さずに話して呉れと請求した。與次郎は笑ひ出した。さうして慰藉の爲か何だか、飛んだ所へ話頭を持つて行つて仕舞つた。
「馬鹿だなあ、あんな女を思つて。思つたつて仕方がないよ。第一、君と同い年位ぢやないか。同い年位の男に惚れるのは昔の事だ。八百屋お七時代の戀だ」
三四郎は默つてゐた。けれども與次郎の意味は能く分らなかつた。
「何故と云ふに。二十前後の同じ年の男女を二人並べて見ろ。女の方が萬事上手だあね。男は馬鹿にされる許りだ。女だつて、自分の輕蔑する男の所へ嫁に行く氣は出ないやね。尤も自分が世界で一番偉いと

思つてる女は標準外だ。輕蔑する所へ行かなければ獨身で暮らすより外に方法はないんだから。よく金持の娘や何かにそんなのがあるぢやないか、望んで嫁に來て置きながら、亭主を輕蔑してゐるのが。美禰子さんはそれよりずつと偉い。其代り、夫として尊敬の出來ない人の所へは始めから行く氣はないんだから、相手になるものは其氣で居なくつちや不可ない。さう云ふ點で君だの僕だのは、あの女の夫になる資格はないんだよ」

三四郎はとう／＼與次郎と一所にされて仕舞つた。然し依然として默つてゐた。

「そりや君だつて、僕だつて、あの女より遙かに偉いさ、御互に是でも、なあ。けれども、もう五六年經たなくつちや、其偉さ加減が彼の女の眼に映つて來ない。しかして、かの女は五六年凝としてゐる氣遣ひはない。從つて、君があの女と結婚する事は風馬牛だ」

與次郎は風馬牛と云ふ熟字を妙な所へ使つた。さうして一人で笑つてゐる。

「なに、もう五六年もすると、あれより、ずつと上等なのが、あらはれて來るよ。日本ぢや今女の方が餘つてゐるんだからね。風邪なんか引いて熱を出したつて始まらない。――なに世の中は廣いから、心配するがものはない。實は僕にも色々あるんだが、僕の方であんまり煩いから、御用で長崎へ出張すると云つてね」

「何だ、それは」

「何だつて、僕の關係した女さ」
三四郎は驚いた。
「なに、女だつて、君なんぞの曾て近寄つた事のない種類の女だよ。それをね、長崎へ黴菌の試驗に出張するから當分駄目だつて斷つちまつた。所が其女が林檎を持つて停車場まで送りに行くと云ひ出したんで、僕は弱つたね」
三四郎は益驚いた。驚きながら聞いた。
「それで、何うした」
「何うしたか知らない。林檎を持つて、停車場に待つてゐたんだらう」
「苛い男だ。よく、そんな惡い事が出來るね」
「惡い事で、可哀相な事だとは知つてるけれども、仕方がない。始めから次第々々に、そこ迄運命に持つて行かれるんだから。實はとうの前から僕が醫科の選科生になつてゐたんだからなあ」
「なんで、そんな餘計な嘘を吐くんだ」
「そりや、又それ〳〵事情のある事なのさ。それで、女が病氣の時に、診斷を頼まれて困つた事もある」
三四郎は可笑しくなつた。
「其時は舌を見て、胸を叩いて、好い加減に胡魔化したが、其次に病院へ行つて、見て貰ひたいが好い

かと聞かれたには閉口した」
三四郎はとう／＼笑ひ出した。與次郎は、
「さう云ふ事も澤山あるから、まあ安心するが好からう」と云つた。何の事だか分らない。然し愉快になつた。
與次郎は其時始めて、美禰子に關する不思議を說明した。與次郎の云ふ所によると、よし子にも結婚の話しがある。それから美禰子にもある。それ丈ならば好いが、よし子の行く所と、美禰子の行く所が、同じ人らしい。だから不思議なのださうだ。
三四郎も少し馬鹿にされた樣な氣がした。然しよし子の結婚丈は慥かである。現に自分が其話しを傍で聞いてゐた。ことによると其話しを美禰子のと取り違へたのかも知れない。けれども美禰子の結婚も、全く噓ではないらしい。三四郎は判然した所が知りたくなつた。序だから、與次郎に敎へて吳れと賴んだ。與次郎は譯なく承知した。よし子を見舞に來る樣にしてやるから、直かに聞いて見ろといふ。旨い事を考へた。
「だから、藥を飲んで、待つて居なくつては不可ない」
「病氣が癒つても、寐て待つてゐる」
二人は笑つて別れた。歸りがけに與次郎が、近所の醫者に來て貰ふ手續をした。

晩になつて、醫者が來た。三四郎は自分で醫者を迎へた覺えがないんだから、始めは少し狼狽した。そのうち脈を取られたので漸く氣が附いた。年の若い丁寧な男である。三四郎は代診と鑑定した。五分の後病症はインフルエンザと極まつた。今夜頓服を飲んで、成る可く風に當たらない樣にしろと云ふ注意である。

翌日眼が覺めると、頭が大分輕くなつてゐる。寐てゐれば、殆ど常態に近い。たゞ枕を離れると、ふら／＼する。下女が來て、大分部屋の中が熱臭いと云つた。三四郎は飯も食はずに、仰向けに天井を眺めてゐた。時々うと／＼眠くなる。明らかに熱と疲れとに囚はれた有樣である。三四郎は、囚はれた儘、逆らはずに、寐たり覺めたりする間に、自然に從ふ一種の快感を得た。病症が輕いからだと思つた。

四時間、五時間と經つうちに、そろ／＼退屈を感じ出した。しきりに寐返りを打つ。外は好い天氣である。障子に當たる日が、次第に影を移して行く。雀が鳴く。三四郎は今日も與次郎が遊びに來て呉れゝば好いと思つた。

所へ下女が障子を開けて、女の御客樣だと云ふ。よし子が、さう早く來ようとは待ち設けなかつた。與次郎丈に敏捷い働きをした。寐た儘、開け放しの入口に眼を着けてゐると、やがて高い姿が敷居の上へあらはれた。今日は紫の袴を穿いてゐる。足は兩方共廊下にある。一寸這入るのを躊躇した樣子が見える。三四郎は肩を床から上げて、「入らつしやい」と云つた。

よし子は障子を閉てて、枕元へ坐つた。六疊の座敷が、取り亂してある上に、今朝は掃除をしないから、猶狹苦しい。女は、三四郎に、
「寐て入らつしやい」と云つた。三四郎は又頭を枕へ着けた。自分丈は穩やかである。
「臭くはないですか」と聞いた。
「えゝ少し」と云つたが、別段臭い顏もしなかつた。「熱が御有りなの。何なんでせう、御病氣は。御醫者は入らしつて」
「醫者は昨夕來ました。インフルエンザださうです」
「今朝早く佐々木さんが御出でになつて、小川が病氣だから見舞に行つて遣つて下さい。何病氣だか分らないが、何でも輕くはない樣だつて仰しやるものだから、私も美禰子さんも吃驚したの」
與次郎が又少し法螺を吹いたと見える。惡く云へば、よし子を釣り出した樣なものである。三四郎は人が好いから、氣の毒でならない。「どうも難有う」と云つて寐てゐる。よし子は風呂敷包の中から、蜜柑の籠を出した。
「美禰子さんの御注意があつたから買つて來ました」と正直な事を云ふ。どつちの御見舞だか分らない。三四郎はよし子に對して禮を述べて置いた。
「美禰子さんも上がる筈ですが、此頃少し忙しいものですから――どうぞ宜しくつて……」

「何か特別に忙しいことが出來たのですか」

「えゝ。出來たの」と云つた。大きな黒い眼が、枕に着いた三四郎の顔の上に落ちてゐる。三四郎は下から、よし子の蒼白い額を見上げた。始めて此女に病院で逢つた昔を思ひ出した。今でも物憂げに見える。同時に快濶である。頼みになるべき凡ての慰藉を三四郎の枕の上に齎して來た。

「蜜柑を剝いて上げませうか」

女は青い葉の間から、果物を取り出した。渇いた人は香に迸る甘い露を、したゝかに飲んだ。

「美味しいでせう。美禰子さんの御見舞よ」

「もう澤山」

女は袂から白い手帛を出して手を拭いた。

「野々宮さん、あなたの御縁談はどうなりました」

「あれ限りです」

「美禰子さんにも縁談の口があるさうぢやありませんか」

「えゝ、もう纒まりました」

「誰ですか、先は」

「私を貰ふと云つた方なの。ほゝゝ可笑しいでせう。美禰子さんの御兄さんの御友達よ。私近い内に

又兄と一所に家を持ちますの。美禰子さんが行つて仕舞ふと、もう御厄介になつてる譯に行かないから」
「あなたは御嫁には行かないんですか」
「行きたい所がありさへすれば行きますわ」
女は斯う云ひ棄てて心持よく笑つた。まだ行きたい所がないに極まつてゐる。
三四郎は其日から四日程床を離れなかつた。五日目に怖々ながら湯に入つて、鏡を見た。亡者の相がある。思ひ切つて床屋へ行つた。其明くる日は日曜である。
朝食後、襯衣を重ねて、外套を着て、寒くない樣にして、美禰子の家へ行つた。玄關によし子が立つて、今沓脱へ降りようとしてゐる。今兄の所へ行く所だと云ふ。美禰子はゐない。三四郎は一所に表へ出た。
「もう悉皆好いんですか」
「難有う。もう癒りました。――里見さんは何處へ行つたんですか」
「兄さん？」
「いゝえ、美禰子さんです」
「美禰子さんは會堂」
美禰子の會堂へ行く事は始めて聞いた。何處の會堂か敎へて貰つて、三四郎はよし子に別れた。横町を三つ程曲がると、すぐ前へ出た。三四郎は全く耶蘇敎に緣のない男である。會堂の中は覗いて見た事もな

い。前へ立つて、建物を眺めた。説教の掲示を讀んだ。鐵柵の所を往つたり來たりした。ある時は寄り掛かつて見た。三四郎は兎も角もして、美禰子の出てくるのを待つ積りである。

やがて唱歌の聲が聞こえた。讚美歌といふものだらうと考へた。締め切つた高い窓のうちの出來事である。音量から察すると餘程の人數らしい。美禰子の聲もそのうちにある。三四郎は耳を傾けた。歌は歇んだ。風が吹く。三四郎は外套の襟を立てた。空に美禰子の好きな雲が出た。

かつて美禰子と一所に秋の空を見た事もあつた。所は廣田先生の二階であつた。田端の小川の縁に坐つた事もあつた。其時も一人ではなかつた。迷羊。迷羊。雲が羊の形をしてゐる。

忽然として會堂の戶が開いた。中から人が出る。人は天國から浮世へ歸る。美禰子は終りから四番目であつた。縞の吾妻コートを着て、俯向いて上り口の階段を降りて來た。寒いと見えて、肩を窄めて、兩手を前で重ねて、出來る丈外界との交渉を少なくしてゐる。美禰子は此の凡てに揚がらざる態度を門際迄持續した。其時、往來の忙しさに、始めて氣が付いた樣に顏を上げた。三四郎の脱いだ帽子の影が、女の眼に映つた。二人は説教の掲示のある所で、互に近寄つた。

「何うなすつて」

「今御宅迄一寸出た所です」

「さう、ぢや入らつしやい」

女は半ば歩を移しかけた。相変らず低い下駄を穿いてゐる。男はわざと会堂の垣に身を寄せた。
「此処で御目に掛かればそれで好い。先刻から、あなたの出て来るのを待つてゐた」
「御這入りになれば好いのに。寒かつたでせう」
「寒かつた」
「御風邪はもう好いの。大事になさらないと、ぶり返しますよ。まだ顔色が好くない様ね」
男は返事をしずに、外套の隠袋から半紙に包んだものを出した。
「拝借した金です。永々難有う。返さう〱と思つて、つい遅くなつた」
美禰子は一寸三四郎の顔を見たが、其儘逆らはずに、紙包みを受け取つた。然し手に持つたなり、仕舞はずに眺めてゐる。三四郎もそれを眺めてゐる。言葉が少しの間切れた。やがて、美禰子が云つた。
「あなた、御不自由ぢや無くつて」
「いゝえ、此間から其積で国から取り寄せて置いたのだから、何うか取つて下さい」
「さう。ぢや頂いて置きませう」
女は紙包みを懐へ入れた。其手を吾妻コートから出した時、白い手帛を持つてゐた。鼻の所へ宛てて、三四郎を見てゐる。手帛を嗅ぐ様子でもある。やがて、其手を不意に延ばした。手帛が三四郎の顔の前へ来た。鋭い香がぷんとする。

「ヘリオトロープ」と女が靜かに云つた。三四郎は思はず顏を後へ引いた。ヘリオトロープの罎。四丁目の夕暮。迷羊。迷羊。空には高い日が明らかに懸かる。

「結婚なさるさうですね」

美禰子は白い手帛を袂へ落とした。

「御存じなの」と云ひながら、二重瞼を細目にして、男の顏を見た。三四郎を遠くに置いて、却て遠くにゐるのを氣遣ひ過ぎた眼附である。其癖眉丈は明確落ちついてゐる。三四郎の舌が上顎へ密着いて仕舞つた。

女はやゝしばらく三四郎を眺めた後、聞き兼ねる程の嘆息をかすかに漏らした。やがて細い手を濃い眉の上に加へて云つた。

「われは我が愆を知る。我が罪は常に我が前にあり」

聞き取れない位な聲であつた。それを三四郎は明らかに聞き取つた。三四郎と美禰子は斯樣にして分かれた。下宿へ歸つたら母からの電報が來てゐた。開けて見ると、何時立つとある。

十三

原口さんの畫は出來上がつた。丹青會は之を一室の正面に懸けた。さうして其前に長い腰掛を置いた。

休む爲でもある。畫を見る爲でもある。休み且味はふ爲でもある。丹青會はかうして、此大作に低徊する多くの觀覽者に便利を與へた。特別の待遇である。畫が特別の出來だからと云ふ。或は人の目を惹く題だからとも云ふ。少數のものは、あの女を描いたからだと云つた。會員の一二は全く大きいからだと辯解した。大きいには違ひない。幅五寸に餘る金の縁を附けて見ると、見違へる樣に大きくなつた。

原口さんは開會の前日檢分の爲一寸來た。腰掛に腰を卸ろして、久しい間烟管を啣へて眺めてゐた。やがて、ぬつと立つて、場内を一順丁寧に廻つた。夫から又故の腰掛へ歸つて、第二の烟管を緩り吹かした。

「森の女」の前には開會の當日から人が一杯集つた。折角の腰掛は無用の長物となつた。たゞ疲れたものが、畫を見ない爲に休んでゐた。それでも休みながら「森の女」の評をしてゐるものがある。

美禰子は夫に連れられて二日目に來た。原口さんが案内をした。「森の女」の前へ出た時、原口さんは「何うです」と二人を見た。夫は「結構です」と云つて、眼鏡の奥からぢつと眸を凝らした。

「此の團扇を翳して立つた姿勢が好い。流石專門家は違ひますね。能く此所に氣が附いたものだ。光線が顔へあたる具合が旨い。陰と日向の段落が確然して――顔丈でも非常に面白い變化がある」

「いや皆御當人の御好みだから。僕の手柄ぢやない」

「御蔭さまで」と美禰子が禮を述べた。

「私も、御蔭さまで」と今度は原口さんが禮を述べた。

夫は細君の手柄だと聞いて左も嬉しさうである。三人のうちで一番鄭重な禮を述べたのは夫である。

開會後第一の土曜の午過ぎには大勢一所に來た。――廣田先生と野々宮さんと與次郎と三四郎と。四人は餘所を後廻しにして、第一に「森の女」の部屋に這入つた。與次郎が「あれだ、あれだ」と云ふ。人が澤山集つてゐる。三四郎は入口で一寸躊躇した。野々宮さんは超然として這入つた。

大勢の後から、覗き込んだ丈で、三四郎は退いた。腰掛に倚つてみんなを待ち合はしてゐた。

「素敵に大きなもの描いたな」と與次郎が云つた。

「佐々木に買つて貰ふ積りださうだ」と廣田先生が云つた。

「僕より」と云ひ掛けて、見ると、三四郎は六づかしい顏をして腰掛にもたれてゐる。與次郎は默つて仕舞つた。

「色の出し方が中々洒落てゐますね。寧ろ意氣な畫だ」と野々宮さんが評した。

「少し氣が利き過ぎてゐる位だ。是ぢや鼓の音の樣にぽん〳〵する畫は描けないと自白する筈だ」と廣田先生が評した。

「何ですぽん〳〵する畫と云ふのは」

「鼓の音の樣に間が拔けてゐて、面白い畫の事さ」

二人は笑つた。二人は技巧の評ばかりする。與次郎が異を樹てた。

「里見さんを描いちや、誰が描いたつて、間が拔けてる樣には描けませんよ」

野々宮さんは目錄へ記號を附ける爲に、隱袋へ手を入れて鉛筆を探した。鉛筆がなくつて、一枚の活版刷の端書が出て來た。見ると、美禰子の結婚披露の招待狀であつた。披露はとうに濟んだ。野々宮さんは廣田先生と一所にフロックコートで出席した。三四郎は歸京の當日此招待狀を下宿の机の上に見た。時期は既に過ぎてゐた。

野々宮さんは、招待狀を引き千切つて床の上に棄てた。やがて先生と共に外の畫の評に取り掛る。與次郎丈が三四郎の傍へ來た。

「どうだ森の女は」

「森の女と云ふ題が惡い」

「ぢや、何とすれば好いんだ」

三四郎は何とも答へなかつた。たゞ口の内で迷羊、迷羊と繰り返した。

昭和四年一月一日印刷
昭和四年一月五日發行

漱石全集第五卷

著作權者 夏目純一

編輯及發行 東京市神田區南神保町十六番地 漱石全集刊行會

右代表者 岩波茂雄

印刷者 東京市本所區[illegible] 牛山源之丞

印刷所 東京市[illegible] 山陽印刷株式會社分工場

（大衆版本）